

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第351集

清水ヶ野遺跡発掘調査報告書

地域活性化支援道路整備事業
主要地方道盛岡横手線関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

清水ヶ野遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	行	誤	正
4	22	主要地方道盛岡拱手跡	主要地方道盛岡拱手跡
12	表 77	S 45～57 岩手埋文	S 45～57 湧田町教委
17	25	層下位では、	Ⅱ層下位では
18	4	A区 8b グリッドの層面で、	A区 8b グリッドのⅡ層面で、
22	8	積高 30 以上	積高 30 cm以上
25	28	炉内には層厚 00 cm程の	炉内には層厚 6 cm程の
25	37	半截竹管状	半截竹管状
40	16	磯磯石籠	磯石籠
52	16	半截竹管文	半截竹管文
	14	半截竹管状工具	半截竹管状工具
	16	半截竹管による沈積	半截竹管による沈積
54	37	半截竹管による沈積	半截竹管による沈積
55	3	半截竹管文	半截竹管文
59	(図)	206㈬	205 b ㈬
60	4	半截竹管文	半截竹管文
64	3	東西 0.0m×南北 0.0m	東西 1.2m×南北 1.1m
	4	深さは最大 0.0mである。	深さは最大 0.6mである。
87	(図)	S = 147	S 147
		S = 149	S 149
		S = 153	S 153
88	(図)	S = 154㈬㈬	S 154㈬㈬
		S = 155㈬㈬	S 155㈬㈬
		S = 156㈬㈬	S 156㈬㈬
		S = 157㈬	S 157㈬
		S = 158	S 158
		S 214	S 214㈬
92	(図)	S 215	S 216㈬
		S 216	S 216㈬
		S 216	S 216㈬
192	9	不整形 00 蓋	不整形
201	6	コンテナ 00 箱分	コンテナ約 30 箱分
205	18	土坑 34 蓋。	土坑 33 蓋。
	21	剥片・砕片 00 箱分が	剥片・砕片が
218		※ 2 斜線文の表記では、	※ 2 施文原体の表記では、
239	表 488 ～494	石棒	石柱
		S 470	S 471
331	写真	S 471	S 470
		S 470	S 470

序

岩手県には旧石器時代から近代までの数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しており、平成12年度の岩手県教育委員会のまとめではその数9,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護・保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。一方、豊かで快適な生活環境を実現するための地域開発もまた、県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和のとれた施策が今日の課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、岩手県教育委員会の指導および調整の下、開発事業によりやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、地域活性化支援道路整備事業主要地方道盛岡横手線に関連して、平成11年度に発掘調査を実施した和賀郡湯田町清水ヶ野遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代前期木葉を主体とする住居跡・土坑等で構成される集落跡とそれに伴う遺物が発見され、該期の貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました岩手県北上地方振興局、湯田町教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人岩手県文化振興事業団

理事長 千葉浩一

例 言

1. 本報告書は岩手県和賀郡湯田町湯田18地割122番地5に所在する清水ヶ野遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本発掘調査は、地域活性化支援道路整備事業主要地方道盛岡横手線に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県北上地方振興局土木部と岩手県教育委員会事務局文化課の協議を経て、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡登録台帳記載の遺跡番号はMD38-2212、調査時の遺跡略号はSMN-99である。
4. 発掘調査の期間・担当者・対象面積は次のとおりである。

平成11年4月13日～平成11年8月17日 千葉正彦・本多準一郎 1,200㎡
5. 室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

平成11年11月1日～平成12年3月31日 千葉正彦・本多準一郎
平成12年7月1日～平成12年9月30日 千葉正彦
6. 分析・鑑定は、次の方々および機関に依頼した。

石器・石製品の石材鑑定	矢内圭三・柳沢忠昭（花崗岩研究会）
放射性炭素 ¹⁴ Cによる年代測定	御古環境研究所
黒曜石の産地同定	薬科哲男（京都大学原子炉実験所）
赤色顔料の蛍光X線分析	咲山まどか・赤沼英男（岩手県立博物館）
7. 遺構外出土剥片石器の災害・トレースは、大成エンジニアリング㈱に委託した。
8. 基準点測量および空中写真撮影は、次の機関に委託した。

基準点測量	㈱キタミ・シーエーディー
空中写真撮影	㈱東邦航空
9. 野外調査および室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただいた。（敬称略）

小田野哲憲・佐々木 勝・中村英俊（岩手県教育委員会）、佐藤嘉広（岩手県立博物館）、酒井宗孝（花巻市教育委員会）、稲野裕介・大渡賢一（北上市立埋蔵文化財センター）、福田友之・木村鐵次郎・茅野嘉雄（青森県埋蔵文化財調査センター）、岡田康博・斎藤岳・中村美杉（青森県教育庁）、小林謙一（金沢大学埋蔵文化財調査センター）、遠藤匡俊（岩手大学）、柴田慈幸（雫石町教育委員会）、晴山雅光（乙部中学校）、朝倉雄大（岩谷堂高等学校）、布谷義彦（新里村教育委員会）、湯田町教育委員会
10. 野外調査では、地元湯田町および沢内村・横手市の次の方々に協力していただいた。（敬称略）

高橋順一、小田島敏男、小田島昭市、高橋信広、照井峰生、照井ゆり子、高橋禮子、高橋悦子、高橋久子、高橋ヒサ、佐々木洋子、高橋キヤ子、高橋悦子、高橋弘子、戸巻聖子、川村由美子、菊地いま、菊地由紀、南川イマ子、高橋アキ子、佐々木成子
11. 本書の作成は当センター臨時職員の協力を得て、千葉・本多が行った。担当は、次のとおりである。

〈執筆〉 千葉正彦
〈編集・校正〉 千葉正彦、本多準一郎

<作図> (平成11年度) 川村雅子、佐藤真理子、館沢美代子、藤枝英子、八重樫絹子、山崎ちはる、山口桂子、渡辺裕子 (五十音順)

(平成12年度) 浅沼孝子、浅沼則子、岩館富士子、大澤曜子、小笠原邦子、瀬川幸子、田村菊代、三上ゆかり (五十音順)

<遺構写真撮影> 千葉正彦、本多準一郎

<遺物写真撮影> 村田燕鴻、福士昭夫

12. 遺構・遺物の表現方法は、第7図(遺構)および第57図(土器)、第88・89図(石器)に凡例を示した。

13. 本書では国土地理院発行の以下の地図を使用した。

1/25,000 地形図 新町・陸中川尻・左草・羽後黒沢

1/50,000 地形図 川尻・横手

1/200,000 地形図 盛岡・一関・秋田・山形

13. 調査で得られた出土遺物および調査に関わる諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

14. 調査成果の一部については、現地説明会資料および「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成11年度)」(岩文振調報第340集)等において公表しているが、本書の記載内容と異なる場合は本書の記載内容が優先する。

目 次

序
例言

< 本 文 >

I 調査に至る経過	2	1. 黒曜石の産地同定	171
II 遺跡の立地と環境		2. 放射性炭素年代測定	183
1. 遺跡の位置と環境	2	3. 赤色顔料の蛍光X線分析	186
2. 周辺の地形と地質	4	VI まとめと考察	
3. 基本層序	7	1. 遺構	
4. 周辺の遺跡	9	(1) 竪穴住居跡	190
5. 調査以外で得た知見	15	(2) 土坑	192
III 調査と整理の方法		(3) 集落の占地	192
1. 調査の経過	17	2. 遺物	
2. 野外調査	19	(1) 土器	198
3. 整理方法	21	(2) 土製品	201
4. 掲載の方法	22	(3) 石器	201
IV 検出された遺構と遺物		(4) 石製品	202
1. 竪穴住居跡	25	3. 遺跡	
2. 土坑	61	(1) 周辺地域の該期集落について	203
3. 土器埋設遺構	72	(2) 「石器製作跡」について	204
4. 旋土遺構	73	(3) 遺跡のまとめ	206
5. 掘立柱建物跡	74	引用・参考文献	214
6. 出土遺物	91	報告書抄録	334
V 分析鑑定		職員名簿	335

< 表 >

表1 沢内盆地の段丘面対比	6	表4 遺跡別石器出土量	207
表2 周辺の遺跡	11	表5 土器観察表	218
表3 新・旧遺構名の対応	19	表6 石器・石製品観察表	231

< 図 版 >

第1図 遺跡位置	1	第4図 地質分類	6
第2図 調査区と周辺の地形	3	第5図 基本層序	8
第3図 地形分類	5	第6図 周辺の遺跡	13

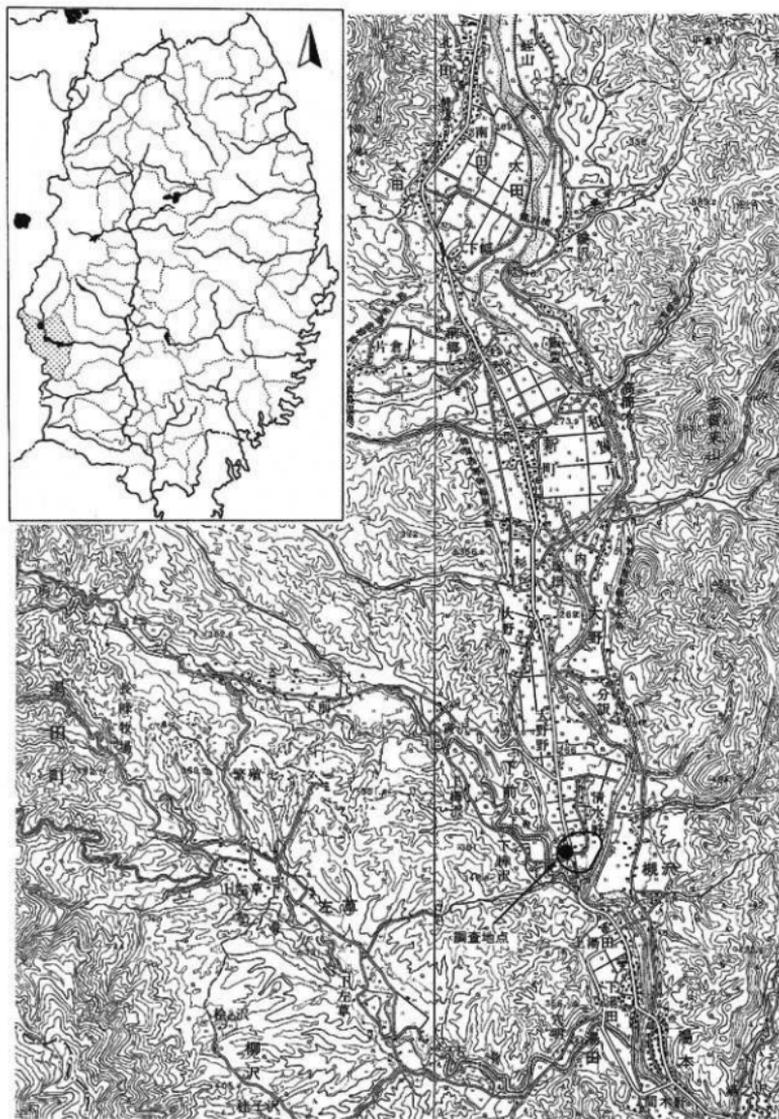
第7図	調査以前の上出土遺物	16	第48図	土坑出土遺物(1)	82
第8図	凡例(1)遺構	22	第49図	土坑出土遺物(2)	83
第9図	遺構配置図	23	第50図	土坑出土遺物(3)	84
第10図	1号住居跡	26	第51図	土坑出土遺物(4)	85
第11図	1号住居跡出土遺物	27	第52図	土坑出土遺物(5)	86
第12図	2号住居跡(1)	29	第53図	土坑出土遺物(6)	87
第13図	2号住居跡(2)	30	第54図	土坑出土遺物(7)	88
第14図	2号住居跡出土遺物(1)	31	第55図	上蓋埋設遺構・焼土遺構出土遺物	89
第15図	2号住居跡出土遺物(2)	32	第56図	掘立柱建物跡	91
第16図	2号住居跡出土遺物(3)	33	第57図	凡例(2)土器・土器分類概念図	97
第17図	2号住居跡出土遺物(4)	34	第58図	遺構外出土遺物 土器(1)実測図	98
第18図	2号住居跡出土遺物(5)	35	第59図	遺構外出土遺物 土器(2)実測図	99
第19図	2号住居跡出土遺物(6)	36	第60図	遺構外出土遺物 土器(3)実測図	100
第20図	2号住居跡出土遺物(7)	37	第61図	遺構外出土遺物 土器(4)実測図	101
第21図	2号住居跡出土遺物(8)	38	第62図	遺構外出土遺物 土器(5)実測図	102
第22図	2号住居跡出土遺物(9)	39	第63図	遺構外出土遺物 土器(6)実測図	103
第23図	3・4号住居跡、32号土坑(1)	41	第64図	遺構外出土遺物 土器(7)実測図	104
第24図	3・4号住居跡、32号土坑(2)	42	第65図	遺構外出土遺物 土器(8)実測図	105
第25図	3号住居跡出土遺物(1)	43	第66図	遺構外出土遺物 土器(9)実測図	106
第26図	3号住居跡出土遺物(2)	44	第67図	遺構外出土遺物 土器(10)実測図	107
第27図	3号住居跡出土遺物(3)	45	第68図	遺構外出土遺物 土器(11)実測図	108
第28図	3号住居跡出土遺物(4)	46	第69図	遺構外出土遺物 土器(12)実測図	109
第29図	3号住居跡出土遺物(5)	47	第70図	遺構外出土遺物 土器(13)実測図	110
第30図	3号住居跡出土遺物(6)	48	第71図	遺構外出土遺物 土器(14)拓影図	111
第31図	3号住居跡出土遺物(7)	49	第72図	遺構外出土遺物 土器(15)拓影図	112
第32図	3号住居跡出土遺物(8)	50	第73図	遺構外出土遺物 土器(16)拓影図	113
第33図	3号住居跡出土遺物(9)	51	第74図	遺構外出土遺物 土器(17)拓影図	114
第34図	3号住居跡出土遺物(10)	52	第75図	遺構外出土遺物 土器(18)拓影図	115
第35図	4号住居跡出土遺物	53	第76図	遺構外出土遺物 土器(19)拓影図	116
第36図	5号住居跡	56	第77図	遺構外出土遺物 土器(20)拓影図	117
第37図	5号住居跡出土遺物(1)	57	第78図	遺構外出土遺物 土器(21)拓影図	118
第38図	5号住居跡出土遺物(2)	58	第79図	遺構外出土遺物 土器(22)拓影図	119
第39図	5号住居跡出土遺物(3)	59	第80図	遺構外出土遺物 土器(23)拓影図	120
第40図	5号住居跡出土遺物(4)	60	第81図	遺構外出土遺物 土器(24)拓影図	121
第41図	土坑(1)	75	第82図	遺構外出土遺物 土器(25)拓影図	122
第42図	土坑(2)	76	第83図	遺構外出土遺物 土器(26)拓影図	123
第43図	土坑(3)	77	第84図	遺構外出土遺物 土器(27)拓影図	124
第44図	土坑(4)	78	第85図	遺構外出土遺物 土器(28)拓影図	125
第45図	土坑(5)	79	第86図	遺構外出土遺物 土器(29)拓影図	126
第46図	土坑(6)・土器埋設遺構	80	第87図	遺構外出土遺物 土製品	127
第47図	焼土遺構	81	第88図	石器分類概念図①	133

第89図	石器分類概念図②	134	第114図	遺構外出土遺物	石器 (25)	159	
第90図	遺構外出土遺物	石器 (1)	135	第115図	遺構外出土遺物	石器 (26)	160
第91図	遺構外出土遺物	石器 (2)	136	第116図	遺構外出土遺物	石器 (27)	161
第92図	遺構外出土遺物	石器 (3)	137	第117図	遺構外出土遺物	石器 (28)	162
第93図	遺構外出土遺物	石器 (4)	138	第118図	遺構外出土遺物	石器 (29)	163
第94図	遺構外出土遺物	石器 (5)	139	第119図	遺構外出土遺物	石器 (30)	164
第95図	遺構外出土遺物	石器 (6)	140	第120図	遺構外出土遺物	石器 (31)	165
第96図	遺構外出土遺物	石器 (7)	141	第121図	遺構外出土遺物	石器 (32)	166
第97図	遺構外出土遺物	石器 (8)	142	第122図	遺構外出土遺物	石製品 (1)	167
第98図	遺構外出土遺物	石器 (9)	143	第123図	遺構外出土遺物	石製品 (2)	168
第99図	遺構外出土遺物	石器 (10)	144	第124図	遺構外出土遺物	石製品 (3)	169
第100図	遺構外出土遺物	石器 (11)	145	第125図	遺構外出土遺物	石製品 (4)、古銭	170
第101図	遺構外出土遺物	石器 (12)	146	第126図	C区堅穴住居跡の配置		190
第102図	遺構外出土遺物	石器 (13)	147	第127図	A区土坑群と埴状耳飾出土地点		191
第103図	遺構外出土遺物	石器 (14)	148	第128図	土器集成図 (1)		193
第104図	遺構外出土遺物	石器 (15)	149	第129図	土器集成図 (2)		195
第105図	遺構外出土遺物	石器 (16)	150	第130図	土器変遷概念図		197
第106図	遺構外出土遺物	石器 (17)	151	第131図	岩手県内出土オオバコ回転文土器		199
第107図	遺構外出土遺物	石器 (18)	152	第132図	和賀川流域の埴状耳飾		202
第108図	遺構外出土遺物	石器 (19)	153	第133図	大木5~7a式期の遺跡分布		205
第109図	遺構外出土遺物	石器 (20)	154	第134図	遺跡別石器出土量 (1)		208
第110図	遺構外出土遺物	石器 (21)	155	第135図	遺跡別石器出土量 (2)		209
第111図	遺構外出土遺物	石器 (22)	156	第136図	遺跡別石器出土量 (3)		210
第112図	遺構外出土遺物	石器 (23)	157	第137図	遺跡別石器出土量 (4)		211
第113図	遺構外出土遺物	石器 (24)	158	第138図	遺跡別石器組成の比較		212

＜ 写真図版 ＞

写真図版1	空中写真	243	写真図版13	土坑 (3)	255
写真図版2	調査区現況	244	写真図版14	土坑 (4)	256
写真図版3	作業風景・現地説明会	245	写真図版15	土坑 (5)	257
写真図版4	基本順序	246	写真図版16	土坑 (6)	258
写真図版5	1号住居跡	247	写真図版17	土坑 (7)	259
写真図版6	2号住居跡 (1)	248	写真図版18	土坑 (8)	260
写真図版7	2号住居跡 (2)	249	写真図版19	土器埋設遺構、焼土遺構 (1)	261
写真図版8	3号住居跡 (1)	250	写真図版20	焼土遺構 (2)	262
写真図版9	3号住居跡 (2)、4号住居跡	251	写真図版21	焼土遺構 (3)、掘立柱建物跡	263
写真図版10	5号住居跡	245	写真図版22	遺物出土状況	264
写真図版11	土坑 (1)	253	写真図版23	遺構内出土遺物 (1)	265
写真図版12	土坑 (2)	254	写真図版24	遺構内出土遺物 (2)	266

写真図版25	遺構内出土遺物(3)	267	写真図版60	遺構外出土遺物(16) 土器	302
写真図版26	遺構内出土遺物(4)	268	写真図版61	遺構外出土遺物(17) 土器	303
写真図版27	遺構内出土遺物(5)	269	写真図版62	遺構外出土遺物(18) 土器	304
写真図版28	遺構内出土遺物(6)	270	写真図版63	遺構外出土遺物(19) 土器	305
写真図版29	遺構内出土遺物(7)	271	写真図版64	遺構外出土遺物(20) 土器	306
写真図版30	遺構内出土遺物(8)	272	写真図版65	遺構外出土遺物(21) 土器	307
写真図版31	遺構内出土遺物(9)	273	写真図版66	遺構外出土遺物(22) 土器、 土製品	308
写真図版32	遺構内出土遺物(10)	274	写真図版67	遺構外出土遺物(23) 石器	309
写真図版33	遺構内出土遺物(11)	275	写真図版68	遺構外出土遺物(24) 石器	310
写真図版34	遺構内出土遺物(12)	276	写真図版69	遺構外出土遺物(25) 石器	311
写真図版35	遺構内出土遺物(13)	277	写真図版70	遺構外出土遺物(26) 石器	312
写真図版36	遺構内出土遺物(14)	278	写真図版71	遺構外出土遺物(27) 石器	313
写真図版37	遺構内出土遺物(15)	279	写真図版72	遺構外出土遺物(28) 石器	314
写真図版38	遺構内出土遺物(16)	280	写真図版73	遺構外出土遺物(29) 石器	315
写真図版39	遺構内出土遺物(17)	281	写真図版74	遺構外出土遺物(30) 石器	316
写真図版40	遺構内出土遺物(18)	282	写真図版75	遺構外出土遺物(31) 石器	317
写真図版41	遺構内出土遺物(19)	283	写真図版76	遺構外出土遺物(32) 石器	318
写真図版42	遺構内出土遺物(20)	284	写真図版77	遺構外出土遺物(33) 石器	319
写真図版43	遺構内出土遺物(21)	285	写真図版78	遺構外出土遺物(34) 石器	320
写真図版44	遺構内出土遺物(22)	286	写真図版79	遺構外出土遺物(35) 石器	321
写真図版45	遺構外出土遺物(1) 土器	287	写真図版80	遺構外出土遺物(36) 石器	322
写真図版46	遺構外出土遺物(2) 土器	288	写真図版81	遺構外出土遺物(37) 石器	323
写真図版47	遺構外出土遺物(3) 土器	289	写真図版82	遺構外出土遺物(38) 石器	324
写真図版48	遺構外出土遺物(4) 土器	290	写真図版83	遺構外出土遺物(39) 石器	325
写真図版49	遺構外出土遺物(5) 土器	291	写真図版84	遺構外出土遺物(40) 石器	326
写真図版50	遺構外出土遺物(6) 土器	292	写真図版85	遺構外出土遺物(41) 石器	327
写真図版51	遺構外出土遺物(7) 土器	293	写真図版86	遺構外出土遺物(42) 石器	328
写真図版52	遺構外出土遺物(8) 土器	294	写真図版87	遺構外出土遺物(43) 石器	329
写真図版53	遺構外出土遺物(9) 土器	295	写真図版88	遺構外出土遺物(44) 石器	330
写真図版54	遺構外出土遺物(10) 土器	296	写真図版89	遺構外出土遺物(45) 石製品	331
写真図版55	遺構外出土遺物(11) 土器	297	写真図版90	遺構外出土遺物(46) 石製品	332
写真図版56	遺構外出土遺物(12) 土器	298	写真図版91	遺構外出土遺物(46) 石製品、 占銭	333
写真図版57	遺構外出土遺物(13) 土器	299			
写真図版58	遺構外出土遺物(14) 土器	300			
写真図版59	遺構外出土遺物(15) 土器	301			



第1圖 遺跡位置

I. 調査に至る経過

清水ヶ野遺跡は「地域活性化支援道路整備事業主要地方道盛岡横手線」湯本バイパス道路整備工事に伴って発掘調査が行われることとなった。

主要地方道盛岡横手線は県道1号とも称され、盛岡市を起点として琴石町・沢内村・湯田町を経由し、一部国道107号線を重用して秋田県横手市に至る重要路線である。平成10年9月、当路線の最大難所である山伏峠に新山伏トンネルが開通して利便性が向上、特に厳冬期の安全性が高まった。当路線中の湯田町湯本バイパスは湯本温泉を西側に迂回する道路として計画され、南側1工区については昭和54年度に先行整備を実施し、平成4年度より北側2工区に事業着手した。北側2工区は、1工区北端部からトンネル1本と橋梁1脚で清水ヶ野地区に至る延長1.4kmの路線である。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県北上地方振興局土木部から、平成10年4月30日付北地上第214号「湯本地区新交流ネットワーク整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について」により、岩手県教育委員会に試掘調査を依頼した。岩手県教育委員会は平成10年5月7日に試掘を実施し、その調査結果を平成10年5月18日付教文第201号「湯本地区新交流ネットワーク整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答し、事業計画地が清水ヶ野遺跡の範囲内であることが付記された。その後、北上地方振興局土木部と岩手県教育委員会との間で協議が行われ、平成11年3月2日付教文第1251号「平成11年度埋蔵文化財発掘調査事業について（通知）」により、平成11年4月1日から平成12年3月31日までの期間で師岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業として発掘調査を行うこととなった。通知を受けた両者は、平成11年4月1日付で岩手県北上地方振興局長と師岩手県文化振興事業団理事長との間で契約を結び、発掘調査は平成11年4月13日に開始された。

なお、調査原因となった事業名は、調査当時（平成11年度）には「新交流ネットワーク道路整備事業」であったが、同事業は平成12年度に「地域活性化支援道路整備事業」へ事業名称が変更されており、本報告書では現在の事業名を用いている。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置と環境

清水ヶ野遺跡は岩手県和賀郡湯田町湯田18-122-5に所在し、東日本旅客鉄道北上線ほつとゆだ駅の北西約5km、沢内盆地南端付近の和賀川右岸段丘上に所在している。遺跡は沢内村との境に程近い湯田町北部、和賀川とその支流である下前川によって形成された舌状段丘南端に広がり、国土地理院発行の1:50,000地形図「新町」NJ-54-19-4（秋田4号）の図幅に含まれる北緯39°21'30"、東経140°45'40"付近に位置する。調査区は低位段丘に舌状に張り出す中位段丘高位面に載り、主要地方道盛岡横手線西側に隣接する南北約160m・東西約2～17mの範囲である。但し、調査に際しては現道の崩落を防ぐために、現道側0.5～1m程に法を残している。また、25mグリッド付近を農業用水路が東西に横切するため、用水路両側1m程にも法を残している。調査区の標高は海拔262～264m、和賀川との比高は約20mである。現況は宅地および戦後の植林による杉林となっているが、原地形は大幅な改変を被っていないものと思われる。

本遺跡が載る段丘は、北隣の沢内村から湯田町北部へと跨って広がる沢内盆地に属している。そこで、本



第2図 調査区と周辺の地形

項では湯田町のみならず沢内村を含めた、いわゆる「西和賀地方」について概観する。

湯田町は岩手県最西端の県境付近に位置し、奥羽脊梁山脈の山懐に抱かれている。総面積は304.56km²であるが、82%が山林、11%が原野で占められており、総面積の90%近くが海拔300m以上の高地である。和賀川およびその支流によって形成された段丘上に、中央部の川尻を中心として北の湯本・湯田・大草・下前、西の柳沢・新田郷、南の湯川・鷺之巣・大石等の集落が散在し、総人口は4,244人、人口密度は13.93人/km²である⁽¹⁾。一方、沢内村は湯田町の北部に位置しており、四方を山陵に囲まれた高原性の盆地に立地し、総面積286.22km²、総人口14,035人、人口密度14.10人/km²である⁽¹⁾。総面積の81%を山林が占め、村中央部を貫流する和賀川沿岸に沿う28km程に、新町・太田・前郷・貝沢等の集落が点在している。

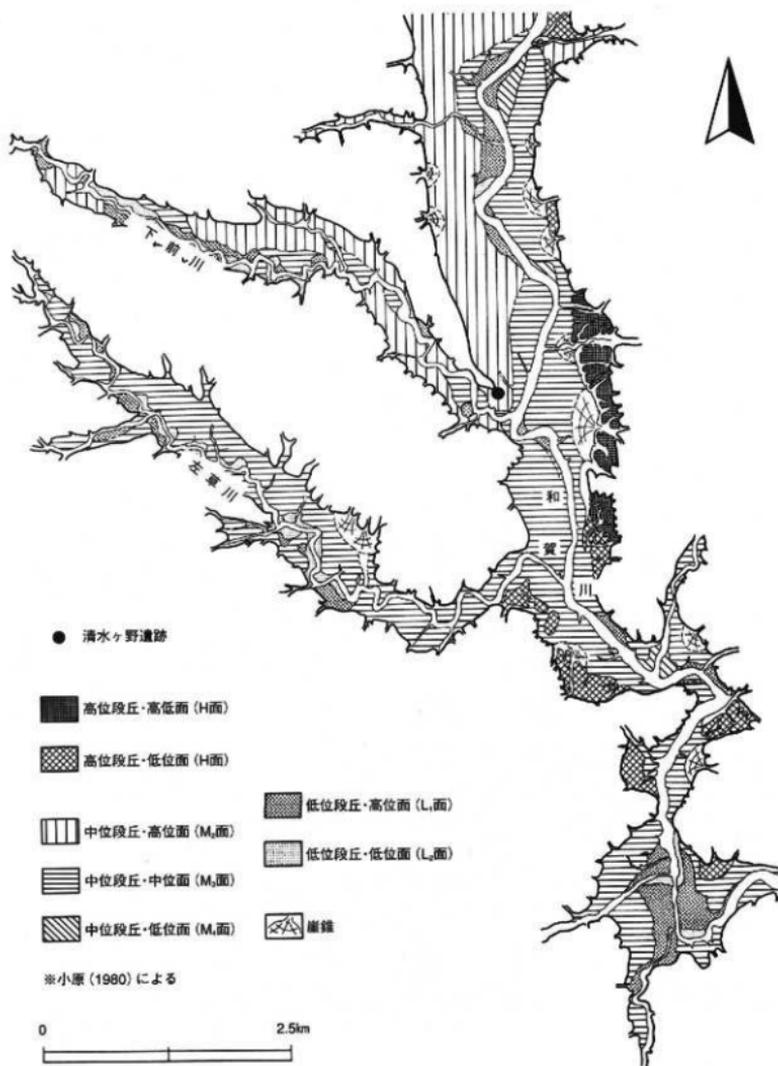
湯田町・沢内村ともに中部奥羽主山系を境として秋田県に接している。湯田町は、東側で北上市、南側で胆沢郡胆沢町および秋田県雄勝郡東瀬村、西側では秋田県仙北郡千畑町・同郡六郷町・平鹿郡山内村の3町村と県境を挟んで接している。一方、沢内村は、東側は花巻市・北上市、北側は岩手郡磐石町および秋田県仙北郡田沢湖町、西側では秋田県仙北郡角館町・同郡太田町・同郡千畑町に境を接している。両町村を跨いで広がる沢内盆地は、四囲を山陵が取り巻く。湯田町内には女神山(956m)・割倉山(770m)・白木峠(601m)・二森山(1,102m)・蟻山(1,155m)・三界山(1,381m)・南本内岳(1,486m)・焼石岳(1,548m)・牛形山(1,389m)・鷲ヶ森山(1,207m)が、沢内村内では和賀岳(1,440m)を中心に高下岳(1,322m)・栗岳岳(1,218m)・中ノ沢岳(1,061m)・風鞍(1,023m)・鹿子ノ山(938m)・真丘岳(1,059m)が聳える。分水嶺をなす和賀岳を源とする和賀川が、沢内村のほぼ中央部および湯田町北部～中央部を南流し、湯田町川尻付近で直角状に折れて東流して北上川に注いでいる。両町村ともに、県東部の北上川流域とは異なって日本海型の気候を示している。年間降水量は2,000mm以上と県平均に倍する。殊に冬季の降雪量は多く、降雪期間は11月初旬から4月中旬まで及び、この間2m以上の雪に覆われる県内屈指の豪雪地帯である。

東日本旅客鉄道北1線が湯田町中央部を横断し、国道107号(平和街道)がこれに並走する。一方、藩政時代以来の幹線道路である主要地方同盛岡横手線(原道1号)は沢内村を縦断し、湯田町川尻を経て国道107号へ合流して秋田県横手市まで延びている。奥羽脊梁山脈の最も低い分水嶺は本地域に所在しており、原始・古代においても、当地域が北上川流域と日本海側の横手盆地とを結ぶ交通路の要衝を占めていたと推測される。なお、平成9年8月には東北横断自動車道秋田線が開通し、高速交通時代に対応した交通網の整備が進められている。

2. 周辺の地形と地質

<地形> 本遺跡は岩手・秋田両県に跨る奥羽脊梁山脈東側の沢内盆地南部、和賀川右岸の段丘上に所在している。沢内盆地は奥羽脊梁山脈内部に位置し、南北約30km、東西最大幅約2kmの狭隘な盆地である。和賀川は沢内盆地中央付近を南北に貫流しており、先行河川である和賀川は湯田町川尻で脊梁山脈の傾斜と逆の東へ流れ、海拔700mの山地(横谷部)を繞って北上市で北上川へ注ぐ。和賀川は、湯田町湯本付近まで両岸に高～低位の段丘群を発達させている。本遺跡の位置する付近では、段丘南側が和賀川支流の下前川によって侵食され、段丘崖となっている。

和賀川流域の段丘区分については、中川ほか(1971)、小原(1980)、Toyoshima(1984)、豊島(1993)等で示されている。中川ほか(1971)によると、和賀川横谷部～北上低地帯においては、高位から順に峰山高位段丘、峰山低位段丘、大荒沢段丘、耳取・川尻段丘に大別される。Toyoshima(1984)では、中川ほか(1971)の耳取・川尻段丘を大台野段丘と小荒沢段丘に分離している。これらの和賀川横谷部の段

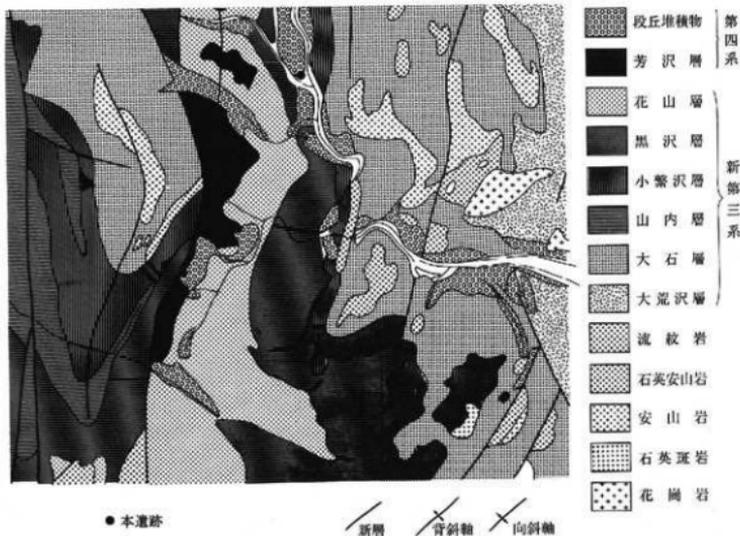


第3図 地形分類

表1 沢内盆地の段丘面対比

沢内盆地		和賀川横谷部		北上河谷	南関東
(小原 1980)		(中川ほか 1971)	(Toyosima 1984 豊島 1993)	(中川ほか 1963)	(東北地方第四紀 研究グループ 1969)
低位段丘群	L ₁ 面	川尻低位段丘	川尻低位面	河岸平野	海岸平野
	L ₂ 面				
	L ₃ 面				
	L ₄ 面				
中位段丘群	M ₁ 面			金ヶ崎段丘	立川段丘
	M ₂ 面	川尻段丘	小紫沢面		
	M ₃ 面	耳取段丘	大台野面		武蔵野段丘
	M ₄ 面				
高位段丘群	H ₁ 面	大荒沢段丘	大荒沢面	村崎野段丘	下末吉段丘
	H ₂ 面				
	H ₃ 面	峠山低位段丘	峠山低位面		
		峠山高位段丘	峠山高位面		

※ 小原 1980を一部改変



第4図 地質分類

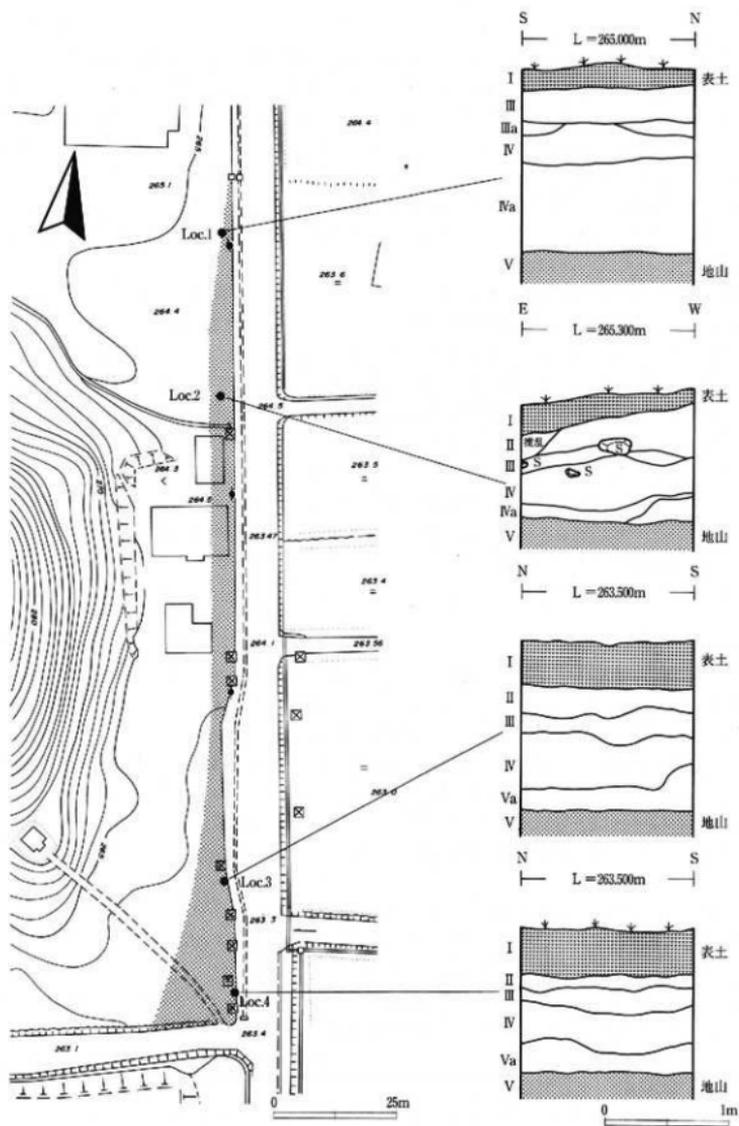
丘と北上低地帯のそれとの関係は、峠山低位・大荒沢段丘は村崎野段丘、耳取・川尻段丘は金ヶ崎段丘、川尻低位段丘は河岸平野へとそれぞれ対比できる。一方、本遺跡の立地する和賀川上流域（峡谷部）の段丘については、小原（1980）によると高位段丘群（ $H_1 \sim H_3$ 面）、中位段丘群（ $M_1 \sim M_3$ 面）、低位段丘群（ $L_1 \sim L_3$ 面）、合計11面に分類される。うち、 H_1 面は峠山低位段丘、 H_2 面は大荒沢段丘、 M_1 面は耳取段丘、 M_2 面は川尻段丘、 $L_1 \sim L_3$ 面は川尻低位段丘へ対比される。第3図に示したのは、小原（1980）による沢内盆地南部の段丘区分である。本遺跡周辺では中位段丘 M_2 面が新町から清水ヶ野付近および下前川南岸に緩やかな勾配で広く連続的に認められる。本遺跡は、この中位段丘 M_2 面（耳取段丘・金ヶ崎段丘相当）の段丘縁付近に載っている。

〈地質〉 奥羽脊梁山脈付近の新第三紀層（グリーンタフ）は、変質した安山岩・デイサイト・および流紋岩を主とし、黒鉱鉱床・鉱脈型鉱床を胚胎している。この新第三紀層の下位には、阿武隈変成岩・阿武隈花崗岩・母体変成岩等、北上山地から続く古い基盤岩類が存在する。奥羽脊梁山脈東側の沢内盆地付近では、盆地を挟んだ東西の山腹は新第三紀層からなる凝灰岩・安山岩質岩石・流紋岩質岩石・花崗岩質岩石から構成され、盆地縁辺では第四紀層洪積層、和賀川およびその支流周辺では沖積層からなっている。和賀川上流～中流の地質分布について示したのが第4図である。グリーンタフ系の凝灰質岩の大荒沢層・大石層・小繁沢層が背斜部を構成し、向斜部および平鹿盆地には砂岩を主とする黒沢層・花山層が堆積する。本遺跡の周辺の地質は第四系段丘堆積物に分類されている。小原（1980）によると本遺跡周辺の様相は、「下前川と和賀川の合流点付近（本遺跡付近；筆者註）の露頭では、黒沢層と思われる凝灰質砂岩の基盤の上に、最高30cmの砂岩、安山岩を含む *sorting* の悪い層厚15cmの礫層と1mの層厚をもつ細砂層が順にのっている」と報告されている⁽¹⁾。

3. 基本層序

調査区は南北約160mに亘って細長く伸びているため、地点によって土層堆積の様相を異にしている。調査開始当初に設定したA・C区における試掘トレンチの土層観察を基に、次のような基本層序を設定した。調査に際しては、下記の層位区分に拠って、遺構精査・遺物取り上げを行っている。

- I 層 10YR1.7/1～2/1黒色土。層厚は10～30cm。腐植土。一部は攪乱層。土器・石器等の遺物を多量に含んでいる。B区では盛土層である。
- II 層 10YR2/1黒色～10YR3/1黒褐色土。層厚10～40cm。C区北端付近では、削平・攪乱により消失している。層中には灰白色火山灰が混入するが、ブロック状に認められるのみで明瞭な層をなしていないため分層していない。
- III 層 10YR4/6褐色土。層厚10～30cm。遺構検出面。遺物を多量に含んでいる。
- III a 層 5YR3/6暗赤褐色土⁽²⁾。層厚10～20cm。B・C区では全域に薄く分布することが確認されているが、A区では部分的にしか存在していない。
- IV 層 10YR3/2暗褐色土。層厚30～60cm。黄褐色ブロックを疎らに含み、堅く締まる。遺構検出面。遺物を多量に含んでいる。B区では砂礫を多量に含んでいる。一部、本層をIV層とIV a層に分離して記録した部分（第5図 Loc. 1・2）もあるが、両者に然程の差異が認められないため、本報告書では両者を一括してIV層とした。
- V a 層 10YR7/6黄褐色土を主体に10YR3/2暗褐色土を40％程度含む。IV層とV層の漸移層。層厚10～70cm。遺構検出面。B区では存在しない。



第5图 基本層序

V 層 10YR7/6黄褐色土。やや砂質。層厚不明。基盤層（地山）。B区においては、砂礫層となる。

V層以下については深掘りを行わなかったため、V層より下位の土層については不明である。

地点別の土層堆積状況を第5図に示した。なお、この層序はA・C区の土層を参照しており、B区においてはやや様相が異なっている。B区では表土が住宅造成に伴う盛土層であり、南側では盛土直下がIV層相当の黒褐色土となり、II～III A層を欠いている。一方、北側（5号住居跡付近）ではI層が残存しており、概ねA・C区に近い様相となっている。出土遺物について見ると、I～V A層まで縄文時代前期～中期初頭の土器が出土しており、調査区全域が遺物包含層をなしていると理解されるが、必ずしも層位的に良好とはいえない状況であった。

4. 周辺の遺跡

岩手県遺跡台帳では、平成11年4月時点で、湯田町内で75遺跡、沢内村内では82遺跡が登録されている⁽¹⁾。時代別に見ると、湯田町内では、旧石器時代遺跡16、縄文時代遺跡38、旧石器時代と縄文時代の複合遺跡5、平安時代遺跡1・中世遺跡8・近世遺跡6・時代不明遺跡1となっている。一方、沢内村内遺跡は、旧石器時代遺跡3、縄文時代遺跡46、旧石器～縄文時代の遺跡2、平安時代遺跡1、中世遺跡16、時代不明遺跡1である⁽²⁾。

本項では、中世城館跡および近世遺跡を割愛し、旧石器～古代の遺跡についてのみ述べる⁽³⁾。そのうち、本遺跡を中心として半径15km圏内に位置する旧石器・縄文・平安時代の94遺跡を第6図・表1に示した（図幅の制約により一部の図示）。遺跡の大多数は、和賀川流域およびその支流域の段丘・丘陵・沖積地に立地している。湯田町では、昭和45～57年の大台野遺跡（湯田町教委1983）、平成3～8年の東北横断自動車道秋田線路線内遺跡群の発掘調査が実施された。後者については当センターが実施しており、越中畑IV・V（岩手埋文1994c）、白木野I～III（岩手埋文1994b）、大渡I（岩手埋文1993）、大渡II（岩手埋文1995a）、塚野I・II（岩手埋文1993）、上野々I（岩手埋文1995）、耳取I（岩手埋文1994d、岩手埋文1999b）、本内I（岩手埋文1994）、本内II（岩手埋文1998b）、峠山牧場I（岩手埋文1999a、岩手埋文2000b）の計14遺跡が発掘調査された。沢内村内では発掘調査事例が少なく、昭和34年の東京大学による内沢遺跡列石の調査のみである。それ以外の遺跡の内容は詳細不明な点が多く、時期区分については表採資料により推定されたものである。以下、発掘調査が行われた遺跡を中心に、時期別の遺跡分布について概観する。

<旧石器時代> 図幅の範囲では25遺跡を数える。本遺跡を中心とした10km圏内では、長峰、間木野I・II（湯田町）の3遺跡が所在する。15km圏内では、坂本（沢内村）および上野々I、大渡I～III、大台野、白木野V～VII、野々宿II～III、耳取I、峠山牧場I（以上、湯田町）等、計18遺跡が所在しており、これらの遺跡が発掘調査されたのは大台野、間木野I、大渡I・II、上野々I、耳取I、峠山牧場Iの7遺跡である。うち、大台野、大渡II、耳取I、峠山牧場I遺跡では、旧石器時代の遺構・遺物が確認された。大台野遺跡では、ナイフ形石器や彫器が出土しており、県内における旧石器時代の代表的な遺跡となっている。また、大渡II遺跡では、後期旧石器時代の文化層と泥炭層が層位的に検出され、ナイフ形石器・彫器・搔器および加工木等が出土している。また、泥炭層中に示標火山灰である長良丹沢火山灰（AT）層が確認された。耳取I遺跡では、後期旧石器時代後半の石器製作跡が検出され、細石刃や細石刃核、ナイフ形石器・彫器・搔削器・台形礫石器等が検出され、複数の接合資料が確認された。峠山牧場I遺跡では、後期旧石器時代の旧石器集中区が検出され、細石刃・細石刃核・台形礫石器・ナイフ形石器・彫器・搔削器・尖頭器・舟底形石核等が検出された。

〈縄文時代〉 関幅の範囲内では89遺跡を数え、うち11遺跡が旧石器との複合遺跡である。瞥見すると、湯田町・沢内村内では中～後期の遺跡は多数存在しているのに対し、草創期は皆無、前・晩期は僅少である。本遺跡を中心とした10km圏内に所在する該期遺跡は、沢内村の内沢環状列石・新町Ⅰ・頭無・内沢Ⅰ・分沢、湯田町の湯本温泉・湯之沢・火石長根・間木野・大谷Ⅰ～Ⅱ遺跡である。

- ①早期：沢内村の下幅遺跡で、貝殻文の土器片が表採されている。また、耳取Ⅰ遺跡で、早期後半～前期前半とされる竪穴住居跡1棟が検出されている。
- ②前期：沢内村内では、内沢環状列石のみが前期とされている。前述のとおり同村内で調査された唯一の遺跡であり、出土した遺物から前期末葉～中期前半とされている。湯田町内では、本遺跡の他、耳取Ⅰ、峠山牧場Ⅰ、白木野Ⅰ、塚野Ⅱ、越中畑Ⅴ、等で調査に際して該期の遺構・遺物が検出された⁽¹⁷⁾。該期の遺物は他に、沢内村の下幅・坂本、湯田町の下前・館で表採されている。うち、下幅遺跡は、早期～中期の土器片および須恵器片が表採されており、多時期に亘る集落跡である可能性が指摘されている。また、下前遺跡については、本遺跡の南限を区切る下前川の流域に立地しており、本遺跡との関連が問題となろう。
- ③中期：両町村内で最も遺跡数が多い。沢内村内では、前述の下幅の他、安ヶ沢Ⅱ、桐沢、上長瀬野、ドの沢Ⅰ、新町Ⅰ・Ⅳ、頭無等で該期遺物が表採されている。うち、安ヶ沢Ⅱ遺跡は中期～晩期に亘る土器片が多量に採取されており、長期間営まれた大規模集落跡の可能性あり、との指摘がなされている（深沢・田村ほか2000）。また、上長瀬野遺跡では、表採遺物から、中期中葉（大木8b式期）の早時期の遺跡とされている。一方、湯田町内では、本遺跡近隣の湯本温泉、前述の峠山牧場Ⅰ、その他に本内Ⅱ、大谷Ⅰ、館、川尻中学校、剣戸、鷺ノ果、杉名畑、等の遺跡群が和賀川とその支流に沿って分布する。これらのうち、川尻中学校遺跡は損壊し、杉名畑遺跡は湯田ダム建設に伴って錦秋湖底に没している。また『湯田町史』では「湯本小学校地区」から出土した該期資料が紹介されている。
- ④後期：沢内村内では未調査ながら、高下Ⅰ・Ⅱ、安ヶ沢Ⅱ、桐沢、七内川Ⅰ、上嶺橋、太田、坂本、頭無等で該期の遺物が表採されている。湯田町内では、大波Ⅱ、本内Ⅱで該期に位置付けられる遺構・遺物が検出されたが、調査遺跡以外では明確に該期に位置付けられた遺跡は少なく、瀬戸、杉名畑が挙げられるのみである。
- ⑤晩期：該期に位置付けられた遺跡は僅少で、沢内村内の安ヶ沢Ⅱ、桐沢、湯田町内の湯本温泉、本内Ⅱが挙げられよう。うち本内Ⅱでは、初頭～前葉6棟、後葉～末葉7棟の竪穴住居跡をはじめとする遺構・遺物が検出された。

なお、両町村に隣接する秋田県山内村では、東北横断自動車道秋田線（横手～湯田間）建設事業に関連して、平成3～5年に半鹿郡山内村茂竹沢遺跡・小田Ⅳ～Ⅴ遺跡・虫内Ⅰ～Ⅲ遺跡・岩瀬遺跡・上谷地遺跡・越上遺跡の調査が行われ、縄文時代草創期～晩期の遺構・遺物が検出されている⁽¹⁸⁾。山内村～横手市の地域は地理的条件を鑑みて、本遺跡の所在する「西和賀地方」とも関係が深いと思われる。上記の遺跡群中、小田Ⅴ遺跡C地区で大木4～5式期の竪穴住居跡が検出され、該期土器が出土している（秋田県教委1996b）。なお、第6図には関幅の関係で越上遺跡のみを示した。

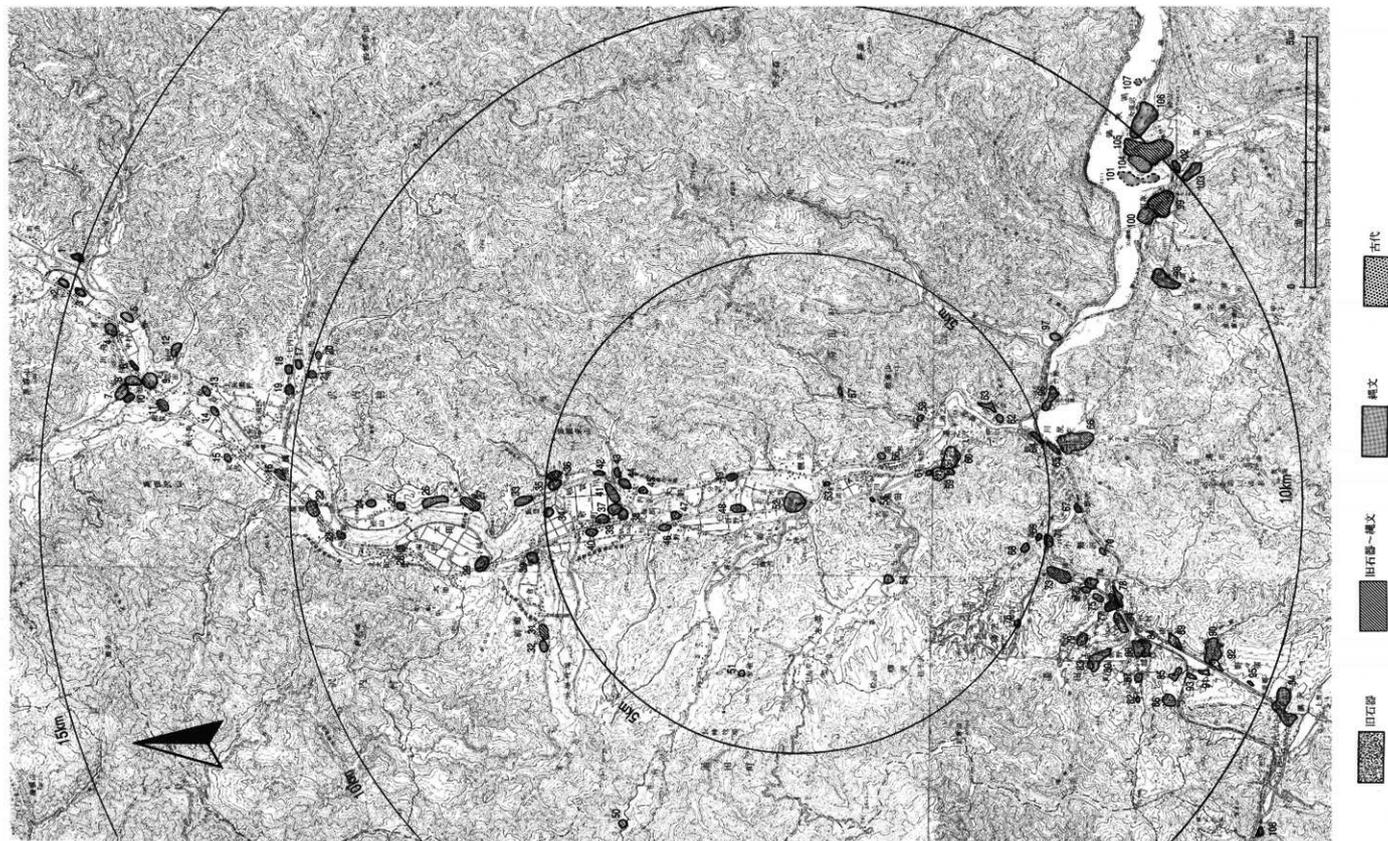
〈弥生時代〉 両町村ともに該期の遺跡として確実視されるものはない。該期の遺物は、沢内村内の頭無（表採）、湯田町内の大台野、野々宿、本内Ⅱの4遺跡から出土している。

〈古代〉 弥生時代と同様に、両町村内では古代の遺跡が希薄である。古代とされるのは、沢内村の太

表2 周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	備考
1	新山寺屋敷	沢内村	縄文	石棒	寺院跡
2	高下Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器(中・後)、硬玉大珠、楕形石器	
3	高下Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器(中・後)、石器	
4	川舟Ⅰ	沢内村	縄文	石斧、耳飾り、石彫形石製品	
5	川舟Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器、勾玉	
6	持田	沢内村	縄文	縄文土器、石匙、剥片	
7	安ヶ沢Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器、石器、剥片	
8	安ヶ沢Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器(中～晩)、石鏃、石匙、石棒;大規模集落?	
9	小坂	沢内村	縄文	縄文土器、石器、剥片	
10	安ヶ沢館	沢内村	中世	館周辺の畑地から剥片、土製品	城館跡
11	和賀	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
12	綱沢	沢内村	縄文	縄文土器(中～晩)、磨製石斧、剥片	
13	上長瀬野	沢内村	縄文	縄文土器(大木8a)、剥片	
14	藤森子	沢内村	縄文	縄文土器、剥片	
15	泉沢Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器、剥片	
16	泉沢Ⅱ	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
17	七内川Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器(中～晩;主体は晩)、石棒、石斧	
18	七内川Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器(中?)、剥片	
19	七内川Ⅲ	沢内村	縄文	縄文土器(中)、剥片	
20	和佐内Ⅰ	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
21	和佐内Ⅱ	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
22	上嶺橋	沢内村	縄文	縄文土器(中～後)、剥片	
23	橋橋	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
24	蛭山Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器(中)	
25	蛭山Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器、掻器	
26	磯沢Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器(中)、石器、剥片;表採遺物多	
27	磯沢Ⅱ	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
28	太田	沢内村	縄文・古代	縄文土器(後・晩)、剥片、土師器、須恵器	
29	下福	沢内村	縄文	縄文土器(早・前・中)、石器、須恵器、石製品	
30	坂本	沢内村	旧石器～縄文	縄文土器(前～後;主体は中)、剥片	
31	下の沢Ⅰ	沢内村	旧石器～縄文	剥片	
32	下の沢Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器(中)、剥片、石核	
33	飯豊	沢内村	縄文	縄文土器、石器、剥片	
34	瀬田館	沢内村	中世	縄文土器、剥片、須恵器	城館跡
35	七ッ釜館	沢内村	中世	縄文土器、剥片	城館跡
36	高間木	沢内村	縄文	剥片	城館跡
37	新町Ⅰ	沢内村	縄文	縄文土器(中)、石器、剥片	
38	新町Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器、石器、剥片	
39	新町Ⅲ	沢内村	縄文	石器、剥片、石核	
40	新町Ⅳ	沢内村	縄文	縄文土器(中)、	
41	嶺無	沢内村	縄文	縄文土器(中・後)、磨製石斧、剥片、弥生土器	
42	志賀来	沢内村	縄文	石器	
43	内沢環状列石	沢内村	縄文	環状石列、縄文土器(前～中)、剥片	S34 東京大学
44	内の沢Ⅰ	沢内村	縄文	石籠、剥片	
45	内の沢Ⅱ	沢内村	縄文	縄文土器、剥片	照台帳では古代
46	大野Ⅰ	沢内村	縄文	石器、剥片	
47	大野Ⅱ	沢内村	縄文	剥片	
48	大野Ⅲ	沢内村	縄文	縄文土器(後?)剥片、石核	
49	分沢	沢内村	旧石器～縄文	縄文土器、剥片	
50	下前	湯田町	縄文	縄文土器(前)、石器	
51	長峰	湯田町	旧石器	石刃、石匙	
52	清水ヶ野	湯田町	縄文	縄文土器(前～中)、石器	F111、報告遺跡
53	上湯田	湯田町	古代	土師器、須恵器	
54	火石長根	湯田町	縄文	縄文土器	
55	西山	湯田町	平安	合口榎棺墓	

No	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	備考
56	湯本温泉	湯田町	縄文	縄文土器(中・晩)、石斧	
57	大水上	湯田町	縄文		
58	湯之沢	湯田町	縄文	縄文土器、石器	
59	開木野Ⅰ	湯田町	旧石器	旧石器	
60	開木野Ⅱ	湯田町	旧石器	旧石器	
61	開木野Ⅲ	湯田町	縄文	縄文土器	
62	大倉Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器(中)、石鏃、石匙、石斧、土鏃	
63	大倉Ⅱ	湯田町	縄文	縄文土器、石器	
64	館	湯田町	縄文	縄文土器(前・中)、石斧、石鏃	
65	川尻Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器	
66	上野々	湯田町	縄文	縄文土器、石匙	H6 岩手埋文
67	合野々	湯田町	縄文	縄文土器、剥片石器	
68	落合	湯田町	縄文	縄文土器	
69	小繋沢Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器	
70	小繋沢Ⅱ	湯田町	旧石器	縄文土器	
71	塚野	湯田町	縄文	縄文土器、土坑	I14 岩手埋文
72	大波Ⅰ	湯田町	縄文	旧石器	H4 岩手埋文
73	大波Ⅱ	湯田町	旧石器~縄文	旧石器、有舌尖頭器、石斧、縄文土器、陥し穴	H3~5 岩手埋文
74	大波Ⅲ	湯田町	旧石器	炭化物粒	
75	大波Ⅳ	湯田町	縄文	縄文土器	
76	柳沢Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器	
77	大台野	湯田町	旧石器~縄文	旧石器、縄文土器、弥生土器、石器	S45~57 岩手埋文
78	大台野Ⅱ	湯田町	縄文	縄文土器、石器	損壊
79	細内Ⅱ	湯田町	旧石器		
80	白木野Ⅰ	湯田町	縄文	剥片石器	I14 岩手埋文
81	白木野Ⅱ	湯田町	旧石器	石刃他	
82	白木野Ⅵ	湯田町	旧石器	彫刻刀・石刃他	
83	白木野Ⅶ	湯田町	旧石器	剥片石器他	
84	越中畑Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器	
85	越中畑Ⅱ	湯田町	旧石器		
86	越中畑Ⅲ	湯田町	縄文		
87	越中畑Ⅳ	湯田町	縄文	縄文土器	H6 岩手埋文
88	越中畑Ⅴ	湯田町	縄文	縄文土器	I16 岩手埋文
89	中村	湯田町	旧石器	旧石器、剥片石器	
90	野々宿Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器、石器	
91	野々宿Ⅱ	湯田町	旧石器	旧石器、剥片石器	
92	野々宿Ⅲ	湯田町	旧石器	旧石器、剥片石器	
93	野々宿北	湯田町	旧石器	旧石器、剥片石器	
94	奥郷Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器	
95	奥郷Ⅱ	湯田町	旧石器	旧石器、剥片石器	
96	川尻中学校	湯田町	縄文	縄文土器(中)、石斧、石匙	損壊
97	廻戸	湯田町	縄文	縄文土器(中・後)、石器	
98	鷺ノ巣	湯田町	縄文	縄文土器(中)、石匙、石鏃	
99	耳取Ⅰ	湯田町	縄文	旧石器、住居跡、陥し穴、土坑、土器(前)、石器	H5~6 岩手埋文
100	耳取Ⅱ	湯田町	縄文	縄文土器	
101	草井沢	湯田町	縄文		
102	本内Ⅰ	湯田町	縄文	縄文土器、剥片石器	H5 岩手埋文
103	本内Ⅱ	湯田町	縄文	住居跡、土坑、縄文土器、剥片石器	H5~6 岩手埋文
104	本内Ⅲ	湯田町	縄文	縄文土器、石器	
105	峠山牧場Ⅰ	湯田町	縄文	焼土、旧石器集中区、縄文住居跡、土坑、焼土、土器(早・前・中)、石器	H5~6・8 岩手埋文・湯田町教委
106	峠山牧場Ⅱ	湯田町	縄文	縄文土器、石器	
107	杉名畑	湯田町	縄文	縄文土器(中・後)	水没・損壊
108	越上	山内村	縄文	縄文土器(前~後)、石器	H3 調査、秋田県教委



第6図 周辺の遺跡

田、湯田町の上湯田・西山の3遺跡である。該期の遺物は、沢内村の太田で内面黒色処理の上師器坏・須恵器、堀田館で須恵器、坂本で土師器（平安）、内沢Ⅱ⁽⁹⁾で土師器（平安）が表採されている。一方、湯田町では上湯田で土師器、西山で合口甕棺墓（平安）が出土したとされるが、詳細は不明である。次項で述べるが、今調査区の周辺から須恵器片が得られており、今調査区の周辺に古代の遺跡が存在する可能性もある。内沢Ⅱ・上湯田・西山の3遺跡は本遺跡の半径5km以内に位置しており、これらの遺跡との関連性が窺われる。

以上、本遺跡の所在する湯田町および北隣の沢内村について、遺跡の分布状況を概観した。本遺跡の近隣には、北0.7kmの新町Ⅲ（縄文後期）、北東の分沢（縄文）、南の上湯田（古代）・西山（平安）、南東の湯本温泉（縄文中・晩期）等が存在しているが、その分布密度は疎である。

5. 調査以外で得た知見

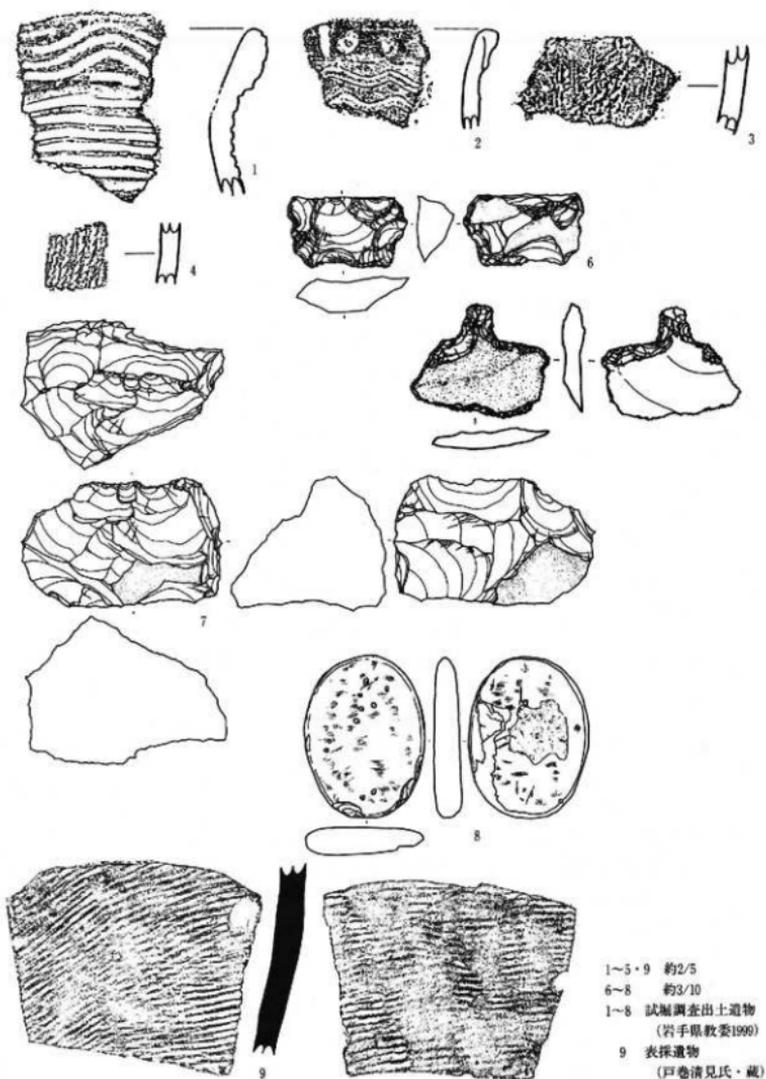
本遺跡は従前より縄文時代前期の遺跡として周知されており、『湯田町史』では本遺跡出土の遺物が紹介されている。同書に拠ると、昭和52年秋、岡道脇の原野において宅地造成工事により、土器・石器が出土したという。その際、菅原寛氏・戸巻和夫氏らが収集した資料では、縄文時代前期末葉〜中期初頭のものであったという。掲載されている上器片（同書70頁）・板状土偶（同書72頁）は大木6式に比定され、垂飾品（同書84頁）も今回の調査で出土したものに類似する。

今回の調査に先立って行われた試掘調査においても、A区付近を南北に縦断するトレンチから、大木6〜7a式の土器片、石器、石核等（第7図）が出土している（岩手県教委1999）。

一方、今回の調査区の25aグリッド付近を農業用水路が東西に横切っている。この用水路周辺を踏査したところ、調査区内外ともに用水水辺および河床には、縄文土器片・石器・剥片類が散布している。調査区中央部西側の隣接地に在住の戸巻清見氏によると、宅地造成および耕作に伴って多量の遺物が出土しているとのことであった。実見した表採遺物は、礫石器類および須恵器片である。うち、須恵器大甕の体部片（第7図）のみは、今回の調査区周辺に古代の遺跡が存在している可能性を示唆する資料であると思われる。

<注>

- (1) 平成10年10月時点の数字を示した。岩手日報社（1999）による。
- (2) 小原（1980）、19頁。
- (3) 当センターが調査を行った湯田町本内Ⅱ遺跡の基本層序において、「焼上と類似して」いる「粘性があるシルト」層（Ⅱa層）が検出されており、本遺跡のⅢa層に類似すると思われる。但し、本内Ⅱ遺跡では、この層からの出土遺物の大半が縄文時代晩期の遺物であることから、晩期以降に堆積したものと推定されている（岩手埋文1998）が、本遺跡では、ごく僅かに後期の土器片が出土しているのみであり、様相を異にする。
- (4) 沢内村教育委員会が平成9〜11年度に詳細分布調査を実施した結果、新規に41遺跡が追加登録された（沢内村教委1998・1999・2000）。
- (5) 沢内村教委（前掲）と岩手県登録台帳とは、一部、内容が異なる遺跡がある。本項では、沢内村内の遺跡については前者を基として、後者を加味する形で記述した。
- (6) 和賀川上流域における中世城館については、下記に詳しいので参照されたい。
本堂寿一（1985）「和賀川上流域の館跡とその分布について」『北上市立博物館研究報告』第5号、北上市。



第7回 調査以前の出土遺物

市立博物館

(7) 後述第VI章を参照。

(8) このうち、上谷地遺跡、岩瀬遺跡、小田IV・V遺跡、茂竹沢遺跡では、縄文時代前期の石器製作跡が検出されている。後述の第VI章を参照。

(9) 沢内村教委(2000)では縄文時代の遺跡として登録されているが、古代の土器も表採されている。岩手県教委の遺跡台帳では古代とされている。

Ⅲ. 調査方法と整理方法

1. 調査の経過

平成11年は春先の残雪が多く、現場設営に支障を来した。前年度末の3月30日に行った現地確認の際には、調査区全域に亘って残雪が1.5~2.0mと厚く、調査区の現況を把握できなかった。委託者に対して、調査区内では比較的広い南部(A区)について重機による除雪を依頼し、4月9日、委託者・プレハブ建設予定地地権者と第2回の現地協議を行った。

4月13日、調査事務所プレハブへ機材を搬入、現場を設営して調査を開始した。除雪されたA区には、伐採された雑木等が散乱していたため、雑物撤去作業を行う。一方、除雪を行っていない調査区中央部(B区・北部(C区))には、猶も厚さ0.8~2.0m程の雪が残っていたため、人力による両区の除雪作業を午後から開始した。作業は16日まで継続した。4月15日、除雪・雪消し作業と並行して、調査区の設定を実施。調査区の境界杭が、除雪の際に失われ、調査区の確定が滞ったため、委託者との現地協議を行う。4月16日、民家の基礎コンクリート等が残存していたB区を除いて、A・C区にトレンチを設定して試掘を開始した。その結果、表土層から基盤粘土層(地山)まで満遍なく遺物が包含されていることが判明した。そこで粗掘を人力で行うこととし、A・C区の粗掘を4月20日から開始した。この粗掘段階で多量の土器片・剥片類等が表面採取された。同日、湯田町教育委員会高橋主事が来跡し、調査区近隣の県立西和賀高校生徒の現場見学について協議した。

4月21日、基準杭の打設が完了し、調査区のグリッド設定を行う。調査区が狭隘なため、排土処理が問題となっており、同口、委託者と現地協議を行っている。その結果、調査区外に排土の置き場が確保できないため、排土の反転を行わざるを得ず、まず6月中旬を目処にC区の粗掘・精査を優先して行うこととなった。しかし、C区のⅡ層下位~Ⅳ層上位において多量の遺物が出土し、精査は難航した。特に29a~32aグリッド付近から遺物が集中して出土している。

4月26日、県文化課の現地指導が実施され、調査方法等について指導助言を受けた。5月6日、西和賀高校生徒が地学教育の一環として現場見学を訪れた。以後、同校生徒の来跡は調査終盤まで断続的に継続している。5月17日には、湯田町教育委員会小原教育長が来跡した。

5月12日、C区において、29aグリッドの西側調査区境の法面で土器埋設遺構(1号埋設土器)、31aグリッドのⅡ層下位面では焼土(1号焼土)が相次いで検出された。同口、重機によるB区の表土除去作業を実施。民家の基礎コンクリートおよび盛土を除去し、プレハブ用地内に移動し仮置きすることとした。B区盛土下は、礫を多量に含む黒~黒褐色土層が存在し、砂礫層が地山であった。但し、この礫を含有する黒色土層中にも遺物が包含されており、必ずしも人為的な盛土層ではないことが判明した。また、C区では、2号

埋設土器が検出されている。5月26日、B区のIV層相当の礫層面で上器埋設遺構を検出（3号埋設土器）。B区南側の砂礫層（地山）では大規模な土坑（21号土坑）やフラスコビット（28号土坑）が検出された。

5月25日～26日、本遺跡が当センター新任調査員の現場研修会場となった関係で、A区のII層面の粗掘を行って研修準備を行った。その際、A区8bグリッドの層面で、焼土1箇所および遺物集中地点数箇所が検出された。5月27日～28日、新任調査員現場研修が本遺跡を会場として実施された。県南各遺跡の調査を担当する新任職員8名が参加して、A区のII層面の精査を行った。検出されていた8bグリッドの焼土、および遺物集中地点付近で竪穴住居跡等の遺構の存在が想定されたが、明瞭ではなかった。結果的には、8bグリッドの焼土は後述の2号焼土となった。なお、遺構の疎な14a～15aグリッドについては6月1日で精査を終了し、排土の仮置き場とした。

6月4日、C区26aグリッドで石囲炉を検出、竪穴住居跡（1号住居跡）として登録した。これ以後、C区では竪穴住居跡の検出が相次いだ。6月2日、29a～30aグリッドIV層面で、黄褐色ブロックを多量に含む暗褐色上のプランを検出し、6月4日には、27a～28aグリッドのIVa層面で多量の遺物を含む暗褐色土のプランを検出した。6月8日に27aグリッドのプランは1棟、次いで6月11日に30aグリッドのプランは2棟、それぞれ竪穴住居跡であることが判明した（2～4号住居跡）。特に狭隘なC区において、予想外に竪穴住居跡の検出が相次いだことにより、C区の精査終了は大幅に遅れ、最終的には精査・実測完了に7月下旬までの約2ヶ月弱を費やした。このことが、調査全体の遅れを引き起こしてしまった。この間、6月11日、当文化振興事業団理事長の現場視察が行われた。

6月中旬以降、精査の遅れているC区と並行して、A・B区の精査も実施した。6月15日、3号住居跡の覆土から赤色顔料の付着した石匙が出土した。6月中～下旬、A区III層面の精査を実施し、前期末葉の土器片が多量に出土している。7月上旬、A区の精査がIV層面まで進んだ段階で、4a～5cグリッドにおいて大形のプランが検出された。当初、このプランは人形住居跡と推測されたため、床・壁の確認のため各所にサブトレンチを設定するが把握できず、精査が難航した。7月8～14日の間、濱田宏調査員の調査支援を受けて、各調査区の調査を並行して進めた。7月12日、A区の精査中、遺構外で缺状耳飾2点が相次いで出土した。また、B区23a～24aグリッドで、住居跡床面と思われる粘土層を貼った平坦面を検出し、精査している（5号住居跡）。かかる状況により、予定の7月末での調査終了が難しい見通しとなり、8月9日まで調査が延長されることとなった。

7月9日、岩手日報社芸芸部が取材のため来跡。7月17日に現地説明会を開催した（参加者40名）。また、7月21日、下前小学校の児童7名が現場見学のため来跡した。

調査終盤の7月30日、県文化課と委託者の立会いの下、調査終了確認が行われた。しかし、A区4a～5cグリッドのIV層下位～Va層面で検出された大形の遺構プラン、およびB区の5号住居跡、20a～21aグリッド付近の精査が途上であり、調査終了は不可能であった。協議の結果、調査期間を8月17日まで再延長して、A・B区の精査を進めることとなった。また、その際、民家の進入路の関係で未調査だった18～20グリッド付近について遺構の有無を確認する旨、指導を受けた。これを承けて、当該グリッドについて重機による盛土除去を急遽実施し、砂礫層（地山）面の精査を行った。柱穴状小土坑1基（29号土坑）のみを検出、精査の後、直ちに埋め戻した。一方、7月30日に4号住居跡の精査がほぼ終了し、C区の精査が概ね終了した。

8月3日、調査区の空中写真の撮影を実施した。一方、A区の大形住居跡と思われたプランの精査を進めた結果、実際には10基以上の土坑群の重複・密集したプランであったことが判明。そこで、最後までプラン上に残っていた土層観察ベルト（駐）を除去し、個々の土坑の精査を進めた。この間、B区の精査が並行

して進められたが、当初想定していた範囲よりも5号住居跡の範囲が南に伸びており、20a～24aグリッドに及ぶことが判明した。5号住居跡の精査は8月10日に終了し、直ちにB区の埋め戻しを行った。一方、8月4日からは重機を稼働し、精査終了したA区北半部およびC区の埋め戻しを並行して行っている。8月10日～11日、7坑群の精査は、平面実測を残して概ね終了した。8月17日、A区上坑群の平面実測を終了、A区南半部を埋め戻した。午後、機材搬出して現場作業をすべて終了、撤収した。

2. 野外調査

<グリッドの設定と遺構名>

本遺跡の調査区は、前述のとおり、主要地方道盛岡横手線に沿った東西約1～17m・南北約180mの南北方向に細長く延びた範囲である。主要地方道盛岡横手線は、調査区付近では直線的に南南東-北北西方向へ延びている。平面直角座標系第X系に沿ったグリッド設定が難しく、地形に沿った任意のグリッドを設定することとした。

まず、調査区東側(現道西輪)に任意の基準点1・2を設定した。この基準点2点を結んだ延長線を基準線とした(グリッド基軸線と磁北のズレは、 $N-11^{\circ}40' -W$ である)。この基準線およびそれに直交する線を5m毎に分割して、調査区全体を覆う 5×5 mのグリッドを設定した。このグリッド南東端を基点として、東西方向には東からa～d、南北方向には南から1～36の名称を付した(第9図)。基準点の測量成果値は次のとおりである。

$$\text{基準点1 } X = -71,225.202 \quad Y = -5,797.228 \quad H = 263.723$$

表3 新・旧遺構名の対応

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
1号住居跡	C26a 住居跡	13号土坑	A5a-4土坑	30号土坑	B22a 土坑
2号住居跡	C28a 住居跡	14号土坑	A5a-1土坑	31号土坑	C28a 土坑
3号住居跡	C30a-1住居跡	15号土坑	A4a-4土坑	32号土坑	C30a 土坑
4号住居跡	C30a-2住居跡	16号土坑	A4a-3土坑	33号土坑	C32a 土坑
5号住居跡	B24a 住居跡	17号土坑	A5a-3土坑	1号土器埋設遺構	C29a 埋設土器
1号土坑	A4b-3土坑	18号土坑	A5b-3土坑	2号土器埋設遺構	C27a 埋設土器
2号土坑	A4b-2土坑	19号土坑	A5b-4土坑	3号土器埋設遺構	B15a 埋設土器
3号土坑	A4a-1土坑	20号土坑	A6b土坑	1号焼土	C31a 焼土
4号土坑	A4b-1土坑	21号土坑	B13a 土坑	2号焼土	A8b住居跡
5号土坑	A4c-1土坑	22号土坑	B15a 土坑	3号焼土	A5b 焼土
6号土坑	A4c-2土坑	23号土坑	B16a-4土坑	4号焼土	A6b 焼土
7号土坑	A5b-1土坑	24号土坑	B16a-3土坑	5号焼土	A7b 焼土
8号土坑	A4b-4土坑	25号土坑	B16a-2土坑	6号焼土	A8a 焼土
9号土坑	A5b-2土坑	26号土坑	B16a-1土坑	1号獨立木建物跡	A4a 建物跡
10号土坑	A4a-2土坑	27号土坑	B16a-1土坑	登録抹消	A4a住居跡
11号土坑	A5a-5土坑	28号土坑	B17a 土坑		B14a 土坑
12号土坑	A5a-2土坑	29号土坑	B18a 土坑		B21a 集石

基準点2 X=-71,104.570 Y=-5,820.823 H=264.542

また、野外調査においては、調査区の地形および調査の便宜を考慮して、60m毎に調査区を区別して南からA～C区とした。グリッドの呼称は区名を付してA5bグリッド・C29aグリッド等としたが、本報告書では5bグリッド・29aグリッド等と区名を除いたグリッド名で記載している。遺構名は、調査時にはグリッド名と遺構種別を組み合わせて、B24a住居跡・C27a埋設土器等と呼称した。その後、室内整理の段階で検討した結果、現場で認定した遺構のうち幾つかを登録変更・抹消し、新たに遺構種別毎に通し番号を付して、5号住居跡・2号埋設土器等と遺構名を変更した。住居跡・土器埋設遺構・焼土については検出順で、土坑については埋雑さを避けるため南から順に番号を付している。なお、旧遺構名と新遺構名の対応は表2のとおりである。

<掘削と遺構の検出>

調査開始当初、調査区には1.5～2.0m程の積雪が残存しており調査に支障を来す為、委託者と協議の上、A区については重機による除雪を行った。しかし、狭隘なB・C区については重機の除雪は不可能だったため、人力による除雪を行った。除雪完了後、遺構検出面までの深さおよび層序把握のため、調査区内の任意の地点に1.5×1.0mの試掘トレンチを入れた結果、A区・C区においては1層～V層まで満遍なく多量の遺物が包含されていることが判明したため、原則として人力による表土除去を行い、遺構の有無を確認しながらV層（地山）まで層位的に掘り下げた。1c・d～3cグリッド付近については人為的な深い攪乱を受けていたため、重機によって遺構検出面までの除去を行った（現地表面では岩手県教育委員会事務局文化課の試掘トレンチの痕跡が確認できなかったが、この攪乱部分が試掘トレンチ満だったと思われる）。一方、B区においては民家の基礎コンクリート部分が残存しており、かつ表土約50cmまでは人為的な盛上であることが判明したため、重機によって遺構検出面までの除去を行った後、A・C区同様に人力による掘り下げを行った。なお、盛土中には遺物が含まれていることが地表面でも確認できたが、除去後に排土中から可能な限り遺物を採取することとした。

<遺構の精査と出土遺物の取り上げ>

検出した遺構の精査は、住居跡は4分法、土坑・土器埋設遺構・焼土等は2分法を原則とした。しかし、実際には住居跡は総て狭隘なB・C区でのみ検出されたため、住居跡に関しても2分法を採用して精査を行った。精査の各段階で、必要に応じて写真撮影や断面・平面実測を行った。また、調査員が遺構の壁・底面（床面）を指示できず、掘り過ぎてしまった遺構もある。遺構内の出土遺物については、原則として覆土上部・覆土下部・床面に区分して取り上げた。但し、厳密な層位区別による取り上げはできず、結果的には「覆土」で取り上げたものが多かった。遺構外の出土遺物については、グリッド別に出土層位を記録し、適宜、写真による記録を行って取り上げた。従って、遺構外出土遺物については、出土位置・状況の図面での記録をとっていない。また、調査員が指導・点検を徹底できず、出土位置・層位が不明な遺物も多くある。精査における観察事項は、可能な限り現場でフィールドカードに記録し、広汎な情報の収集に努めた。

<実測方法・写真撮影>

遺構の実測は、いわゆる簡易測方によって行った。なお、土抗の一部については平板測量で実測している。遺構の実測図は、住居跡・土坑・掘立柱建物跡については1/20縮尺で、土器埋設遺構・焼土遺構については1/10縮尺で平面図・断面図を作成した。土層の観察に際して、色調の判別は『新版 標準土色帳（第10版）』（小山正忠・竹原秀雄 1990）に拠った。土層注記の表現については、以下のとおりである。

土質については概ね「砂・砂質土・シルト（壤土）・粘土質土・粘土」で記録したが、本遺跡で最も一般的に見られる「シルト」については、本報告書では特に記載していない。つまり、特に土質の記載がない場合は「シルト」である。また、粘性・締まりについては、野外調査では概ね「粘性：強・やや強・中・やや弱・弱（・なし）」「締まり：（堅く締まる）・あり・ややあり・中・ややなし・なし」という表現で記録したが、本報告書では「粘性：強・弱（・なし）」「締まり：あり・なし」とのみ表記し、各属性の中間表記（「やや～」、「中」の類）は記さないことを原則とした。従って、注記において各属性の記載がない場合は、その土層が中間的性質であることを示している。また、含有物等については、「10%含む」「少量含む」等、表現にばらつきがあるが、統一していない。

写真撮影は、当初、6×7cm判カメラ（モノクロ）を主として、35mm判カメラ2台（モノクロ・カラーリバーサル）を補助カメラとして使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるため、撮影カードを使用している。また、適宜、ボラロイドカメラを使用した。撮影したボラロイド写真はフィールドカードに貼付し、文章記載による記録を補完した。また、調査終盤には、セスナ機による空中写真を撮影している。

3. 整理方法

野外調査の終了後、平成11年11月1日～平成12年3月31日の期間に、調査記録および出土遺物の整理を行った。しかし、出土遺物量が多く当該期間内に整理作業が終了しなかったため、平成12年7月1日～平成12年9月30日の3ヶ月間、期間を延長して室内整理を行った。整理作業の大まかな内容は、次のとおりである。

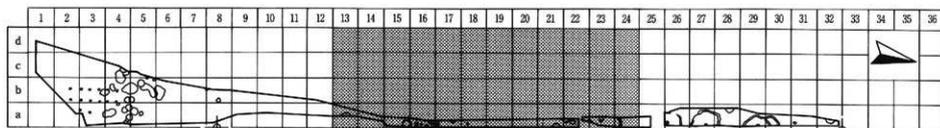
〈遺構〉 遺構の実測図は遺構毎の分類・整理および点検を行った後に、修正図（第二原図）を作成してトレースし、作成した原図・修正図には番号を付して図面台帳を作成した。

〈遺物〉 野外調査の段階で遺物洗浄を行い、野外調査終了時点でほぼ遺物洗浄を終了した。室内整理が開始された11月以降、遺物を遺構・グリッド別に仕分けした後、以下の手順で資料化を図った。

土器・土製品：平成11年11月～翌年1月中旬の間、遺構・グリッド別に接合・復原・選別・登録を行った。今回は整理期間を勘案して、原則として異なる遺構・グリッド間では接合を行っていない。反転実測可能な状態で接合した個体は、立体として登録した。一方、立体とならなかった破片から、口縁部・文様の明瞭な胴部（体部）の破片を中心に、拓影作成用破片を選別・登録している。底部破片については、木葉痕・網代痕等の認められるものを中心に選別した。土器片への出土地点・層位の記名は、接合分の破片についてのみ行った。なお、注記段階では遺構名を変更していないため、旧遺構名が記名してある。1月中旬～3月末まで、登録した立体（および破片の一部）の実測、破片の拓影作成、写真撮影を並行して行った。以上の作業は3月末で終了し、翌年度8月下旬～9月下旬には、実測図・トレース図・拓影図の修正、図版作成を行った。

石器類・石製品：現場での仕分けが未了だったため、平成11年11月下旬から、出土した石器類を器種・出土地点別に仕分けし、それぞれ別個に出土地点・層位を記入したビニール袋へ収めた。石器類にはすべて仮番号を付して登録した。2月上旬～3月上旬にかけて登録石器の観察を行って、報告書掲載遺物を選別した。当該年度は以上の作業で終了した。実測・トレースは、翌年度に行った。遺構外出土の石鏃・石匙・尖頭器・石錐・不定形石器については大成エンジニアリング㈱へ委託し、それ以外の石器については当センター臨時職員が7～8月に実測を行った。図版作成は9月に行った。

〈写真〉 撮影したコマ順に整理して写真台帳を作成した後、6×7cm・35mmのネガフィルムはネガアルバムに貼付し、35mmリバーサルフィルムはスライドファイルへ、それぞれ収納した。

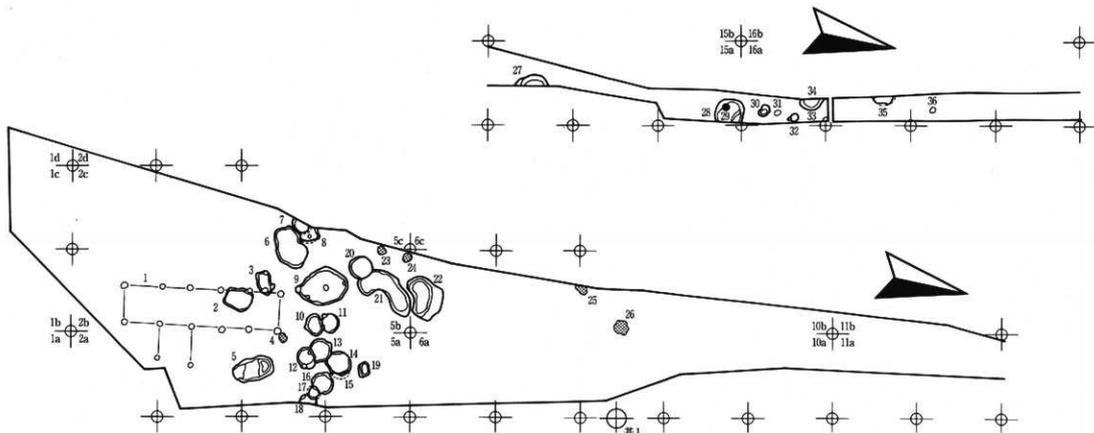
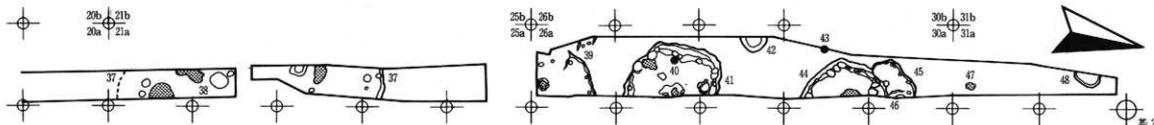


X=71,225.202
Y=-5,797.228

X=71,104.570
Y=-5,820.823

遺構名一覧

No.	遺構名
1	1号掘立柱建物跡
2	1号土坑
3	2号土坑
4	6号焼土
5	3号土坑
6	4号土坑
7	5号土坑
8	6号土坑
9	7号土坑
10	8号土坑
11	9号土坑
12	10号土坑
13	11号土坑
14	12号土坑
15	13号土坑
16	14号土坑
17	15号土坑
18	16号土坑
19	17号土坑
20	18号土坑
21	19号土坑
22	20号土坑
23	3号焼土
24	4号焼土
25	5号焼土
26	2号焼土
27	21号土坑
28	22号土坑
29	3号埋設土器
30	23号土坑
31	24号土坑
32	25号土坑
33	26号土坑
34	27号土坑
35	28号土坑
36	29号土坑
37	5号住居跡
38	30号土坑
39	1号住居跡
40	2号埋設土器
41	2号住居跡
42	31号土坑
43	1号埋設土器
44	3号住居跡
45	4号住居跡
46	32号土坑
47	1号焼土
48	33号土坑



第9図 遺構配置図

IV. 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 5 棟、上坑 33 基、土器埋設遺構 3 基、焼土遺構 6 基、時期不明の掘立住居跡 1 棟である。遺物は、縄文時代の上器 50 箱分〔T-40 規格 (41×31×19) コンテナ；以下、「箱」は同規格コンテナの換算値を示す〕、石器類 2,622 点、土製品 4 点、石製品 46 点、金属製品 6 点が出土した。

なお、遺構内出土遺物については、各遺構の記載においては概略のみ触れる。遺物の分類等については「6. 出土遺物」において遺構内外の出土遺物を一括して記載する。

1. 竪穴住居跡

1号住居跡

遺構 (第10図、写真図版5)

〔検出状況・重複関係〕調査地北部の26 a グリッドに位置する。同グリッドのIV層下部面において、石囲炉と思われる礫の並びを検出した。そこで、周辺を清浄したがプランを把握できなかった。但し、検出した炉のレベルから床面と推定されるV層面において、壁の残存と思われる僅かな立ち上がりおよび柱穴状小上坑数基が認められたことから、不明瞭ながらも竪穴住居跡と認定した。

〔平面形・規模〕壁を明瞭に把握できなかったため、全体の平面形・規模の詳細は不明である。石囲炉の西・北側で検出した僅かな立ち上がりが本住居の壁であるとすれば、住居の構築範囲は調査区外に伸びているものと思われる。

〔床面積〕不明である。

〔覆 上〕上位はI～II層、中位はIII a 層、下位はIV層系の暗褐～黒褐色土で構成され、自然堆積の様相を示している。下位の黒褐色土には炭化物・焼土粒がごく僅かに含まれる。

〔壁・床面〕前述のとおり、5～7 cm 程のごく僅かな立ち上がりが確認されたが、壁の残存部であるか確認できなかった。炉周辺の床面はV層相当で、ほぼ平坦である。かから 1 m 程北側には焼成の微弱な焼土層・炭化物粒の分布が認められる。分布範囲は約1.1×1.2 m の楕円形状を呈している。地焼炉の痕跡だった可能性があるが、明瞭ではない。

〔炉〕石囲炉1基を検出した。使用痕のない自然礫6個を用いたもので、平面形は方形状を呈する。炉石の周囲に設置痕跡が確認されている。炉内には層厚00 cm 程の焼土が形成されているが、焼成は良くない。

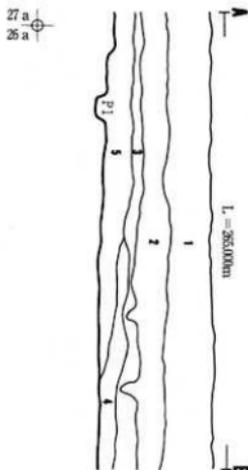
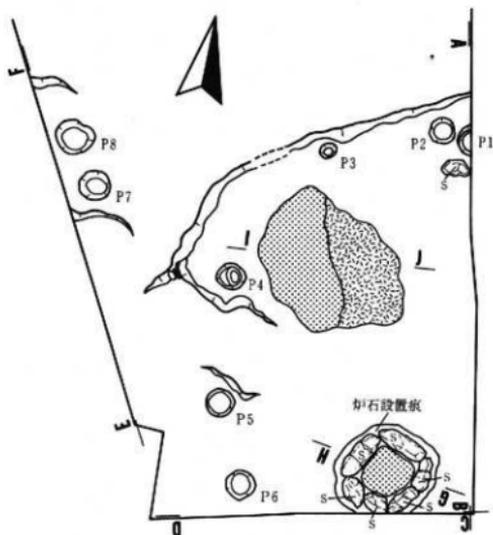
〔柱 穴〕床面で柱穴状小上坑 8 個を検出した。いずれも柱痕跡は認められず、径・深さから考えても、主柱穴と思われるものはない。

〔壁 溝〕検出されていない。

遺物 (第11図、写真図版23)

検出した時点で覆土の大部分が失われており、「26 a グリッド・IV層」で取り上げた遺構外遺物に本住居跡に属する遺物が含まれていると思われる。しかし、当該グリッド出土遺物から本住居に属する遺物を分離できないため、炉検出(遺構認定)以後に確認できた出土遺物のみを示した。

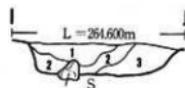
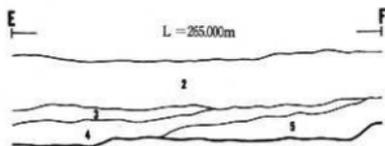
〔土 器〕約1.0 kg が出土したが、小片が多い。伊覆土から出土した1点(1)を掲載した。半葎竹管状工具による平行沈線で山形文を施した深鉢の胴部破片である。



SPA-B-C-D-E-F

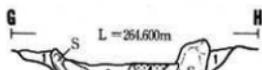
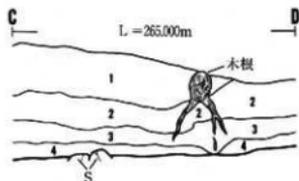
- 1 表土 (盛り土) [I層]
- 2 IYR2/1 黒 粘粒なし [II層]
上段にIYR7/1 灰白ブロック (火山灰?) を雜らに含む
- 3 IYR2/2 黒 粘粒あり [III層]
- 4 IYR2/3 暗褐 粘粒あり
- 5 IYR2/3 黒褐 粘粒あり 炭化物粒・焼土粒散在に含む

26 a
25 a



- 1 IYR4/6 褐 焼土 (焼成弱) IYR6/8 明黄褐色ブロック雜らに含む
- 2 IYR2/3 暗褐
- 3 IYR2/4 暗褐 炭化物小粒少量含む IYR6/8 明黄褐色ブロック含む

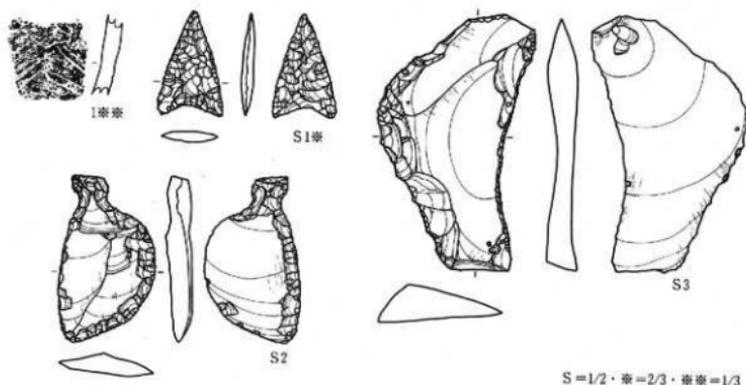
0 1m



- 1 IYR2/4 暗褐
- 2 IYR2/3 暗褐
- 3 IYR4/6 褐 焼土 (焼成微弱) IYR6/8 明黄褐色ブロック雜らに含む
- 4 IYR4/8 中褐 焼土 微小粒を含む

0 50cm

第10図 1号住居跡



第11図 1号住居跡出土遺物

〔石器〕3点出土した。S1は無茎凹基の石鏃、S2は楕形の石匙、S3は不定形石器である。時期 炉覆土から出土した土器片は縄文時代前期末葉の特徴を示しているが1片のみであり、所屬時期の判断材料としては弱い。また、炉の形態が他の住居跡に比して異質である。以上より、縄文時代前期末葉～中期に属するものと推測されるが詳細は不明である。

住穴計測表

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
開口部 (cm)	(27)	24×22	15×13	23×21	23×24	25×22	26×23	35×25
深さ (cm)	10	11	15	15	11	9	12	15

2号住居跡

遺構 (第12～13図、写真図版6～7)

〔検出状況・重複関係〕調査区北部の27aグリッドのIVa層下位～Va層面で、遺物が集中出土する黒褐色土のプランを検出し、遺構として認定した。住居跡東側は調査区外(規道)に伸びており、住居跡西側を部分的に検出したに過ぎない。2号埋設土器が、本住居跡の西壁中央付近の覆土を截って構築されている。

〔平面形・規模〕東側が調査区外に伸びているため、全体の平面形・規模は不明である。検出部分から推測すると、概ね東西方向に長軸線をもつ隅丸方形を呈するものと考えられる。検出部分は、東西3.6m以上、南北5.2mを測る。

〔床面積〕9.60㎡(検出部分)

〔覆土〕炭化物粒を含む黒褐～暗褐色土を主体とする。覆土の堆積状態は自然堆積の様相を示す。覆土には遺物が多量に包含されており、床面上約10cmから床面にかけて、遺物の集中箇所が検出された。廃絶された堅穴が徐々に埋没していく過程で、埋没しなかった凹地に遺物を集中廃棄したものであり、必ずし

も本遺構に伴うものではないと思われる。便宜上、廃棄ブロック①～⑦・一括土器①～②として取り上げている（第13図参照）。

〔壁・床面〕検出部分では、床面からやや外傾して立ち上がる。残存する壁高は15～20cmである。床面はほぼ平坦で堅く締まっている。北壁際および南壁際の床面では、非現地性の焼土・炭化物粒の集積が検出されている。壁上部はⅤa層、壁下部・床面はⅤ層に相当する。なお、南壁際の床面ではほぼ完形の深鉢（2）が横倒しの状態で出土している。

〔炉〕検出部東縁で地焼が1基を検出した。床面を深さ10cm程の浅い皿状に掘り窪めており、その底面で焼土が認められる。焼土は痕跡程度で、焼成は良くない。炉掘り込み部の南北両縁には、大小6個の礫が設置されている。断面では礫の設置痕は認められず、礫を直接床面に突き刺して設置していた礫には被熱痕跡はなく、その用途は不明である。

〔柱 穴〕主柱穴と思われる5個の柱穴状土坑を検出した。壁際床面および壁溝内で検出されており、床面中央付近では検出されていない。平面形は円形乃至は楕円形を呈し、深さ37～74cmである。覆土は黒褐色土で、柱痕跡は確認できなかった。底面は堅くしまっており、底面中央付近では柱設置痕跡と思われるグライ化が認められる。検出した柱穴間では、P1-P5、P2-P4（またはP3）の対応関係が認められることから、推定長軸線（東-西）を挟んで、左右対称に主柱穴が配置されているものと推測される。なお、壁溝内には柱穴と認定できない程度の不整な浅い窪みが認められ、副穴的な施設だった可能性もある。

〔壁 溝〕検出した壁に沿って、柱穴状土坑に連結しながら断続的に巡っている。南北側では壁際に、西側では壁から約30～50cm離れた床面に構築されている。覆土は暗褐色土である。幅15～45cm、深さ20～35cmを測る。壁は底面から直立しないしは外傾して立ち上がり、断面形はU字乃至はV字状を呈する。底面は部分的に浅く窪んでおり、補助的な柱が設置されていた可能性もある。

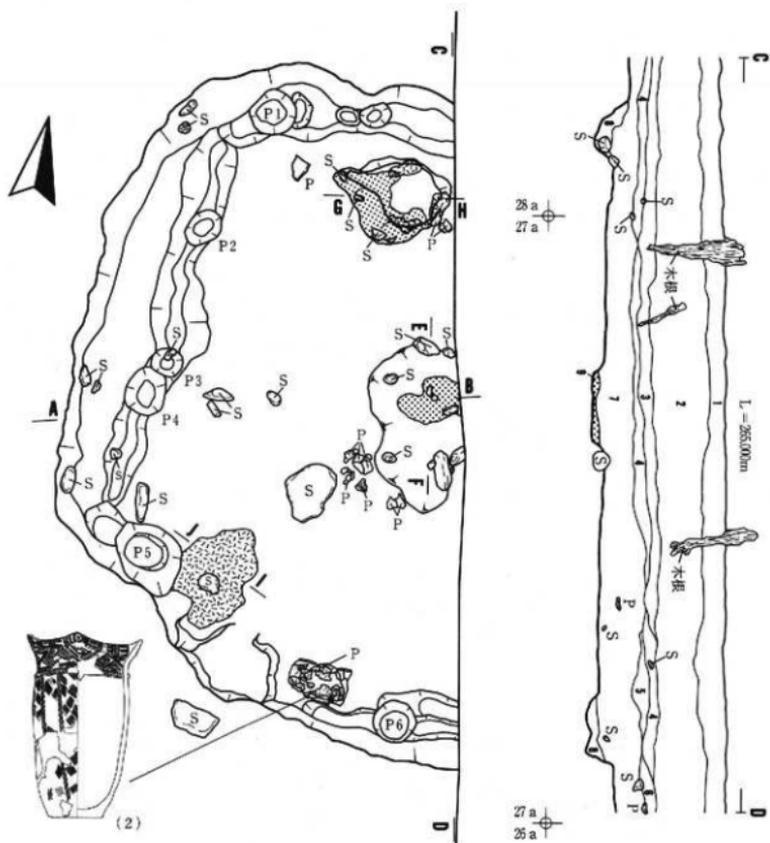
〔付属施設〕南壁中央付近で、スロープ状の施設を検出した。このスロープは、壁から60cm内側の床面から緩やかな傾きで立ち上がり、壁上部へ連結している。床面からの傾斜角は約30°である。断面で確認したところ、スロープ部分は地山（Ⅴ層）で、壁穴住居構築時に意図的に地山を残存させたものと思われる。本施設の用途については明瞭な論証を欠くが、出入り口状施設と推測される。

柱穴計測表

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
開口部 (cm)	35	59×48	40×30	29×22	34×27	41×37
深 さ (cm)	55	74	37	41	55	73

遺物（第14～22図、写真図版23～29）

〔上 器〕立体10点と破片60点を図化した、その他の約11.5kg分を不掲載とした。床面：2・3・12～17が出土した。2は、ほぼ完形の深鉢で南側壁際から出土した（第12図）。頭部の刻みを伴う隆帯により区画された口縁部に、半截竹管状工具の背面（または棒状工具）を用いた凹線による重磨的なA形モチーフや、半截竹管状工具の腹面による連続山形沈線を施文する。胴部は綾線文（LR 結節×2）が縦走している。3は、鉢形土器である。口縁が波状（6単位?）をなし、口縁部が肥厚・無文化し、胴部には平行沈線が縦に施されている。12は深鉢の口縁～胴部上半部の破片で、平縁である。平行な3条の凹線により区画された口縁部文様帯に、上下交互に連弧文が施される。胴部には綾線文が縦走する。13～17は小破片であるため詳細不明であるが、概ね12と同様であると思われる。廃棄ブロック：4～9・11・27～50。4はほぼ

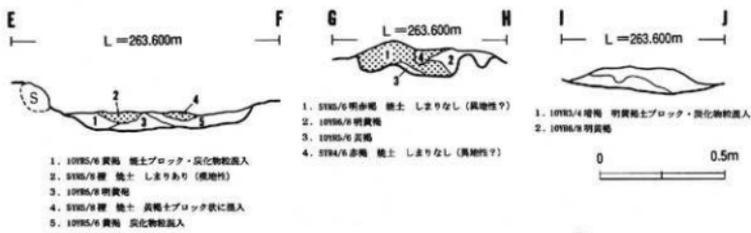


- SPA-B
- 1 10YR2/2 黒陶 胎性なし 炭化物粒少量含む
 - 2 10YR2/2 黒陶 炭化物粒・黄褐色フロッサ少量含む
 - 3 10YR2/2 黒陶 胎性なし 炭化物粒少量含む
 - 4 10YR3/2 暗陶 しまりあり 黄褐色粒多く含む
 - 5 10YR2/2 黒陶

- SPC-D
- 1 10YR2/2 黒陶 表土(盛り土) [I層]
 - 2 10YR2/1 黒 シルト質砂質土 [II層]
 - 3 10YR4/6 褐 胎性あり [III層]
 - 4 10YR2/4 暗陶 胎性なし しまりあり 炭化物粒少量含む
 - 5 10YR4/3 に近い黄陶
 - 6 10YR3/2 暗陶
 - 7 10YR3/2 暗陶 しまりあり 炭化物・焼土粒少量含む
 - 8 10YR2/3 黒陶 しまりあり

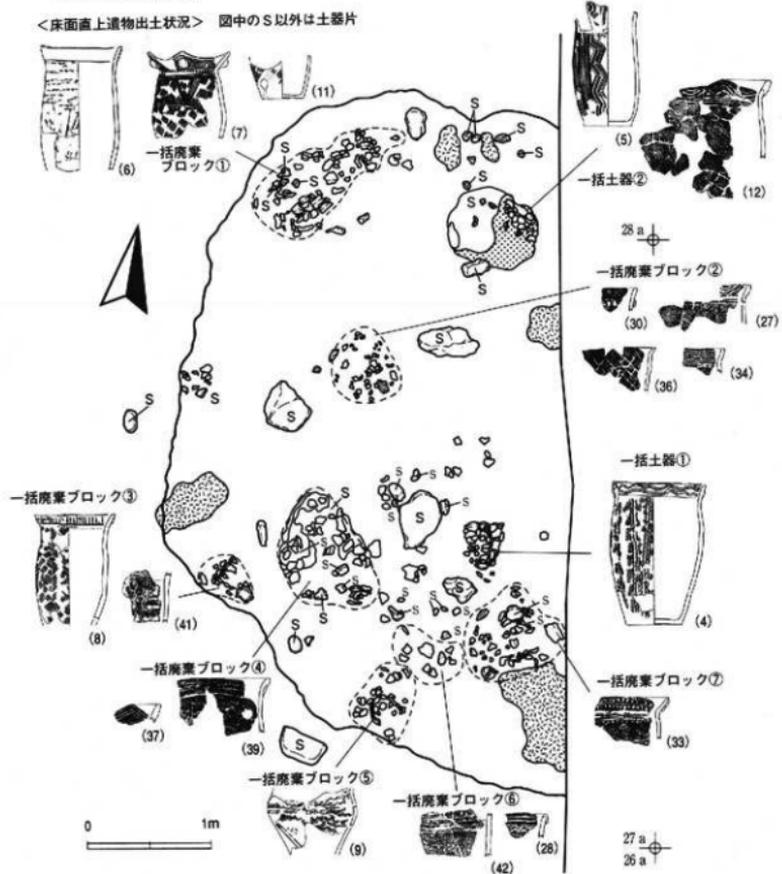
0 1m

第12図 2号住居跡 (1)

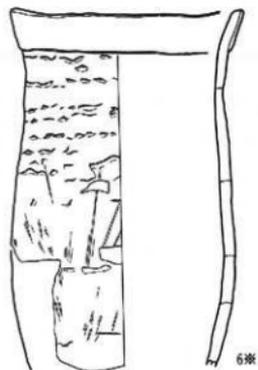
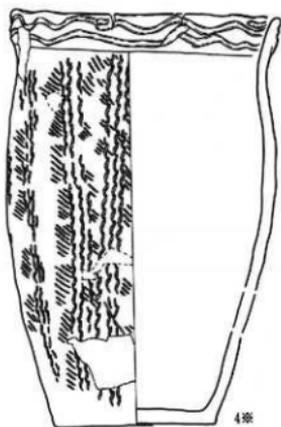
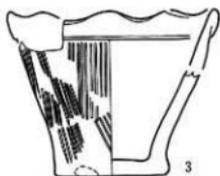
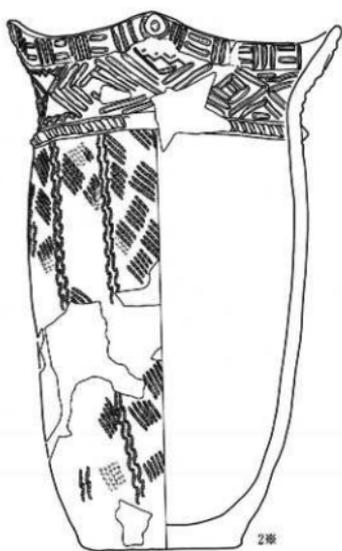


1. 10795/9 黄砂 粘土ブロック・炭化物粒混入
 2. 5195/9 黄砂 粘土 しまりなし (異物性?)
 3. 10795/9 明炭層
 4. 5195/9 黄砂 粘土 炭層+ブロック状に混入
 5. 10795/9 黄砂 炭化物粒混入
1. 5195/9 明炭層 粘土 しまりなし (異物性?)
 2. 10795/9 明炭層
 3. 10795/9 黄砂
 4. 5195/9 黄砂 粘土 しまりなし (異物性?)
1. 10795/9 黄砂 明炭層粘土ブロック・炭化物粒混入
 2. 10795/9 明炭層

<床面直上遺物出土状況> 図中のS以外は土器片

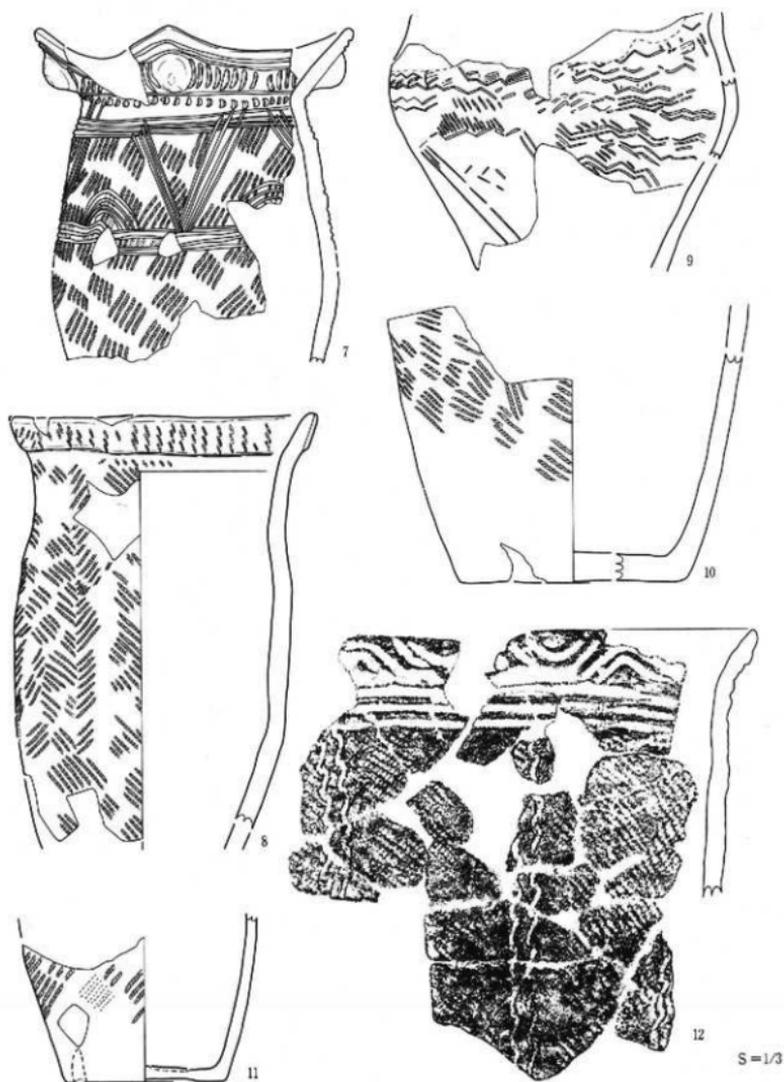


第13図 2号住居跡 (2)



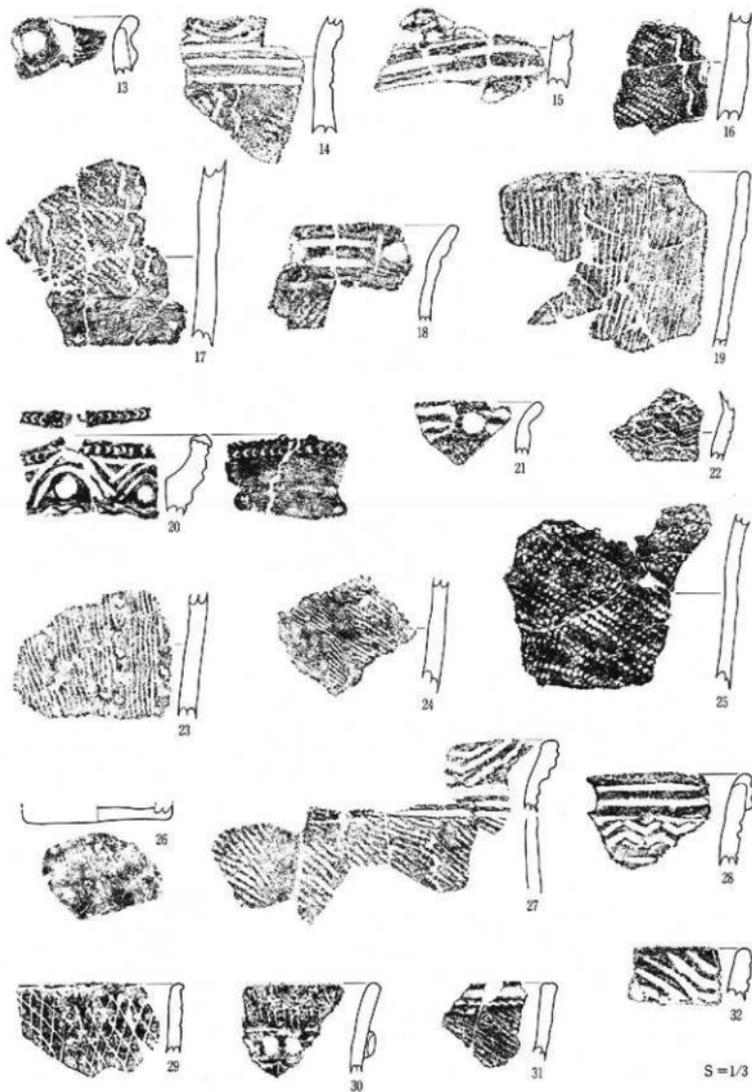
S = 1/3 · 米 = 1/4

第14图 2号住居跡出土遺物(1)



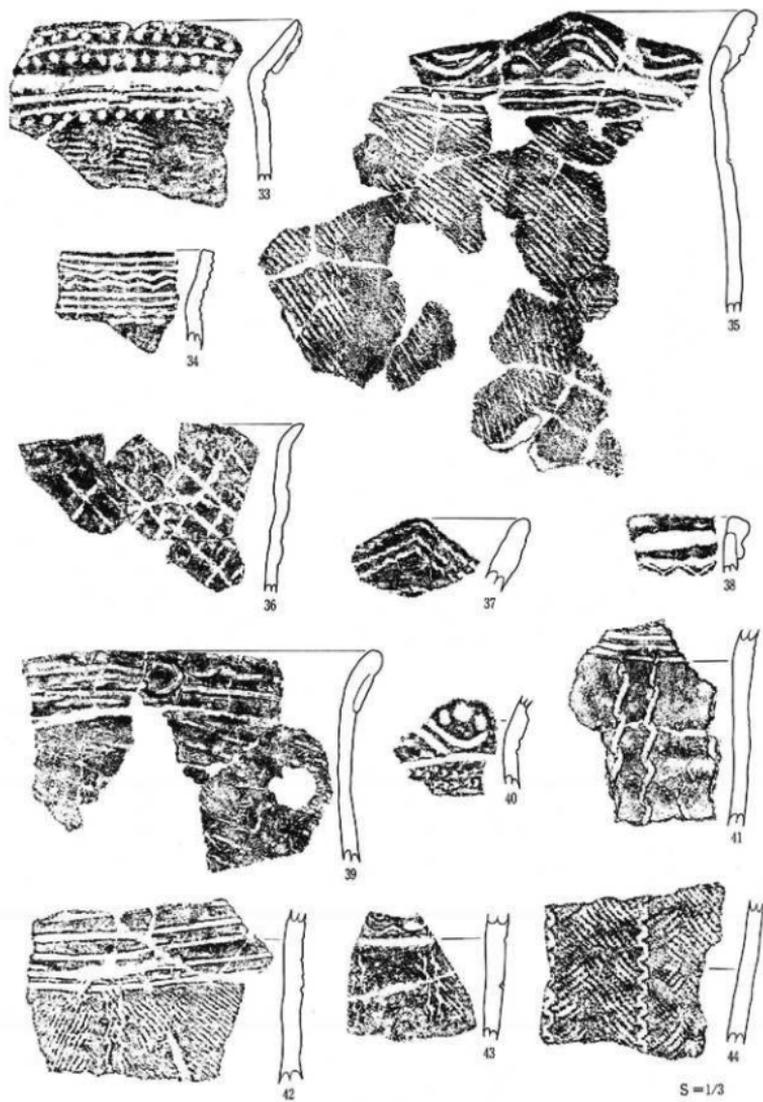
S=1/3

第15图 2号住居跡出土遺物(2)

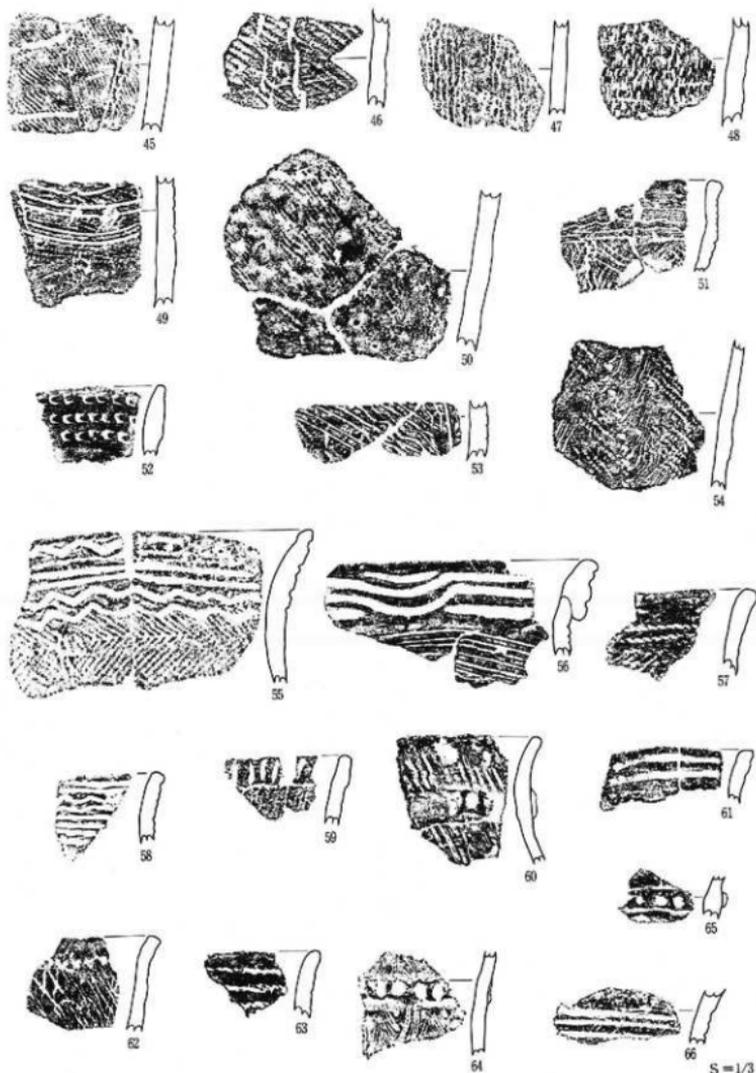


S = 1/3

第16图 2号住居跡出土遺物(3)

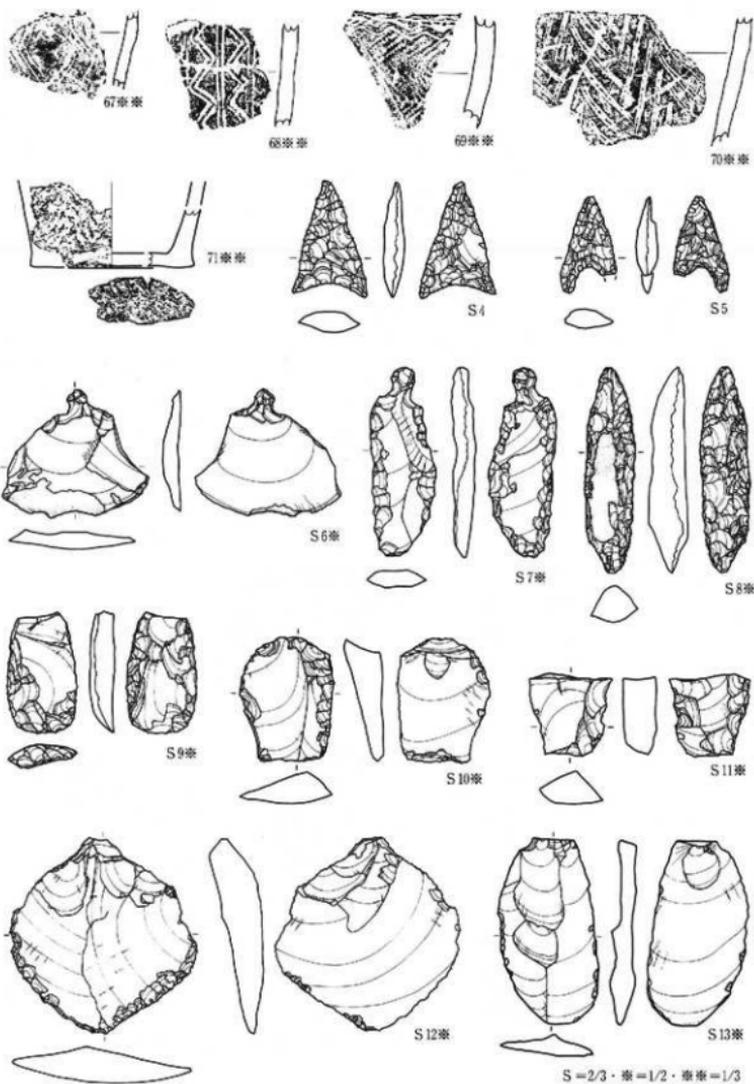


第17图 2号住居跡出土遺物(4)

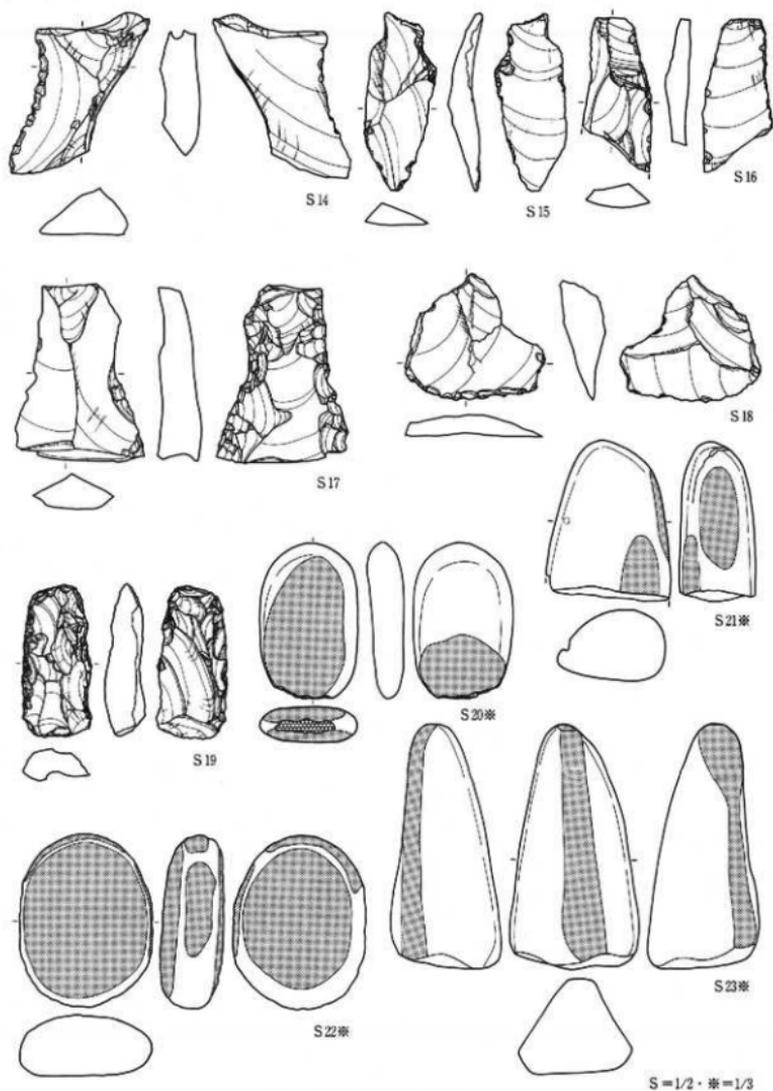


第18图 2号住居跡出土遺物 (5)

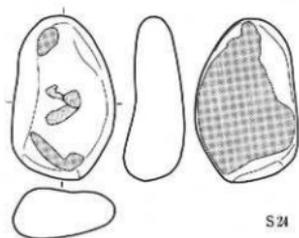
S=1/3



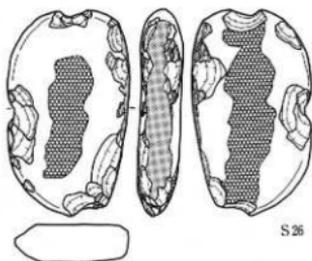
第19圖 2号住居跡出土遺物(6)



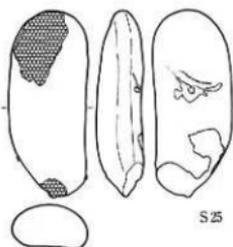
第20图 2号住居跡出土遺物(7)



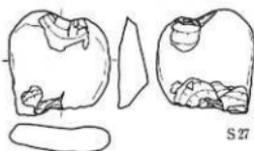
S24



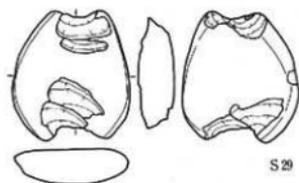
S26



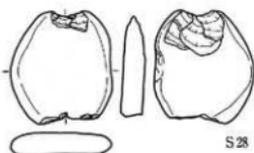
S25



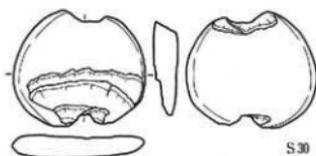
S27



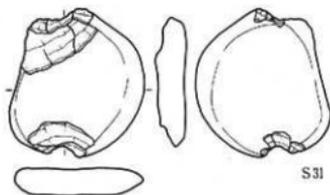
S29



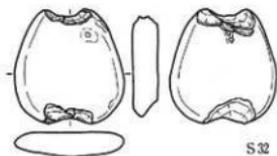
S28



S30



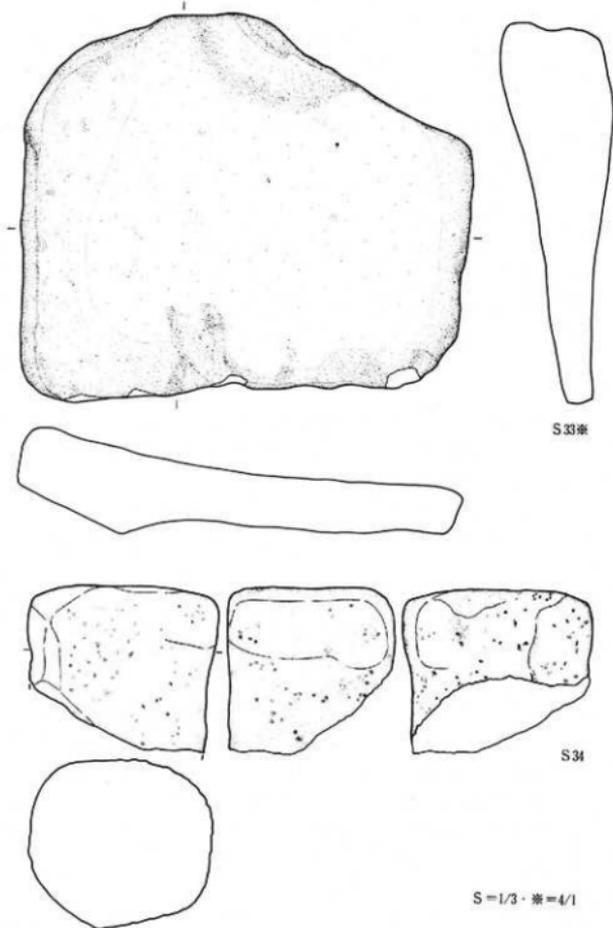
S31



S32

S=1/3

第21圖 2号住居跡出土遺物(8)



第22図 2号住居跡出土遺物(9)

完形の深鉢である。口縁部は肥厚し、半截竹管状工具による凹線が緩やかな波状に施される。胴部には3条1組の綾線文(L結節)が縦走する。5は、細く浅い直線・曲線の条痕が縦に施文されている。櫛齒状工具か半截竹管状工具(腹面)によるものと思われる。6は深鉢であるが、器表面が著しく摩滅している。口縁部は肥厚し、胴部には輪積痕が断続的に残存している。輪積みを指頭で(?)磨り消したのではないかと思われる。胴部下半には部分的に平行沈線が認められるが、摩滅のため痕跡を残す程度である。他の

上器群に比して異質である。7は、波状口縁の深鉢である。口縁部の波頂は4単位と思われる。波頂部に対応する位置に突起が貼付される。この突起周縁を取り巻くように沈線による連弧文が施文される。頸部には2~3条の沈線が通り、口縁部文様帯を区画する。文様は胴部上半部にまで及んでおり、半載竹管文の直線文・連弧文が施される。8はRL非結束の羽状縄文を胴部上~中部に施すが、下部では横回転の斜縄文である。肥厚した口縁部には縦の原体汗痕がなされる。27~40は口縁部破片である。半載竹管状工具による凹線を施すものは27・28・32~35・38~40、網目状燃糸文を施すものは29・36、37は原体汗痕を施す。41~43は頸部~胴部上半部破片である。44~50は胴部破片である。48は多軸絡糸体回転文である。床面直上:10・18~26。10は深鉢の胴部下半~底部で、地文のみが施される。18~21は口縁部破片である。19を除いて、指頭状圧痕と半載竹管状工具による凹線が施文されている。20は口唇部と口唇部縁(口縁部最上部)の表裏に半載竹管による刺突文(爪形文)が施される。22~25は胴部破片である。23は木目状燃糸文を施文している。26は底部破片である。底面にナデ調整が認められる。壁溝・柱穴覆土:51~54。52は口縁部に半載竹管による3段の爪形文を施文する。覆上:55~71。55~63は口縁部、64~70は胴部、71は底部の破片である。

〔石器〕29点が出土した。S4~5は無茶凹鉢縁である。S6~8は尖頭器で、背面に自然面を残す。S9は石鏝、S10~19は不定形石器である。S19は不定形石器としたが、石鏝の可能性もある。S20~26は敲磨器類である。S27~32は礫石鏝である。

〔石製品〕2点が出土している。S33は石皿で、中央付近の床面で検出した。S34は、石棒先端の総れ付近で欠損したものである。先端部分を加工して4つ平坦面を作り出している。総れ以下は断面が略円形である。

時期 床面で出土した遺物から、縄文時代前期末葉に属すると推定される。なお、覆土下位で検出した木炭片の¹⁴C年代(補正年代)はBP4520±110である。

3号住居跡

遺構(第23~24図、写真図版8~9)

〔検出状況・重複関係〕C区29a~30aグリッドのIV層下位面において、明黄褐色ブロックを多量に含んだ暗褐色土の広がりを検出し、遺構プランと認定した。しかし、精査の過程で、当初想定していたプランの北側1/4程が別遺構(4号住居跡)であることが判明した。4号住居跡・32号土坑を截っている。

〔平面形・規模〕住居西端部のみを検出であり、全体の平面形・規模の詳細は不明である。検出部分から推測すると、ほぼ東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈すると思われるが確認は欠く。東西2.9m以上、南北3.5mを測る。

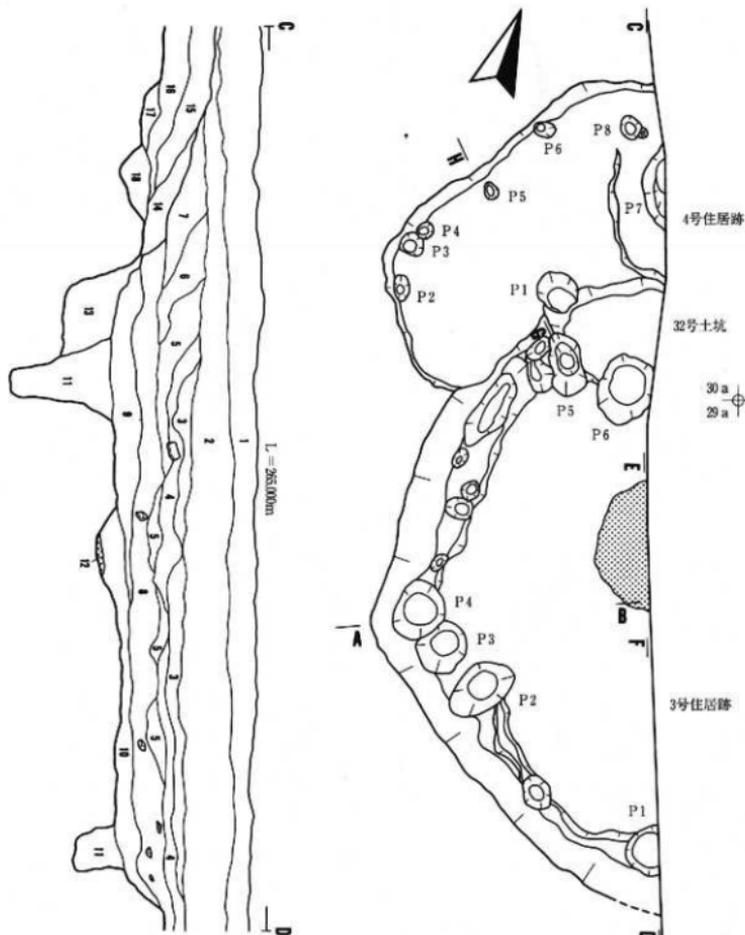
〔床面積〕3.32㎡(検出部分)

〔覆土〕暗褐色~黒褐色土で構成される。上~中位の暗褐色土には、明黄褐色ブロックが多量に含まれる。下位には自然堆積的な様相が窺えるが、上~中位については遺物や覆土の様相から人為堆積の可能性がある。

〔壁・床面〕壁は床面から直立気味に立ち上がり、上半部でやや外傾する。

〔炉〕地焼炉と思われる焼土1基を検出した。焼成は不良である。

〔柱穴〕壁溝に沿って壁際を巡る柱穴状土坑6個が検出された。平面は径25~56cmの楕円形で、深さ33~75cmと深く掘り込まれている。覆土は暗褐色土である。2号住居跡と同様に、推定長軸線(東~西)を挟む形で、P2-P6(またはP3-P6)、P4-P5が対応関係にあると思われる。いずれの柱穴も、



C-D

1 表土 [1層]

2 MYR

3 MYR5/8 明黄褐色

4 MYR1/6 暗

5 MYR3/3 暗褐

6 MYR1/2 灰黄褐

7 MYR1/3 に近い黄褐

8 MYR2/2 黒褐

9 MYR3/4 暗褐色 焼土ブロック・炭化物粒混入

10 MYR1/3 暗褐 焼土ブロック・炭化物粒混入 明黄褐色%混入

11 MYR2/2 暗褐 明黄褐色ブロック状%混入 (P1・6焼土)

12 MYR4/4 暗 焼土ブロック混入

13 MYR3/3 暗褐 明黄褐色%混入 堅く締まる (土沈埋土)

14 MYR3/2 暗褐 明黄褐色ブロック状%混入 堅く締まる

15 MYR3/3 暗褐

16 MYR2/1 灰

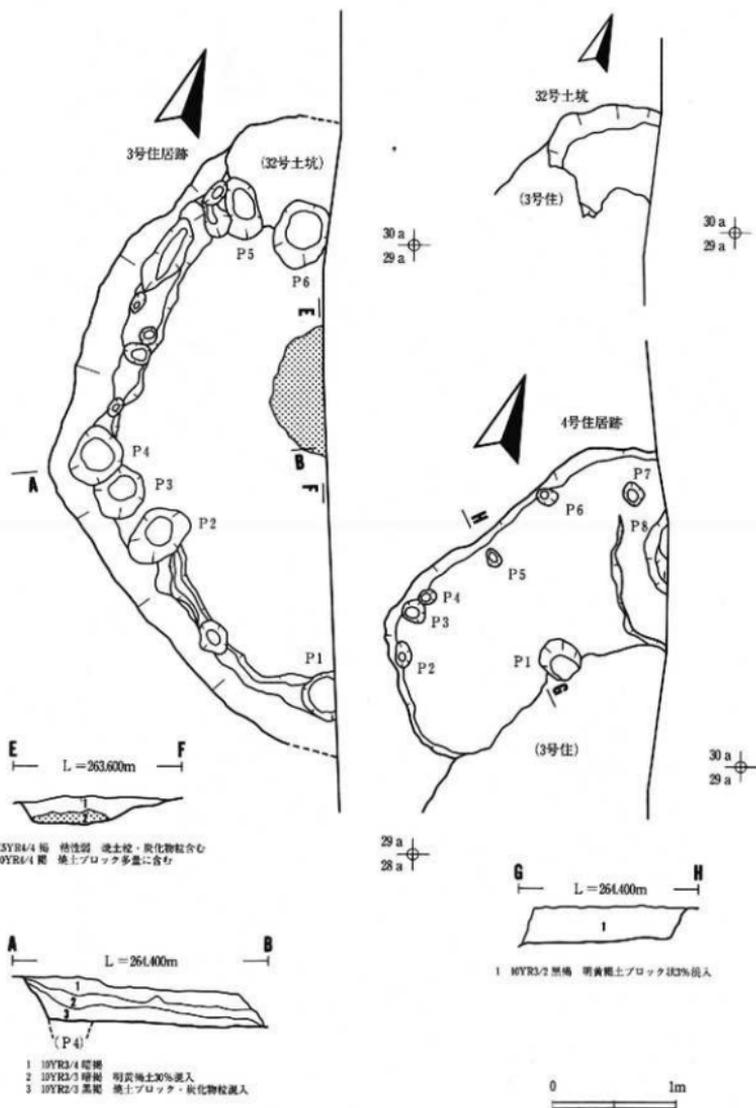
17 MYR5/6 黄褐

18 MYR3/2 暗褐 (P7埋土)

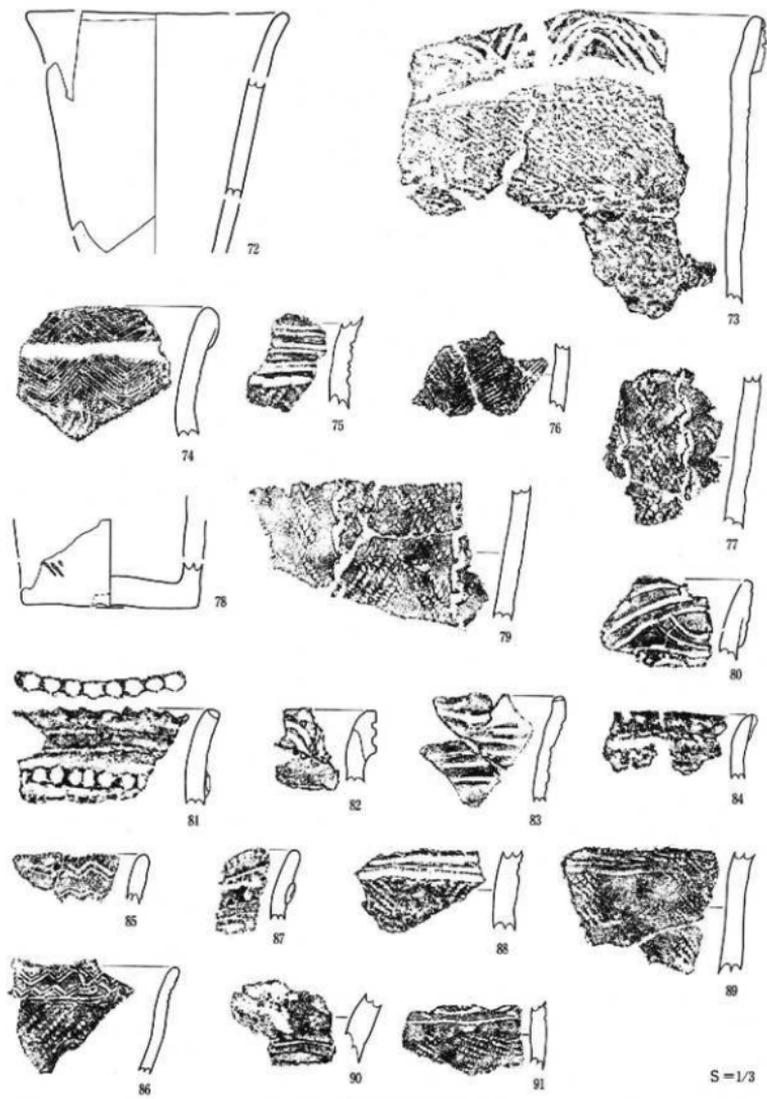
1-12 3号住居跡土 14から18 4号住居跡土

0 1m

第23図 3・4号住居跡・32号土坑(1)

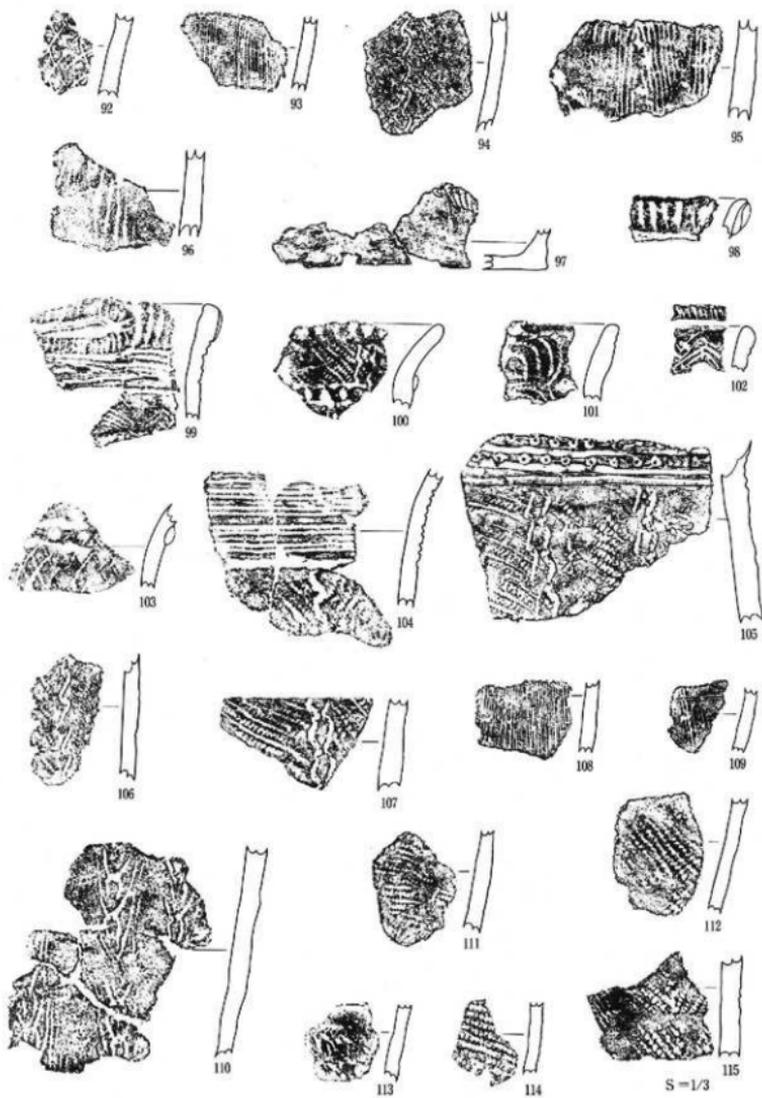


第24図 3・4号住居跡・32号土坑(2)

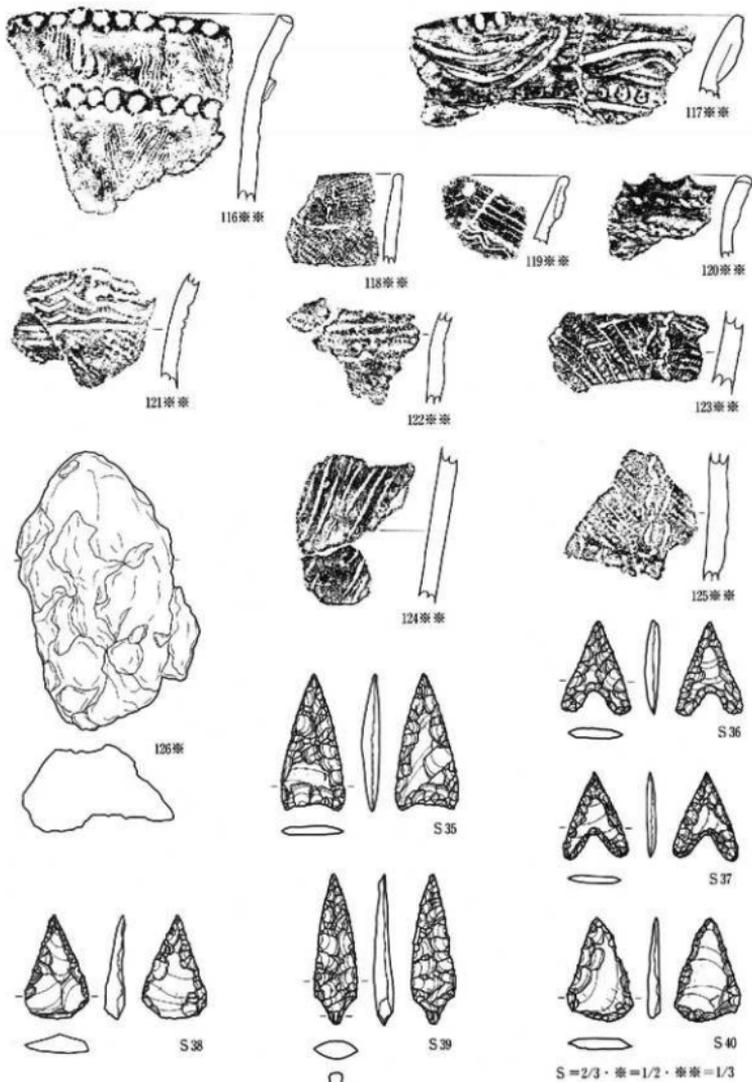


S=1/3

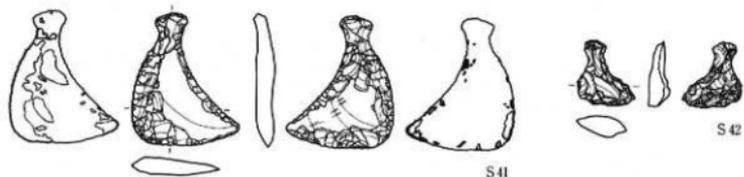
第25图 3号住居跡出土遺物(1)



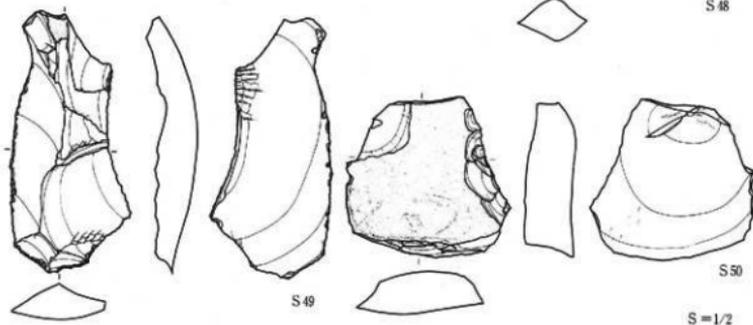
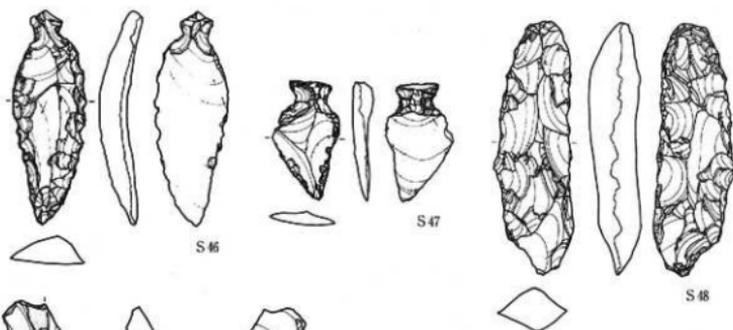
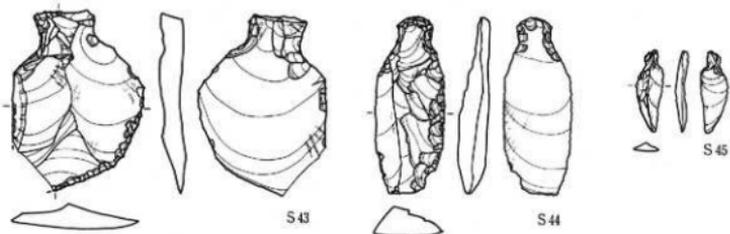
第26图 3号住居跡出土遺物(2)



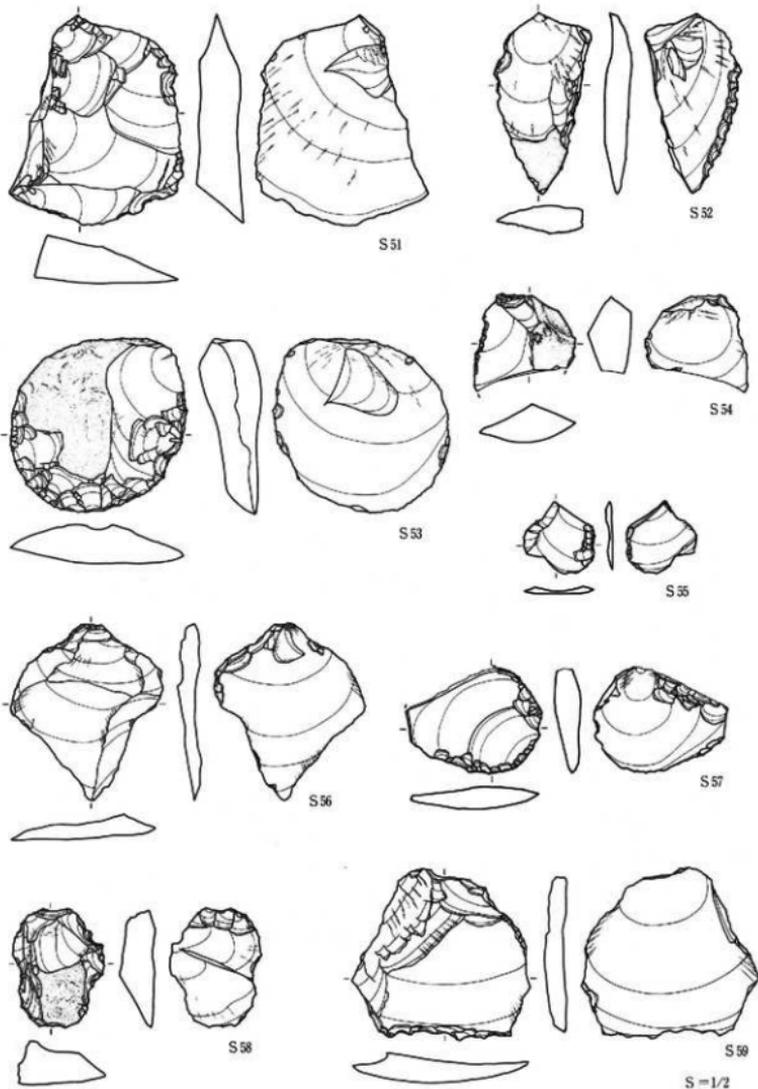
第27图 3号住居跡出土遺物(3)



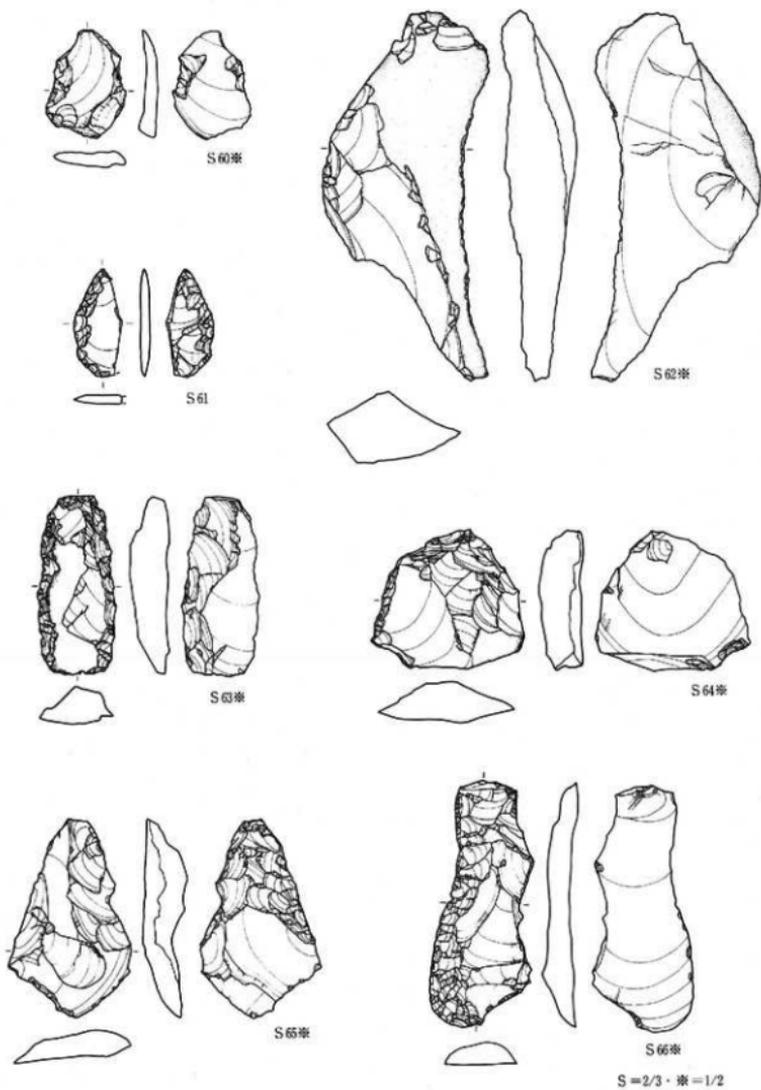
S41
 ※トーン部分は赤色顔料付着範囲



第28図 3号住居跡出土遺物(4)

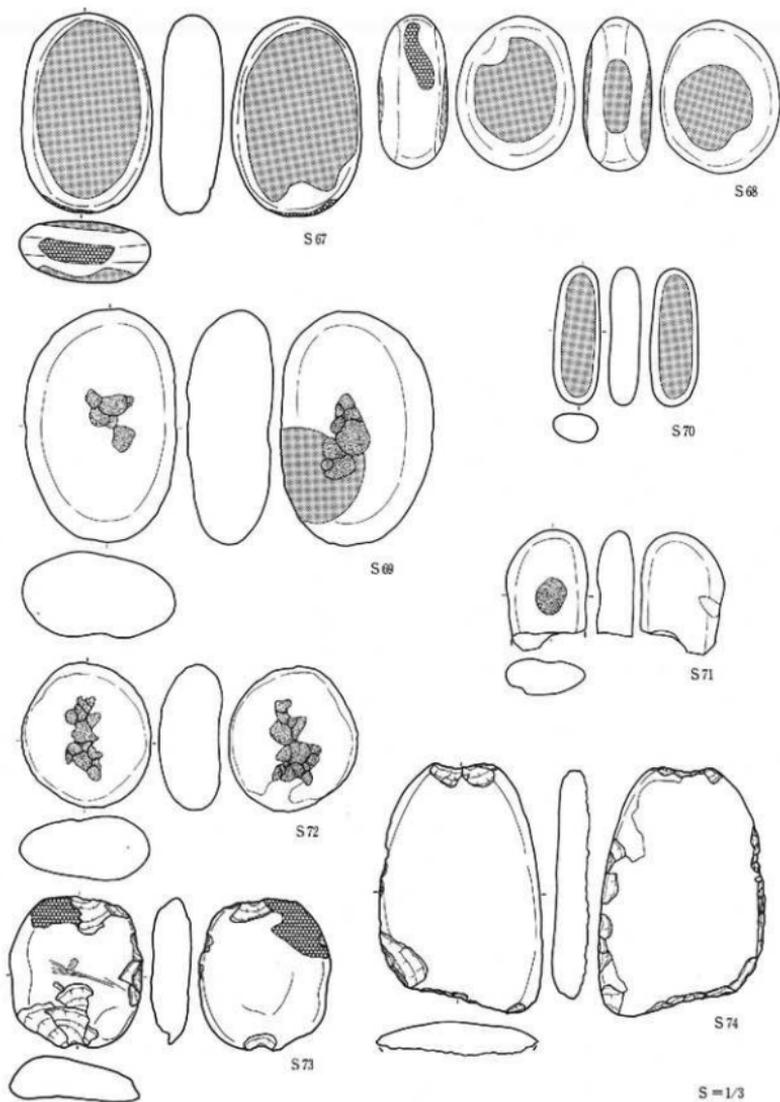


第29図 3号住居跡出土遺物(5)

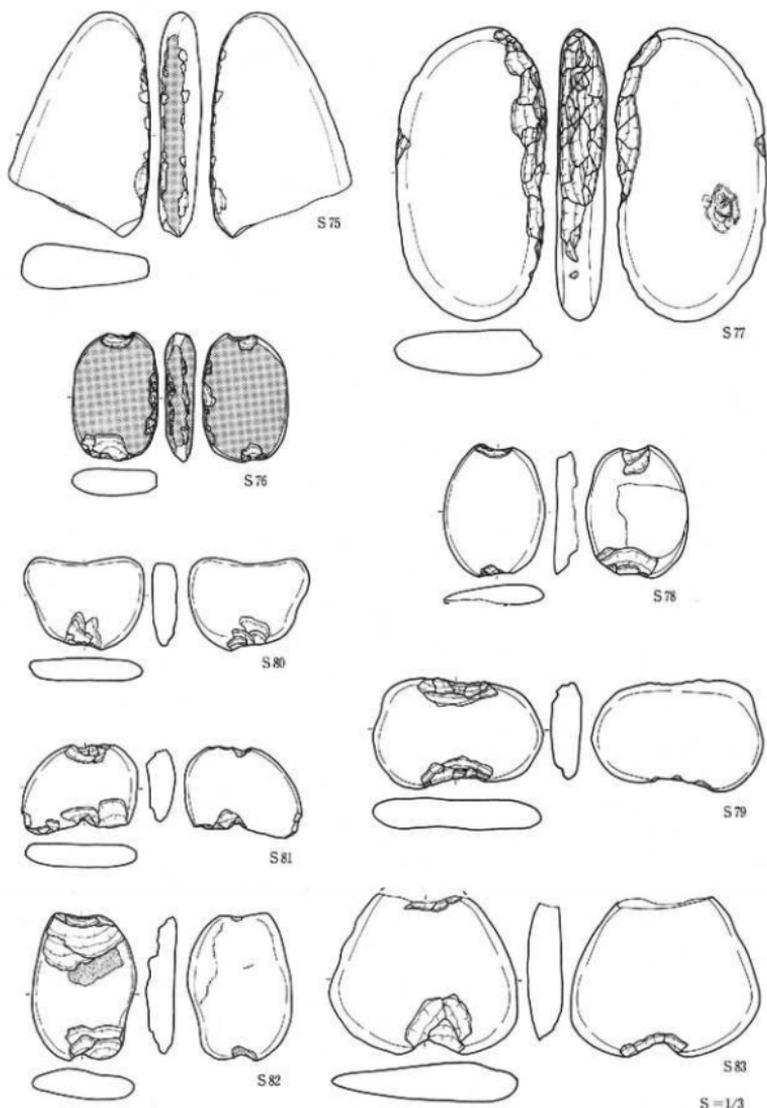


S=2/3 · ※=1/2

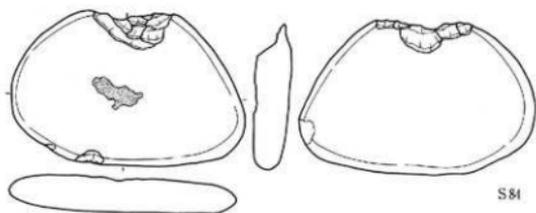
第30圖 3号住居跡出土遺物 (6)



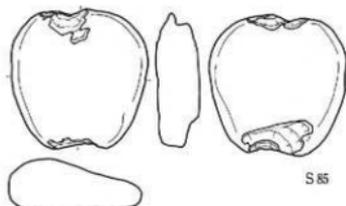
第31圖 3号住居跡出土遺物(7)



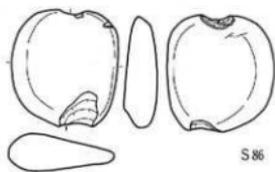
第32图 3号住居跡出土遺物(8)



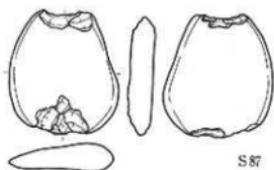
S84



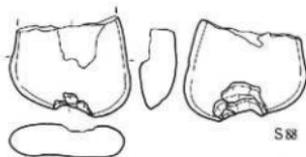
S85



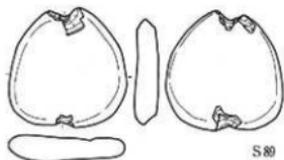
S86



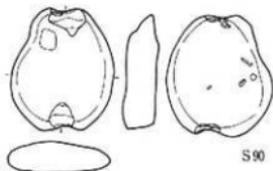
S87



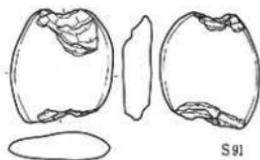
S88



S89



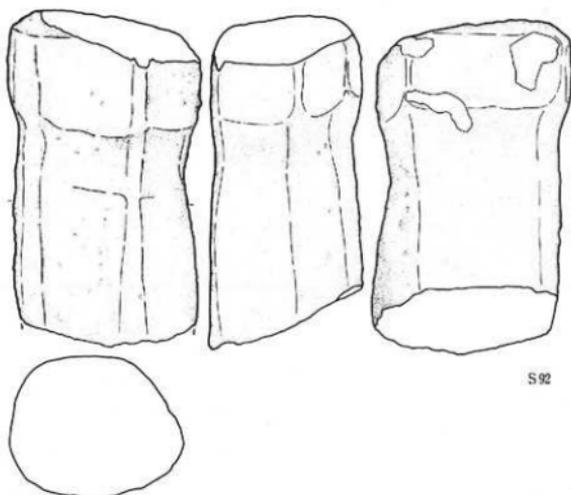
S90



S91

S=1/3

第33圖 3号住居跡出土遺物(9)



第34図 3号住居跡出土遺物 (10)

断面では柱痕跡は確認されなかったが、底面中央付近が強く締まり、柱設置痕跡と思われる変質（グライ化）が認められた。また、壁溝内には柱穴と認定できない程度の不整な浅い窪みが認められ、副穴的なものだった可能性もある。

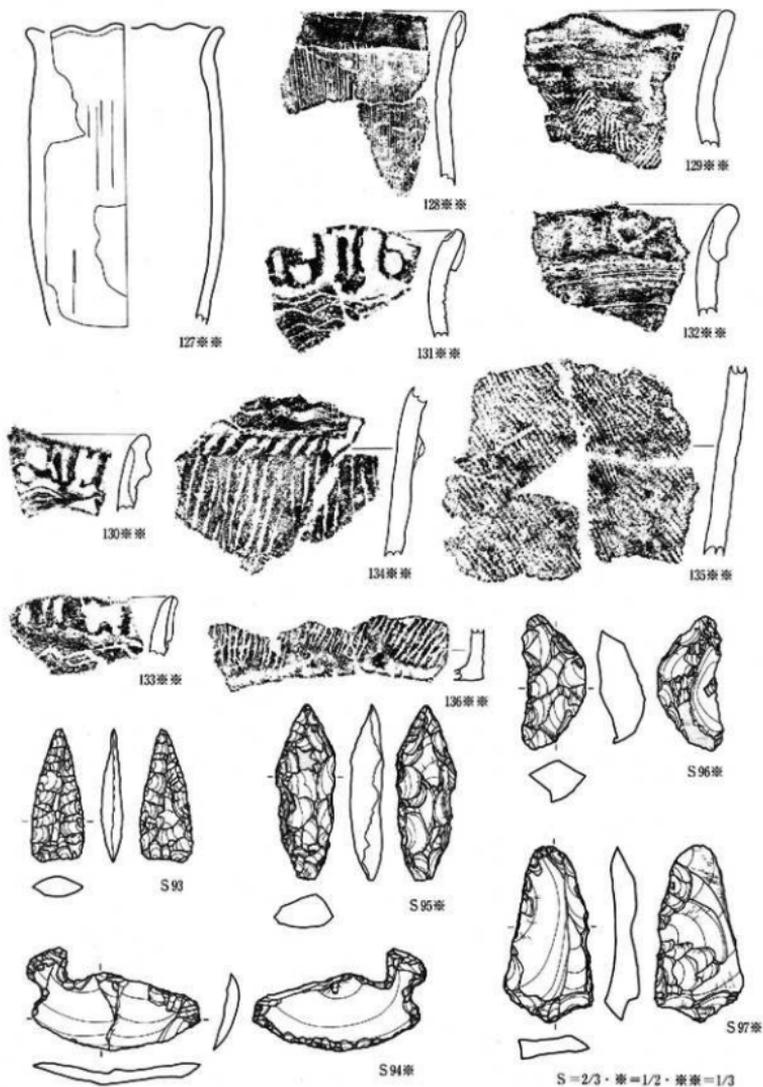
〔壁溝〕壁に沿ってほぼ全周している。床面からの深さは15～20cmである。

柱穴計測表

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
開口部 (cm)	45×(35)	55×38	44×32	46×38	51×25	56×45
深さ (cm)	33	57	48	40	46	75

遺物 (第25～34図、写真図版30～36)

〔土器〕立体1点と破片53点を図化し、その他の約8.3kg分を不掲載とした。床面：73～78。73は口縁部が貼り付けにより肥厚し、半截竹管文（凹線）が施文される。74は肥厚した口縁部に半截竹管による山形文が展開する。75は頸部に竹管による沈線が数条横走る。76・77は縦位の綾織文が施文される。覆土下位：72・79～97。72は無文で、緩やかに外傾し、口縁部で僅かに外反する。80・82・83・85・86は口縁部に入組み状・山形状・平行線状等の半截竹管状工具による沈線文が展開する。81・87は貼り付け隆帯に指頭状の圧痕が施される。81はさらに口唇部にも指頭状圧痕、口縁部には原体圧痕文が認められる。88～91は頸部に半截竹管による沈線が巡り、文様帯と胴部との区画をなす。覆土上位：98～125。100・116は頸部に指頭状圧痕が施された隆帯が巡る。100は口縁部が強く外反し、116は口唇部にも指頭状圧痕がなされる。120は平縁であるが2個一対と思われる低い山形状突起を有する。



第35圖 4号住居跡出土遺物

〔土製品〕1点のみ出土した。126は用途不明の焼成粘土塊である。

〔石器〕57点出土した。S35～40は石鏃、S41～47は石匙、S48は尖頭器、S49～66は不定形石器、S67～77は敲器類、S78～91は礮石錘である。S39は有茎の石鏃である。本遺跡で出土した石鏃は殆どが無茎形であり、有茎形は稀少である。また、石匙S41は覆土中位から出土したものであるが、背腹両面に赤色顔料が付着している。調査時の手違いにより赤色顔料の一部が剥げ落ちており、出土時点で図示したもののより広範囲に赤色顔料が付着していた。付着していた赤色顔料は、分析の結果、ベンガラ（酸化第二鉄）と推定された。S42・45は小形であり、実用品なのか不明である。S48は尖頭部が鈍く、搦割器的なものかもしれない。

〔石製品〕1点のみ（S92）が出土した。S92は、石棒先端部と下半部分が欠損している。加工により鋭れ部分を作り出している。断面は楕円形状である。

時期 出土遺物から、縄文時代前期末葉に属すると思われる。なお、覆土下位で検出した木炭片の¹⁴C年代（補正年代）はBP4650±50である。

4号住居跡

遺構（第23～24図、写真図版9）

〔検出状況・重複関係〕3号住居跡のプランの一部として検出した。しかし、3号住居跡の北壁が想定プランよりも南側で検出され、北壁面でVa～V層（地山）を掘り込んだ床面および壁の立ち上がりを確認したため、同住居跡の精査の過程で別遺構として認定した。平面形や壁柱穴の在り方から竪穴住居跡として認定したが、竪穴住居状遺構の可能性もある。3号住居跡および32号土坑に截られており、それらの遺構よりも古期の遺構である。

〔平面形・規模〕検出した部分では、1.7m以上×2.8m以上の隅丸方形（ないしは楕円形）状を呈する。

〔床面積〕4.52㎡（検出・残存部分）

〔覆土〕明黄褐色の地山ブロックを含んだ黒褐色土の単層である。覆土中には遺物が多量に包含されており、人為的な堆積状況である。

〔壁・床面〕検出した北～西壁は、床面からやや外傾して立ち上がる。残存する壁高は20～35cmである。床面は北から南へ向けて緩やかに傾斜している（レベル差約5cm）。床面東側が、3～5cm程の高まりとなっており、段差部分に伴うP8が検出された。P8は特殊ビットだと思われるが、ビット東半部が調査区外に延びており詳細不明である。

〔炉〕検出されていない。

〔柱穴〕床面で柱穴状小土坑6個を検出した。P1は主柱穴、壁際に巡るP2～7は副穴と推測される。

柱穴計測表

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
開口部 (cm)	30×(35)	22×13	23×18	27×13	22×10	28×15	20×15	72×(20)
深さ (cm)	23	11	10	10	10	12	11	(17)

遺物（第35図、写真図版36）

〔土器〕立体1点と破片9点を図化し、その他の約1.9kg分を不掲載とした。掲載した10点はすべて覆土出土である。127は波状口縁を呈し、半截竹管による沈線が数条認められるが、摩擦により文様は判然としな。128～133は口縁部破片である。128は平縁で、折り返しにより口縁が肥厚する。130・131は口

縁部に隆帯が貼付され、そこに竹管文（凹線）による刻み・円形の刺突がなされる。134・135は頸部～胴部上半、136は底部破片である。134は口縁部には竹管文、頸部には斜位の刻みをもつ隆帯が巡り、胴部は縦位の半截竹管文が施される。

〔石 器〕5点出土した。S93は石鏃、S94は石匙、S95は尖頭器、S96～97は不定形石器である。S94は素材剥片の形状を利用して、縁辺を2次加工して成形しているが、二次調整は粗く最低限の調整に止まる。時期 出土遺物から、縄文時代前期末葉に属すると思われる。

5号住居跡

遺構（第36図、写真図版10）

〔検出状況・重複関係〕B区23a～24aグリッドにおいて、非現地性の焼土ブロックを伴う暗褐色プランを検出し、遺構と認定した。当初、遺構の範囲が当該グリッド内に収まるものと想定していたが、精査の結果、さらに南側の22a～23aグリッドに及ぶ大形住居跡であることが判明した。30号土坑と重複するが、直接の載り合い関係はない。

〔平面形・規模〕調査区が狭いため、北壁の一部しか検出できなかった。また、南壁の立ち上がりは確認できなかった。本遺構の東西両側はともに調査区外へと伸びており、全体の平面形・規模は不明である。検出した部分では、東西1.7m以上、南北15.6mを測り、南北方向に長軸線をもつものと思われる。

〔床面積〕20.9㎡（検出部分）

〔覆 土〕黒褐色土を主体とし、焼土・炭化物粒を多量に含んでいる。

〔壁・床面〕砂礫層の地山面に粘土を貼り床している。貼り床の層厚約5cm程である。床面は、南側ではほぼ平坦であるが、北側ではやや起伏し、北壁付近で10cm程の低い段差をなす。北壁の壁面では地山の砂礫層が露出する。壁は床面から外傾して立ち上がり、壁高は約20cmである。

〔炉〕北側床面で1基、南側床面で2基の地焼炉を検出した。南側の1基は円形、他の2基は不整形に焼土が広がっている。焼土の層厚は最大15cmを測るが、焼成は良くない。

〔柱 穴〕床面で、柱穴状小土坑7個を検出した（P1～3、5～8）。うち、小径のP7・8を除いた5個については主柱穴だった可能性があるが、いずれの柱穴でも柱痕跡は確認されていない。覆土は砂礫を含んだ黒褐色である。

〔壁 溝〕検出されていない。

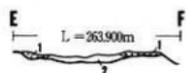
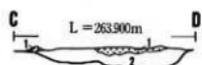
〔付属施設〕床面で検出されたP4は、規模から見て柱穴ではなく、住居内土坑（貯蔵穴？）だった可能性が考えられる。覆土は礫を多く含む黒褐色土で、少量の土器片が出土した。壁・底面では地山の砂礫層が露出している。

柱穴計測表

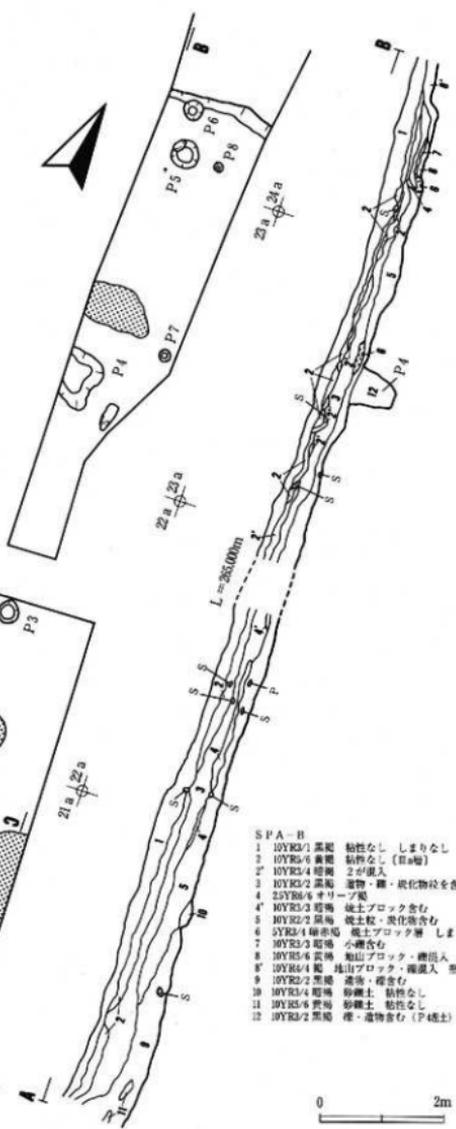
番 号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
開口部 (cm)	54×52	37×35	39×34	90×(62)	46×43	30×28	22×17	15×13
深 さ (cm)	73	53	69	64	65	32	18	13

遺物（第37～40図、写真図版37～39）

〔土 器〕立体2点と破片21点を図化し、その他の約5.4kg分を不掲載とした。床面直上：137～155。137はやや割張りの深鉢である。口縁部は不規則な原体圧痕文が施されて文様帯を形成し、胴部は縦線文が縦走る。138も胴部に縦位の縦線文が施されている。139～145は口縁部、146・147は頸部、148～154は胴

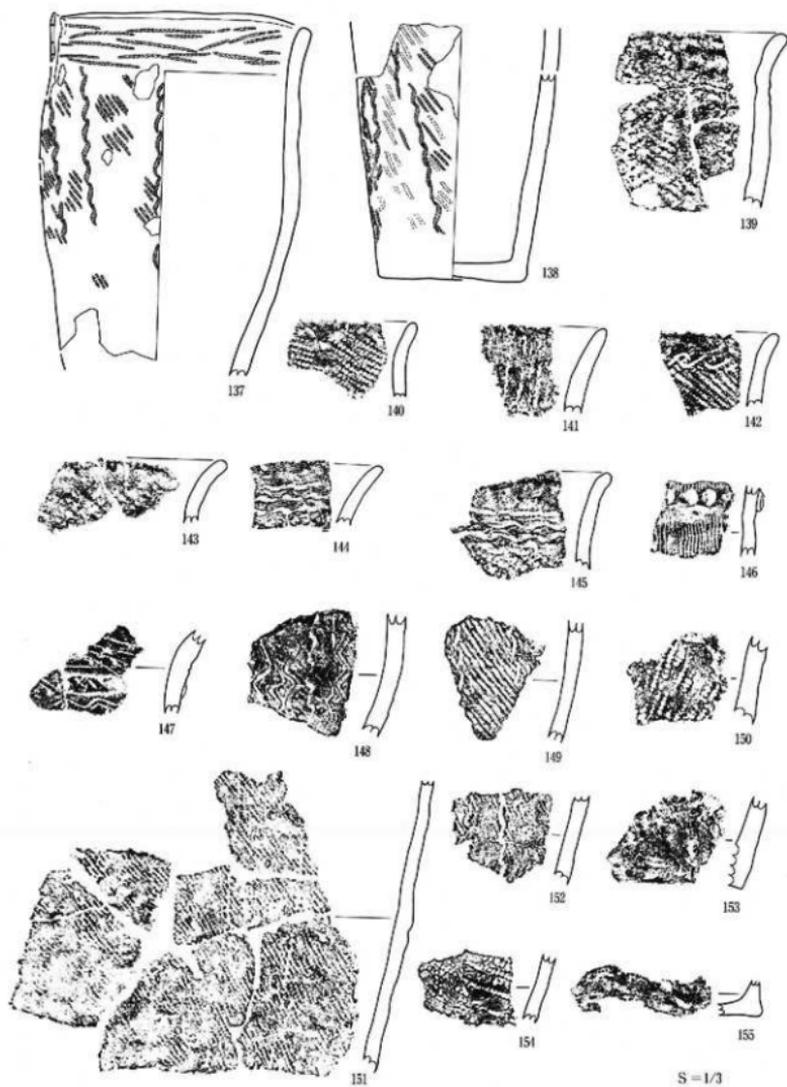


S P C - D - E - F
 1 2SYR6/8 層 粘土
 2 2SYR5/8 明層 黄土 (硬或弱)



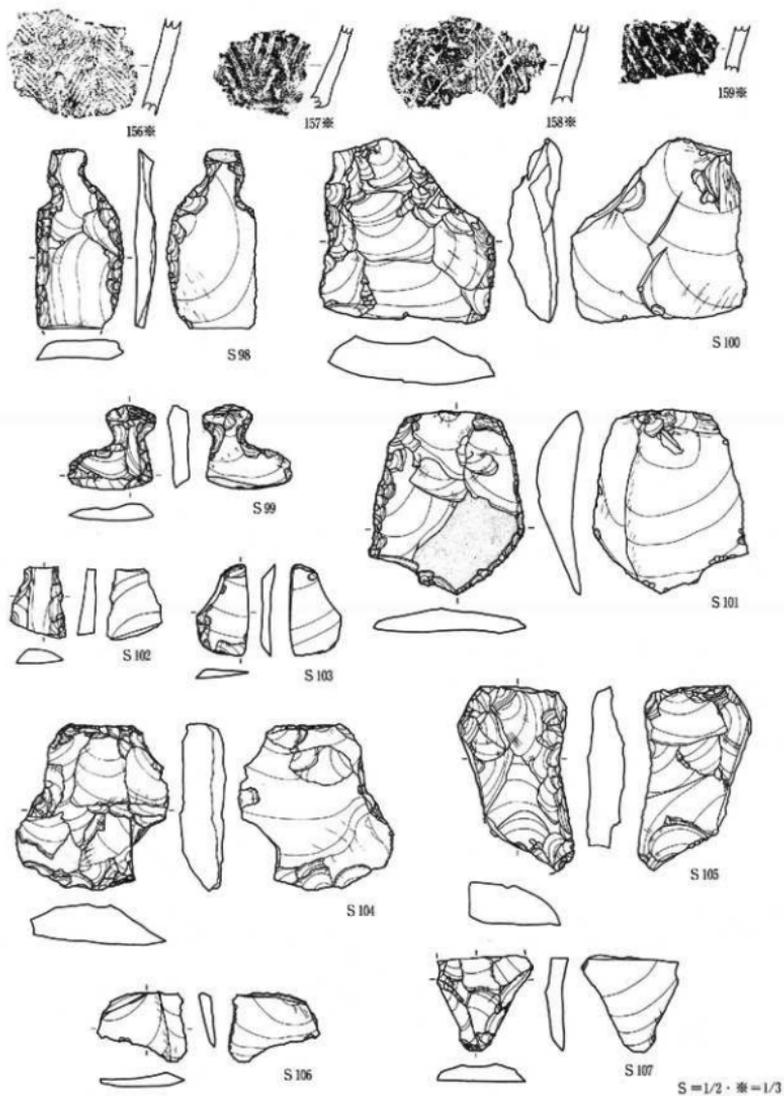
- S F A - B
- 1 10YR3/1 黒泥 粘りなし、しまりなし 埋・遺物混入
 - 2 10YR3/6 黄泥 粘りなし【目a層】
 - 2' 10YR3/4 暗黄 2が混入
 - 3 10YR2/2 黒地 遺物・雜・炭化物粒を含む
 - 4 2SYR6/6 ナリフ泥
 - 4' 10YR3/3 暗地 黄土ブロック含む
 - 5 10YR2/2 黒地 黄土・炭化物含む
 - 6 5YR2/4 暗赤地 黄土ブロック層 しまりなし
 - 7 10YR3/3 暗地 小礫含む
 - 8 10YR5/6 黄地 粘土ブロック・埋入 堅く締まる
 - 8' 10YR4/4 暗 粘土ブロック・埋入 堅く締まる
 - 9 10YR2/2 黒地 遺物・埋含む
 - 10 10YR4/4 暗地 砂礫土 粘りなし
 - 11 10YR5/6 黄地 砂礫土 粘りなし
 - 12 10YR2/2 黒地 埋・遺物含む (P4粘土)

第36図 5号住居跡

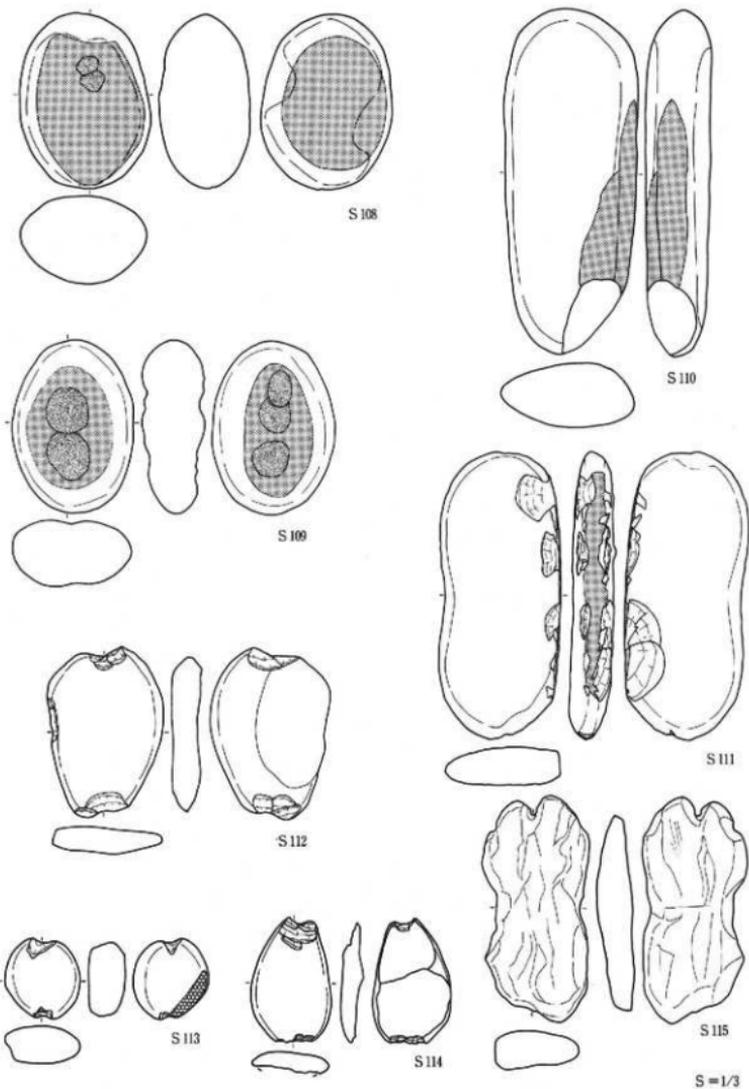


S=1/3

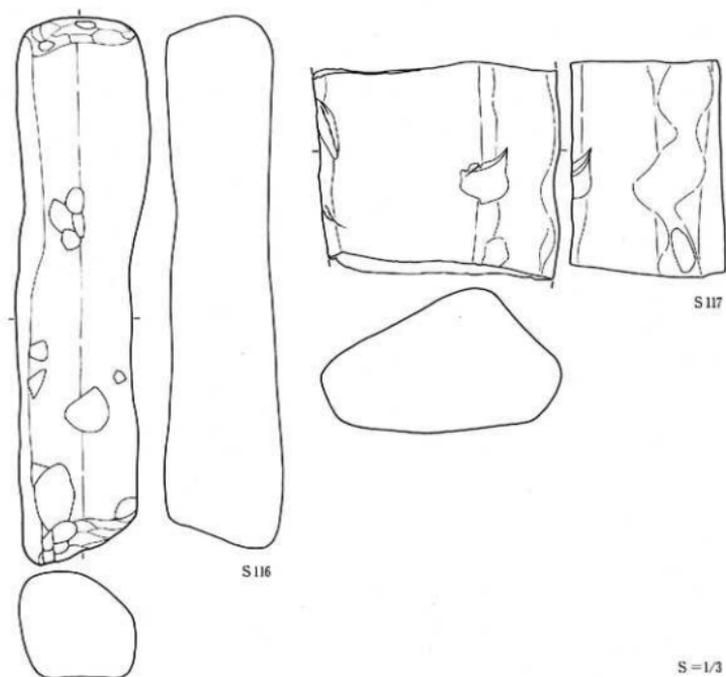
第37图 5号住居跡出土遺物(1)



第38图 5号住居跡出土遺物(2)



第39圖 5号住居跡出土遺物(3)



第40図 5号住居跡出土遺物(4)

部破片である。では、139~143は地文のみで文様帯をもたない。142は横位の綾線文が施される。144・145は接合しないが同一個体の可能性が高い。緩い波状口縁を呈しており、口縁部文様帯には不整燃糸文が施文され、他の土器群よりも古い様相を示している。縄文時代前期前葉のもの(大木2a式?)と思われる。146・147は隆帯が貼付される。146は縦位の半裁竹管文が施文され、隆帯には指頭状圧痕が施される。147は山形の半裁竹管文が施され、隆帯には刻みが施される。覆土:156~159。156は綾線文、157は単軸絡条体による燃糸文、158・159は何れも網目状燃糸文を施した胴部破片である。

〔石器〕18点が出土した。S98・99は石匙である。S99は小形の石匙であり、握み部に対して体部が小さく、刃部が作り出されていない。S100~107は不定形石器、S108~111は敲磨器類である。S108・109は敲磨器Ⅰ類で磨り痕・凹みを有する。S110~111は敲磨器Ⅱ類で、扁平乃至は楕円形礫の一端に比較的幅の広い磨り面を有する。S113~115は礫石錘である。S115は通常の礫石錘と異なる礫を素材として用いており、3ないし4箇所の打ち欠きをもつ礫石錘と思われるが、素材となった礫の石質により判離が判然としない。礫石錘ではない可能性もある。

〔石製品〕石柱2点が出土した。S116はほぼ完形、S117は両端を欠失した欠損品である。
時期 床面直上から前期前葉の144・145が出土しているが、埋没過程で流れ込んだものと推測される。それ以外の出土遺物は縄文時代前期末葉に比定され、本住居跡も該期に属すると思われる。

2. 土 坑

1号土坑

遺構（第41図、写真図版11）

〔検出状況・重複関係〕3b～4bグリッドのV層上面で検出した。北西隅付近で1号掘立柱建物と重複しており、同建物の柱穴P2にごく僅かに截られている。

〔平面形〕開口部は東西1.3m・南北1.7m程のやや長方形気味の不整な楕円形を呈する。

〔断面形〕ごく浅い皿状を呈する。壁は、底面から外傾して立ち上がっている。深さはおよそ0.15mを測る。

〔底 面〕全面に小さな凹凸が目立つが、全体としてはほぼ平坦である。

〔覆 土〕黒褐色上の単層である。人為堆積か。

遺物 出土していない。

時期 出土遺物が無く、時期決定の資料を欠く。検出層位から考えて、縄文時代に構築された可能性があるが詳細不明である。

2号土坑

遺構（第41図、写真図版11）

〔検出状況・重複関係〕4bグリッド南側のV a層下～V層上面で検出した。重複する遺構はない。

〔平面形〕東西1.2m×南北0.8mの隅丸方形形状を呈する。

〔断面形〕鉢型を呈する。深さは約0.3mである。

〔底 面〕ほぼ平坦である。東端付近で浅い段差をなしている。

〔覆 土〕中央付近は黒褐色土、その他は黒褐色土の2層からなる。覆土全体に、地山小ブロックが混入する。

〔付属施設〕底面及び壁付近で小ビット3個を検出した。覆土は土坑本体と同様に黒褐色土である。うち、P2は本土坑に付随しない可能性もある。

遺物（第48図、写真図版39）

〔土 器〕覆土から縄文土器片約0.2kg分が出土したが、小破片のみであり図化していない。

〔石 器〕覆土から礫石錘1点（S118）が出土した。打ち欠きは反軸側に2箇所、腹・背面両方に磨り痕を有する。

時期 縄文時代に属するものと思われるが、時期決定の資料が乏しく、詳細不明である。

3号土坑

遺構（第41図、写真図版11）

〔検出状況・重複関係〕4aグリッド南側のV層上面で検出した。重複する遺構はない。

〔平面形〕長楕円形を呈する。規模はおよそ東西1.3m×南北2.5mである。

〔断面形〕深さ約0.5mの鉢底形を呈する。南側では立ち上がり不明瞭である。

〔底 面〕やや中央で窪んで彎曲し、北側では一段落ち込んで浅い窪みとなっている。

〔覆 土〕黒褐色土の単層である。人為堆積の可能性はある。

遺物 遺物は出土していない。

遺物

〔土器〕覆土より縄文土器小破片約1.1kg分が出土したが、摩滅が著しく、凶化できない小破片のみのため、掲載していない。

〔石器〕出土していない。

時期 時期決定の資料が乏しいが、出土遺物・検出層位から考えて、縄文時代に属するものと思われるが詳細不明である。

4号土坑

遺構（第42図、写真図版11）

〔検出状況・重複関係〕4b～4cグリッド北側層上面で検出した。重複する遺構はないが、5・6号土坑に隣接する。

〔平面形〕北壁の一部が隠れているが、大略、楕円形基調である。東西2.5m、南北1.5mを測る。

〔断面形〕壁の立ち上がりやや不明瞭で、鍋底状を呈する。北壁東側の一部が内傾している。深さは、南壁際で約0.74mを測る。

〔底面〕やや凹凸があり、南側に傾斜している。

〔覆土〕上位・下位ともに黒褐色～暗褐色土で構成され、両者の間にオリブ褐色土層が介在する。土坑中央付近の1位層下部には礫が落ち込んでいる。人為堆積の可能性はある。

遺物（第48図、写真図版39）

〔土器〕覆土から出土した1点のみ掲載した。他に縄文土器片が約0.4kg分出土している。160は深鉢の口縁部破片縁位の隆帯を貼り付け、半截竹管状工具による平行沈線を施している。

〔石器〕石鏃2（S119・120）、尖頭器1（S121）、不定形石器4（S122～125）が出土した。S119・120は無茎凹基鏃である。S121は尖頭器としたが、尖頭部が鈍く、不定形石器に分類すべきかも知れない。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉に属するものと思われる。

5号土坑

遺構（第42図、写真図版12）

〔検出状況・重複関係〕4cグリッド東側調査区塊のV層上面で検出した。西半部分は調査区外に延びている。4号土坑に隣接し、6号土坑を截っている。

〔平面形〕西半部分が調査区外に延びるため、全体の平面形状は不明である。また、南側の壁上部が崩落しており、本来の形状が崩れている。残存部の開口部径は約1.1mで、全体としては円形（乃至は楕円形）を呈すると思われる。

〔断面形〕南側の壁上部が崩落しているため、不明瞭ではあるが本来はフラスコ形を呈していたものと思われる。深さは残存部で最大1.3mである。

〔底面〕ほぼ平坦である。底径は検出部で約1.2mである。

〔覆土〕上位層はⅢ層で、Ⅲa層起源のオリブ褐を挟んで、下位層は地山ブロックが混入した黒褐色～暗褐色土である。

遺物 遺物は出土していない。

時期 出土遺物が無く、時期決定の資料を欠く。検出層位・形態から考えて、縄文時代に構築された可能性はある。

6号土坑

遺構 (第42図、写真図版12)

〔検出状況・重複関係〕5号土坑の精査途上で、想定プランの東側が別の土坑であることが判明し、遺構登録した。結果的に4cグリッドのV層上面で検出したことになる。4号土坑に隣接しており、南西部分を5号土坑に載られている。

〔平面形〕5号土坑に載られており、北壁上部が崩落しているが、円形乃至は楕円形を呈していたと思われる。残存部の開口部径は約1.0mである。

〔断面形〕フラスコ形を呈すると推測される

〔底面〕北東側壁際は低い段をなしている。中央付近(?)はほぼ平坦である。やや東寄り小穴(P1)が検出された。

〔覆土〕遺構認定した時点で覆土が失われており、詳細不明である。

遺物 確実には本遺構に伴うといえる遺物はない。

時期 出土遺物が無く、時期決定の資料を欠く。検出層位・形態から考えて、縄文時代に構築された可能性がある。

7号土坑

遺構 (第41図、写真図版12)

〔検出状況・重複関係〕4b～5bグリッドに跨る暗褐色～黒褐色土のプランとして検出した。当初、大形住居跡のプランの一部と誤認したが、V層上面で個別の土坑としてプランを確認した。

〔平面形〕東西2.3m、南北3.1mの長楕円形状を呈する。

〔断面形〕壁は床面からやや外傾して立ち上がっており、ピーカー状を呈する。深さは最大1.1mを測る。

〔底面〕ほぼ平坦で、堅く締まっている。

〔覆土〕覆土上位層は黒褐色～暗褐色土で、中央付近へ落ち込むように堆積する。覆土下位層は黒～黒褐色土で、壁際に厚く堆積している。上・下位覆土の間には、Ⅲa層起源と思われるオリブ褐色土(5層)が挟まっている。全般に地山ブロック、最上位層(3層)には粒状の焼土・炭化物の混入が見られる。全体に比較的締まっている。セクション図では自然堆積的な様相を示すが、人為堆積の可能性がある。

〔付属施設〕壁・底面に柱状穴小土坑4個を検出した。P1は壁面、P2・4は壁際底面、P3は底面ほぼ中央に設置されており、何らかの上屋構造を伴っていた可能性もある。

遺物 (第48～50図、写真図版39～40)

覆土中から比較的少量の遺物が出土した。

〔土器〕161～164を掲載し、他の約6.6kg分を不掲載とした。すべて縄文土器である。161は底部を欠損しているが、底部から直線的に立ち上がるほぼ円筒形の深鉢(I-F類)と思われる。綾線文(LR結節)が縦走している。163はI-B類②の深鉢で、単軸絡条体による網目状撫糸文(1+r)が施される。

〔石器〕石鏃1(S126)、不定形石器6(S127～132)、敲磨器類2(S133・134)、礫石錘3(S135～137)が出土した。S126は無茎平基鏃であるが、全体としてやや崩れた形状である。

〔石製品〕S138は珧状耳飾りである。約1/3が欠損しており、表裏両面から穿孔された貫通孔1個を有する。表裏両面の穿孔位置には若干のずれがある。

時期 検出層位および出土遺物から、縄文時代前期末葉に属する。

8号土坑

遺構 (第41図、写真図版12)

〔検出状況・重複関係〕4 b グリッド北東隅付近のIV層下位面～V a 層上面で検出した。北側で9号土坑と僅かに載り合っているが、新旧関係は不明である。

〔平面形〕南側がやや張り出す三角形気味の楕円形を呈する。規模は東西0.0m×南北0.0mを測る。

〔断面形〕壁は直立し、ピーカー形の断面形を呈する。深さは最大0.0mである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔覆土〕暗褐～黒褐色土で構成される。壁際では、地山起源の黄褐色土が流入しており、崩落したものとされる。

遺物 出土していない。

時期 検出面から縄文時代に属するものと思われるが、詳細は不明である。

9号土坑

遺構 (第41図、写真図版12)

〔検出状況・重複関係〕5 b グリッド南東隅付近に位置し、IV層下位～V a 層上面で検出した。当初、8号土坑と同一のプランとして精査したが、結果的に別土坑となった。8号土坑と僅かに載り合うが、新旧関係は不明である。

〔平面形〕径1.0mほどの略円形を呈する。

〔断面形〕壁は直立している。ほぼピーカー形を呈する。

〔底面〕平坦である。深さは最大0.5mを測る。

〔覆土〕詳細不明である。

遺物 (第50図、写真図版40)

〔土器〕出土していない。

〔石器〕覆土から、石鏃2点が出土した。S139は無茎凹基鏃で、背・腹両面に一次剥離面を残している。S140は石鏃未成品と思われる。

時期 出土遺物から、縄文時代に属すると思われるが、詳細は不明である。

10号土坑

遺構 (第43図、写真図版13)

〔検出状況・重複関係〕4 a グリッド北西付近のIV層下位面で検出した。16号土坑に載られている。

〔平面形〕やや東西に長い歪な楕円形を呈する。東西1.3m×南北0.9mを測る。

〔断面形〕壁が外傾した鍋底状である。深さは0.4mである。

〔底面〕平坦である。

〔覆土〕黒褐色土の単層であり、比較的多くの遺物を含んでいる。全体にブロック状の地山土を含んでおり、人為堆積の可能性がある。

〔付属施設〕北側底面および南東壁に小径のピットを伴う。

遺物 (第50図、写真図版40・41)

〔土器〕覆土出土の7点を掲載した。他に不掲載とした約0.8kg分が出土している。165～169は深鉢口縁部片、170・171は胴部片である。165・166・168・169は燃糸文が施文される。170は横線文が横走する。

〔石器〕石鏃(S141)、不定形石器(S142)、礫石鏃(S143)が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代前期末葉と推測される。

11号土坑

遺構（第44図、写真図版14）

〔検出状況・重複関係〕4 a グリッド東側の調査区境に位置する。西半部のみを検出し、精査を行ったが、大幅に掘り過ぎた結果、形状・規模等の詳細は全く不明である。西側で15号土坑と載り合い関係にあると思われるが、新旧関係は不明である。

〔平面形〕東半部が調査区外に延び、かつ、西半部も掘り過ぎているため、全体の形状は不明である。

〔断面形〕調査区境の断面を観察すると、北壁は直立気味に立ち上がり上部で浅く広がり、南壁はやや外傾しつつ立ち上がっている。

〔底面〕断面の観察からは、平坦だったと思われる。

〔覆土〕分層しているが、概ね黒褐色土の単層に近い。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、所属時期は不明である。

12号土坑

遺構（第43図、写真図版13）

〔検出状況・重複関係〕5 a グリッド西側に位置し、IV層下位面で検出した。13号・16号土坑と重複し、13号土坑を載り、16号土坑に載られる。即ち、(旧)13号土坑→12号土坑→16号土坑(新)という関係であると推定される。

〔平面形〕ほぼ円形であり、径1.3mを測る。

〔断面形〕ピーカー形を呈する。深さは0.7mである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔覆土〕上～中位は黒褐色土、下位は黄褐・明黄褐色土で構成される。下位の様相については、人為的な埋め戻し土の可能性はある。

遺物（第51図、写真図版41）

〔土器〕掲載した1点の他、不掲載約0.8kg分が覆土から出土した。172は、深鉢頸部片で、刺突を伴う隆帯を貼付している。

〔石器〕出土していない。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉に属すると推定される。

13号土坑

遺構（第43図、写真図版13）

〔検出状況・重複関係〕12号土坑の精査中、東壁側に黒褐～暗褐色土が不自然に入り込むことに気付き、精査の結果、別遺構として認定した。12号土坑にその大部分を載られている。

〔平面形〕開口部は12号土坑により破壊されており不明であるが、底面の残存部は円形を呈している。

〔断面形〕底面から壁がオーバーハングしており、いわゆるフラスコピットであったと思われる。

〔底面〕詳細は不明であるが、残存部はほぼ平坦である。

〔覆土〕概ね、黒褐～暗褐色土であるが、中位ではブロック状の焼土を含む層が認められる。

遺物 出土していない。

時期 検出面および12号土坑との載り合い関係から考えると縄文時代前期末葉以前に属する。

14号土坑

遺構（第44図、写真図版14）

〔検出状況・重複関係〕4 a グリッド北側に位置し、IV層下位面で検出した。15号十坑に東南壁を截られている。

〔平面形〕やや傘ではあるが、概ね円形を呈する。開口部径は1.2mである。

〔断面形〕ほぼピーカー形を呈し、深さは0.5mである。

〔底面〕平坦である。

〔覆土〕暗褐色土主体で構成され、最下層に地山崩落土が混入する。

遺物（第51図、写真図版41）

〔土器〕掲載した3点および不掲載2.2kg分が、覆上から出土している。173・174は深鉢胴部片で、撚り糸文が施文される。175は底部片である。

〔石器〕不定形石器（S144）、敲磨器（S145）、礫石錘（S146）が出土した。S145は凹み石で、表裏両面に各2箇所の変形部がある。

時期 縄文時代前期末葉に属すると思われる。

15号土坑

遺構（第44図、写真図版14）

〔検出状況・重複関係〕4 a グリッド北側で、11・14号土坑と隣接したプランとして検出した。当初、11号および14号土坑のプランの一部と考えられたが、精査の過程で、別遺構と判明した。

〔平面形〕11・14号土坑と重複しているため、全体の形状は不明である。残存部では、開口部・底面（下端）ともに円形を呈している。

〔断面形〕壁は底面からオーバーハンクして立ち上がり、内彎して開口部に至っている。深さは約0.6mである。断面形がフラスコ形を呈していることから、いわゆるフラスコビッドだったものと思われる。

〔底面〕平坦であるが、底面やや北寄りに小規模な副穴1個がある。

〔覆土〕遺構認定時点で覆上が失われており、詳細は不明である。

遺物（第51図、写真図版41）

〔土器〕1点を掲載した他に、約0.3kg分が出土している。深鉢胴部片で、地文のみである。

〔石器〕出土していない。

時期 量的に少ないが縄文土器が出土しており、縄文時代の遺構だったと思われるが、具体の時期は不明である。

16号土坑

遺構（第43図、写真図版13）

〔検出状況・重複関係〕4 a・5 a グリッド西側の境界付近のIV層下位面に構築されている。10号土坑の精査中に、10号土坑北側の土器片を多量に包含する暗褐色土の広がりを別遺構として認定した。10号・12号土坑と截り合い関係にある。件の暗褐色土の広がりから考えると、10号土坑を載るものと思われる。12号土坑については、これを確かに載っているものと解釈しているが、不確実である。

〔平面形〕概ね径1.3mの円形を呈すると推測される。

〔断面形〕残存する部分から推測すると、壁が外傾して鍋底状を呈していたと思われる。掘り込みは截り合う10号土坑よりも浅く、約0.5mである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔覆土〕10号土坑の精査過程で別遺構として認定しているため、本土坑の覆上の詳細は不明である。10

号土坑の覆土と類似する黒褐色土であると思われる。覆土中に多量の土器片が包含されていた。

遺物 (第51～53図、写真図版41～43)

〔土器〕14点を掲載した。他に不掲載19.6kg分が出土している。177～183は深鉢口縁部破片である。177は平縁の口唇部の一部にのみ3個の指頭圧痕が加えられる。178は口縁部が指頭圧痕により小波状を呈し、頸部に浮き彫り状の隆帯が巡る。180は弁状突起の突端部に指頭圧痕が加えられる。182は、178と同様の浮き彫り状の頸部隆帯で加飾されている。184～185は胴部破片で、182と同一個体か。186～191は底部破片である。186は燃糸文、187は縦位の綾線文が施文される。188は、底部に網代痕が認められる。認められる期代は、4本溝り・4本超え・2本送りである。

〔石器〕石器1点(S147)のみである。握み部・刃部にのみ粗い調整が加えられている。

時期 出土遺物には大木5式類似資料と6式類似資料が混在しているが、10号・12号土坑との載り合い関係から、本遺構も縄文時代前期末葉に属するものと推測される。

17号土坑

遺構 (第44図、写真図版14)

〔検出状況・重複関係〕5 a グリッド中央付近のIV層下面で検出した。

〔平面形〕壁上部が崩落して形状が崩れているが、隅丸長方形を呈する。東西0.9m×南北0.5mを測る。

〔断面形〕壁は外傾して、バケツ形である。深さは約0.3mである。

〔底面〕概ね平坦ではあるが、小さな凹凸がある。

〔覆土〕暗褐～黒褐色土である。地山土がブロック状に混入している。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代の可能性が高いが、確証を欠いており具体的な時期は不明である。

18号土坑

遺構 (第44図、写真図版15)

〔検出状況・重複関係〕5 b グリッド西側のV a 層面で検出した。19号土坑と載り合い関係にあり、19号土坑を載っている。

〔平面形〕径1.4mの円形である。

〔断面形〕北側が低い段差をなしているが、全体に鍋底状を呈している。深さは約0.3mである。

〔底面〕北側が落ち込み、低い段差をなしている。

〔覆土〕暗褐色土の単層であり、全体に締まりが欠けている。人為堆積の可能性が高い。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から縄文時代の可能性が高いが、確証を欠いており具体的な時期は不明である。

19号土坑

遺構 (第44図、写真図版15)

〔検出状況・重複関係〕5 b グリッド西側V a 層面で、18号土坑と合わせて検出した。18号土坑に載られている。

〔平面形〕細長くかつ彎曲した、勾玉状を呈している。規模は、東西1.2m×南北3.3mである。

〔断面形〕壁が外傾して、やや椀鉢状である。深さは約0.3mを測る。

〔底面〕中央部に向かって緩やかに傾斜する。南側壁際の一部が落ち込んでいる。

〔覆土〕黒褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 切り合い関係から18号土坑より古期ではあるが、具体の時期は不明である。不整形形状であり、風倒木痕の可能性も考えられる。

20号土坑

遺構 (第46図、写真図版15)

〔検出状況・重複関係〕

〔平面形〕壁の上部が崩落しているが、細長い楕円形状である。

〔断面形〕壁は外傾して底面との境が判然とせず、鍋底状(?)を呈する。北壁上部は崩落している。

〔底面〕中央に向かって緩やかに傾斜している。

〔覆土〕上～中位は黒、下位は黒褐色土で構成される。地山土がブロック状に混入している。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、所属時期は不明である。形態・規模が19号土坑に類似しており、やはり風倒木痕の可能性がある。

21号土坑

遺構 (第46図、写真図版15)

〔検出状況〕調査区中央部の14aグリッドにおいて、盛土直下のVI層(砂礫層)面で黒色土の広がりとして検出した。東側の約1/2程度が調査区外に伸びている。本米の構築面はもっと上層であった可能性がある。

〔平面形〕西側約1/2を検出したのみで、全体の形状は不明である。検出部分から推定すると、円形(または楕円形)を呈すると思われる。検出部分では、長軸1.9m・短軸0.75mを測る。

〔断面形〕壁は砂礫層であり南壁上部が崩落しているが、大略、ピーカー形を呈する。

〔底面〕平坦であるが、砂礫層であり礫が露出している。

〔覆上〕黒色砂礫土の単層である。遺物をごく僅かに含んでいる。

遺物 縄文土器の小破片約0.5kg分が出土したが、何れも摩滅が著しいため掲載していない。

時期 出土遺物が稀少であり時期判断の資料に乏しいが、縄文時代に属すると思われる。

22号土坑

遺構 (第45図、写真図版16)

〔検出状況・重複関係〕5aグリッド北東隅付近に位置する。検出面はIV層下位である。東側は調査区外に延びている。

〔平面形〕隅丸方形を基調とする。東西1.4m以上×南北1.6mを測る。

〔断面形〕壁は直立気味、底面は北側がやや浅くなり段をなし、歪な五角形を呈する。深さは最大mである。壁は砂礫土で壁面に礫が露出し、容易く崩落する。

〔底面〕底面にも礫が露出しており、細かな凹凸がある。

〔覆土〕礫に富む黒褐色砂土の単層である。全般に締まりがない。

遺物 (第53・54図、写真図版43)

〔土器〕掲載した2点と、不掲載の約0.4kg分が出土した。2点とも覆土中位から出土した。192は、球胴鉢の11線～胴上半部である。脚部分が欠損している。4単位の波状口縁で、頸・胴部に半截竹管状工具による平行沈線文が施文される。193は192と同一個体と思われる。

〔石器〕石鏃(S148)、石匙(S149)、不定形石器(S149～153)、礫石錘(S154～156)が出土して

いる。S149は非常に小形であるが、掘みを有しており、刃部加工も施されている。但し、実用品であるか、疑問がある。

時期 出土遺物から縄文時代前期末葉に属するものと推測される。

23号土坑

遺構 (第45図、写真図版16)

〔検出状況・重複関係〕16a グリッドIV層下位面で、24～26号土坑とともに検出した。当初、これらの4基の小規模な土坑が直線状に並んで、建物を構成する可能性が考えられた。しかし、建物の確証は得られず、個々の土坑として登録した。4基ともに小径であり、柱穴状である。

〔平面形〕壁上部が開いており、開口部形は楕円形を基調する。東西0.7m×南北0.6mを測る。

〔断面形〕北側はやや段差をなしており、漏斗状に近い形状である。深さは0.5mである。壁には礫が露出する。

〔底面〕やや両側に傾き、深くなっている。礫が露出している。

〔覆土〕全体が黒褐色土であるが、2層に分層可能である。1は柱痕跡となる可能性があるが明瞭ではない。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、時期不明である。

24号土坑

遺構 (第45図、写真図版16)

〔検出状況・重複関係〕16a グリッドIV層下位面で23号・25号・26号土坑とともに検出した。

〔平面形〕径0.3mの円形である。

〔断面形〕深さ0.2mの円筒状である。

〔底面〕平坦であるが、礫が露出している。

〔覆土〕黒褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、時期不明である。

25号土坑

遺構 (第45図、写真図版16)

〔検出状況・重複関係〕16a グリッドIV層下位面で23号・24号・26号土坑とともに検出した。

〔平面形〕壁上部が開いており、開口部形は楕円形を基調する。東西0.5m×南北0.6mを測る。

〔断面形〕鍋底状で、深さは0.2mである。壁には礫が露出する。

〔底面〕南側がやや浅くなり、浅い段をなしている。礫が露出している。

〔覆土〕黒褐色土で構成される。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、時期不明である。

26号土坑

遺構 (第45図、写真図版16)

〔検出状況・重複関係〕16a グリッドIV層下位面で23～25号土坑とともに検出した。東側の一部が調査区外に延びている。

〔平面形〕径0.2mの円形である。

〔断面形〕深さ0.15mの円筒状である。

〔底面〕平坦であるが、隙が露出している。

〔覆土〕黒褐色土の単層である。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、時期不明である。

27号土坑

遺構（第45図、写真図版16）

〔検出状況・重複関係〕16aグリッドIV層下位面で検出した。西側は調査区外に延びている。

〔平面形〕検出部分から推測すると、円形を呈するものと思われる。径は南北では1.4mを測る。

〔断面形〕壁がやや外傾しているが、概ねピーカー形を呈する。壁は単層である。深さは0.8mである。

〔底面〕底面には隙が露出し、細かな凹凸がある。

〔覆土〕褐色～暗褐色土の単層で、砂礫層である。小ブロック状に焼土粒が疎らに混入している。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、時期不明である。

28号土坑

遺構（第45図、写真図版17）

〔検出状況・重複関係〕17aグリッドのIV層下位面で検出した。西半部が調査区外に延びている。

〔平面形〕検出した東半部は、開口部・底面ともに概ね楕円形を呈する。径は南北では1.2mを測る。

〔断面形〕北壁側がやや崩落したため、傘ではあるが、開口部から底面に向けて広がるフラスコ形を呈する。いわゆるフラスコビットである。深さは約0.6m。

〔底面〕ほぼ平坦である。溝・副穴などの付属施設はない。

〔覆土〕中央下位に褐色土が堆積した後、中央上～中位に黒色土、壁際に暗褐色土が混入したものと思われる。概ね、自然堆積の様相である。

遺物（第54図、写真図版43）

〔土器〕約0.1kg分の縄文土器小破片が出土したが、図化していない。

〔石器〕石鏃（S157）、不定形石器（S158）が出土した。S157は無茎で、腹面に一次剥離面が残存する。

時期 出土遺物から縄文時代に属するものと推測されるが、詳細は不明である。

29号土坑

遺構（第45図、写真図版17）

〔検出状況・重複関係〕18aグリッドV層面（砂礫層）で検出した。周りに他の遺構は存在していない。

〔平面形〕北壁上部が一部崩落しているが、概ね径0.3mの円形である。規模が小さく、柱穴状であるが、便宜上、「土坑」として登録している。

〔断面形〕円筒状である。地山の砂礫が露出している。深さは0.5mを測る。

〔底面〕平坦である。地山の砂礫が露出している。

〔覆土〕黒色土の単層である。柱痕跡は確認されていない。

遺物 出土していない。

時期 時期判断の資料を欠き、所属時期は不明である。

30号土坑

遺構 (第46図、写真図版17)

〔検出状況・重複関係〕22a グリッドⅢ a 層面で検出した。5号住居跡と重複するが、直接の載り合い関係はない。

〔平面形〕楕円形を呈するが、西側に隣3個が接している。これらの隣が本土坑に付随するものであるか、判然としなかった。規模は東西0.8m×南北1.1mである。

〔断面形〕ごく浅い皿状である。深さは0.1mである。

〔底面〕底面と壁の区分が判然としない。中央に向かって窪んでいる。

〔覆土〕黒褐色土の単層である。覆土各所が攪乱されており、ガラス片や金属片が混入している。

遺物 出土していない。

時期 時期決定の資料を欠いており、時期は不明である。

31号土坑

遺構 (第46図、写真図版17)

〔検出状況〕調査区北部28a グリッドのV層面で検出した。

〔平面形〕西側が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、検出部分では略円形を呈している。検出部の径は1.5mである。

〔断面形〕深さ0.5mで、やや楕円状を呈しており、壁は底面から緩やかに立ち上がり、上部では外傾する。

〔底面〕中央付近では平坦であるが、南～東壁際では壁との境界が不明瞭である。

〔覆土〕黒褐色土(IV層起源)で構成されている。下位では地山ブロックを疎らに含む。

遺物 (第54図、写真図版43)

〔土器〕3点を掲載した。その他、掲載とした約1.4kg分が出土している。194・195は同一個体と思われる。深鉢の頸部～胴上半の破片であり、頸部に沈線数条が通る。196は胴部破片で、網目状燃糸文が施文される。

〔石器〕出土していない。

時期 出土土器から縄文時代前期末葉に属するものと推測される。

32号土坑

遺構 (第23・24図、写真図版18)

〔検出状況・重複関係〕3号住居跡の精査中、同住居跡の床面で暗褐色ブランを検出した。当初、同住居跡に伴う土坑と考えたが、別個の遺構として登録した。3・4号住居跡の断面セクションC-Dの検討、および3号住居跡の覆土上面では本土坑のブランは検出されていないことから、本土坑が同住居跡に載られているものと判断したが、必ずしも明瞭ではない。東側が調査区外に伸びており、南側を3号住居跡の柱穴P5・6に載られ、4号住居跡を載っている。

〔平面形〕楕円形基調と推測されるが、詳細不明である。検出部分の径は約0.9mを測る。

〔断面形〕残存する壁は、床面からやや外傾して立ち上がっており、鉢形の断面形を呈している。深さは0.6mを測る。

〔底面〕ほぼ平坦である。V層に相当し、堅く締まっている。

〔覆土〕明黄褐色の地山ブロックを多く含んだ暗褐色土の単層である。人為堆積と思われる。

遺物

〔土器〕縄文土器の小破片約0.1kg分が底面付近で出土したが、脆く凶化不可能であり掲載していない。
〔石器〕出土していない。

時期 3・4号住居跡との切り合い関係および出土遺物から、縄文時代前期末葉に属するものと思われる。

33号土坑

遺構（第46図、写真図版18）

〔検出状況・重複関係〕調査区北端付近の32aグリッドIV層面で検出した。東半部だけの検出である。

〔平面形〕検出部分では隅丸方形状を呈している。規模は長軸1.4m・短軸0.8m以上である。

〔断面形〕浅い皿状である。調査区境の断面の観察からは、IV層面から掘り込まれているようである。

〔底面〕ほぼ平坦である。

〔覆土〕上位はⅡ・Ⅲ層に被覆されており、下位は黒～黒褐色土である。

遺物 出土していない。

時期 遺物が出土していないが、掘り込み面および周辺の出土遺物から縄文時代に属するものと思われる。

3. 土器埋設遺構

1号埋設土器

遺構（第46図、写真図版19）

調査区北部29aグリッドで検出した。同グリッドⅢ層上の除去作業中に、西側調査区境の法面で正立状態の一括土器を検出した。断面で確認した結果、人為的に埋設された遺構と判断した。土器はほぼ正立状態で埋設されている。検出時点で東半部分を掘りすぎたが、西半部分では不明瞭ながら掘り方が検出された。掘り方の規模は、開口部では40cm程の円形、断面では深さ35cm程の楕円形を呈すると思われる、Ⅲ層上面から掘り込まれている。覆土は、Ⅱ層起源と思われる黒色土の単層である。

遺物（第55図、写真図版44）

〔土器〕埋設されていた土器（197）のみである。

〔石器〕出土していない。

時期 埋設されていた土器から、縄文時代前期末葉と思われる。

2号埋設土器

遺構（第46図、写真図版19）

調査区北側の27aグリッドⅢ層面で検出した。2号住居跡の覆土（および傾かに床面）を載っている。遺構認定が遅れたため、土器周囲の土層が半ば以上失われてしまったため、平面ではプランを確認できなかった。断面では径30cm・深さ25cm程の掘り方が確認されている。構築面はⅢ層だったと思われる。土器はやや斜位の倒立状態で埋設されている。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物（第55図、写真図版44）

〔土器〕埋設されていた土器（198）である。199は198の底部破片と思われる。

〔石器〕出土していない。

時期 埋設されていた土器から、縄文時代前期末葉と思われる。

3号埋設土器

遺構（第46図、写真図版19）

調査区中央部15aグリッドに位置する。IV層面で検出したが、本来の構築面は不明である。掘り方は不

明瞭であったが、開口部50×45cm、深さ20cm以上の楕円状を呈すると思われる。覆土は、小礫を砂らに含んだにぶい黄褐色土である。

遺物（第55図、写真図版44）

〔土器〕埋設されていた土器（200）のみである。

〔石器〕出土していない。

時期 埋設されていた土器から、縄文時代前期末葉と思われる。

4. 焼土遺構

1号焼土

遺構（第47図、写真図版19）

調査区北部31aグリッドのⅢ層下位面で検出した。なお、本焼土の東～南側周辺のⅢ層上面がやや堅く締まっており、堅穴住居跡の炉跡だった可能性も考えられた。しかし、周辺では壁・柱穴等は検出されていないため、独立した焼土遺構として扱った。部分的に擾乱を受けているが、21×19cmのやや不整な楕円形の範囲に焼成不良な焼土層が広がっている。焼土の層厚は、最大3cmである。

遺物（第55図、写真図版44）

〔土器〕焼土西脇から出土した縄文土器片（201）のみである。深鉢胴部の破片である。

〔石器〕出土していない。

時期 出土遺物は時期判断の資料としては弱いですが、検出面および周辺の出土遺物から考えて、縄文時代前期末葉に属すると思われる。

2号焼土

遺構（第47図、写真図版20）

調査区南部の8bグリッドにおいて、Ⅱ層下位面で検出した。堅穴住居跡の炉跡である可能性が考えられたが、明瞭な壁・柱穴が検出できず、独立した焼土遺構として登録した。径80cm程の略円形を呈する。焼土の層厚は最大10cmで、焼成はあまり良好ではないが、締まりがある。

遺物 出土していない。

時期 遺物は出土せず時期判断の資料を欠くが、検出層位および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代前期末葉と思われる。

3号焼土

遺構（第47図、写真図版20）

5cグリッドの調査区境界際のⅣ層上位面で検出した。35×40cmの楕円形状を呈しており、焼成の悪い焼土が最大7cm形成されている。

遺物 出土していない。

時期 遺物は出土せず時期判断の資料を欠くが、検出層位および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代前期末葉と思われる。

4号焼土

遺構（第47図、写真図版20）

調査区南部の6bグリッド北西隅付近、Ⅳ層上位面で検出した。35×40cmの隅丸方形に焼土が広がる。焼成は良好で、焼土層は最大厚9cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 遺物は出土せず時期判断の資料を欠くが、検出層位および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代前期末葉と思われる。

5号焼土

遺構 (第47図、写真図版20)

調査区南部の西側調査区域、7b~8bグリッドの境界線に跨った、IV層土位面で検出した。西側の一部が調査区外に伸びているが、径60cmの略円形を呈すると推定される。焼土の焼成は良好で、最大層厚6cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 遺物は出土せず時期判断の資料を欠くが、検出層位および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代前期末葉と思われる。

6号焼土

遺構 (第47図、写真図版21)

調査区南部Va層下位~V層面で土坑群の精査中、4aグリッド西側で検出した。検出層位はVa層である。層厚5cmの焼土が、50×40cmの楕円形状の範囲に広がる。焼成は良好である。

遺物 出土していない。

時期 遺物は出土せず時期判断の資料を欠くが、検出層位および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代前期末葉と思われる。

5. 掘立柱建物跡

1号建物跡

遺構 (第56図、写真図版21)

〔検出状況・重複関係〕調査区南側のA区2b~4bグリッド付近に位置する。当初、個別の土坑(柱穴状小土坑)として検出したが、検討した結果、個々の柱穴間の対応関係が認められたため、建物跡と認定した。P2が1号土坑北西隅を僅かに載っている。その他の遺構との重複はない。

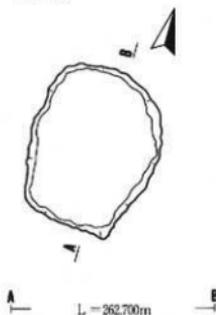
〔構築面〕全てII層下位面で検出したが、本来の構築面は更に上層だった可能性がある。

〔平面形・規模〕ほぼ南北方向に軸線をもつ建物である。身舎部分は、12本の柱穴で構成される桁行5間×梁行1間、南北9.3m×東西2.3mを測る建物である。柱穴間の間尺は、桁北側の4間では1.7~1.8mを、南側の1間のみは2.1~2.2mを測っており、南側の1間のみ間尺が異なる。梁の間尺は2.2~2.3mである。また、身舎の東側に張り出す柱穴2個が認められる。この柱穴2個が身舎に伴う場合は、出入り口状の施設だった可能性が考えられる。但し、南北で間尺が異なること、若干軸線が異なることから不確かである。柱穴の平面形は円形~楕円形で開口部径は26~37cmを測る。深さは20~39cmとバラツキがあるが、検出面の高低差が反映したものであり、底面のレベル差は10cm程度である。

〔主軸方向〕N-9°13'-W

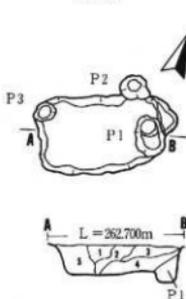
〔覆土〕何れの柱穴とも黒色土を主体とし、黒褐色土が混入している。うち、覆土に地山起源の明黄褐色土が混入し(P2・5・8・10・12)、石が多量に入り込んでいる(P2・9)のものも認められ、人為的な堆積様相ではないかと思われる。平面では柱痕跡は確認できなかったが、P4・7・8・11の断面において、縦に入り込んだ黒色土層は柱痕跡だった可能性もある。

1号土坑



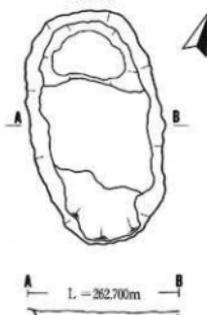
1 10YR3/2 黒褐 しまりなし

2号土坑



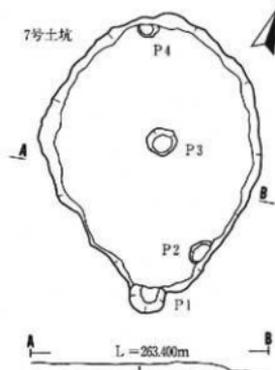
1 10YR3/2 暗褐 黄褐色ブロック混入
 2 10YR3/4 暗褐 黄褐色ブロック混入
 3 10YR2/2 黒褐 黄褐色ブロック混入
 4 10YR2/2 黒褐 黄褐色ブロック混入
 5 10YR2/2 黒褐 黄褐色ブロック混入

3号土坑



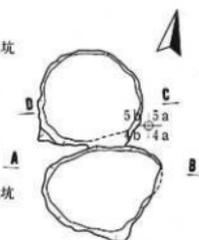
1 10YR3/2 黒褐 しまりなし

7号土坑

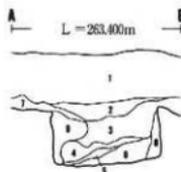


1 10YR3/2 黒褐 小礫・遺物多く混入 粘性なし
 2 10YR3/2 暗褐 小礫・遺物多く混入 粘性なし
 3 10YR2/2 黒褐 炭化焼粒・炭土ブロック・遺物混入
 4 10YR3/4 暗褐 黄褐色ブロック多量に混入 堅く締まる
 5 2.5Y/3 暗褐 オリーブ層 暗褐色混入
 6 10YR2/1 黒 黄褐色混入
 7 10YR2/2 黒 黄褐色ブロック多量に混入
 8 10YR2/2 黒褐 黄褐色ブロック多量に混入 堅く締まる
 9 2.5YR4/3 オリーブ層 粘性なし

9号土坑



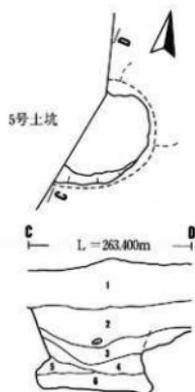
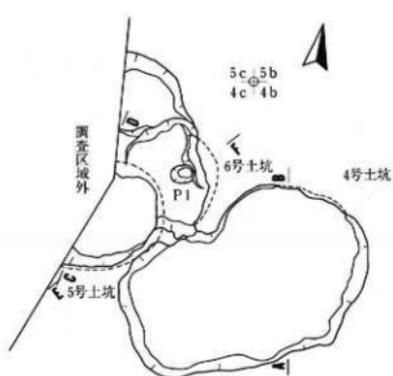
8号土坑



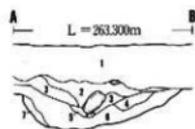
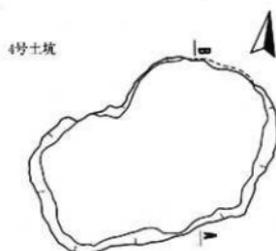
1 10YR3/3 暗褐 礫・遺物多く混入 粘性なし (IV層)
 2 10YR3/4 暗褐 黄褐色ブロック多量に混入 粘性なし 堅く締まる
 3 10YR3/2 暗褐 黄褐色小粒混入 粘性なし
 4 10YR2/2 黒褐 黄褐色小粒・炭化物混入
 5 10YR2/1 黒と2.5YR4/6 オリーブ層の混合土
 6 10YR3/3 暗褐 オリーブ層混入
 7 2.5Y/3 オリーブ層 粘性なし
 8 10YR2/6 明炭褐 地山腐植土
 9 10YR8/6 黄鉄 地山腐植土

0 1m

第41図 1~3・7~9号土坑



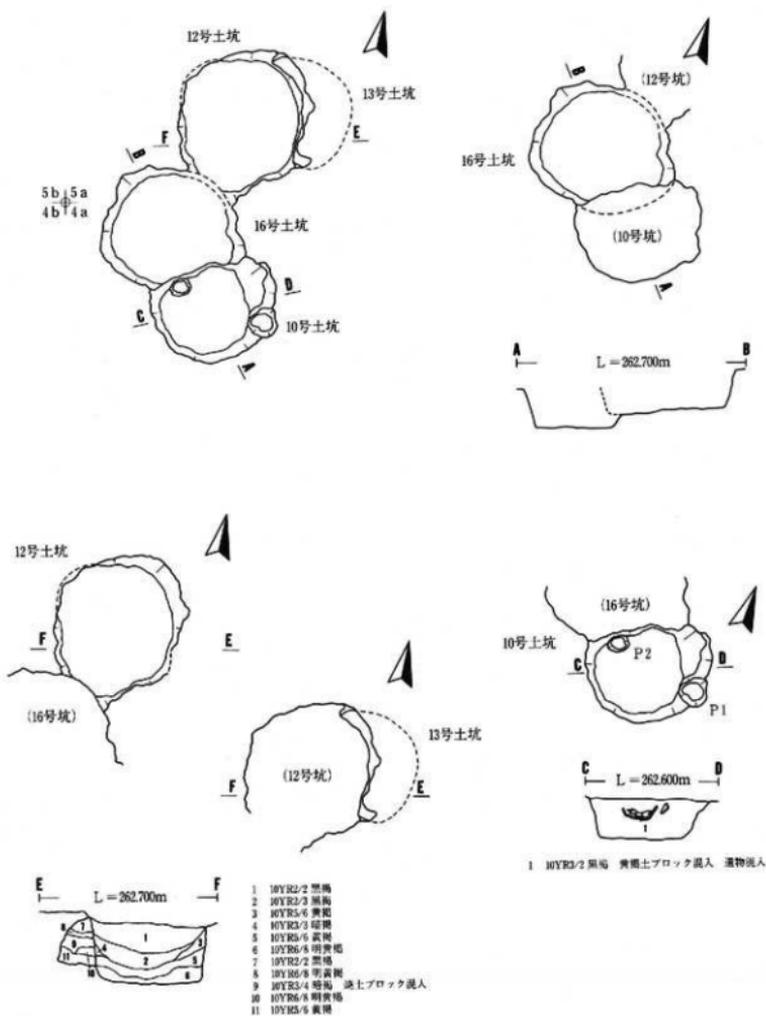
- 1 HVR2/2 黒埴 掘・遺物多量に混入 粘性なし
- 2 HVR2/3 黒埴 掘・灰化物混入
- 3 2SV4/4 オリーブ層 砂質土 総掘土混入 粘性なし
- 4 HVR3/4 黒埴 黄褐色ブロック混入
- 5 HVR2/3 黒埴 雜混入
- 6 HVR2/3 黒埴 黄褐色ブロック混入



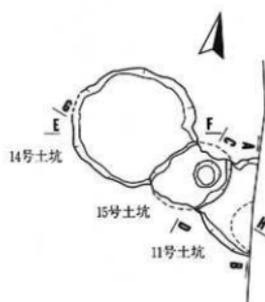
- 1 HVR2/2 黒埴 掘・遺物多量に混入 粘性なし
- 2 HVR2/3 黒埴 掘・灰化物混入
- 3 2SV4/4 オリーブ層 砂質土 総掘土混入 粘性なし
- 4 HVR3/4 黒埴 黄褐色ブロック混入
- 5 HVR2/3 黒埴 雜混入
- 6 HVR2/3 黒埴 黄褐色ブロック混入
- 7 HVR2/2 黒埴 粘性なし



第42図 4~6号土坑

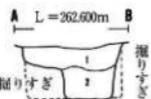


第43図 10・12・13・16号土坑

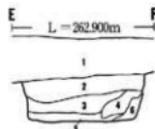


5a
4a

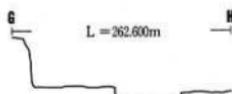
調査区域外



10YR2/2 黒褐色 黄泥土ブロック少量含む
10YR2/3 黒褐色 黄泥土ブロック少量含む



L = 262.600m



- 1 10YR2/2 黒褐色 小礫・遺物混入、粘性なし
- 2 10YR2/3 黒褐色 黄泥土粒、炭化物混入
- 3 10YR2/4 暗褐色 黄泥土多量に混入
- 4 10YR2/3 緑褐色 黄泥土粒少量混入
- 5 10YR2/1 黒 黄泥土と黄泥土の混合層
- 6 10YR2/6 灰褐色 地山崩落土?



17号土坑

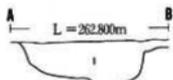


10YR3/3 暗褐色 黄泥土ブロック混入
10YR2/3 黒褐色 黄泥土ブロック混入

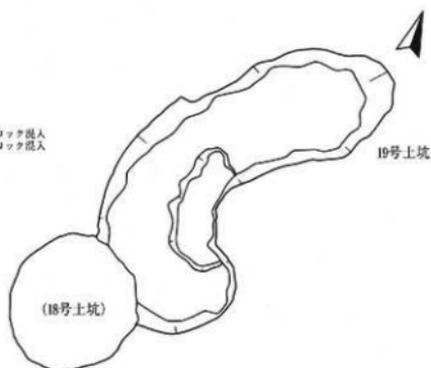


19号土坑

18号土坑



1 10YR2/1 黒 黄泥土混入、しまりなし

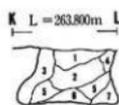
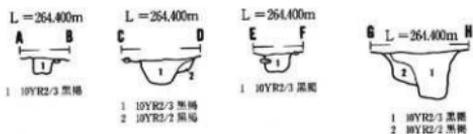
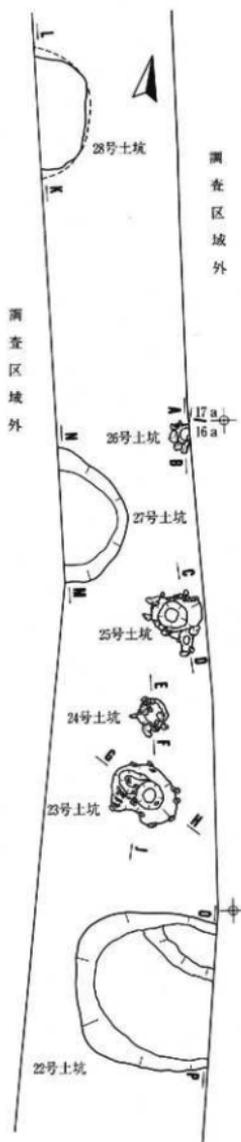


(18号土坑)

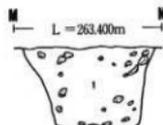
19号土坑

0 1m

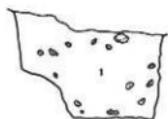
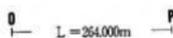
第44図 11・14・15・17～19号坑



- 1 10YR12/1 黒 粘性土
- 2 10YR2/1 黒 粘性土
- 3 10YR3/3 暗褐色
- 4 10YR3/4 暗褐色
- 5 10YR4/4 暗褐色
- 6 10YR3/4 暗褐色
- 7 10YR4/6 暗褐色



- 1 10YR4/4 暗褐色 - 10YR2/3 暗褐色
砂質土、粘性なし、しまりなし
中層多量に含む
焼土ブロック層かを含む



- 1 10YR3/1 黒 粘性土、しまりなし、粘性なし、中層多量に含む

29号土坑



L = 263.700m



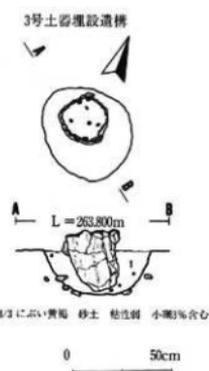
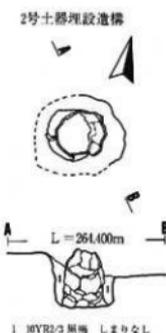
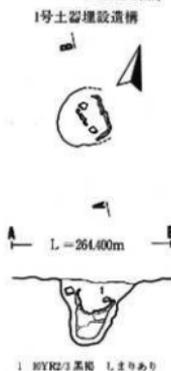
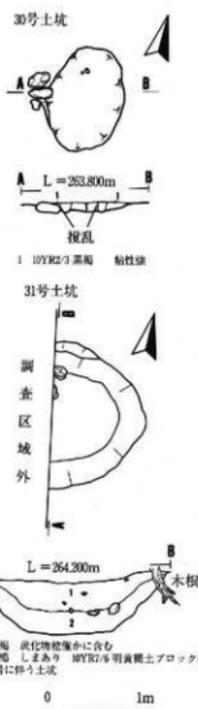
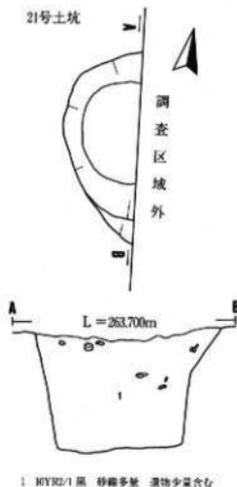
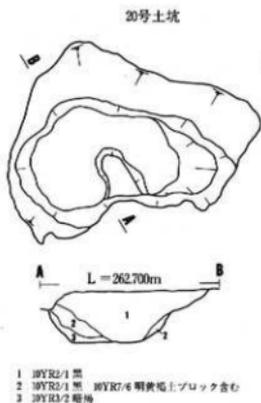
- 1 10YR12/1 黒 しまりなし

18 a

17 a

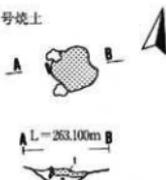
0 1m

第45図 22~29号土坑



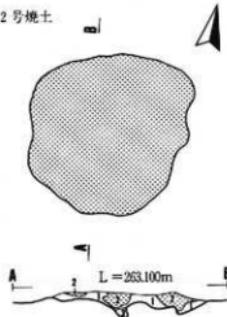
第46図 20・21・30・31・33号土坑、1~3土器埋設遺構

1号焼土



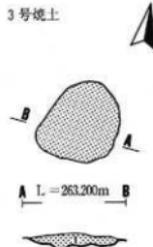
- 1 5YR6/8暗 焼土 焼成弱
 WYR4に多い黄褐色ブロック含む、炭化物細粒含む
 2 10YR5/4暗黄 焼土ブロック・炭化物粒混在含む

2号焼土



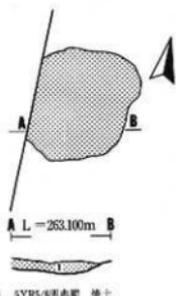
- 1 10YR3/3暗黄 粘粒質
 2 5YR5/8明赤褐 焼土 粘粒質
 3 WYR3/3暗黄とWYR5/8明黄褐色混土 粘粒質

3号焼土



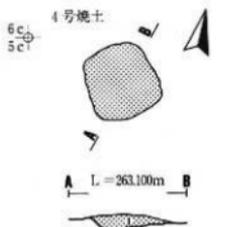
- 1 5YR4/6赤褐 焼土 焼成弱（異地性小?）

5号焼土



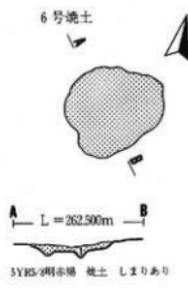
- 1 5YR5/8明赤褐 焼土

4号焼土



- 1 5YR5/8明赤褐 焼土 暗黄~黒褐色ブロック含む 焼成中やや良好（異地性小?）

6号焼土



- 1 5YR5/8明赤褐 焼土 しまりあり

0 30cm

第47図 1~6号焼土遺構

遺物 出土遺物はない。

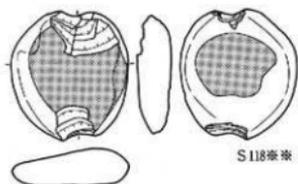
時期 伴出遺物がなく、時期判断の資料を欠く。1号土坑を截ることから、縄文時代前期以後の遺構ではあるが、具体の所属時期は不明である。

柱穴計測表

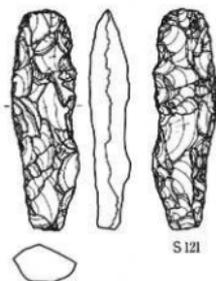
番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
開口部 (cm)	35×30	30×28	30×33	28×32	33×30	30×32	35×34
深さ (cm)	35	39	30	33	30	20	32

番号	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
開口部 (cm)	37×35	35×40	42×33	28×32	34×31	26×29	30×27
深さ (cm)	30	31	34	25	30	37	34

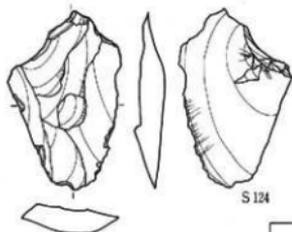
2号土坑



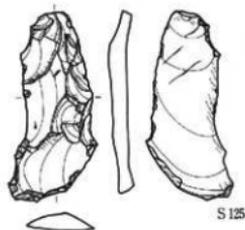
S118※※



S121



S124

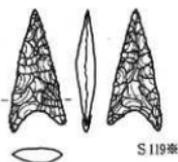


S125

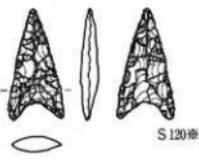
4号土坑



160※※



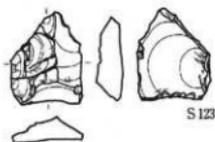
S119※



S120※



S122

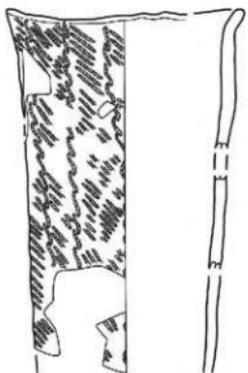


S123

7号土坑(1)



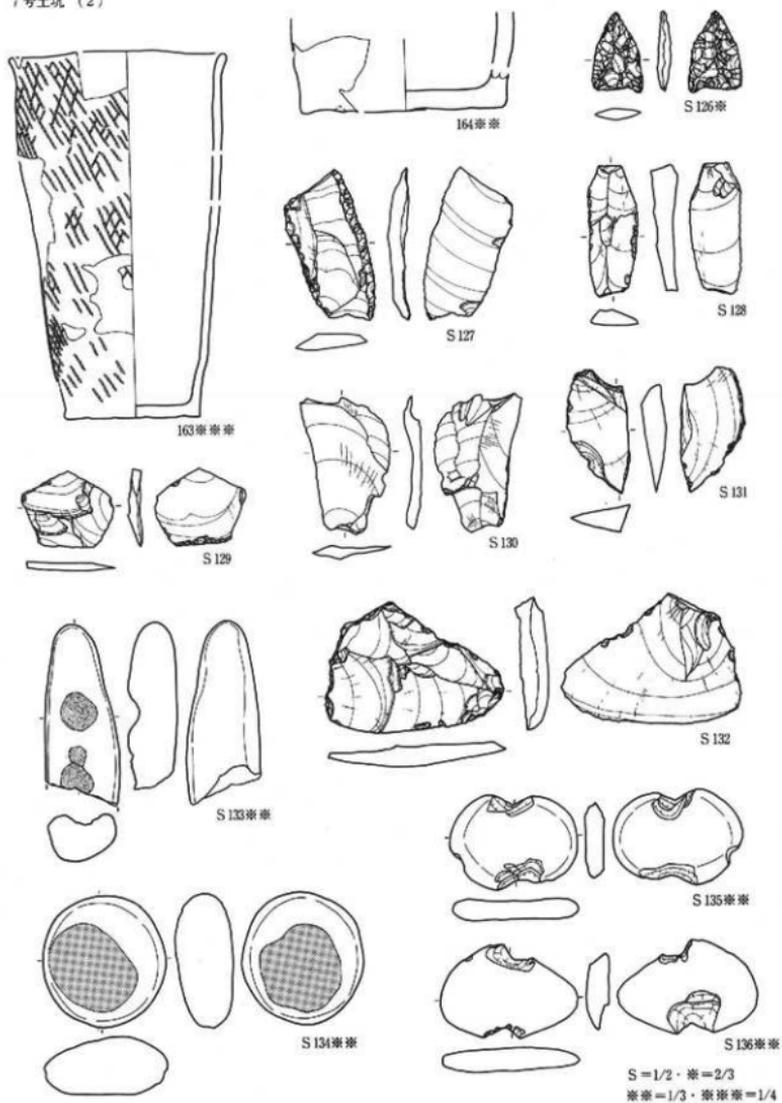
162※※



161※※※

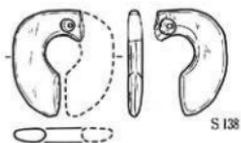
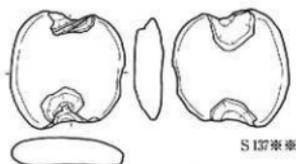
S=1/2 · ※=2/3
※※=1/3 · ※※※=1/4

第48图 土坑出土遺物(1)

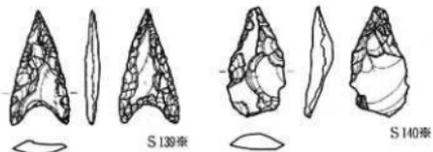


第49图 土坑出土遗物 (2)

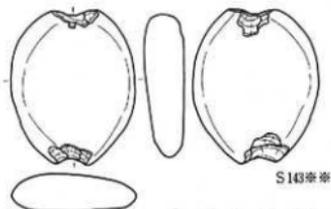
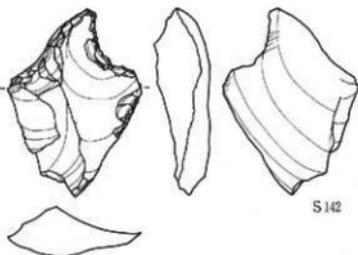
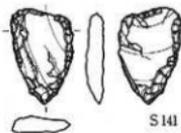
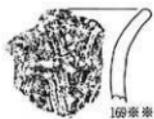
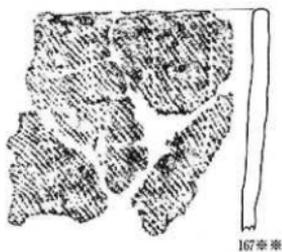
7号土坑(3)



9号土坑



10号土坑



S = 1/2 · 长 = 2/3 · 宽 = 1/3

第50图 土坑出土遺物(3)

12号土坑



172 号

14号土坑



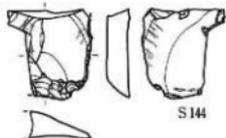
173 号



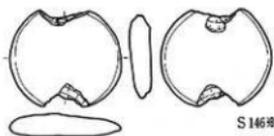
174 号



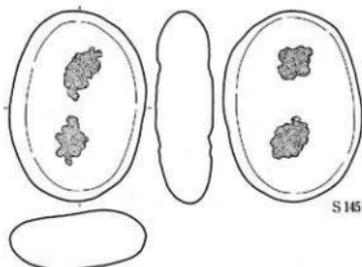
175 号



S14



S146 号



S145 号

16号土坑 (1)



177 号



178 号

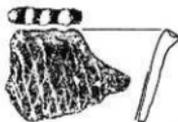
15号土坑



176 号



179 号



180 号

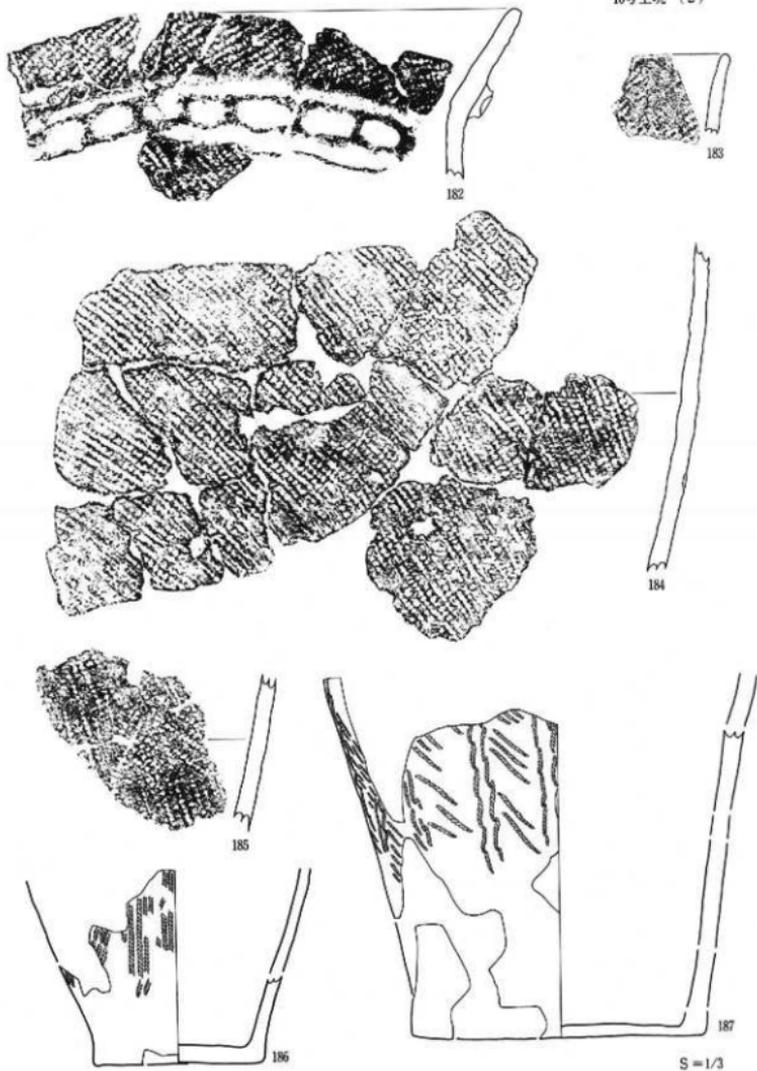


181 号

S=1/2 · 号=1/3

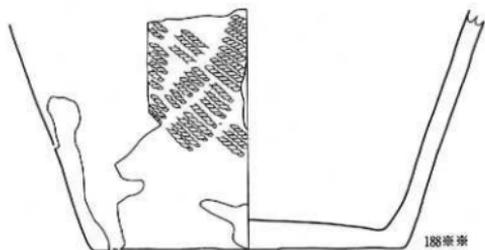
第51图 土坑出土遗物(4)

16号土坑 (2)



第52图 土坑出土遺物 (5)

16号土坑 (3)



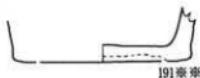
188 毫米



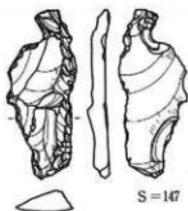
189 毫米



190 毫米

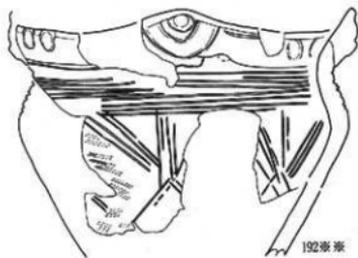


191 毫米



S=147

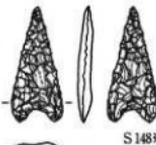
22号土坑 (1)



192 毫米



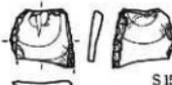
193 毫米



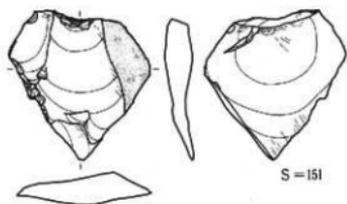
S 148 毫米



S=149



S 150



S=151

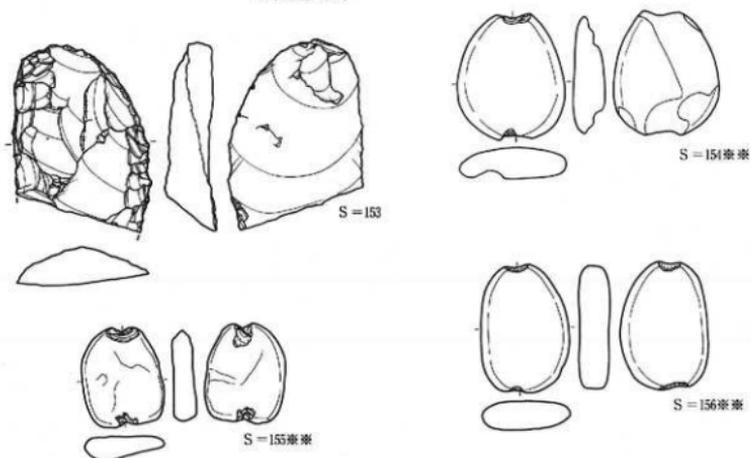


S 152

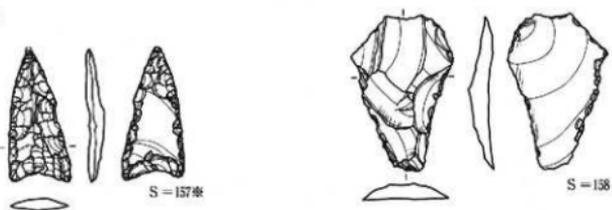
S=1/2 · 毫米=2/3 · 毫米=1/3

第53图 土坑出土遗物 (6)

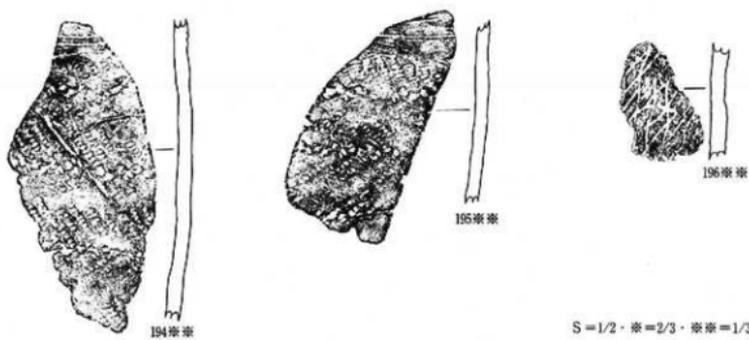
22号土坑 (2)



28号土坑

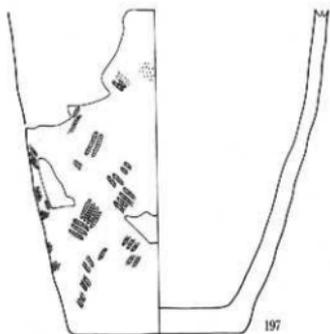


31号土坑

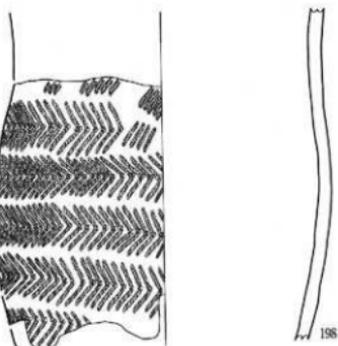


第54图 土坑出土遺物 (7)

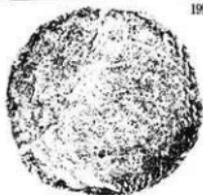
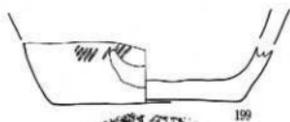
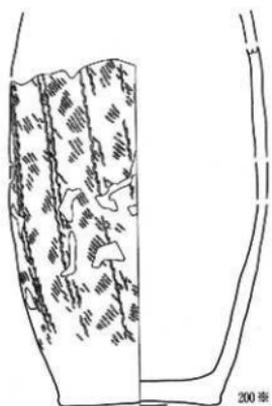
1号土器埋設遺構



2号土器埋設遺構



3号土器埋設遺構

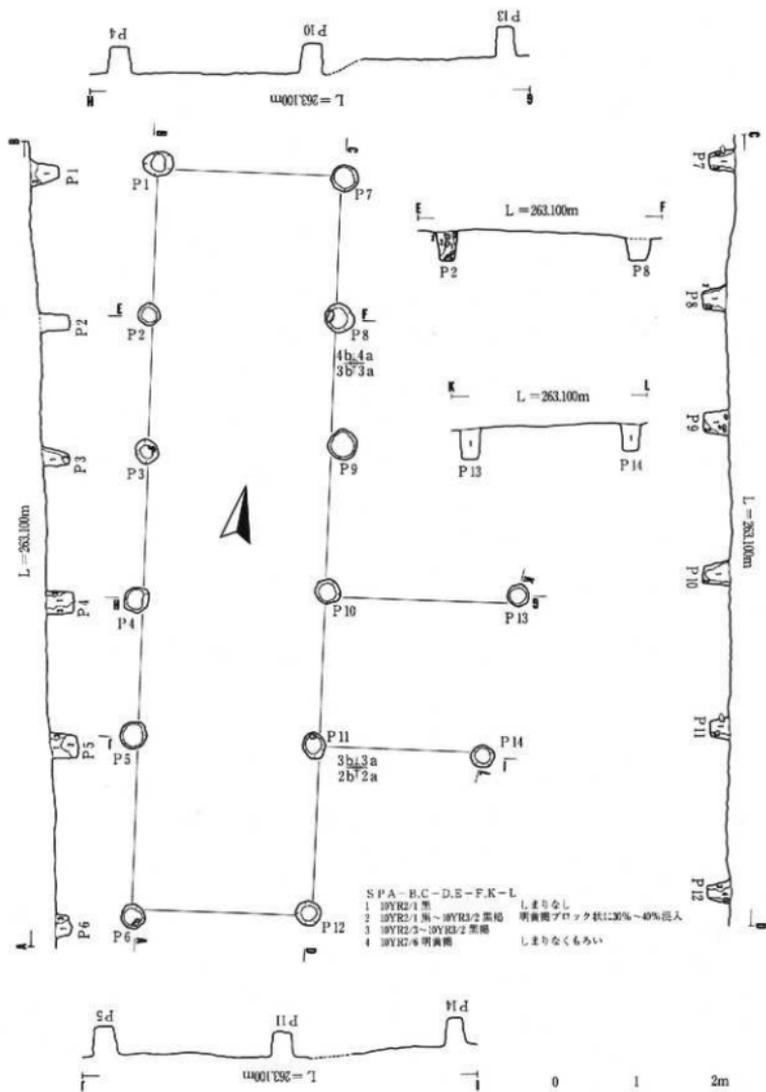


1号焼土遺構



S=1/3 · ※=1/4

第55図 土器埋設遺構・焼土遺構出土遺物



第56図 掘立柱建物跡

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器類、石製品、金属器、植物遺存体（炭化種実）である。金属器を除く出土遺物は、いずれも縄文時代に属するものと推測される。

(1) 縄文土器

今回の調査では、遺構内外を併せてコンテナ約50箱分の縄文土器が出土した。調査区全域から満遍なく出土している。所属時期は、前期前葉、同後葉、同末葉、中期初頭、後期で、主体を占めるのは縄文時代前期末葉の土器群である。出土した土器は全体的に表面が著しく摩滅して脆い破片が多く、かつ時間的な制約により異なる遺構・グリッド間の接合を省略したことも相俟って、実測可能な程度まで復原できた資料は底部のみの資料を含めて105点に止まった。破片資料は、文様特徴ある資料を中心に893点を登録した。この登録資料998点のうち、遺構内201点（立体29・拓影172）、遺構外325点（立体76・拓影249）、合計526点を掲載した。結果的に掲載したのは登録点数の58.9%であり、且つ破片資料が圧倒的に多くなっている。

本項では、遺構内外を含めた復原資料および破片資料について以下のとおり分類を行った。すなわち、出土土器全体を前期前葉（第Ⅰ群）、前期後葉～中期初頭（第Ⅱ群）、後期（第Ⅲ群）に大別した。土器の出土状況が明瞭な層位的区分を反映して共存関係を明瞭に把握できるもの、とは言い難い状況であったことから、分類に際して出土層位は考慮していない。各群の細分について。第Ⅰ・Ⅲ群の資料は絶対数がごく僅かであるため細分していない。第Ⅱ群については立体資料と破片資料を分離して扱い、立体資料は器形・文様を基にして細分を行い、破片資料については部位別に文様等で細分した。個々の資料の部位・文様・計測値等の詳細、比定される所属時期については、後掲の観察表に記載している。なお、本末、第Ⅱ群土器としたものは、土器型式に対応する形で分離可能なものと思われるが、以下の理由により、本節ではこれを一括して扱った。①筆者が大木5～7a式の内容・識別要素（メルクマル）を明確には捉えられなかったこと（とりわけ大木6式と同7a式との区分が判然とせず⁽¹⁾）、どちらに分類すべきか迷う資料も多々あった。これは筆者の不勉強によるところであり、お詫びする次第である。さらに、②筆者の理解する範囲においては、第Ⅱ群とした土器群の大部分が〔前後形式との中間的（漸移的）様相をもつものも含めて〕大木6式の範疇に含まれ、明らかに大木5・7a式に比定される資料が僅かであること。①→②より、同群資料を無理に分類してしまうことを避け、敢えて、時間幅をもった連続性のある群として資料を提示することとしたものである。なお、第Ⅱ群土器の編年のな位置付けの考察については、第Ⅵ章を参照されたい。

第Ⅰ群 縄文時代前期前葉に属する土器（144、145）

口縁部に不整燃糸文を施す資料である。5号住居跡の覆土出土の口縁部片2点（144・145）である。いずれも口縁部は波状を呈し、口縁部文様帯には不整燃糸文が横走する。胴部は地文が施される。同一個体の可能性が高い。

第Ⅱ群 縄文時代前期後葉～中期初頭に属する土器

1類 概ね円筒形を呈する長胴形深鉢（2、4～8、12、16、72、127、137、161、163、202～232）

1-A類 口縁部に最大径を有し、頸部で窄まり、口縁部が強く屈曲して外反ないし外傾するもの。この類は、口縁部が貼付隆帯・段・半截竹管による平行沈線等により区画されている。

- ① 口縁部が波状線であるもの。うち、a・b類は視覚的なイメージが類似し、c～e類は波状口縁の波頂部に刻みを有し、全体としては装飾性に乏しい点で共通性が指摘できる。

- a. 4 単位の波状口縁で、波状の頂部に対応する位置に、円錐状突起・指頭状圧痕による凹文・半截竹管による沈線文等を有するもの (2、7、202~204)。
- b. 口縁部が貼付隆帯により肥厚し、4 単位の波状となるもの (205)。
- c. 4 単位の大形の波状縁で、口唇に沿って刻みを巡らし、口縁部文様帯が無文化されるもの (206)。口唇部に沿って、やや斜位の刻みが施される。波頂部は平坦となり、台状を呈する。
- d. 4 単位の波状縁で、波頂部に刻みを有し、口縁部文様帯が無文化されるもの (207)。
- e. 4 単位の波状縁で、波頂部に刻みを有し、口縁部文様帯を有しないもの (208)。胴部には施文方向の異なる 2 種の結束羽状縄文が施文され、全体としては菱形のモチーフを展開している。
- ② 口縁部が平縁であるもの。この類は、口縁部が沈線・貼付隆帯・段により区画されている (8、12、210~212)。210は、肥厚した口縁部に半月状の凹縁と棒状工具による刺突文による文様が施される。211は、頸部に横方向からの刺突を伴う隆帯が貼付される。刺突の方向は一様ではなく、左右両側がある。212は、口縁部に半截竹管による平行沈線文を施した後、縦位の単輪絡条体による摺糸文を胴部に施文する。
- 1-B 類 口縁部に最大径を有し、底部から緩やかに立ち上がり、口縁部 (口唇部付近) で僅かに外傾ないし外反するもの。この類の土器群は、口縁部と胴部とが明確に区画されたものは見られない。全体として、裝飾性を著しく欠く土器群である。
- ① 口縁部に文様体を有するもの (209、213、214)。209・213は口縁部に原体圧痕を施し、214は口縁部が無文化されて、それぞれ文様帯 (?) となっているが、裝飾性は低い。
- ② 口縁部文様帯を欠くもの。縦線文・摺糸文・擬縄文が施される (163、215~219)。163は網目状摺糸文、217は偽縄文、216・218は単輪絡条体の摺糸文、219は縦位の縦線文である。217の擬縄文はオオバコの花茎を回転施文した「オオバコ回転文」土器である¹¹⁾。
- 1-C 類 口縁部に最大径を有し、底部から緩やかに立ち上がり、口縁部 (口唇部付近) での外傾および外反が顕著ではないもの (220)。口縁部に竹管による凹縁、平行沈線文を施している。
- 1-D 類 最大径が胴部中位にあるか、口縁部径と胴部径がほぼ同じもので、頸部で窄まり口縁部が強く屈曲して外反ないし外傾するもの。
- ① 口縁部が平縁で、口縁部が貼付隆帯・段により区画されるもの (4、6、221~224)。
- ② 口縁部が平縁で、口縁部文様帯と胴部との明確な区画が認められないもの (137、225~228)。225・227は全体のプロポーションが細身である。225はやや器形が特異であるが、227の器形が更にディフォルメされたものかと思われる。228は口唇部にも地文が施される。
- ③ 口縁部が波状縁 (前後波状; 花卉状) で、口縁部文様帯と胴部との明確な区画が認められないもの (127)。
- 1-E 類 口縁部に最大径を有し、底部から口縁部まで直線的に立ち上がるもの。口縁部形状で細分した。
- ① 4 単位の波状縁のもの (229)。229は半截竹管による文様が胴部上半まで及ぶ少数例の一つである。
- ② 平縁のもの (72、230、231)。72は無文で器表面が被熱により剥落している。230はやや底部が彫れたバケツ形の深鉢で、4 単位の台状突起が付く。突起の上面観は山形 (または稲妻形) である。231は頸部に刻みを伴う隆帯が全周する。
- 1-F 類 胴部下半から口縁部まで直線的に立ち上がり、全体の形状が円筒形を呈するもの。基本的には平縁である (161、232)。本類の資料は 2 点のみであり、本遺跡においては「客体的」な存在

であると思われる。232は被熱によるものと思われる器表面の剥落が見られ、胴部中央付近において煤が帯状に付着する点から、炉へ埋設されていたものである可能性も考えられる。

2類 胴上半が球形ないしは球形で、胴下半が円筒形となる深鉢（9、233～242）「球形深鉢」（稲野1991）や「脚付鉢形土器」（岩手県教委1983）と呼称されるものである。

2-A類 胴上半部の屈曲が全体に弱く、緩やかに胴下半の「脚」部へと連結するもの（脚部の区分がやや不明瞭なもの）（9、233）。9・233ともに欠損しており、断言できないところではあるが、胴上半部の様相から本類に位置付けた。胴上半が長く延び、2-B①類に比してやや間延びした印象を受ける。

2-B類 胴上半部が球状ないしは算盤の珠状で、胴下半部が比較的短い「脚」状を呈するもの。

① 胴上半部が強く屈曲して、珠算の珠状を呈するもの（192、236）。ただし、この2点には文様構成に差異が認められる。192は平行沈線による直線的な文様が主体である。それに対し、236は刺突文・垂下する波状文・弧線文等が施され、波頂部に対応する位置に、短い粘土紐が弧状（把手状？）に貼付される⁽³⁾。192の文様は深鉢1類のそれに共通するものであり、同系統に位置付けられよう。一方、236は異系統の文様⁽⁴⁾を有するものと思われる。

② 波状口縁で、胴上半部が強く内彎して、球状を呈するもの（234、235）。235は口縁部のボタン状貼付を中心に連弧状の連続沈線文を施しており、236と同様に異系統の文様である。

③ 平縁で、胴上半部が強く内彎して、球状を呈するもの（237、238）。237は平縁の4箇所（？）に二股状の山形突起を有し、胴部中位には短かい粘土紐の横位の貼付が見られる。

2-C類 胴上半部の屈曲・内彎が緩く外傾気味となり、下半部の「脚」部分が比較的長くなる〔と思われるもの（240～242）。3点ともに「脚」部が欠損しているため、断言できないが、胴上半部の開き度合いから本類としている。240は口縁部に上下交互の連弧文が展開する。241は肥厚した口縁部上下端に半截竹管による三日月状刺突文が連続して施される。242は半截竹管による平行沈線・刺突文が施文される。

2-D類 「球形深鉢」の破片資料と思われるもの。口縁部（449～461）、胴部（462～464）、底部（465）。

3類 小形の深鉢形土器（3、243、244）I口縁部形状により細分した。

3-A類 波状縁で、全体的に外傾しているもの（3）。口縁部は肥厚し、無文化されている。胴部には半截竹管による平行沈線が施される。

3-B類 平縁のもの（243、244）。243は底部から直線的に立ち上がり、I口縁部付近でやや外反する。器面には半截竹管による平行沈線が施される。244は胴張で、I口縁部がやや外傾している。頸部に横位の平行沈線2条が施されるが、口縁部には地文のみである。

4類 浅鉢形土器（245）復原・凶化したものは1点のみである。245は内外面ともにミガキにより無文となっている。

5類 破片資料（1、10～71、73～125、128～136、138～160、162、164～191、193～201、246～277、279～526）全体の器形が不明で1～4類に分類できない破片資料を一括した。部位・施文の特徴により分類した。なお、複数の文様属性を併せ持つものも複数存在するが、その場合はより顕著な属性に分類している。

5-A類 I口縁～胴部破片

① I口縁部・胴部に沈線による文様が展開するもの

- a. 半截竹管背面（外面）または先端の丸い棒状工具を用い、断面U状となる太い沈線（凹線）を引くもの
- ア 沈線文（凹線）を施すもの。直線的沈線と曲線的沈線（波状・同心円状・連弧状等）により文様を構成するものである。
- i 直線的な沈線を引くもの（14・15・18・21・39・55・56・61・279～287）
 - ii 鋸歯状沈線を引くもの（28・121・289～293）
 - iii 曲線的な沈線を引くもの（27・32・35・40・73・82・83・117・247・294～299）
- イ 沈線文（凹線）+刺突文を施すもの。刺突文の種類により細分できる。
- i 半截竹管による爪形文を施すもの（20・300～304）
 - ii 半截竹管による爪形文と棒状工具による○形の刺突文を施すもの（305）
 - iii 棒状工具による○形の刺突文を施すもの（306～309）
 - iv 細い棒状工具による刺突文を施すもの（310）
 - v 輪切りの竹管による◎形の刺突文を施すもの（105・311～314）
 - vi 右斜め下から刺突した三角形の彫去状の刺突文を連続して施すもの（315）
 - vii 右斜め横から刺突した三角形形状の刺突文を連続して施すもの（316）
 - viii 口縁部に刺突を施すもの（317）
- ウ 沈線文（凹線+平行沈線）を施すもの（38・318～322）
- エ 沈線文（凹線+平行沈線）を施し、口縁部に大形降帯を貼付するもの（323）
- オ 沈線文（凹線+平行沈線）を施し、頸部に隆帯を貼付するもの（324）
- カ 沈線文（凹線+平行沈線）+刺突文を施すもの（325）
- キ 沈線文（凹線）を施し、口縁部に縦位の降帯（2本対？）を貼付するもの（328～329）
- b. 半截竹管の腹面（内面）を用いて、押し引き沈線を引くもの（326～327）
- c. 半截竹管の腹面（内面）の末端または櫛歯状工具を用いて、複数条の細い平行沈線を引くもの
- ア 沈線文（平行沈線）を施すもの。直線的沈線と波状沈線（波状）により文様を構成するものである。
- i 平行な直線的沈線を引くもの（34・42・128・132・250・330～332）
 - ii 平行な鋸歯状沈線をひくもの（22・51・86・333～342・356）
 - iii 山形状沈線をひくもの（74・343～346）
 - iv 半円状沈線をひくもの（80・347～351・353・354・357・358）
- イ 沈線文（凹線+平行沈線）を施すもの（352）
- ウ 沈線文（平行沈線）を施し、口縁部に隆帯を添付し肥厚するもの（359～364）
- エ 沈線文（平行沈線）を施し、口縁部に刺突を伴う降帯を貼付するもの（366・367）
- オ 沈線文（平行沈線）を施し、頸部に刻みを伴う隆帯を貼付するもの（365・368・369）
- カ 沈線文（平行沈線）+刺突文を施すもの（33・370～374・376）
- キ 沈線文（平行沈線）+口唇部指頭圧痕・刻みを施すもの（375・377）
- ク 沈線文（平行沈線）+原体側面圧痕を施すもの（378）
- d. 粘土紐を貼付するもの
- ア 口縁上端部に細い粘土紐を山形に貼付するもの（379）

- イ 細い粘土紐を波状・梯子状等に貼付するもの (380~385)
 - ウ 口縁部に太い粘土紐を装飾的に貼付するもの (130・131・386・387)
 - e. 竹管(半截・輪切り)や棒状工具による刺突文を施すもの
 - ア 棒状工具による○形の刺突文を施すもの (388・389)
 - イ 細い棒状工具により、小さな○形の刺突文を施すもの (390~393)
 - ウ 半截竹管状工具による爪形文を重層的に施すもの (52・394)
 - エ 輪切り竹管状工具による◎形の刺突文を施すもの (395・396)
 - f. 原体側面圧痕文を施すもの (31・37・57・63・84・101・120・249・397~408)
 - g. 頸部に指頭状圧痕・刻み等を伴う隆帯を巡らすもの
 - ア 隆帯に指頭状圧痕を施すもの (30・60・64・81・146・409~421)
 - イ 隆帯を大きく挟り、浮き彫り状にするもの (100・103・116・178・182・422~425)
 - ウ 隆帯に斜位の刻みを施すもの (134・147・426・427)
 - h. 口唇部に指頭圧痕・刻み等を施すもの
 - ア 口唇部に隆帯+刻みを有するもの (90・428)
 - イ 口唇部に指頭圧痕を施すもの (177・180・429~434)
 - ウ 口唇部がやや肥厚・外傾して、指頭状圧痕・刺突が施されるもの (435~441)
 - エ 口唇部に地文が施されるもの (442・443)
 - オ 口唇部に瘤状の貼付がなされるもの (444)
 - カ 口唇部に山形状沈線が引かれるもの (445)
 - キ 口唇に刻み・窪みを有するもの (102・446~448)
 - i. 胴部に半截竹管による凹線・平行沈線文が施されるもの (466~489).
- ② 地文のみが施されるもの。
- 綾織文 (251~256・490~497)、単軸絡条体による摺糸文 (246・248・257~260・498~502)、多軸絡条体による摺糸文 (503~505)、羽状縄文 (506~507)、縦縄文 (508)、斜縄文 (261~266・269・509~511)、無文 (267・268・270~277) 等がある。
- 5-B類 底部破片。無文 (512~515)、木葉痕 (516~517)、網代痕 (188・518~520)、地文 (521~523)、ナデ調整 (524~526) 等が見られる。

第Ⅲ群 後期に属する土器 (278)

攪乱層(現道周辺の盛土層)から出土した1点のみである。278は、壺形土器の口縁部である。口唇部・口縁部文様帯・頸部に横位の沈線により区画され、口縁部文様帯は無文化されている。本来は本遺跡に伴わない、他所からの流入物であった可能性が高い。

(2) 土製品 (第27・87図、写真図版31・66)

遺構内1点、遺構外3点、計4点が出土した (126・527~529)。観察表は割愛する。遺構内出土は126のみで、3号住居跡の覆土からの出土である。長さ11.4cm、幅6.2cm、厚さ3.3cmを測る三角柱状で、胎土には若干の粗砂を含んでいる。表面には調整は見られず、一種の焼成粘土塊ではないかと思われる。三角壺形土製品の欠損品の可能性もあるが判然としない。遺構外出土のものは527~529の3点である。527は土製円盤で、直径5.2cmの略円形を呈する。断面はやや彎曲しており、深鉢形土器の胴部破片の転用ではないかと思われるが、表面が脆く摩滅しており地文の有無は確認できない。528は土製重飾品の一種(ま

たはその欠損品)と思われる。長さ3.8cm、幅4.7cmほどを測り、角の丸い三角形形状を呈する。縁辺付近には貫通孔1点を有し、胎上には粗砂を含んでいる。529は用途不明の土製品である。形状は不整な四角錐状で、表面に地文とも見える痕跡が僅かにあるが不明瞭である。長さは6.9cm、幅は3.5cmである。これらの土製品の所属時期は、土器の主体時期から推測して「第Ⅱ群」期(前期後葉～中期初頭)と思われる。

(3) 石器

出した石器類の登録点数は、遺構内・外を合計して2,622点を数えた。器種構成〔()内は点数〕は、石鏃(304)、石匙(191)、尖頭器(46)、石錐(25)、不定形石器〔掻削器、リクッチド・フレイク(Rフレ)〕(1,060)、抉入石器〔ノッチ〕(2)、楔形石器(1)、トランシェ様石器(1)、石匙(56)、打製石斧(18)、磨製石斧(12)、敲磨器類(241)、礫石錘(338)、礫器(5)、石核(残核)(330)、ユーティライズド・フレイク(Uフレ)、フレイク、チップである。Uフレ、フレイク、チップについては、時間的制約により一切登録していない。これらの石器類のうち計451点を掲載した。石核、Uフレ、フレイク、チップは掲載していない。また、いわゆる掻削器・Rフレは「不定形石器」、磨石・凹石・敲石は「敲磨器類」としてそれぞれ一括した。本項では各器種の概要について述べ、個々の石器の観察事項は観察表に記載している。石質について、平成11年度の室内整理前半段階で登録できた石器については花園岩研究会の矢内・柳沢両氏に石材石質を鑑定していただいたが、それ以降の登録石器については鑑定を行っていない。よって、石材不明の資料が多々ある。なお、石器および石核・剥片の量に鑑みて、石器成品相互および石核・剥片類との接合関係があるものと思われるが、時間的な制約により接合は実施していない。なお、石皿・石棒・石柱については石製品に含めており、次項を参照されたい。

前述のとおり、層位的な区分が良好ではないため、出土した石器類の時的な分離は適わなかったが、その大部分が土器の主体時期である「第Ⅱ群」期(前期後葉～中期初頭)に概ね属するものと思われる。

石鏃(S1・4・5・35～40・93・119・120・126・139・148・157・159～213) 出土総数は304点で、遺構内出土は18点、遺構外出土が286点である。73点を掲載した。基部の形状により11種類に細分した(第88図)。明確な中茎(柄)を有する有茎鏃は2点とごく少なく、無茎鏃が卓越する。

I 中茎(柄)がなく基部が抉入するもの〔無茎凹基鏃〕

- I-a類 基部に直線的な抉入のあるもの(S1・4・119・120・159～168)
- I-b類 基部の抉入両端が脚状となるもの(S5・36・139・148・170～182)
- I-c類 基部の抉入が浅く、ほぼ平坦な基部両端に小髯状突起が付くもの(S183～185)
- I-d類 鏃身両側縁が段をなし、基部に抉りのあるもの(S186・187)
- I-e類 基部抉入が深く、ハート形ないしはブーメラン形をなすもの(S37・188・189)
- I-f類 細く鋭い鏃身に脚状の抉入基部がつくもの(S190)
- I-g類 基部の抉入が緩やかな弧状をなすもの(S157・191～198)

II 中茎がなく基部が平坦なもの〔無茎平基鏃〕

- II-a類 基部が平坦なもの(S35・93・126・199～206)
- II-b類 基部が平坦で、鏃身両側縁に抉入のあるもの(S207)

III 中茎を有するもの〔有茎鏃〕

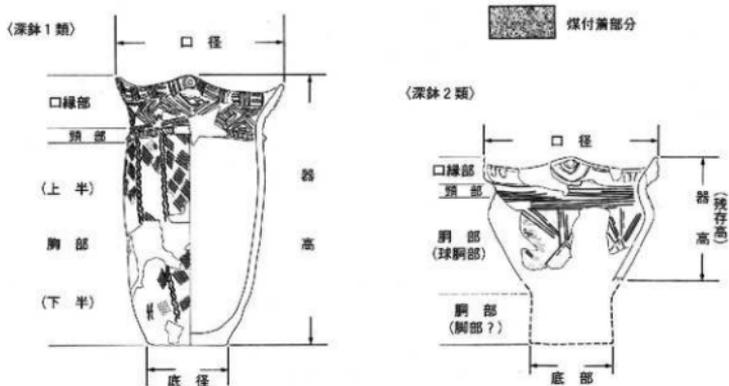
- III-a類 基部が突出するもの〔突基有茎鏃〕(S39・208)

IV 中茎の作り出しが不明瞭なもの

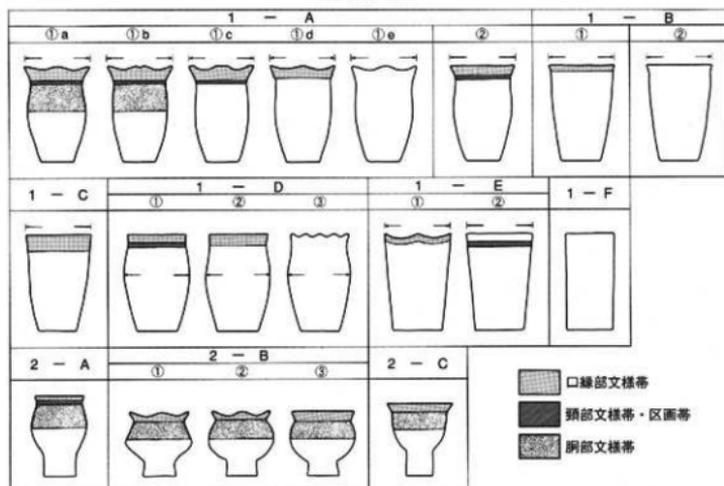
- IV-a類 基部が尖るもの〔尖基鏃〕(S40・209～211)

凡例（2）——土器

※本書での各部位の呼称は図示したとおり。

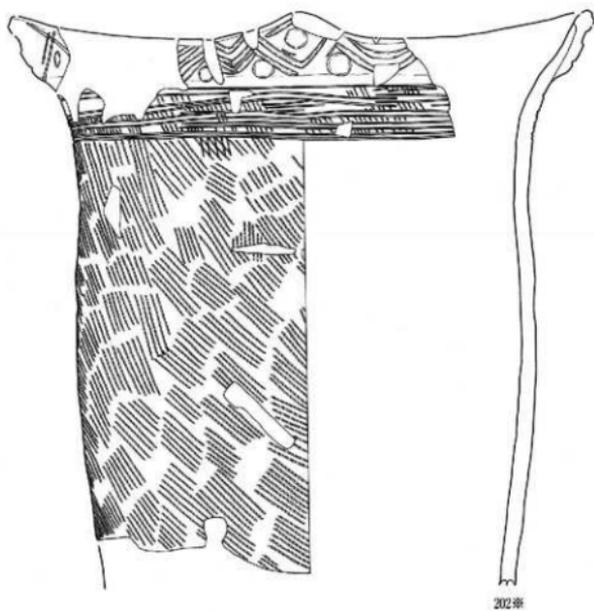


器形分類概念図

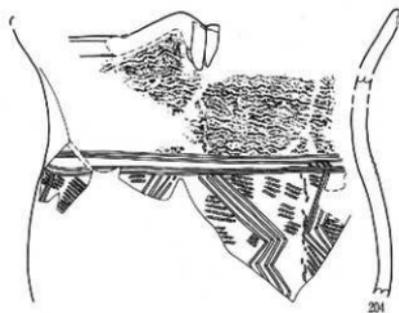


S=1/3

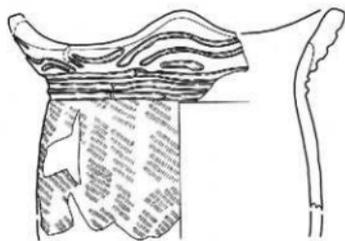
第57図 凡例（2）土器器形分類概念図



202 半



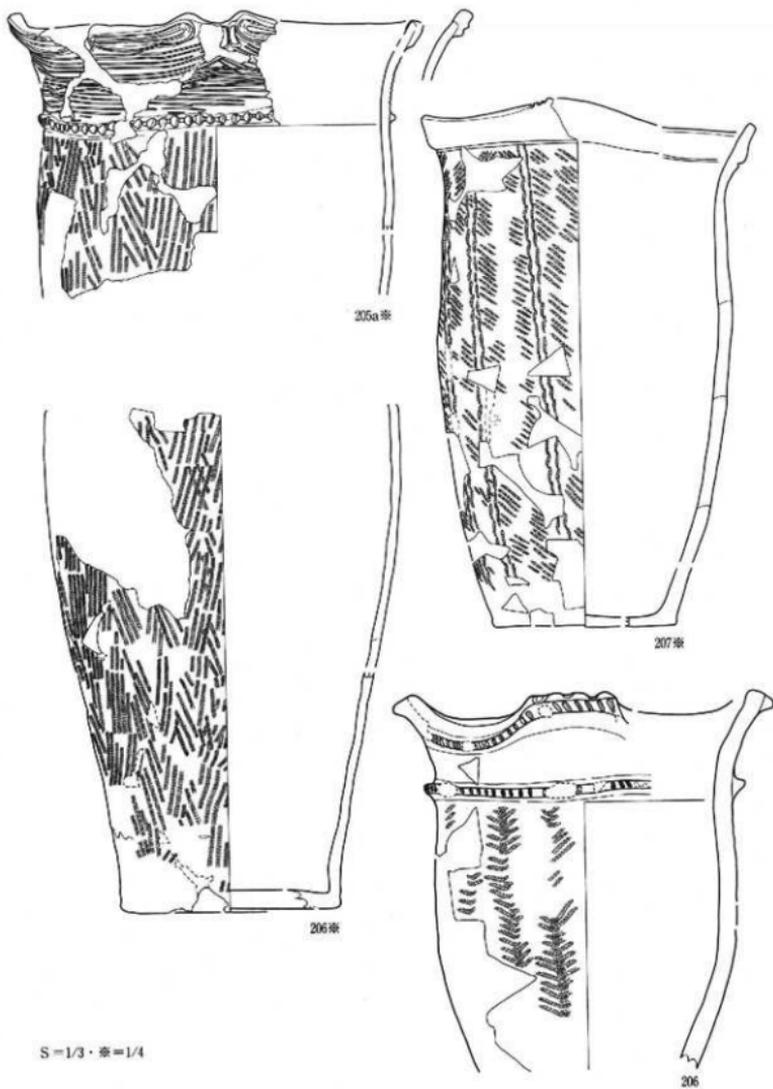
204



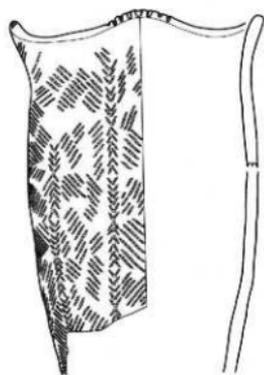
203

S=1/3・半=1/4

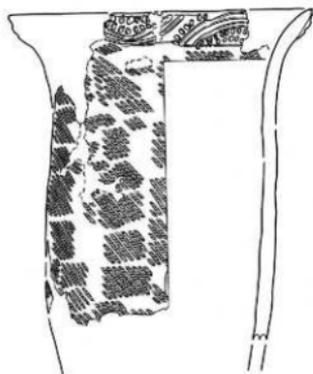
第58図 遺構外出土遺物 土器(1) 実測図



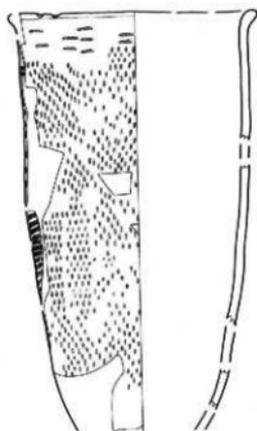
第59圖 遺構外出土遺物 土器(2) 実測図



208※

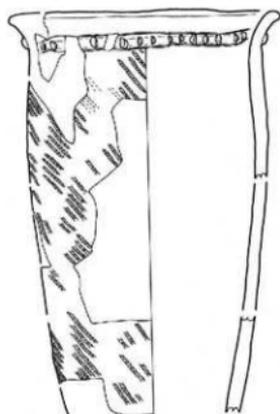


210

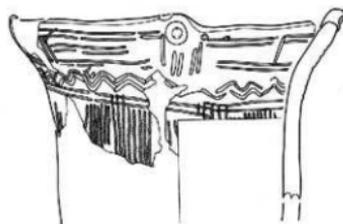


209※

S = 1/3 · ※ = 1/4

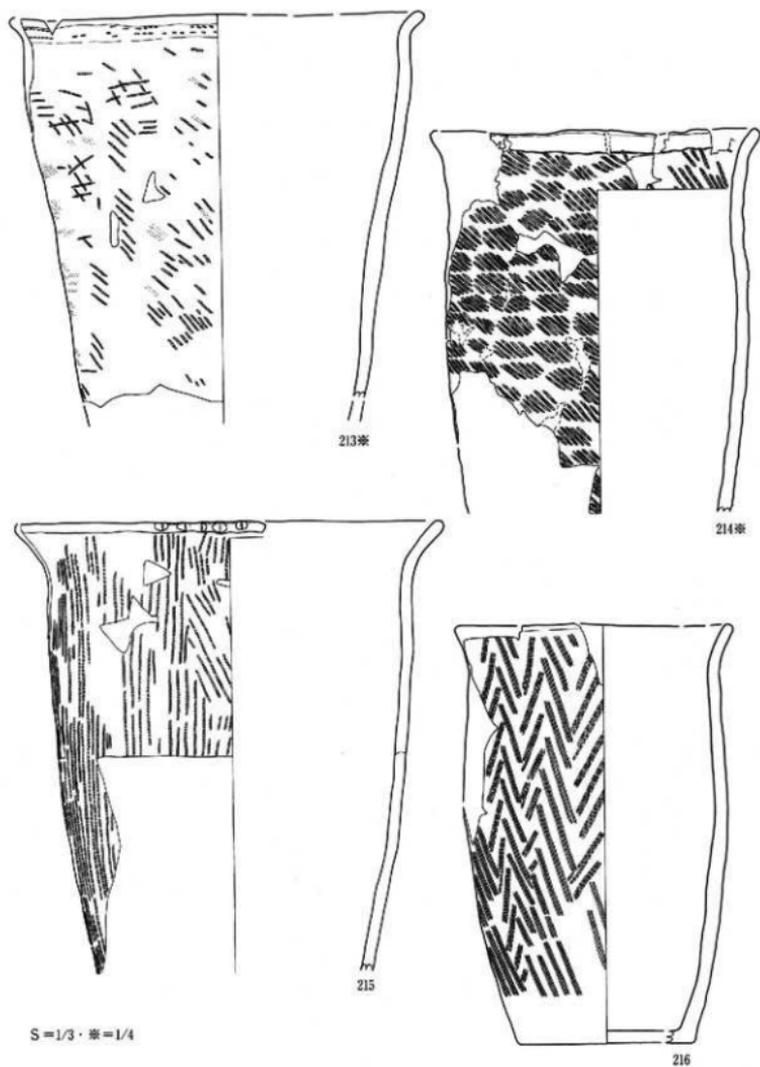


211※

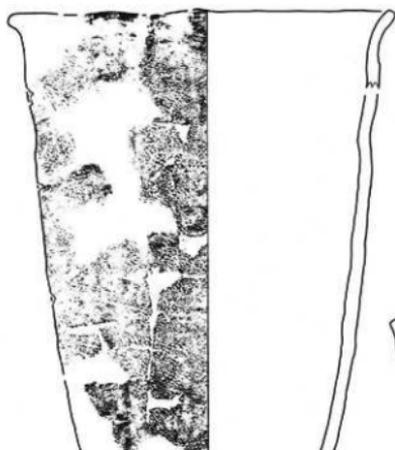


212

第60圖 遺構外出土遺物 土器(3)実測圖

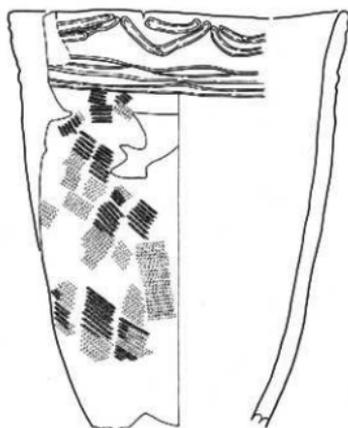
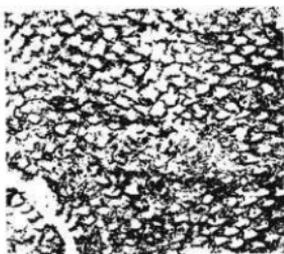


第61图 遺構外出土遺物 土器(4)実測図

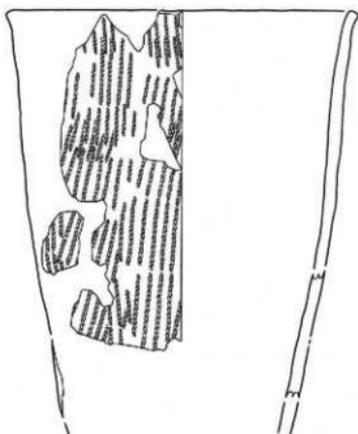


217※

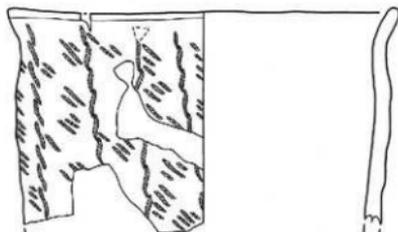
217 部分拡大図



220



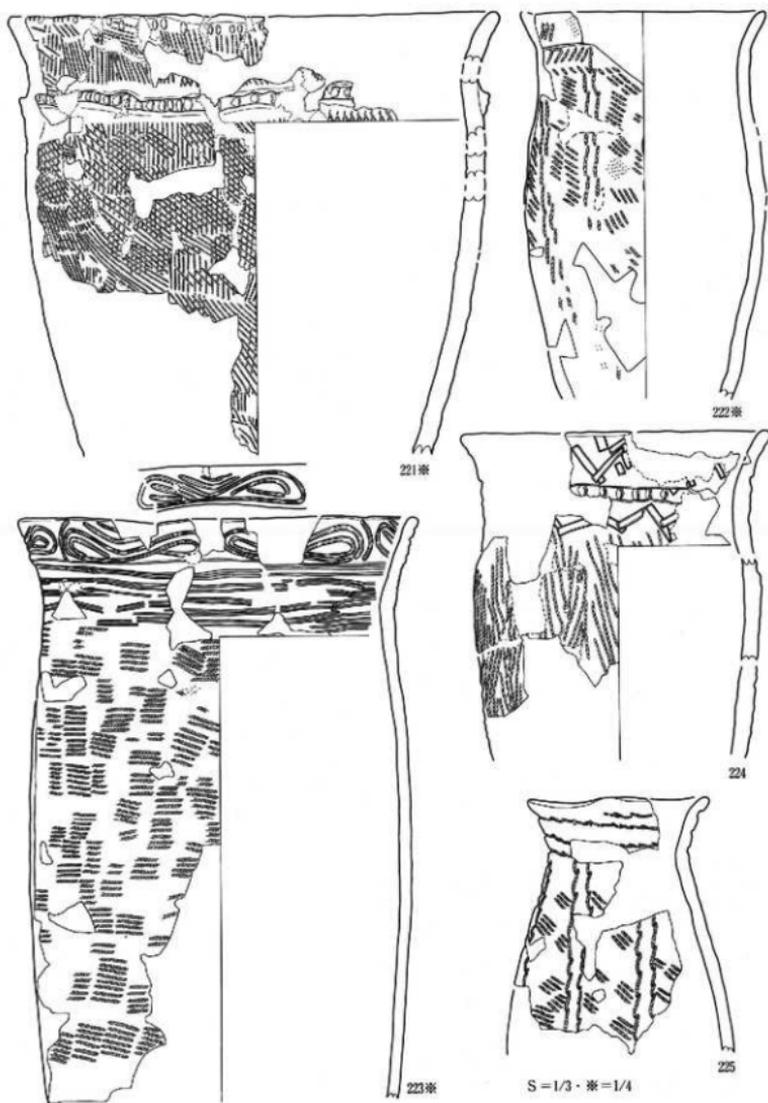
218



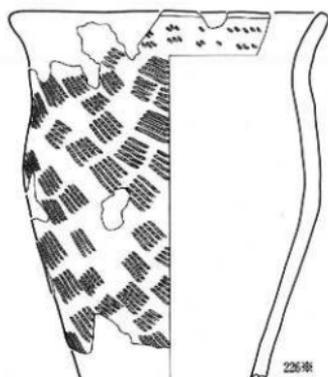
219

S=1/3・※=1/4

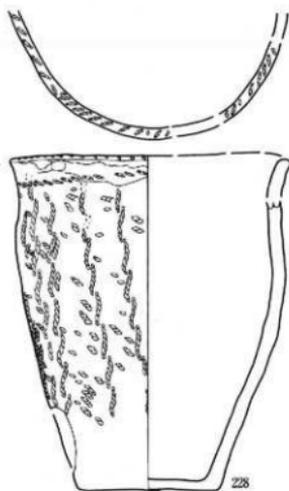
第62図 遺構外出土遺跡 土器(5)実測図



第63図 遺構外出土遺物 土器(6)実測図



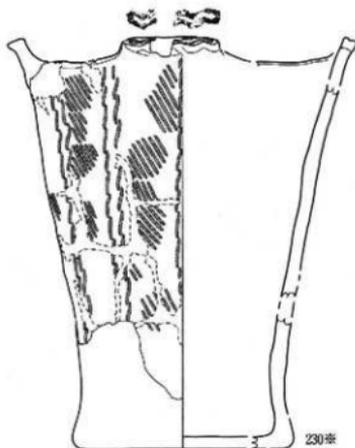
226 幸



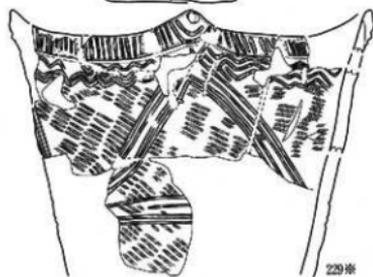
228



227 幸



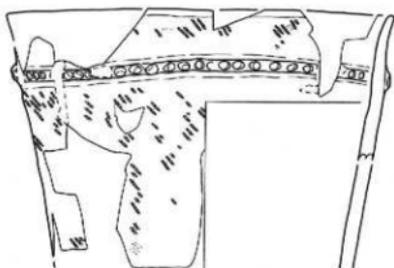
230 幸



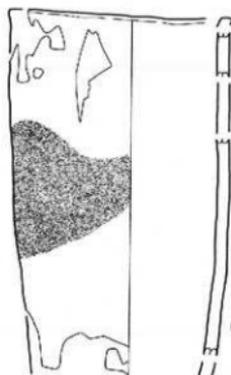
229 幸

S = 1/3 · 幸 = 1/4

第64图 遺構外出土遺物 土器(7) 実測図

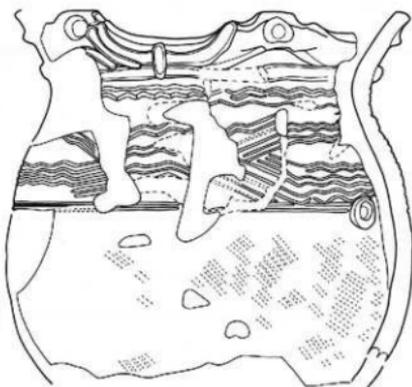


231

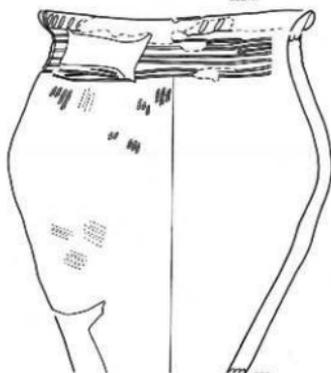


232 半

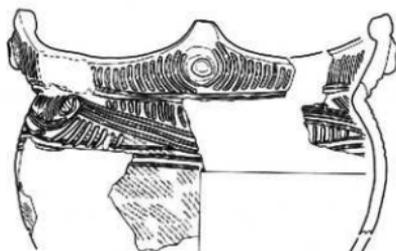
(トーン部分は
原寸着録)



234



233



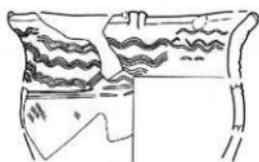
235

S=1/3・※=1/4

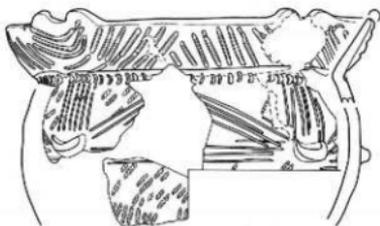
第65図 遺構外出土遺物 土器(8) 実測値



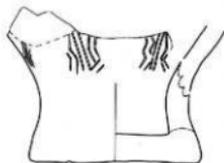
236



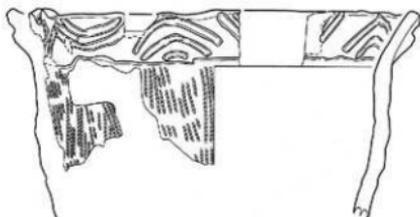
238



237



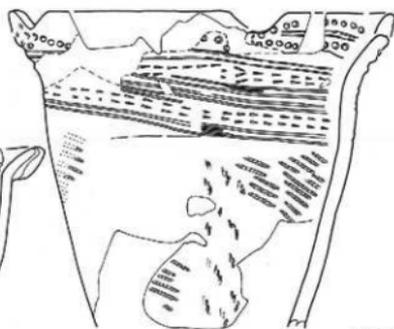
239



240



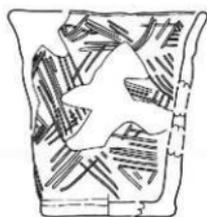
241



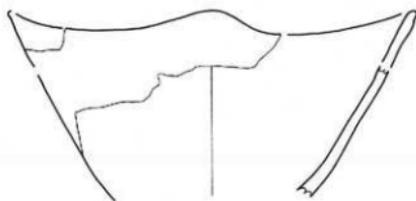
242

S=1/3

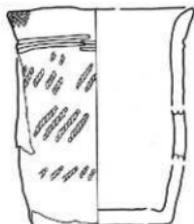
第66図 遺構外出土遺物 土器(9)実測図



243



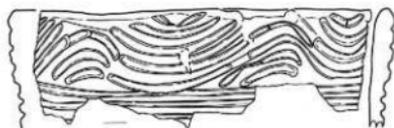
245



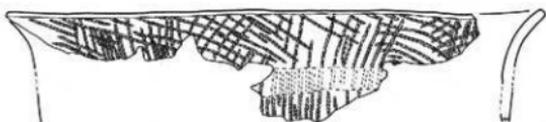
244



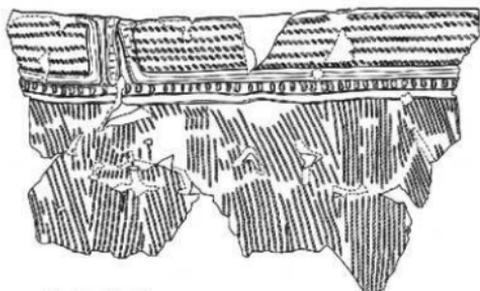
246



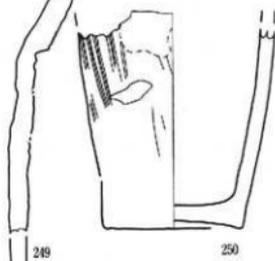
247



248



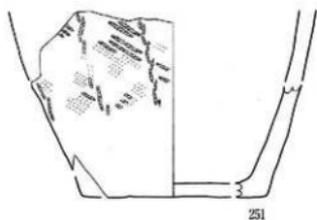
S=1/3 · 壘=1/4



249

250

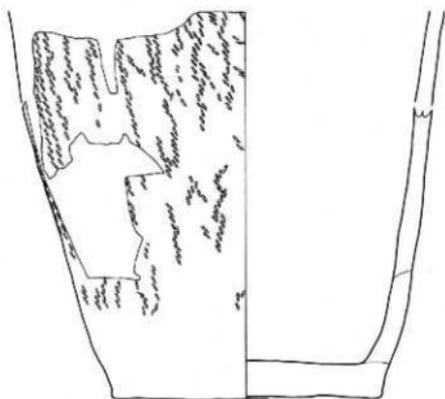
第67圖 遺構外出土遺物 土器 (10) 実測値



251



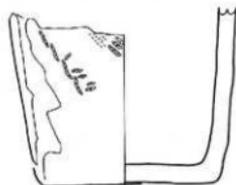
252



253



254

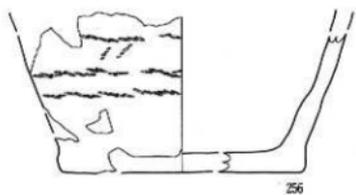


255

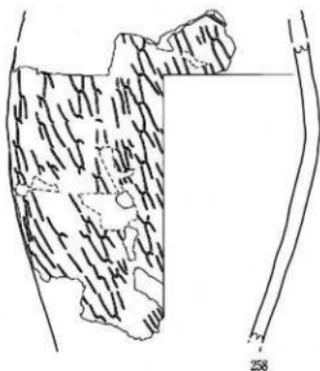


S=1/3

第68圖 遺構外出土遺物 土器 (11) 実測図



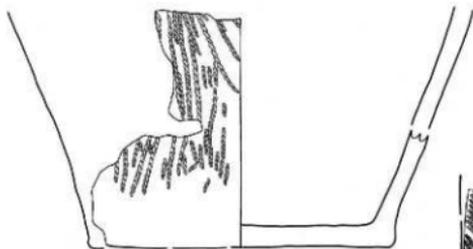
256



258



257



259



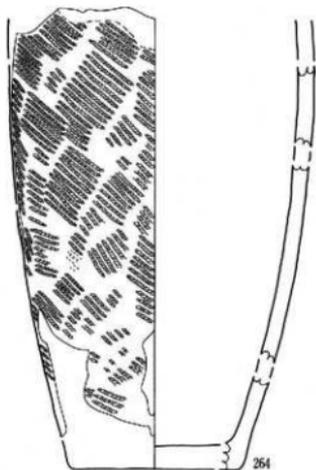
260



261



262



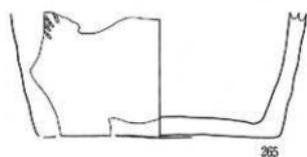
264



263

S=1/3

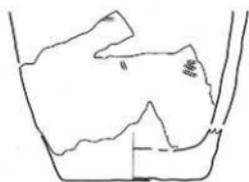
第69圖 遺構外出土遺物 土器 (12) 実測図



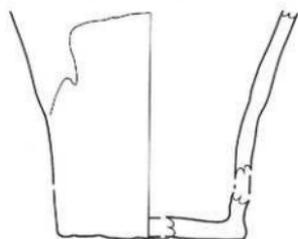
265



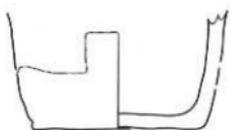
269



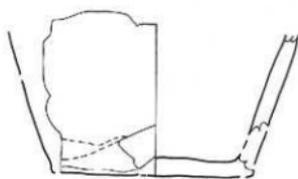
266



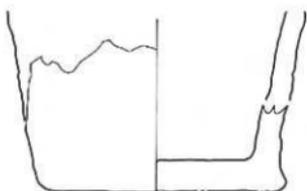
270



267



271



268



272



273



275



277



274



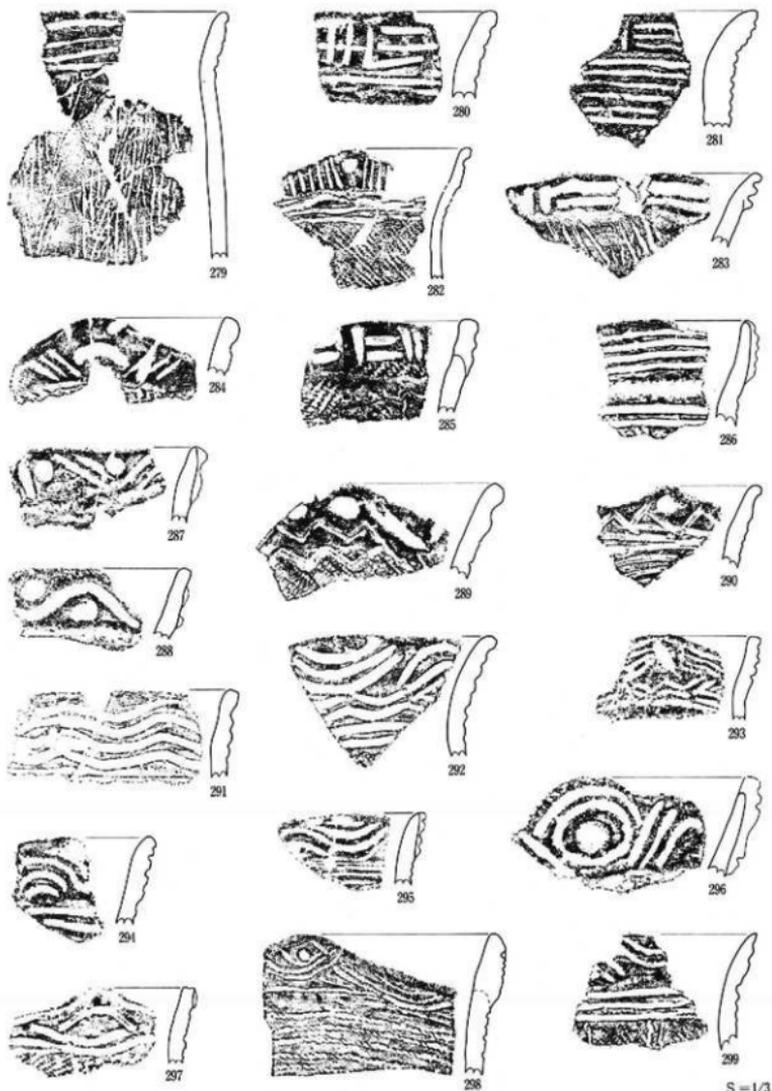
276



278

S=1/3

第70圖 遺構外出土遺物 土器 (13) 実測圖



S-1/3

第71圖 遼東外出土遺物 土器 (14) 拓影圖

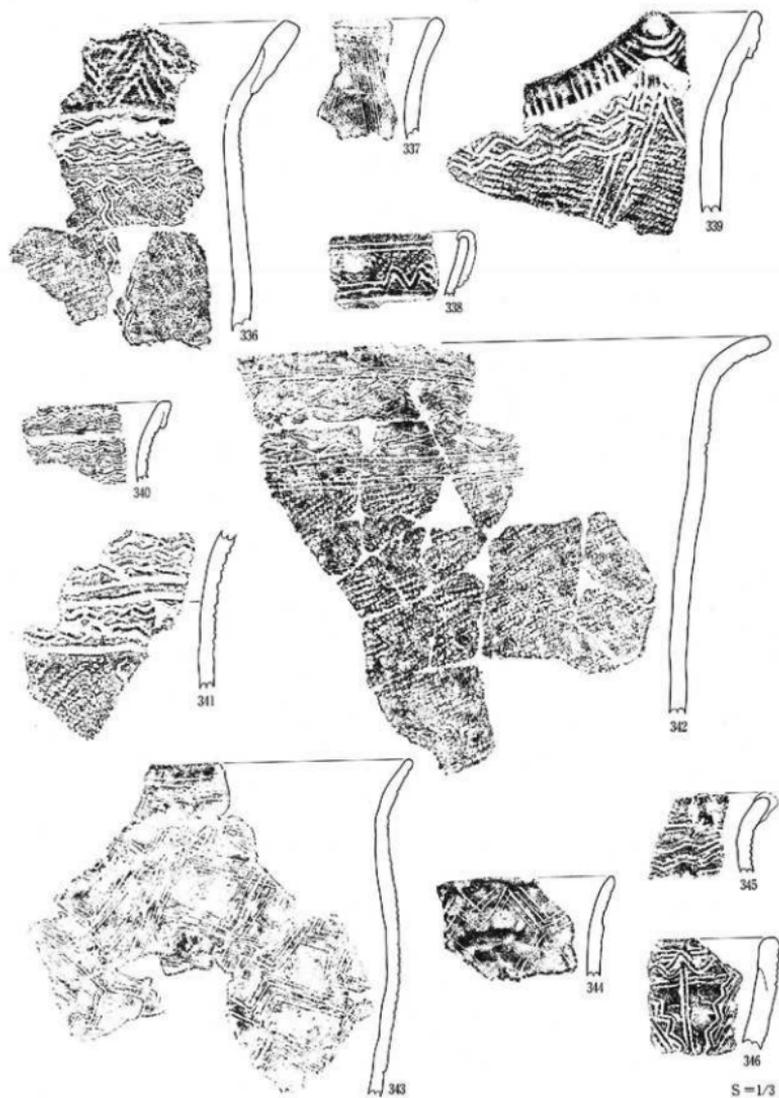


第72圖 遺構外出土遺物 土器 (15) 拓影圖



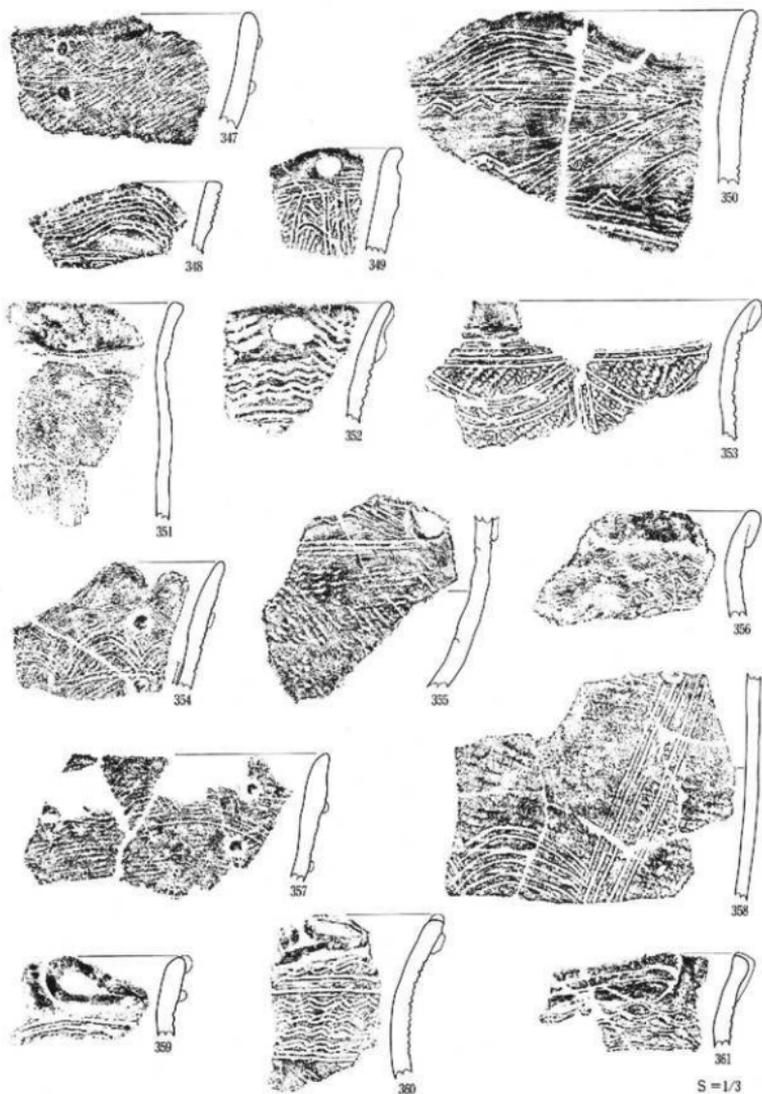
S=1/3

第73圖 遺構外出土遺物 土器 (16) 拓影圖

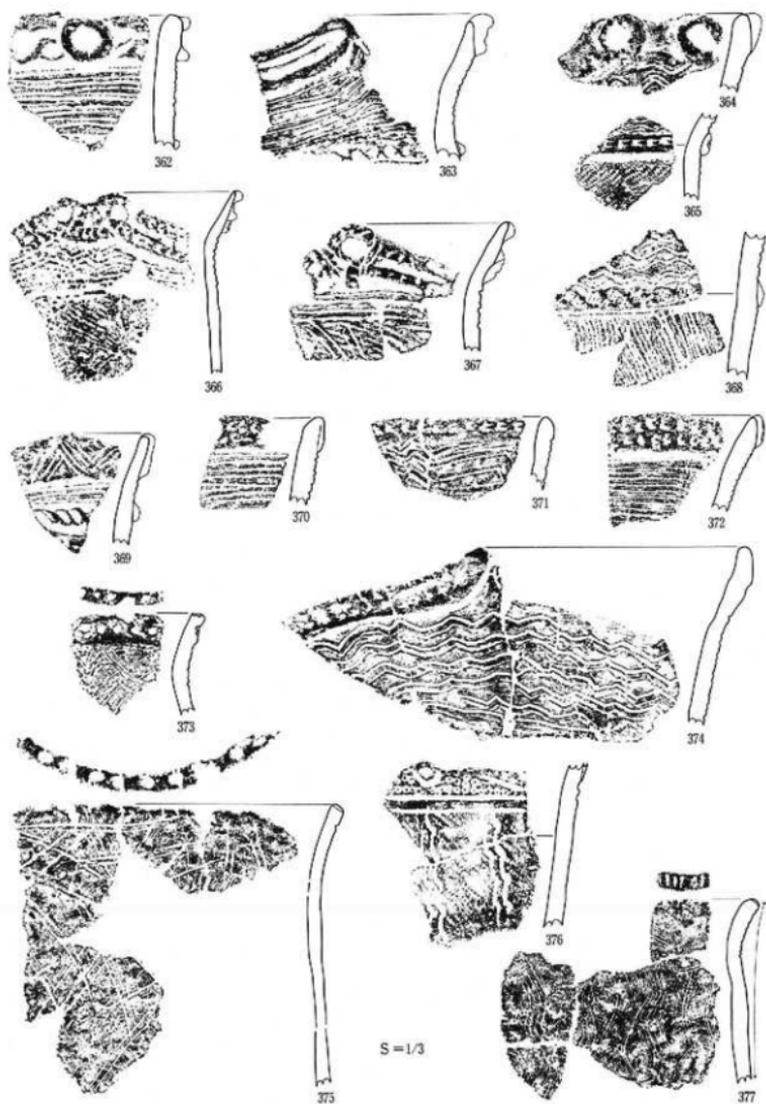


第74圖 遠構外出土遺物 土器 (17) 拓影圖

S=1/3



第75图 遼城外出土遺物 土器 (18) 拓影圖

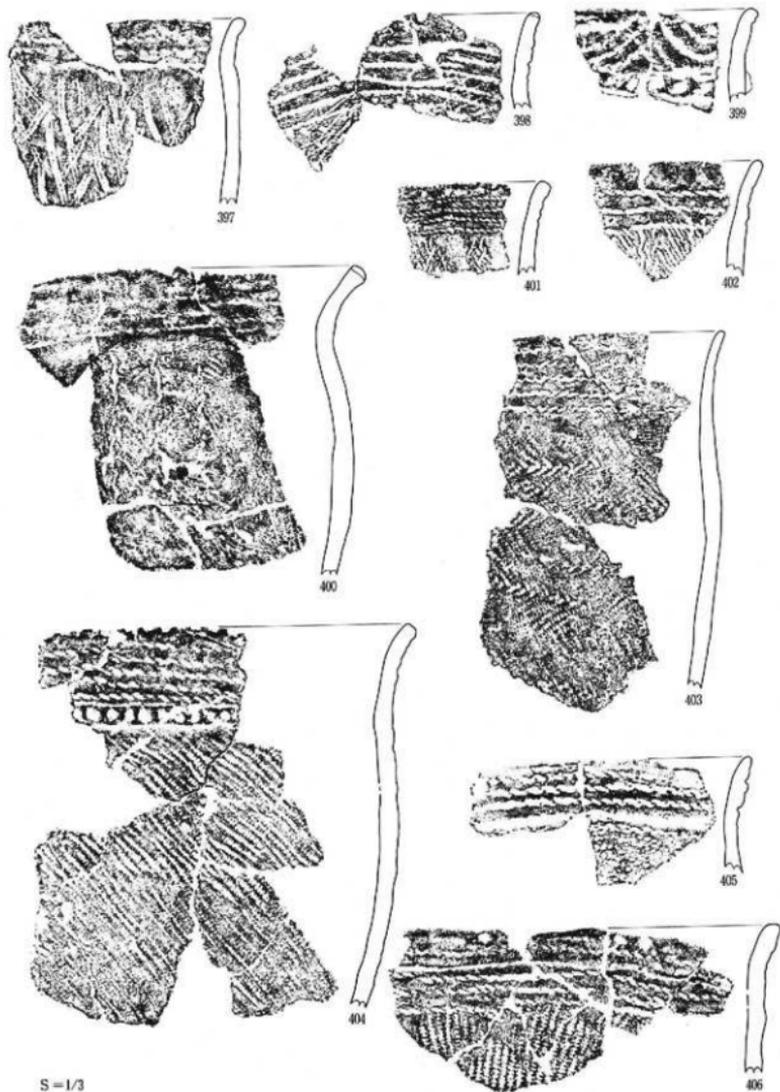


第76圖 遺構外出土遺物 土器 (19) 拓影圖

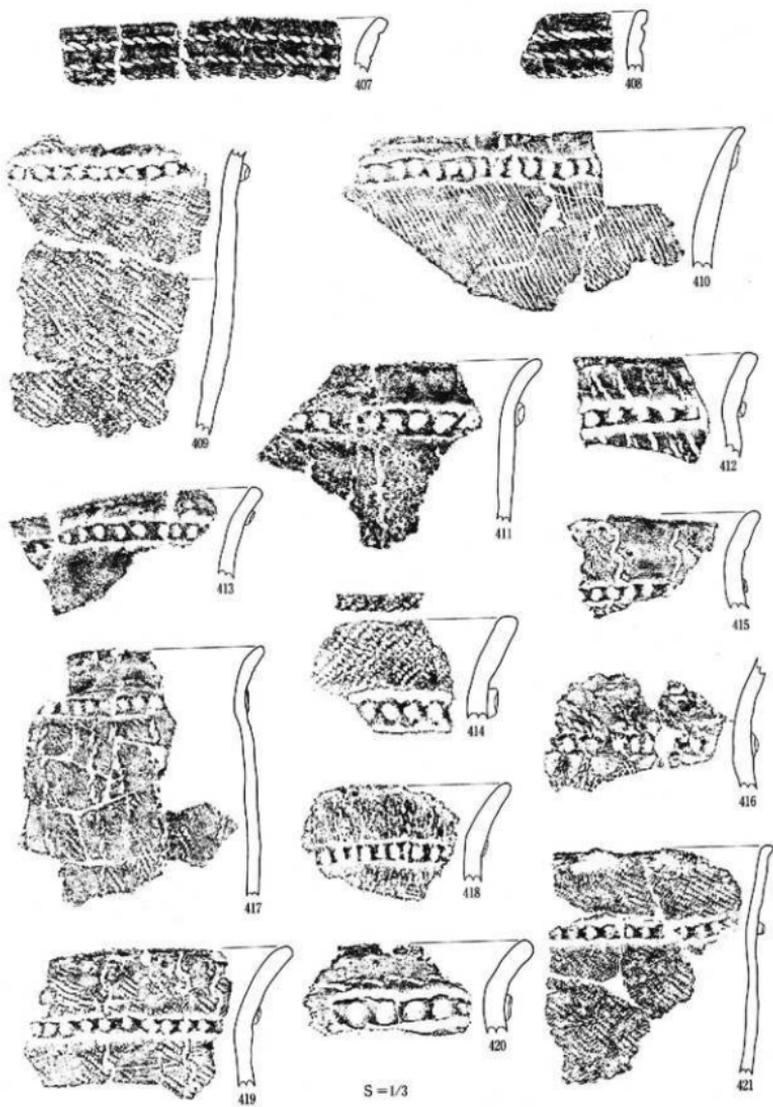


S-1/3

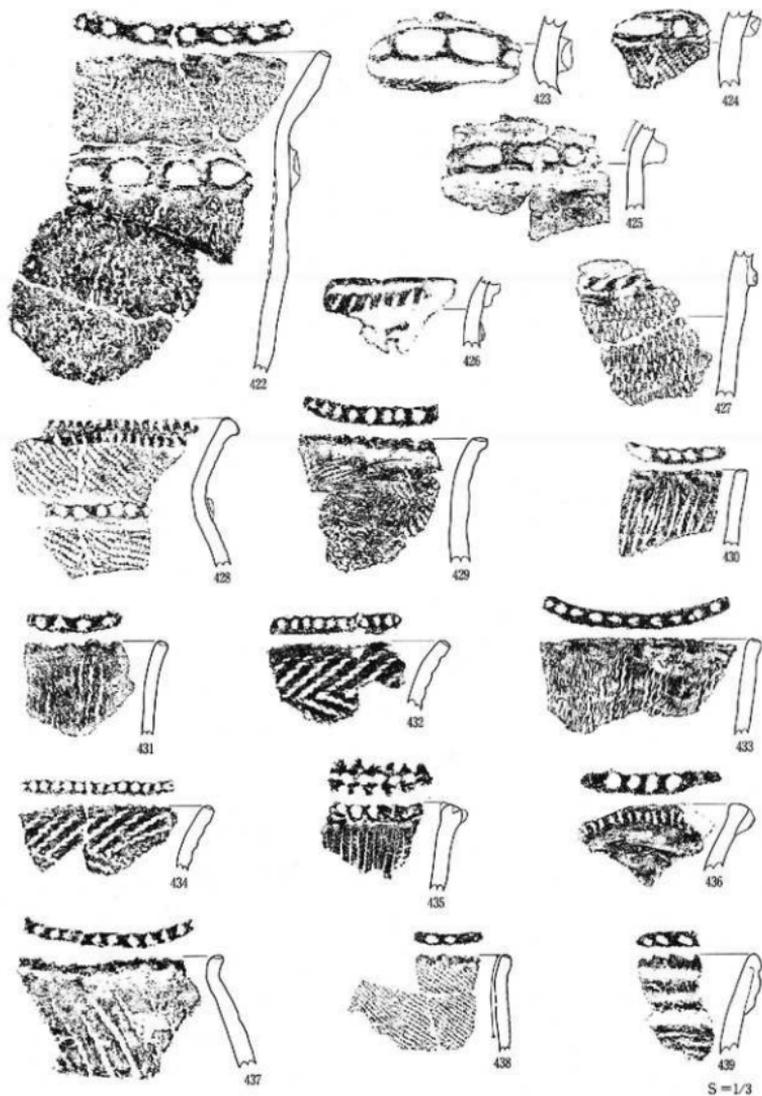
第77图 濠沟外出土遗物 土器 (20) 拓影图



第78圖 遠構外出土遺物 土器 (21) 拓影圖

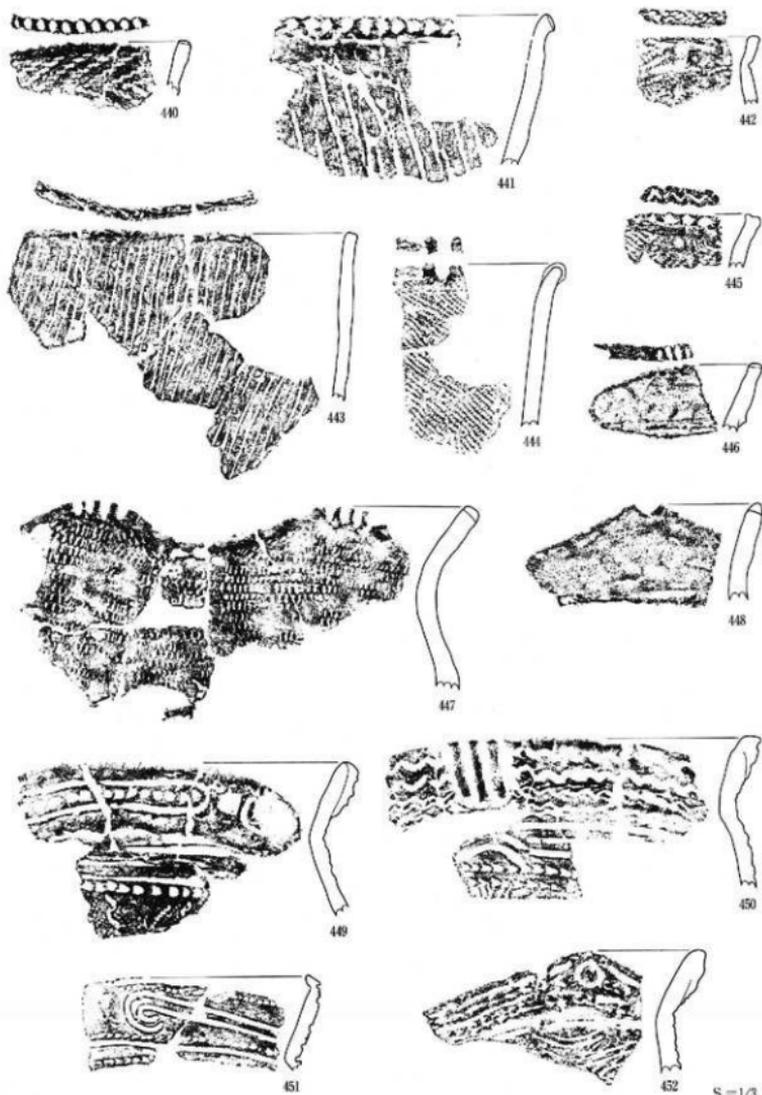


第79圖 遼構外出土遺物 土器 (22) 拓影圖



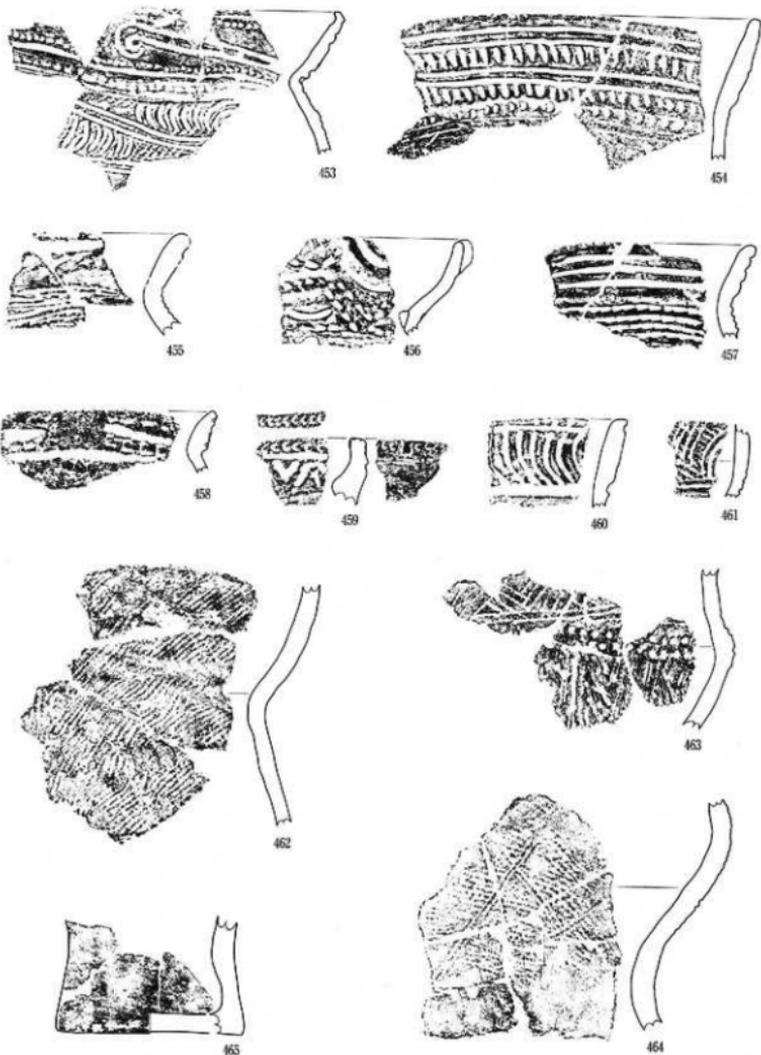
S = 1/3

第80圖 遺構外出土遺物 土器 (23) 拓影圖



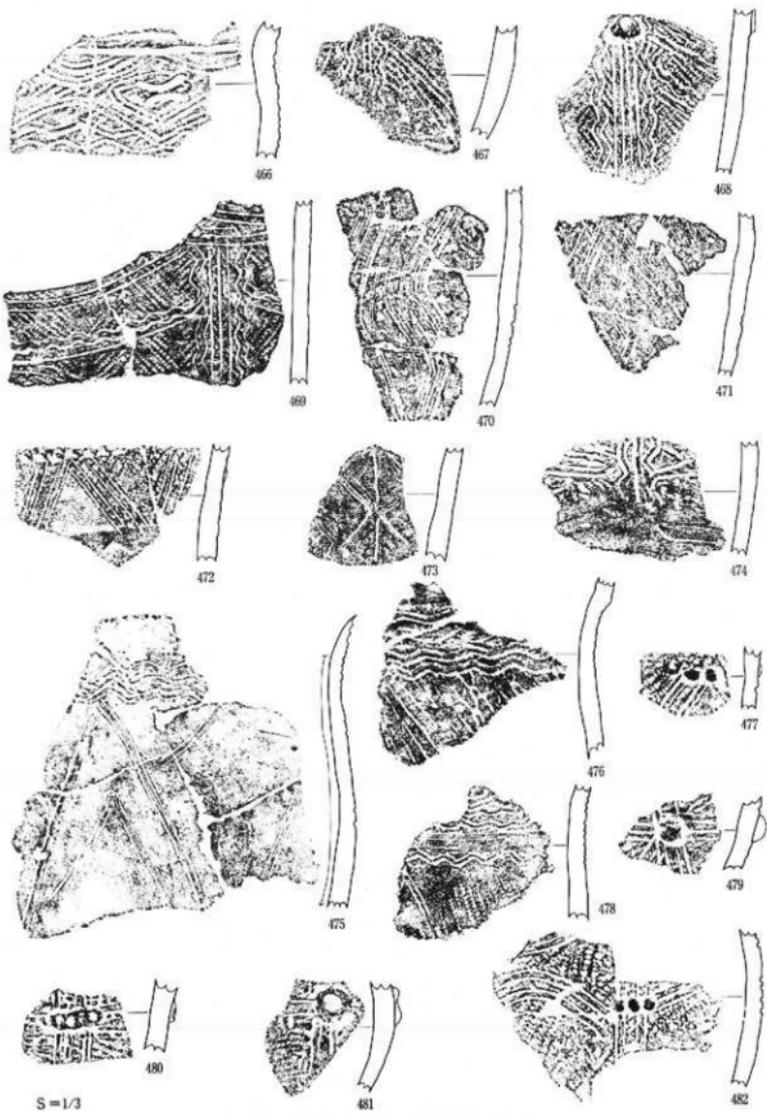
S=1/3

第81圖 遺構外出土遺物 土器(24) 拓影圖



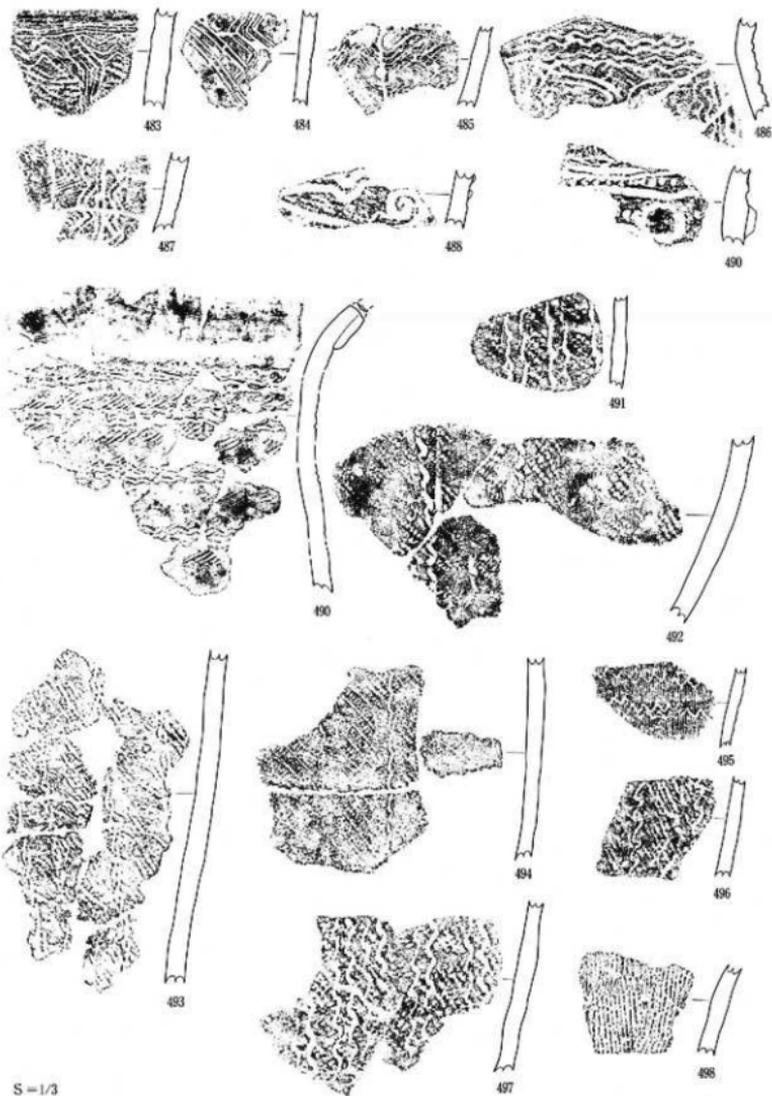
S-1/3

第82圖 遺構外出土遺物 土器 (25) 拓影圖

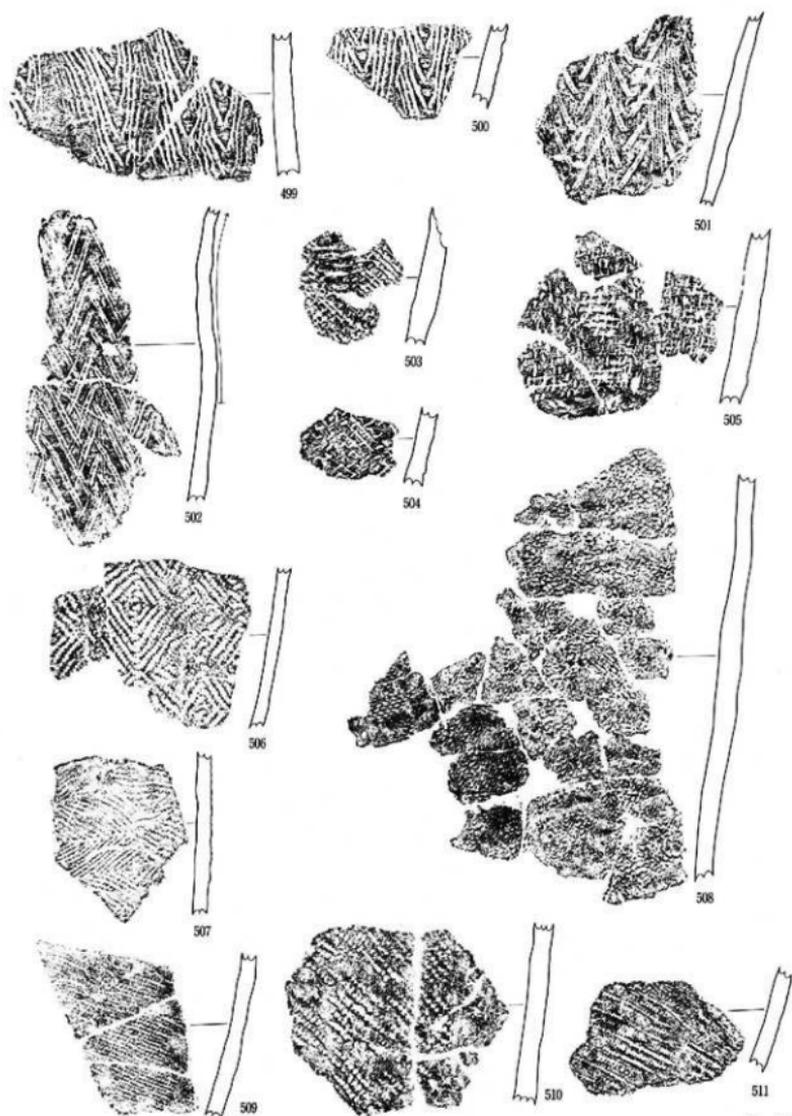


S=1/3

第83圖 遺構外出土遺物 土器 (26) 拓影圖

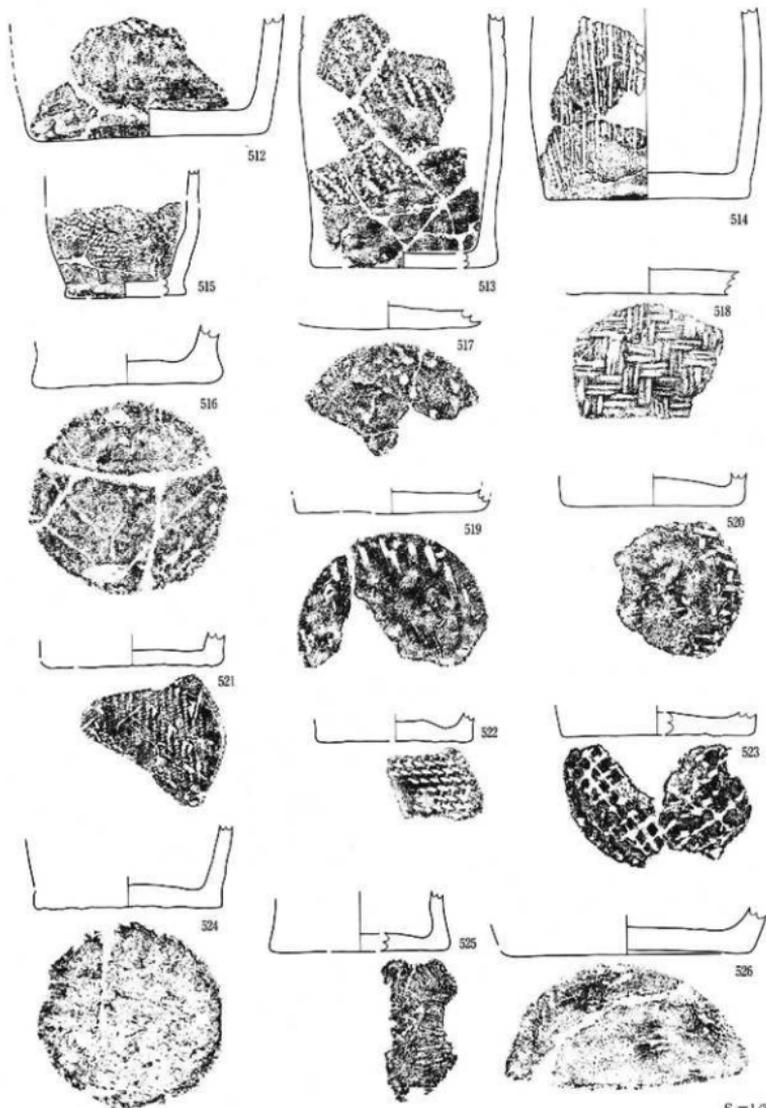


第84圖 遺構外出土遺物 土器 (27) 拓影圖



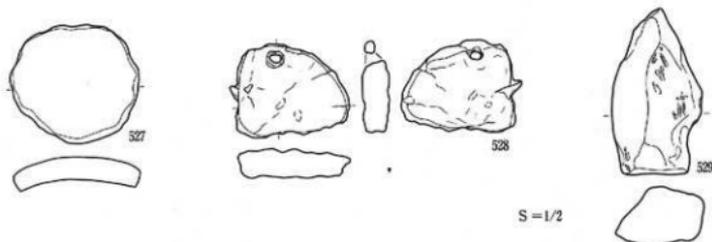
第85圖 遺構外出土遺物 土器 (28) 拓影圖

S = 1/3



S=1/3

第86圖 遺構外出土遺物 土器 (29) 拓影圖



第87図 遺構外出土遺物 土製品

IV-b類 基部が丸みを帯びるもの〔円基礎〕(S38・212・213)

V 欠損品か未成品のため、形状が不明なもの(S140)

石匙(S2・6・7・41~47・94・98・99・147・149・214~246) 撮み状の小突起をもち、刃部が作出されている石器を一括した。191点出土した。遺構内出土16点(9.3%)、遺構外出土175点(90.7%)である。うち、48点掲載した。形態について、次の7種類に分類した(第88図)。

I 縦形のもの

I-a類 体部2側縁に主要刃部をもち、撮み軸と刃部軸がほぼ平行するもの(S7・98・214~227)

I-b類 体部2側縁に主要刃部をもち、撮み軸と刃部軸が斜交するもの(S2・41・43・47・147・228~230)

II 横形のもの

II-a類 体部の底辺に主要刃部をもち、撮み軸と刃部軸がほぼ直交するもの(S6・231~237)

II-b類 体部の底辺に主要刃部をもち、撮み軸と刃部軸がやや斜交するもの(S94・238~240)

III 尖頭器状のもの(S241・242)

体部が両面加工により細く鋭い尖頭器状をなすもので、いわゆる「有撮石器」(秋田県教委1988)と称されるものである。撮みを有する点で石匙に分類されるものであるが、形態から見ると、通常の石匙のような「切る」用途に適さず、刺突具的な使用が想定される。S241は腹面に1次剥離面を部分的に残す。

IV 特殊な形のもの(S42・45・99・149・243~246)

4点掲載した。小形で、釣り針状・三叉状等の特殊な形状をなすもの。S42・45・99・149・243~245は小形石匙である。形状および刃部の在り方から、実用品とは思われない。S246は、体部が楕円形状を呈しており、体部背面側縁の3/4程度に刃部調整が施される。

V 欠損品または未成品であるため、全体の形状が不明なもの。掲載していない。

尖頭器(S8・95・121・247~252) 遺構内4点、遺構外42点出土している。9点掲載した。細分していない。

石鏃(S253~259) 25点出土しており、すべて遺構外出土である。8点を掲載した。形態について、次の6種類に分類した(第89図)。

I 撮み部をもち、機能部(体部)が長く太い棒状をなすもの(S253・254)

II 撮み部をもち、機能部がIに比して短くやや細いもの(S255・256)

III 小形で撮み部をもち、独結杵状のもの(S257)

IV 素材剥片の形状を利用して、一部分に小形の尖端部を作り出しているもの(S258)

- V 握み部をもたず、全体の形状が尖頭器状をなすもの。(S259)
- VI 欠損品または未成品であるため、全体の形状が不明なもの。掲載していない。
- 不定形石器 (S3・9~15・16~19・49~66・96・97・101~107・122~125・127~132・141・142・144・150~153・158・260~326) 定形的な形状を持たず、二次加工によって刃部を作り出している石器を一括した。支脈としては、いわゆる搔器・削器・リタツチド=フレイクを一括して扱っている。遺構内57点、遺構外1,003点、計1,060点出土した。124点掲載している。形態から4つに細分した(第89図)。
- I 剥片末端または側縁に刃部を作り出すもの (S3・10・11・13~18・49・51・52・54~62・64~66・96・97・101~107・122~125・127~132・141・142・144・150~153・158・260~264・270~294)
- II 「く」字状や靴筒形の剥片の縁辺に刃部を作り出すもの (S265~268)
- III 棒状の素材の両縁辺に刃部を作り出すもの (S19・295~317)
尖頭器状に類似するが、先端部分が鈍く、両側縁に鈍い刃部調整が見られるものである。
- IV 楕円形(貝殻状)剥片の縁辺に刃部を作り出すもの (S12・50・53・318・319)
- V 筒状剥片の縁辺に刃部を作り出すもの (S9・63・320~326)
石筥に類似するが、断面形や刃部の在り方が異なる点で不定形に分類されるものである。
- 袂入石器 (S327~328) 刃部の一部に袂入部が見られるもので、出土した2点を掲載した。S328の袂入部は使用により摩滅している。
- トランシェ擦石器 (S329) 1点のみ遺構外で出土した。石筥に類似するが、楕形剥片を素材として鋭利な1次剥離の縁辺を刃部としていることから本類とした。刃部は使用によると思われる刃割れが認められる。
- ピエス・エスキュー (S330) 1点のみ遺構外で出土した。小形で、両縁辺にバイポーラーテクニックによる階段状の剥離を有する楔形の石器である。
- 石筥 (S331~341) 55点出土した。遺構内1点、遺構外54点のうち、11点を掲載した。細分していない。打製石斧との区分が曖昧なものがあり、打製石斧とすべきものもあるかと思われる。
- 磨製石斧 (S342~348) 遺構外で12点出土した。8点掲載している。凝灰岩・閃緑岩を素材とし、全面に整形加工時の細かな擦痕が見られ、器表面は滑らかである。S345は振切り技法を用いたものではないかと思われる。欠損部位を見ると、基部2点(S342・344)、刃部2点(S346・347)である。また2点(S345・348)で刃部の片減りが認められ、とりわけS345では著しい。使用により鈍化(欠損?)した刃部を再生した結果であろう。
- 打製石斧 (S48・100・349~358) 遺構内からは2点、遺構外では16点、合計18点が出土した。12点掲載している。
- 環状石斧 (S359) 遺構外出土の1点のみである。残存部分は2/5程度であり、全体の形状は詳細不明であるが、ドーナツ形を呈していたものと思われる。閃緑岩系のやや軟質の石材を使用しており、表面は摩滅して使用痕は判然としない。
- 石鏃 (S360) 掲載した1点のみ出土した。石材は軟質のリバライトで、全体的に摩滅している。特に刃部は摩滅により鈍化しており、使用によるものと思われる。
- 敲磨器類 (S20~26・67~77・108~111・133・134・145・361~411)
S361~411。自然礫の一部に磨り痕・敲打痕・凹み等を有するものであり、いわゆる磨石・敲石・凹石・特殊磨石・半円状扁平打製石器を一括した形となっている。241点出土した。遺構内24点、遺構外217点中、

76点を掲載した。形状から細分した（第89図）。

I類 断面が円形ないしは楕円形の礫を素材として、その平坦面ないしは側縁に使用痕をもつもの。

I-a類 磨り面のみをもつもの（磨石；S22・70・110・134・361～367）

I-b類 凹みのみをもつもの（凹石；S71・72・133・145・368～371・375）

I-c類 敲打痕のみをもつもの（敲石；S25・73・372・373）

I-d類 磨り面と凹みをもつもの（S24・69・108・109・376～378）

I-e類 磨り面と敲打痕を併せもつもの（S20・67・68・374・379～385）

I-f類 凹みと敲打痕を併せもつもの（S386～391）

I-g類 磨り面・凹み・敲打痕をすべてもつもの（S392～395）

II類 断面形が三角形ないしは扁平な礫を素材として、1ないしは複数の側縁に使用痕をもつもの。

II-a類 断面形が三角形を呈するもの（S23・396～398）

II-b類 断面形がやや楕円ぎみの形状を呈するもの（S21・399～403）

II-c類 断面形が扁平なもの（いわゆる「半円状扁平打製石器」；S26・74～77・111・404～411）

礫石錘（S27～32・78～91・112～115・118・135～137・143・146・154～156・412～451） 扁平礫の數箇所に打ち欠き認められるものである。338点出土し、遺構内出土35点、遺構外303点。73点掲載した。弱く不明瞭な磨り痕・敲打痕等を有するものがあり、敲磨器の転用品もあるものと思われる。素材となる礫の形状、打ち欠き位置により細分した（第89図）。

I 楕円形状の礫を素材とするもの

I-a類 楕円形状の礫を素材とし、長軸付近を打ち欠いたもの（S27～29・31・32・78・82・83・85～91・112～115・143・154～156・414～427）

I-b類 楕円形状の礫を素材として、短軸付近を打ち欠いたもの（S30・79・81・84・135・136・428～435）

I-c類 楕円形状の礫を素材とし、1乃至は3箇所以上の打ち欠きのあるもの（S80・436・437）

II 円形または不整形の礫を素材とするもの

II-a類 円形の礫を素材とし、2箇所を打ち欠いたもの（S118・137・146・438～443）

II-b類 円形の礫を素材とし、3箇所以上を打ち欠いたもの（S439）

II-c類 不整形の礫を素材とし、2箇所を打ち欠いたもの（S444～450）

II-d類 不整形の礫を素材とし、1乃至は3箇所以上を打ち欠いたもの（S451）

不掲載分を含めた礫石錘の重量分布は、50g以下（8点）、51～100g（97点）、101～150g（108点）、151～200g（54点）、201～250g（30点）、251～300g（9点）、301～350g（5点）、351～400g（2点）、451～500g（2点）、501～550g（1点）、551～600g（1点）、601～650g（1点）、651～700g（1点）、701～750g（1点）、990～1000g（1点）、1001g以上（3点）、である。最軽量37.7g、最重量1136.5g、平均値は155.5gである。分布傾向を見ると概ね350gまでが主体であり、最も分布が集中するのは100～150gの範囲である。1,000g以上の重いものも3点あるが、全体としてみれば僅少である。

礫器（S452～456） 出土した5点を掲載した。片面から加撃して片刃状の刃部を作り出すもの、両側から加撃して両刃状の刃部を作り出すものに大別される。前者に該当するものはS453・454、後者はS452・455・456である。何れも使用痕は明瞭ではない。S456は礫器としたが、石核とすべきかもしれない。

石核 330点出土した。掲載していない。

(4) 石製品

総数で46点が出土した。石剣の小破片を除いた45点を掲載している。石皿、石棒、石柱は本類に含めた。所屬時期は、石器類と同様、「第Ⅱ群」期（前期後葉～中期初頭）であると思われる。

球状耳飾（S138・457～459） A区土坑群周辺から4点出土している。うち、遺構内からの出土は1点のみである。S138・S459は、ともに片側の1/3～2/5程度が欠損しているが、逆三角形の楕円形状を呈すると推測される。断面形は扁平な楕円形状である。切目の軸線から若干ずれた位置に、両面から穿たれた貫通孔1個を有する。材質は「質の悪い」翡翠の可能性があるとの鑑定結果を受けた。S457は、片側の先端部が欠損しているが、平面形はやや楕円ぎみの円形、断面は長方形を呈している。材質は滑石である。459は、滑石製で1/2程の残存であるが、平面では長方形を呈すると推測される。断面形は楕円形である。

垂飾（S460～462） 遺構外で3点出土した。S460・461は小形で扁平な板状を呈し、末端付近に孔を有する。S462は1/2程度が欠損しており詳細不明であるが、円筒形で両端から穿った貫通孔を有するものと思われる。

耳栓状石製品？（S463） 1点出土した。円筒形を呈する石製品であり、いわゆる「耳栓」とは異なる形状ではあるが、ここでは仮に「耳栓」状としておく。全体に擦痕が認められる。

砥石（S464） 1点出土した。欠損により全体の形状は不明であるが、楕円形の小品で扁平な板状である。片面の中央付近に鋭利な溝状切れ込み複数条が集中している。凝灰岩系の軟質石材であり疑問が残るが、何らかの利器を砥いだ「砥石」的なものではないかと思われる。

円盤状石製品（S465） 1点出土した。扁平な楕円形の石板である。片面に穿孔を試みた痕跡があるが貫通しておらず、垂飾品の木成品かもしれない。

楔形石製品（S466） 1点出土した。方形の小さく扁平な板状である。全体に擦痕が認められ、片側末端側縁がやや鋭利に加工されており、楔様の石製品である。

石剣（S467～469） 5点出土し、小破片を除いた3点を掲載した。石材はいずれも粘板岩である。S467・468はいずれも欠損している。S467は残存部は細長く、断面菱形を呈する。S469は短く、断面形がやや楕円形状を呈する。ここでは「石剣」に分類したが、「鐮節形石製品」である可能性もある。S468は断面形は長方形で、欠損により全体の形状は不明であるが、S469同様に短いものである可能性がある。その場合は、これもまた「鐮節形石製品」となるかもしれない。

鐮節形石製品？（S470） 1点のみ出土した。欠損品であり詳細は不明であるが、粘板岩を素材として、研磨により扁平で先端部が尖った「鐮節」に似た形状を作り出している⁽¹²⁾。

燕尾形石製品（S471～473） 3点出土した。研磨により短冊状に整形した石材の長軸の一端に、「燕の尾」状の切り込みを入れた石製品である⁽¹³⁾。遺構外から3点出土した。石材は全て粘板岩（スレート）である。S471は先端の切り込み部が欠損しており、切り込みの反対側に貫通孔を有する。孔は両面から穿たれている。断面は三角形を呈する。S472は両面ともに剥落著しい。S471に比して、やや幅広く厚い素材を用いており、長軸の一端に切り込みが施される。S471に見られた貫通孔はこれにはない。S473は切り込み部の欠損品である。両面から溝状の切り込みが入っているが、完全に切られている部分はごく僅かであり、木成品の可能性もある。製作工程で欠損したものであろうか。

板状石製品（S474） 1点出土した。凝灰岩を素材として、研磨により小形の板状としたものである。表面には擦痕が著しく、穿孔等の痕跡はない。用途不明である。

楯鉢状石製品 (S475) 1点出土した。小形の凝灰岩礫を削り貫いたと思われるもので、内面には利器による無数の擦痕が見られる。外面には加工痕が一切ない。砥石とも考えられるが、用途は不明である。

有孔石製品 (S476) 1点出土した。小形の扁平板状の素材を研磨し、中央に穿孔したものである。穿孔は片側から行われている。石質は軟質な凝灰岩である。垂飾品の一類かとも思われる。

有孔石 (S477~484) 自然礫に1~2箇所の孔を有するものである。8点が出土した。孔の開いた自然礫を加工せずに利用しているものと、人為的に穿孔しているものがある。前者については、厳密には石製品ではないが、何らかの利用を目的に遺跡に持ち込まれたものと推測されることから石製品に一括した。形状には斉一性はない。S484は、楕円形状の礫の長軸線上に孔2個を有しており、人為的に穿たれたものと思われる。孔それぞれの周辺にはアスファルト様の付着物が認められる。

石棒 (S34・92) 遺構内で2点出土したが、全て欠損品である。ともに残存するのは末端部のみで、末端部は断面多角形状、縞れ部以下は断面略円形状に加工されている。

石柱 (S116・117・488~494) 9点出土した。柱状節理の長大礫を利用して断面を多角形状に加工したものである。石棒に似るが、末端部付近に縞れが認められないものであり、便宜上、「柱」状の石製品とした。S116・117は5号住居跡から出土し、他の7点は遺構外である。

石皿 (S33・495) 遺構内1点、遺構外1点の合計2点が出土した。S33は2号住居跡の床面で検出されたもので、扁平礫の片面にのみ磨り痕が広く認められる。S495は欠損品であり、残存状況が著しく悪い。僅かに残存する機能面は、摩擦の結果として扁平となっている。

台石 (S496) 遺構外出土S496の1点のみである。中央付近に短痕状の敲打痕が集中している。敲打痕周辺にはやや不明瞭ではあるが磨り痕も見られるが、敲打痕の方が新しい。石皿の転用であろうか。

(5) 金属器 (第125図)

調査区南部の表十層から鉄製焼鏝、鉄斧、古銭が出土した。うち、焼鏝および鉄斧については近代~現代に属するものであり、掲載していない。M1~3はいずれも寛永通寶で、いわゆる「新寛永」である。

(6) 自然遺物

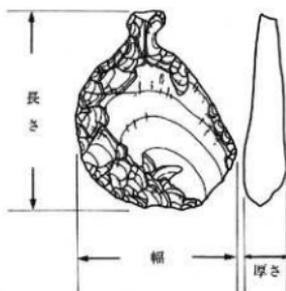
遺構の事実記載では触れなかったが、植物遺存体(炭化種実)が2号住居跡および3号住居跡の覆土より各々10数点出土している。詳細な分析・樹種同定は実施していないが、肉眼による観察では栗であると思われる。何れも被熱により萎縮し脆くなっており、遺存状態が不良であるため、掲載を省略した。

<註>

- (1) とりわけ、大木6式と同7a式の間置型式—いわゆる「輪塚式」(林1965)の資料については、その内容を把握できなかったため、大木7a式古相として捉えることとする。
- (2) 「オオバコ回転文」土器については、後述第VI章を参照されたい。
- (3) 小笠原好彦氏は、宮城県域のこの種の深鉢に貼付される「把手」について、仙台湾周辺地域と内陸部とは差異が存在することを指摘している。すなわち、松島湾周辺ではL線部に縦に「把手」がつくのに対し、宮城県内陸部の同種資料では松島湾とは逆に横につくものが多く、かつ爪形文が少ないことが特徴となる(小笠原1968)。本遺跡の場合、「縦に」つく例はなく「横に」つく資料ばかりであることから、後者の様相に似ることを指摘しておく。
- (4) 稲野彰子氏は、この種の深鉢の文様を大別し、全く異なる2系統の文様が存在していることを指摘している(稲野1991)。すなわち、大木系の文様と十三善提系のそれである。235・236のごときは後者、十三善提式土器の影響を受けたものであろう。
- (5) 「麴形石製品」・「燕尾形石製品」の名称は、ともに秋田県協和町上ノ山II遺跡(秋田県教委1988)の調査報告に倣った。なお、この種の石製品は、本遺跡に近い湯田町峠山牧場Iや和賀町(現北上市)蟹沢館でも出土している。これらの石製品の出上は、和賀川流域と秋田県域との連関を示唆するものであろう。後述の第VI章を参照されたい。

凡例 (3) —— 石器

(石器の計測箇所)



形態分類概念図

石鏃

I						
I-a	I-b	I-c	I-d	I-e	I-f	I-g
II		III	IV			
II-a	II-b		IV-a	IV-b		

I : 無茎凹基鏃
 II : 無茎平基鏃
 III : 有茎鏃
 IV : 茎が不明鏃

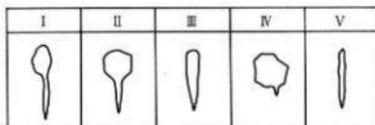
石匙

I		II		III	IV
I-a	I-b	II-a	II-b		

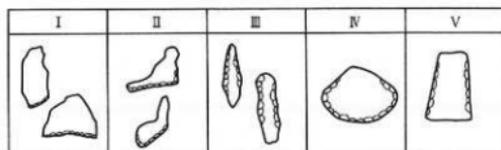
I : 椗形
 II : 柄形
 III : 尖頭器形
 IV : 特殊形

第88図 凡例 (3)、石器分類概念図①

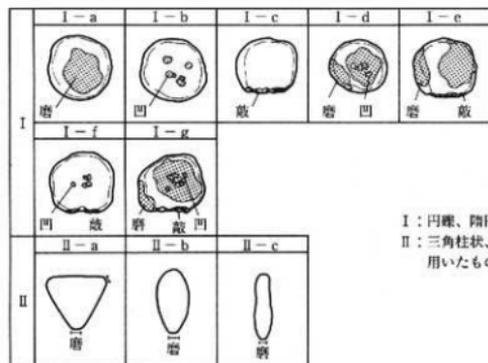
石鏃



不定形石器

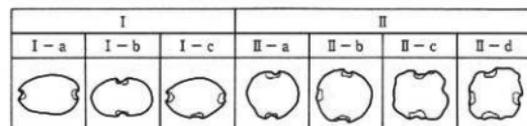


磨器類



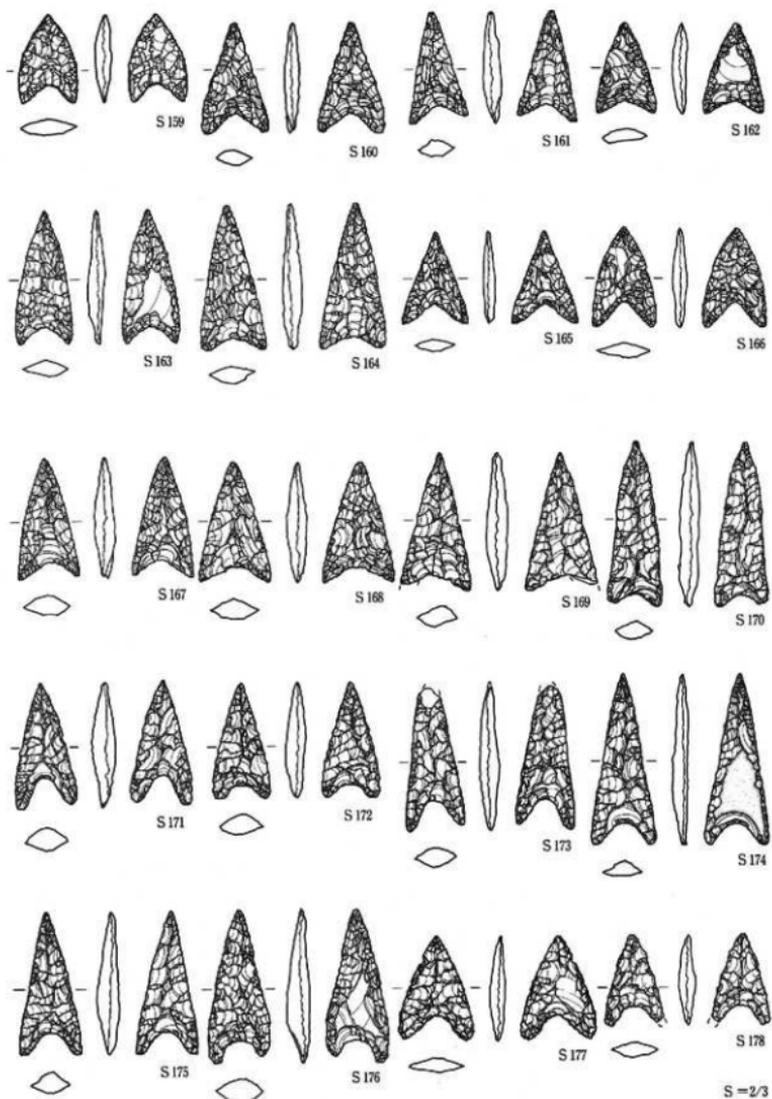
I：円礫、階円礫を用いたもの
II：三角柱状、扁平礫の縁辺を用いたもの

礫石鏃

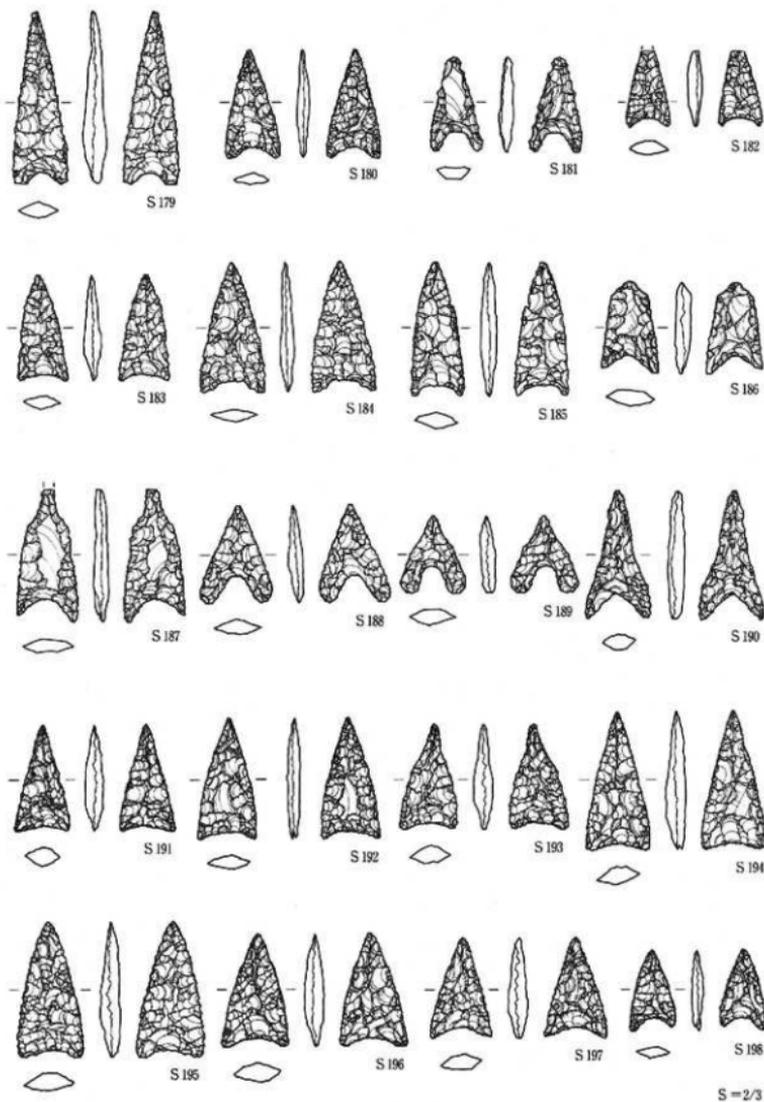


I：階円形礫を用いたもの
II：円形、不定形礫を用いたもの

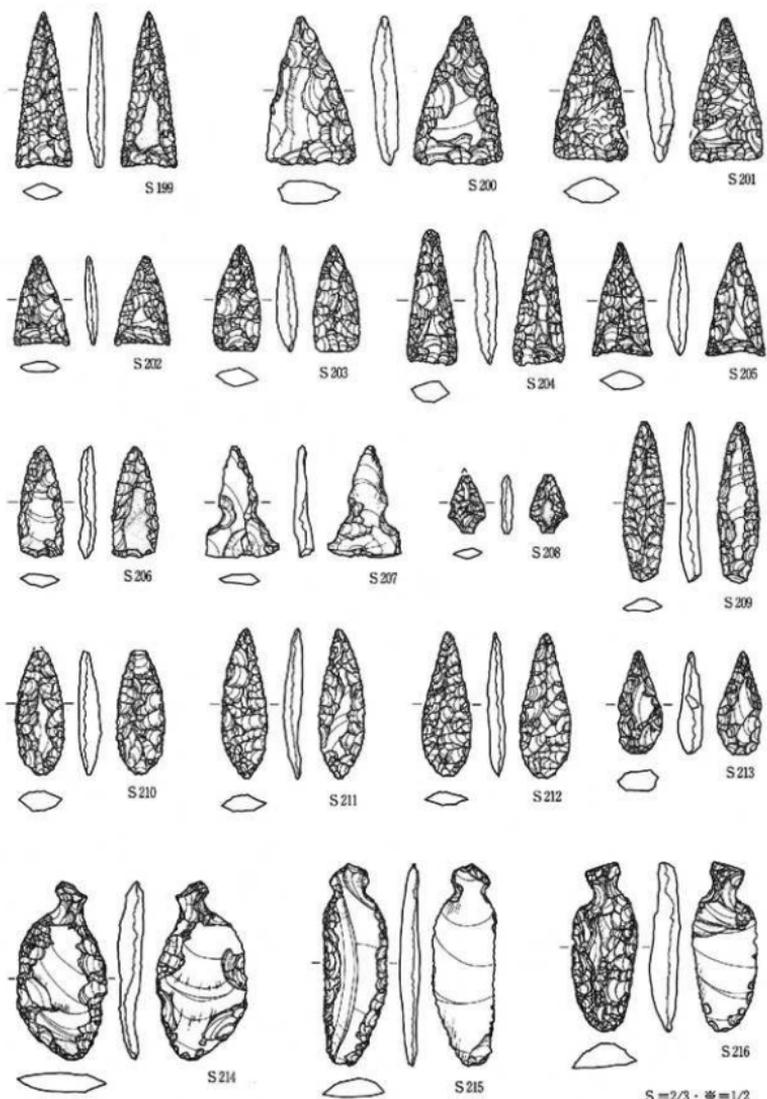
第89図 石器分類概念図②



第90圖 遺構外出土遺物 石器 (1)

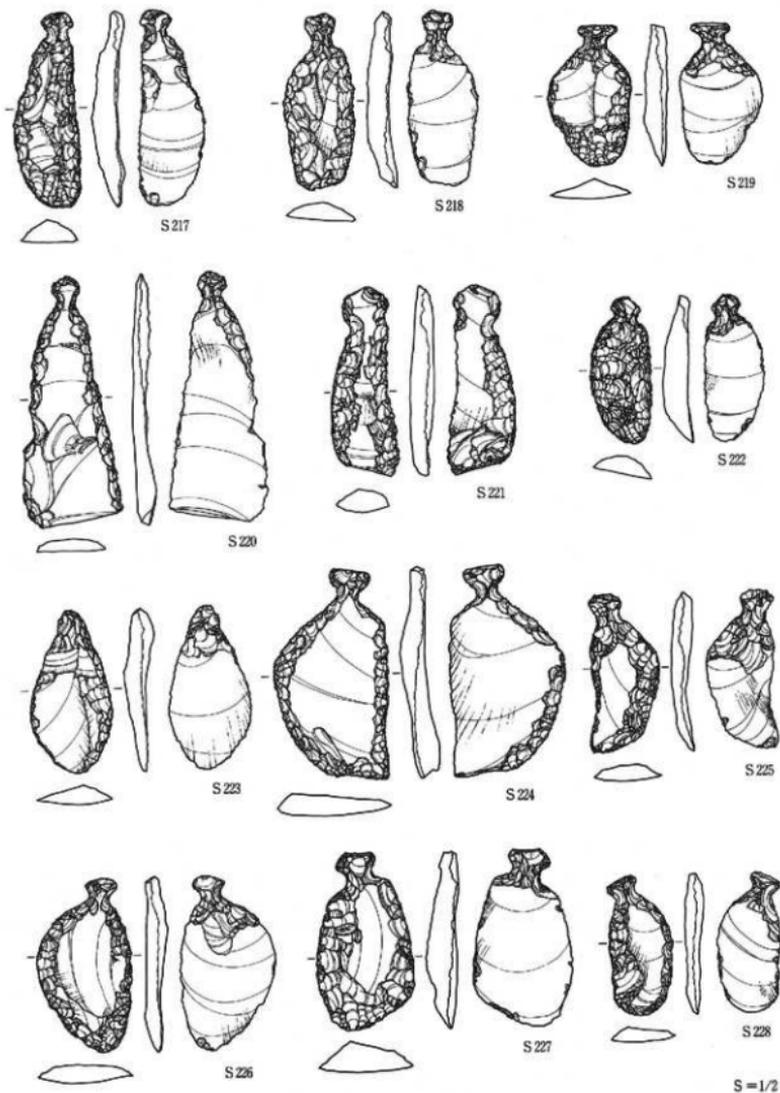


第91圖 遺構外出土遺物 石器 (2)

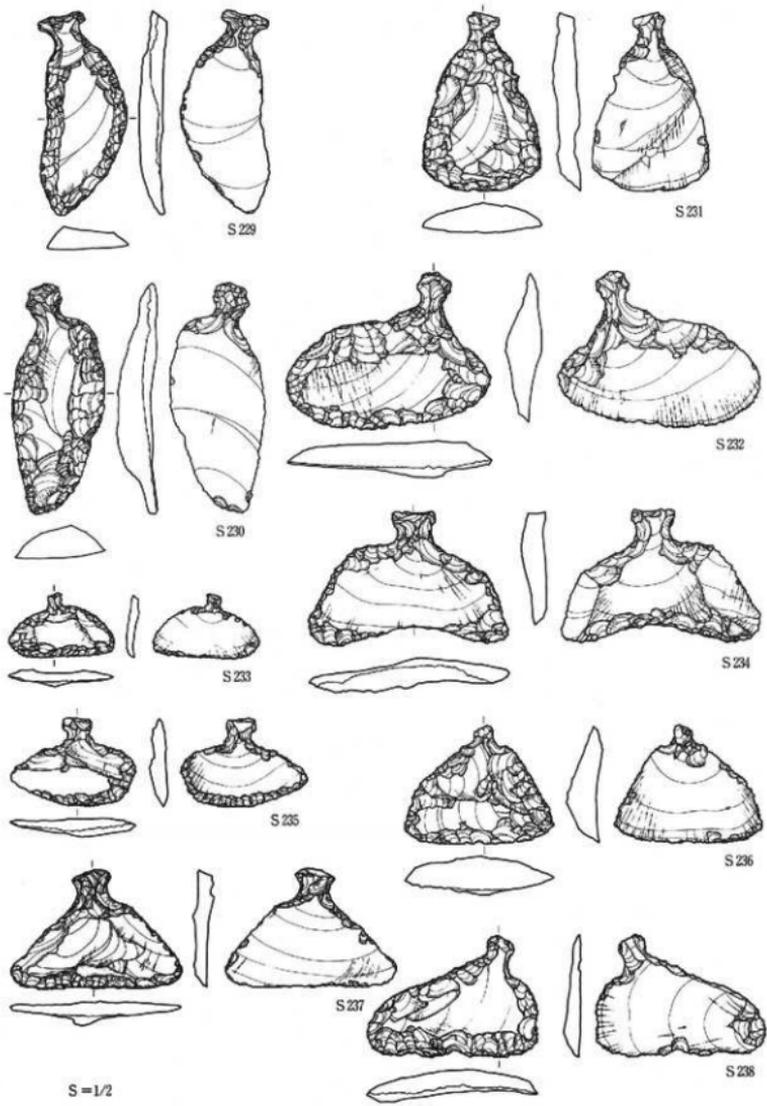


S = 2/3 · ※ = 1/2

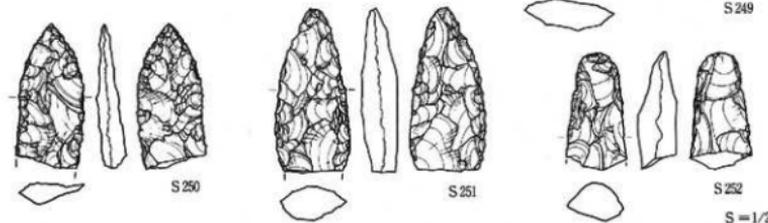
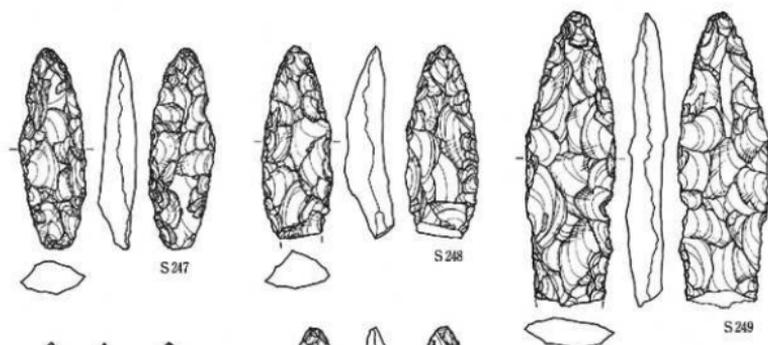
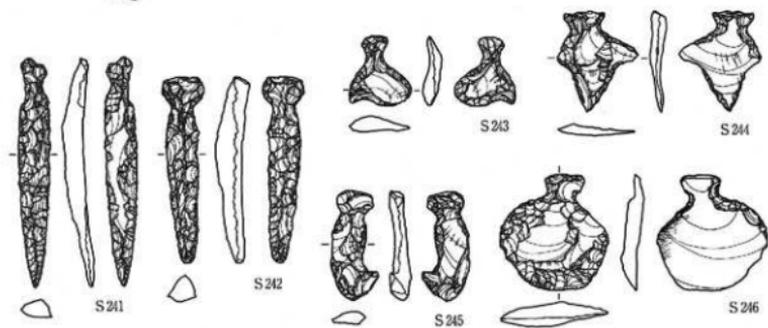
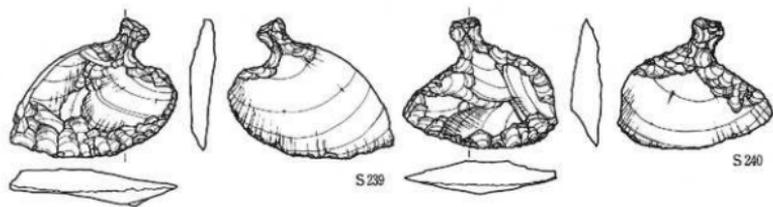
第92図 遺構外出土遺物 石器 (3)



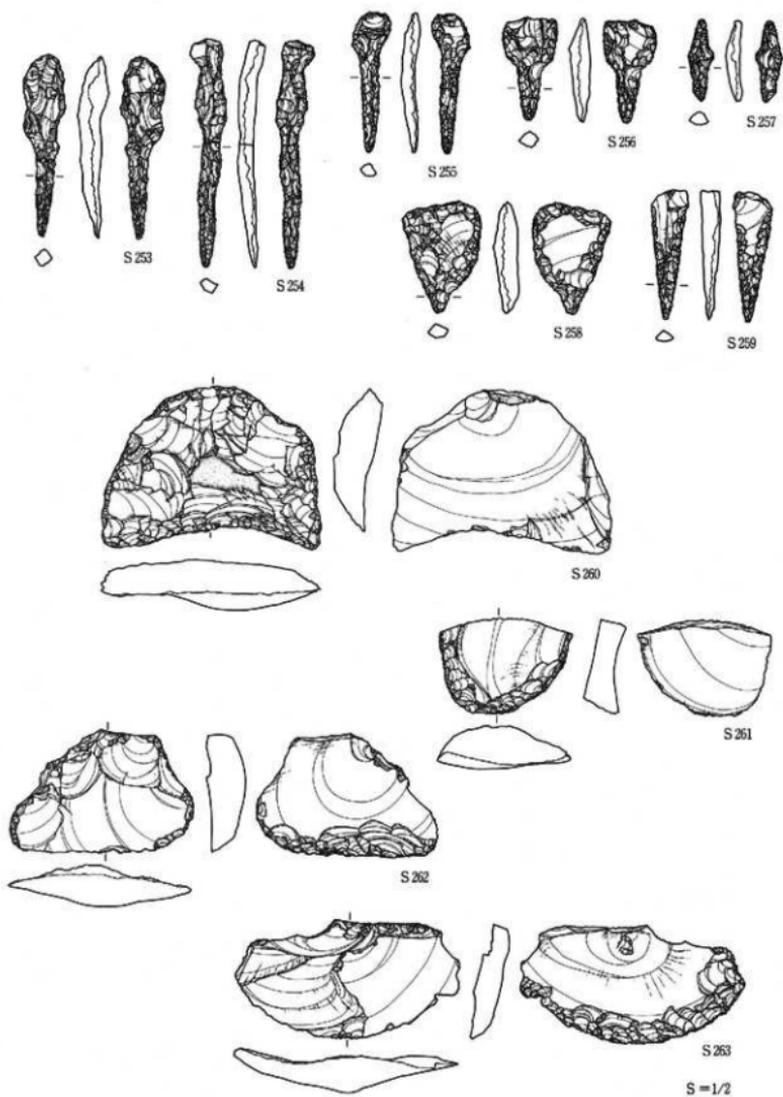
第93圖 遺構外出土遺物 石器 (4)



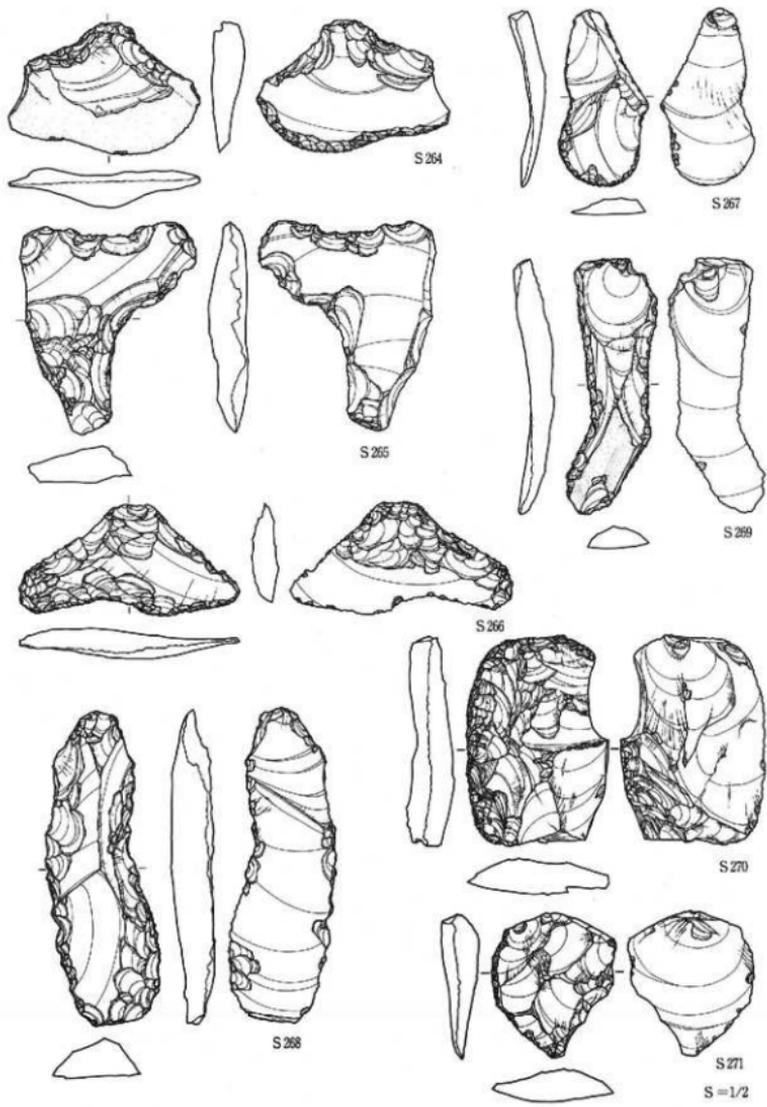
第94圖 遺構外出土遺物 石器 (5)



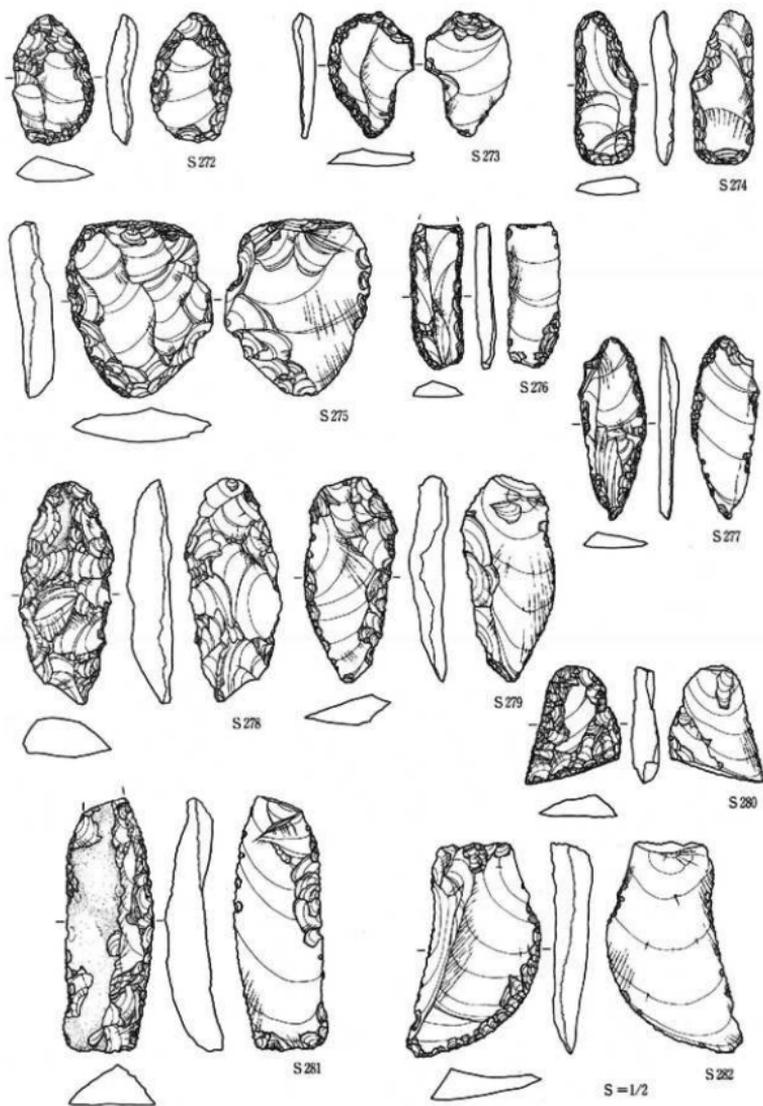
第95图 滇南外出土遗物 石器(6)



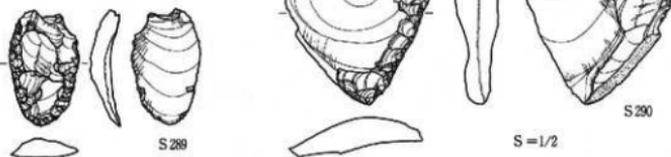
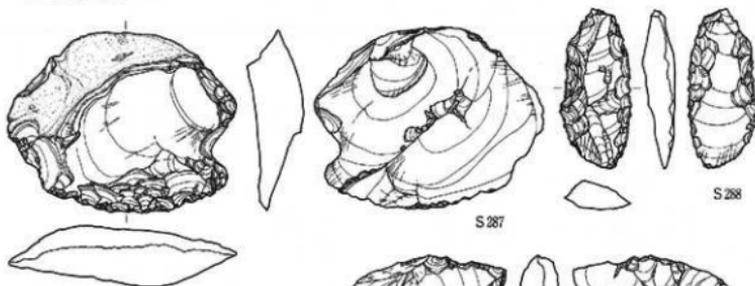
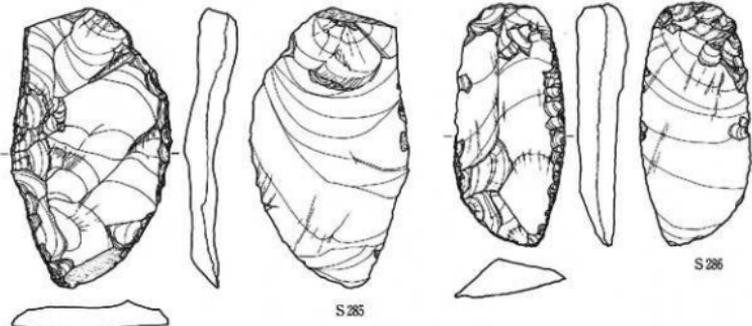
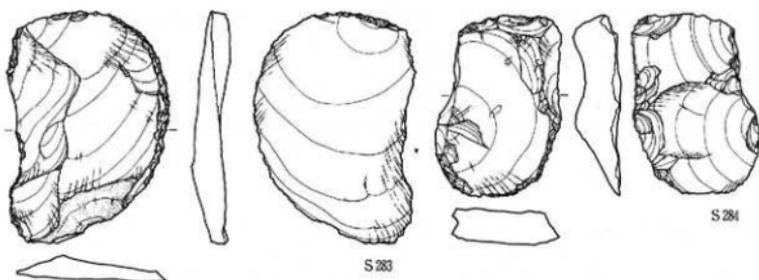
第96圖 遺構外出土遺物 石器(7)



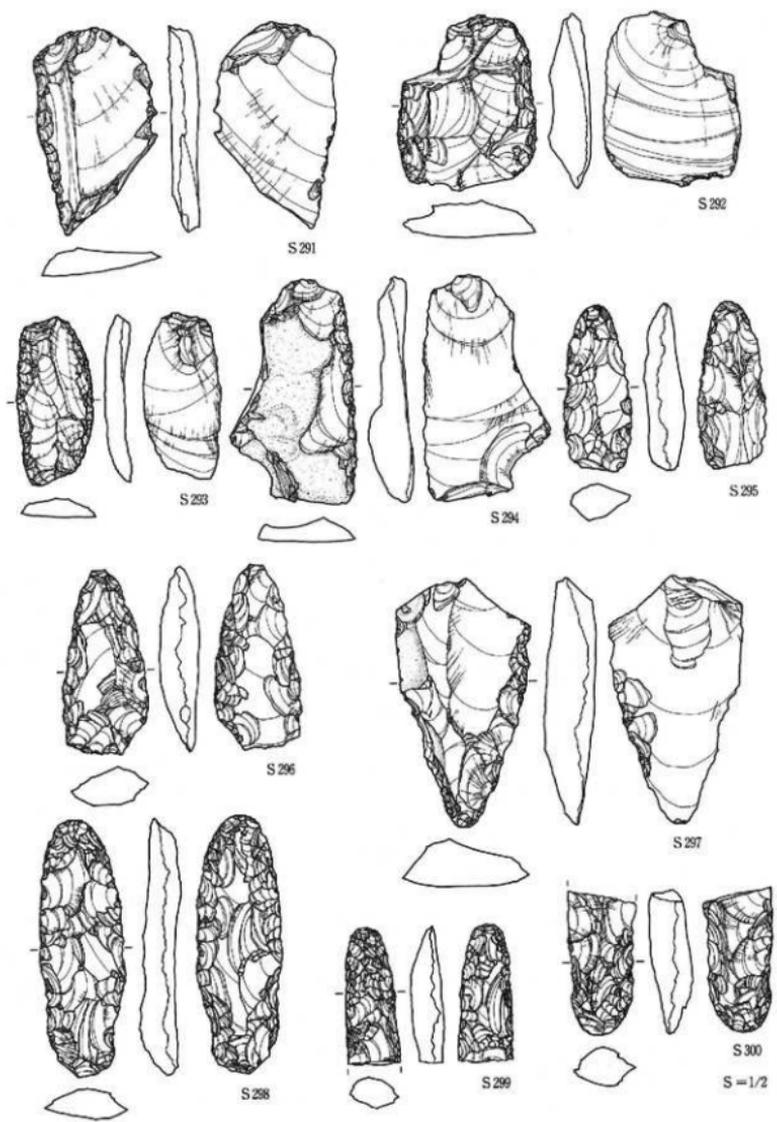
第97図 遺構外出土遺物 石器(8)



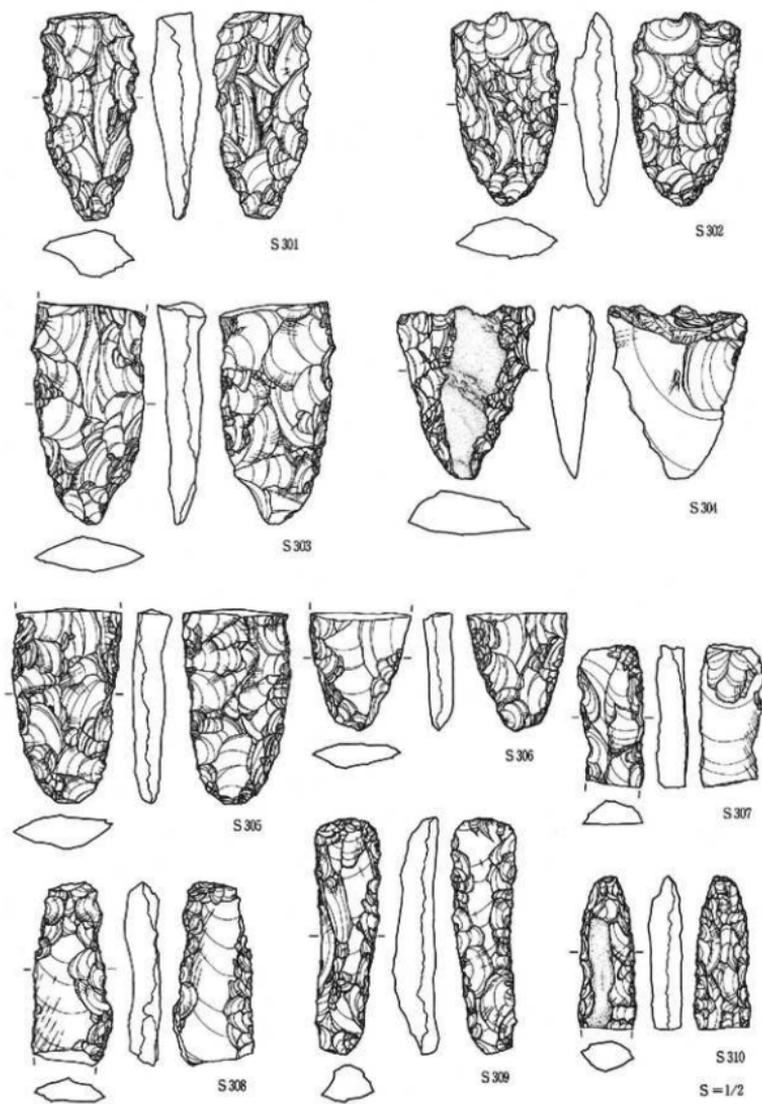
第98圖 遺構外出土遺物 石器 (9)



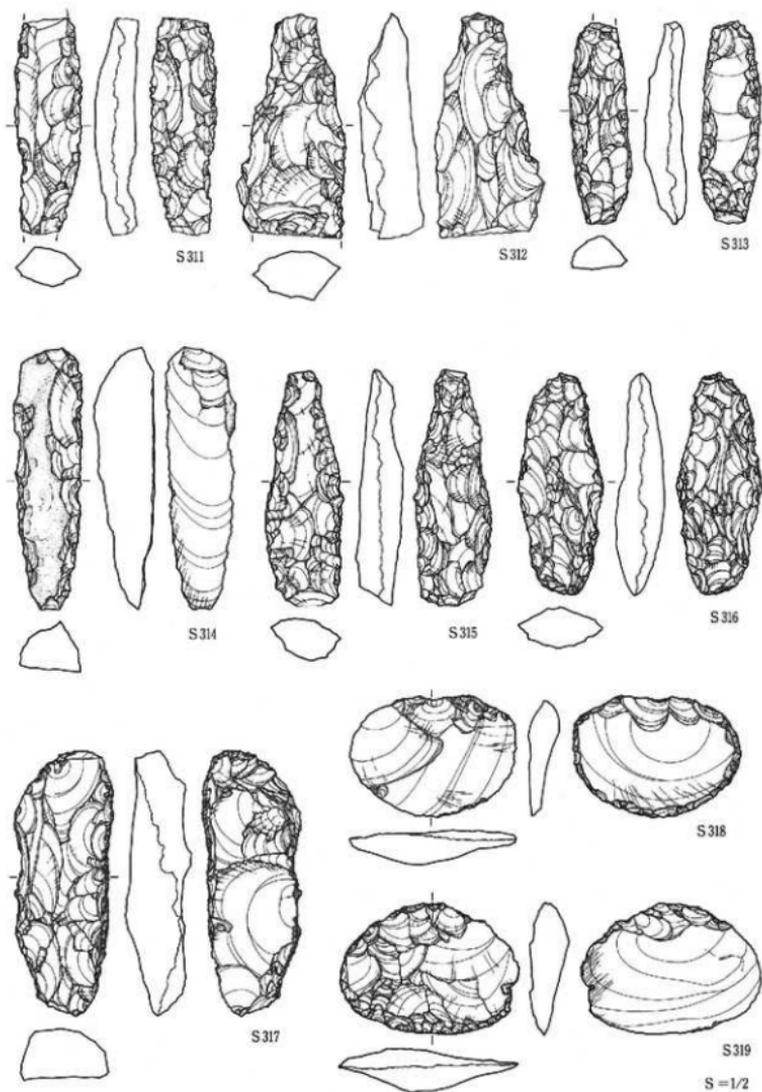
第99回 遺構外出土遺物 石器 (10)



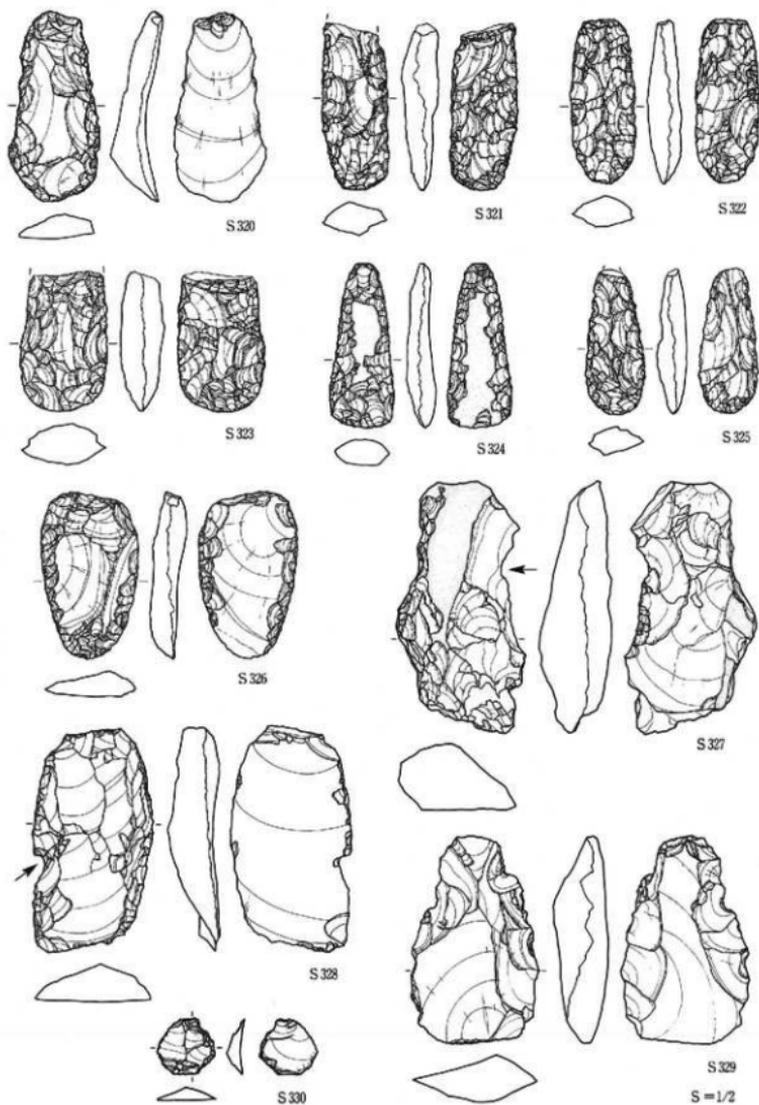
第100圖 遺構外出土遺物 石器 (11)



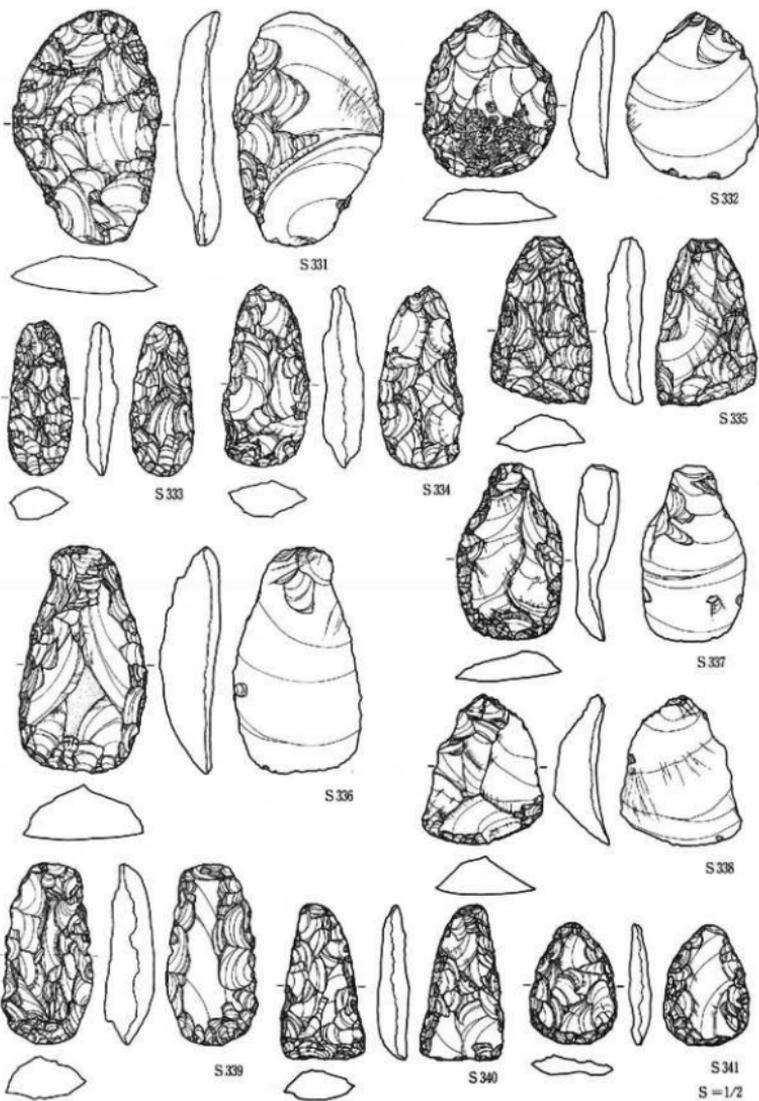
第101圖 遺構外出土遺物 石器 (12)



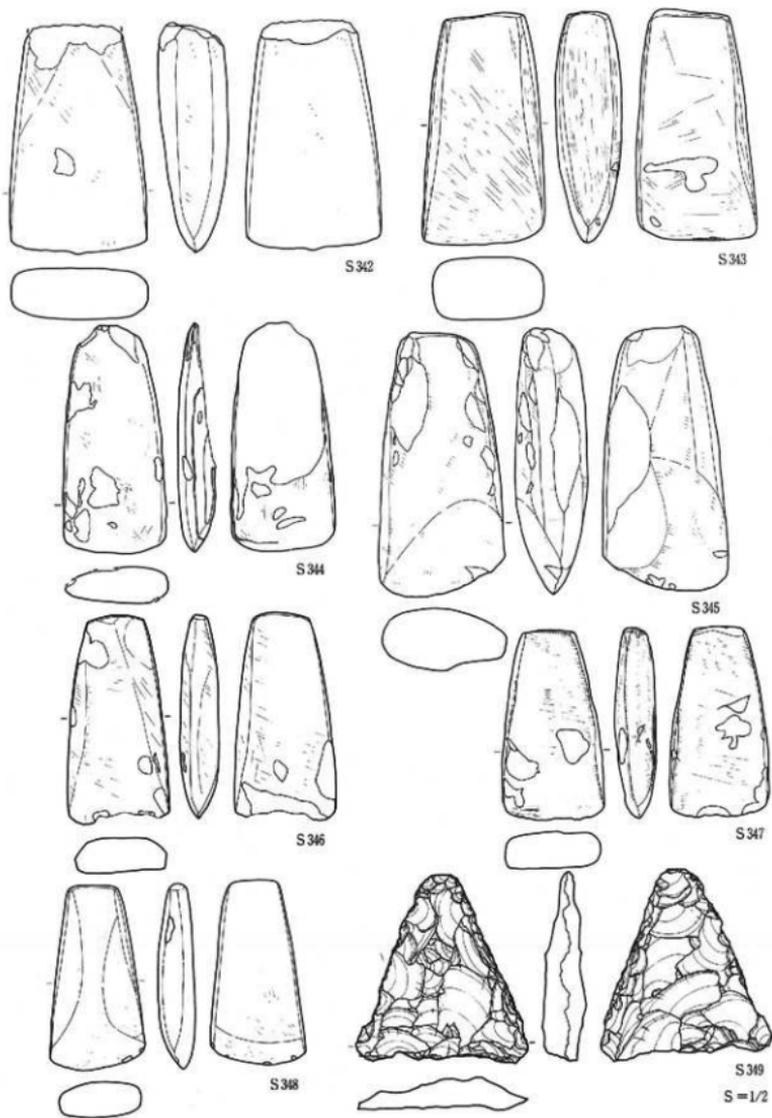
第102図 濠構外出土遺物 石器 (13)



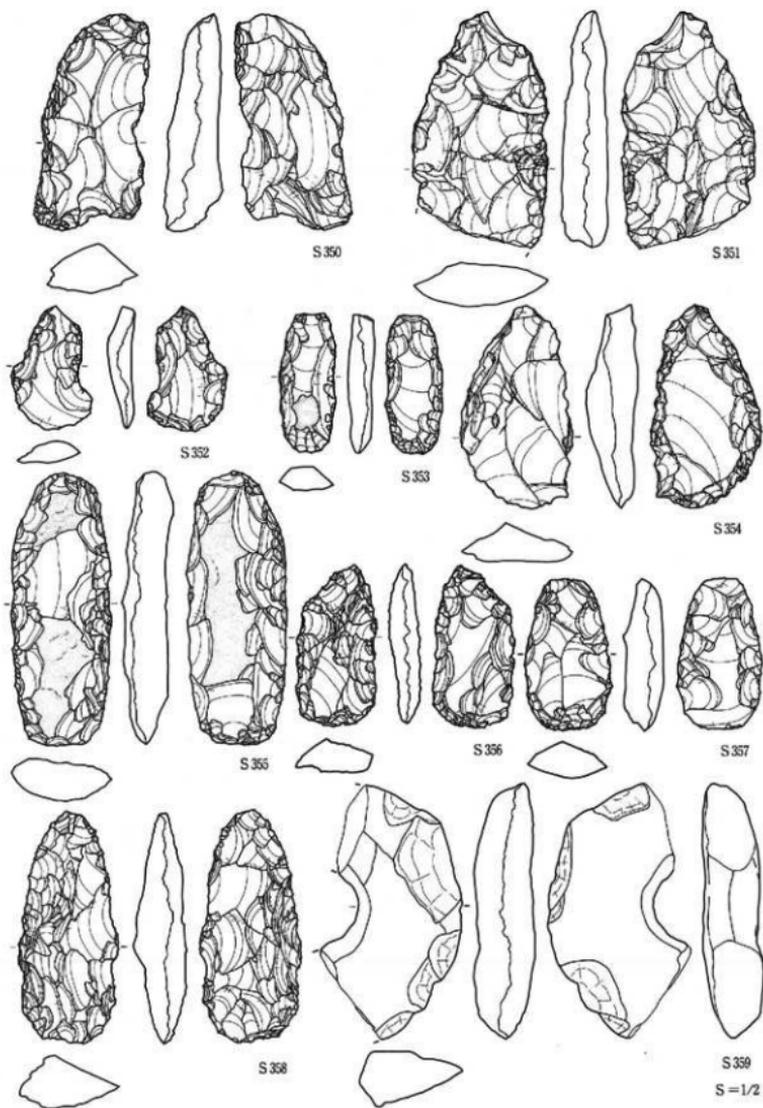
第103圖 遺構外出土遺物 石器 (14)



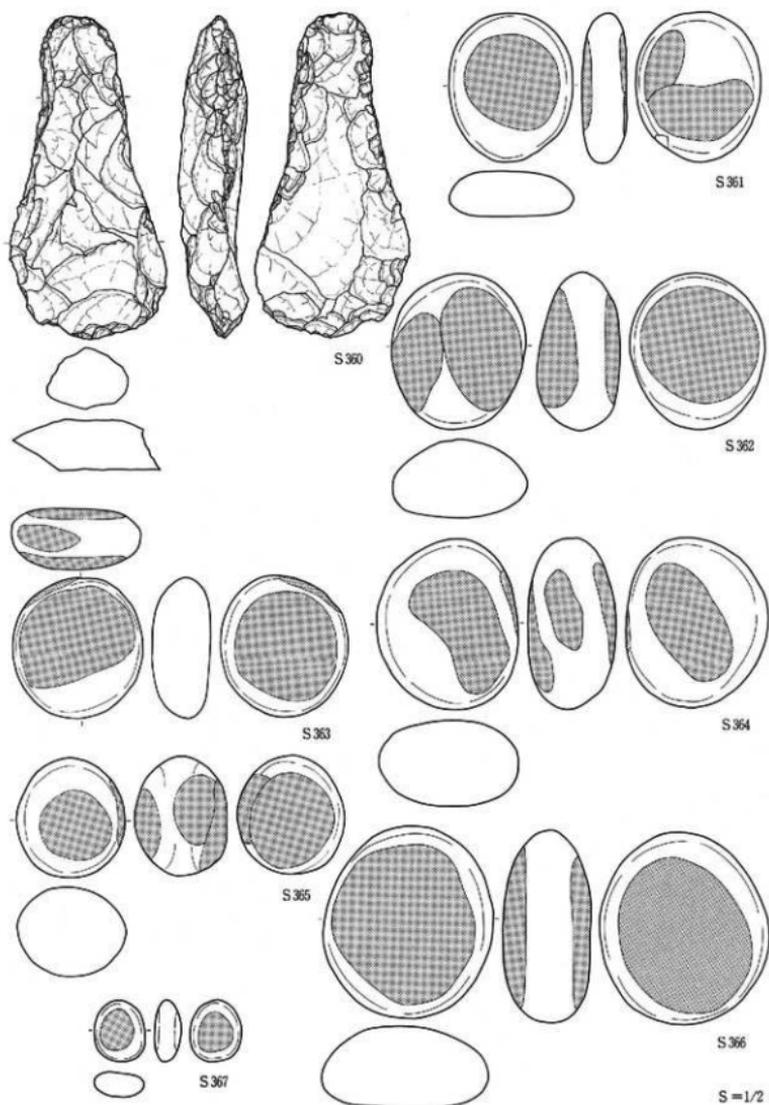
第104図 遺構外出土遺物 石器 (15)



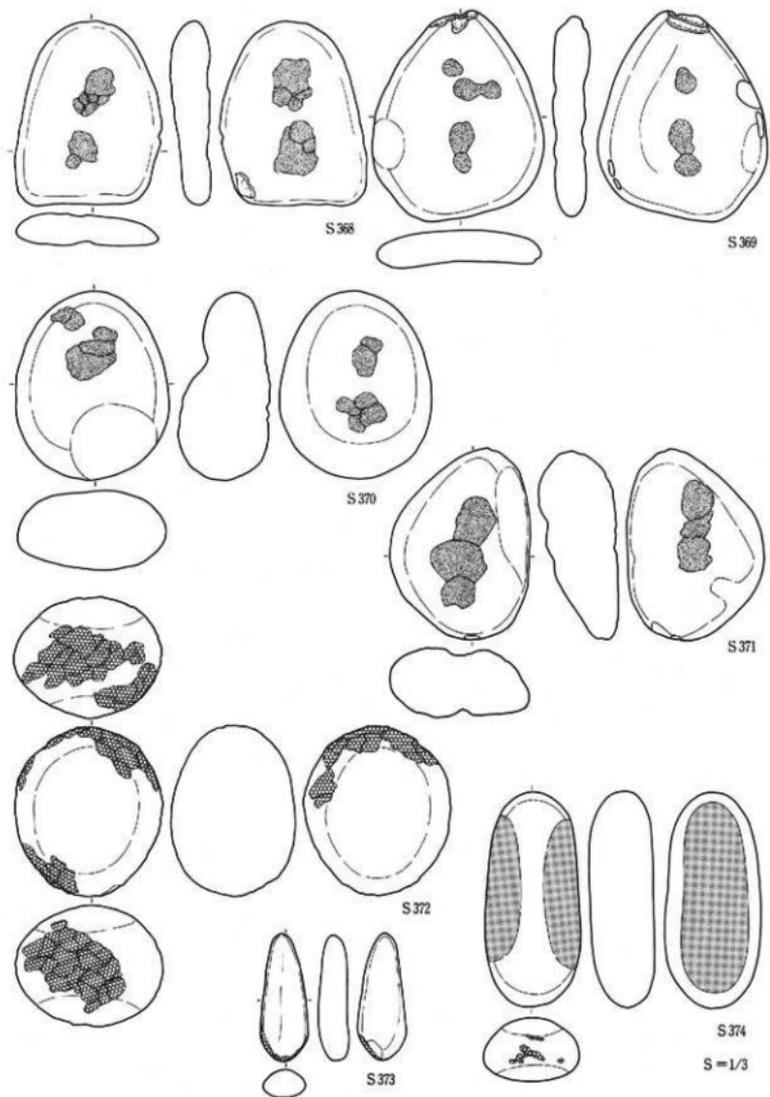
第105図 遺構外出土遺物 石器 (16)



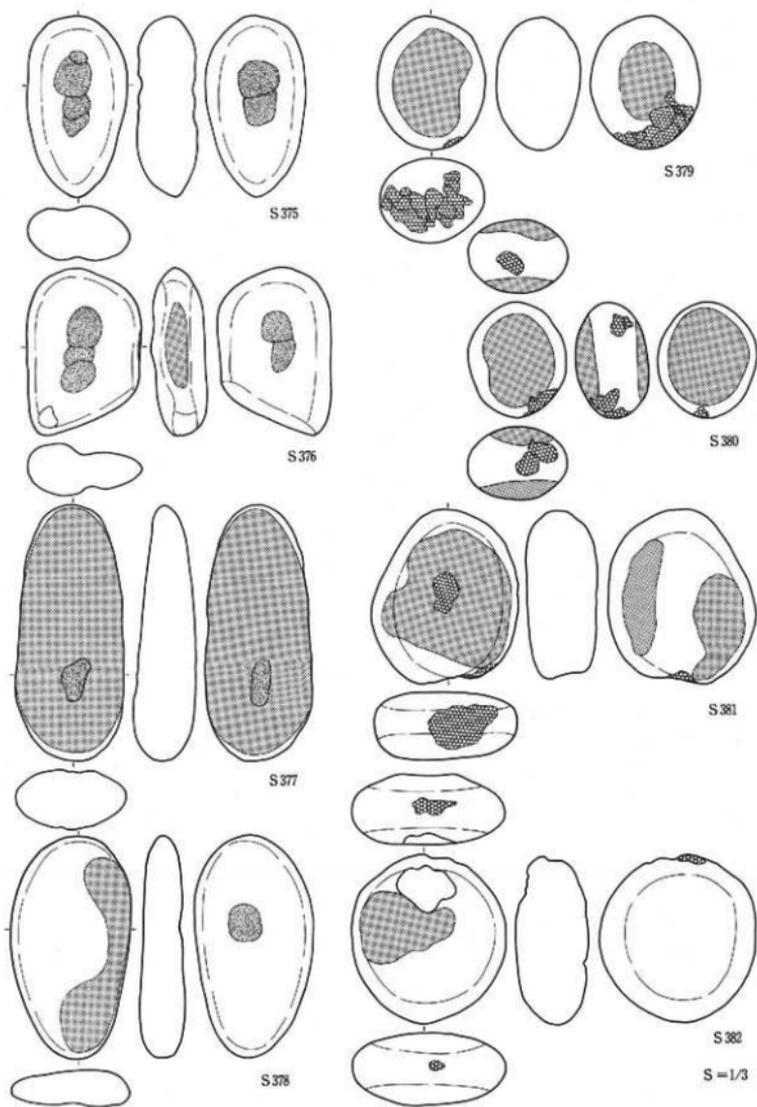
第106図 遺構外出土遺物 石器 (17)



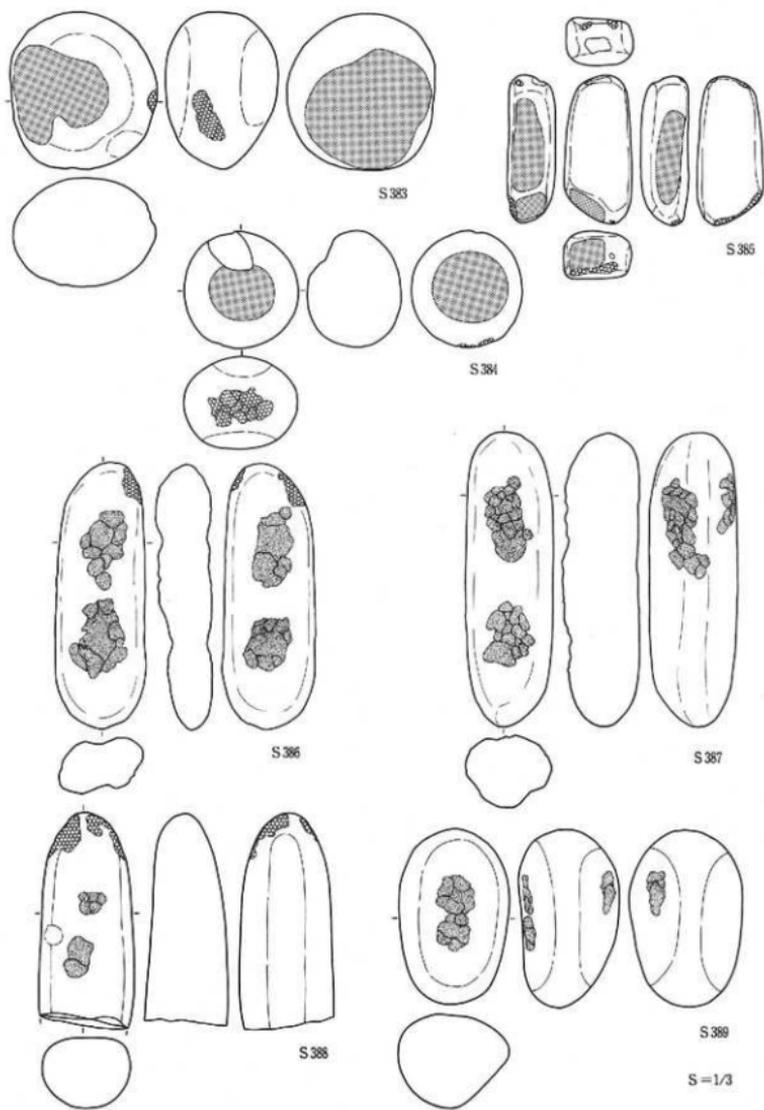
第107圖 遺構外出土遺物 石器 (18)



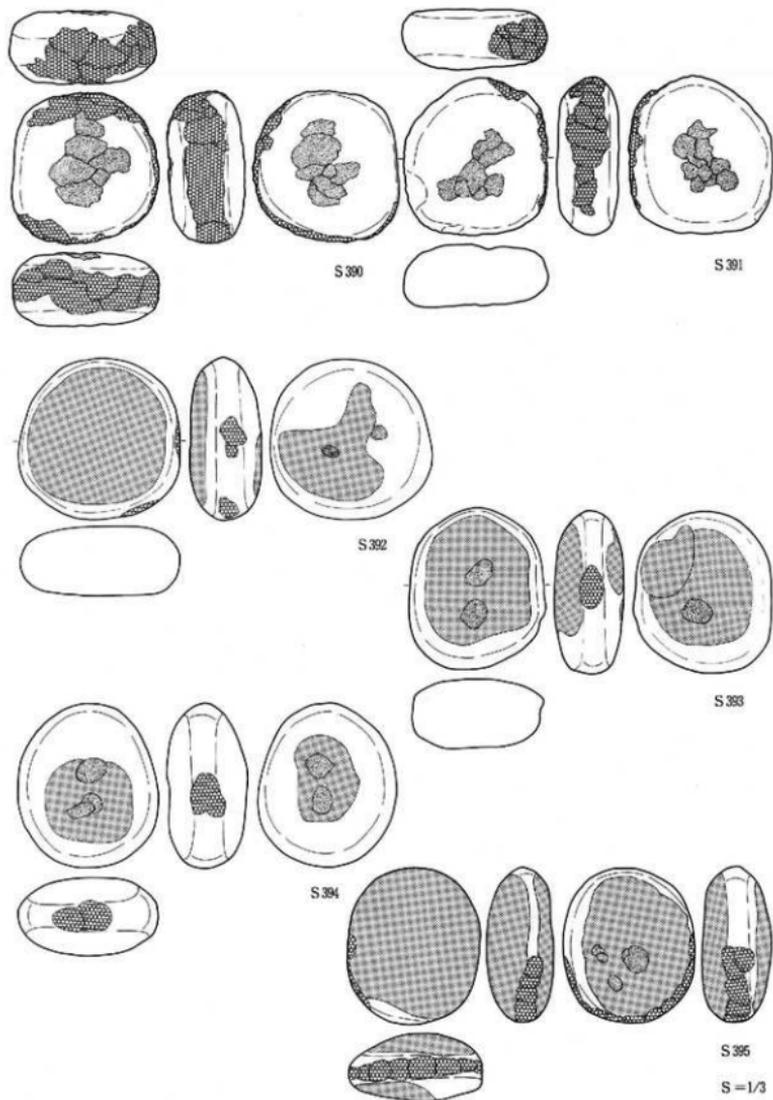
第108圖 遺構外出土遺物 石器 (19)



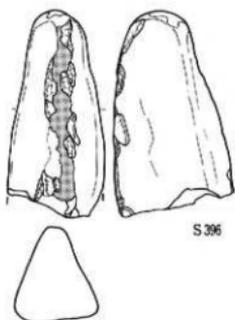
第109圖 遺構外出土遺物 石器 (20)



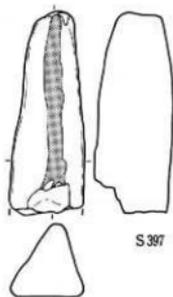
第110圖 遺構外出土遺物 石器 (21)



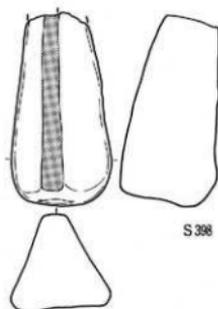
第111圖 遺構外出土遺物 石器 (22)



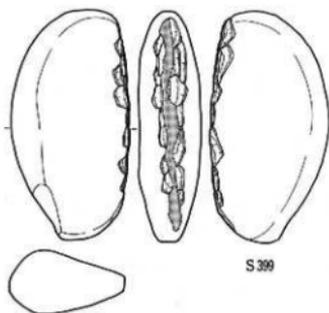
S396



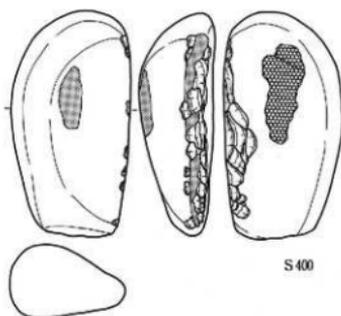
S397



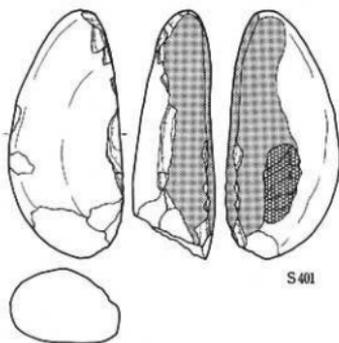
S398



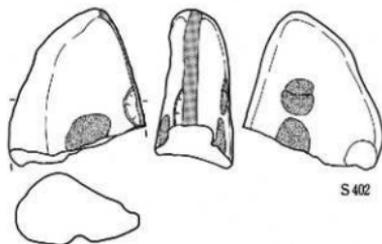
S399



S400



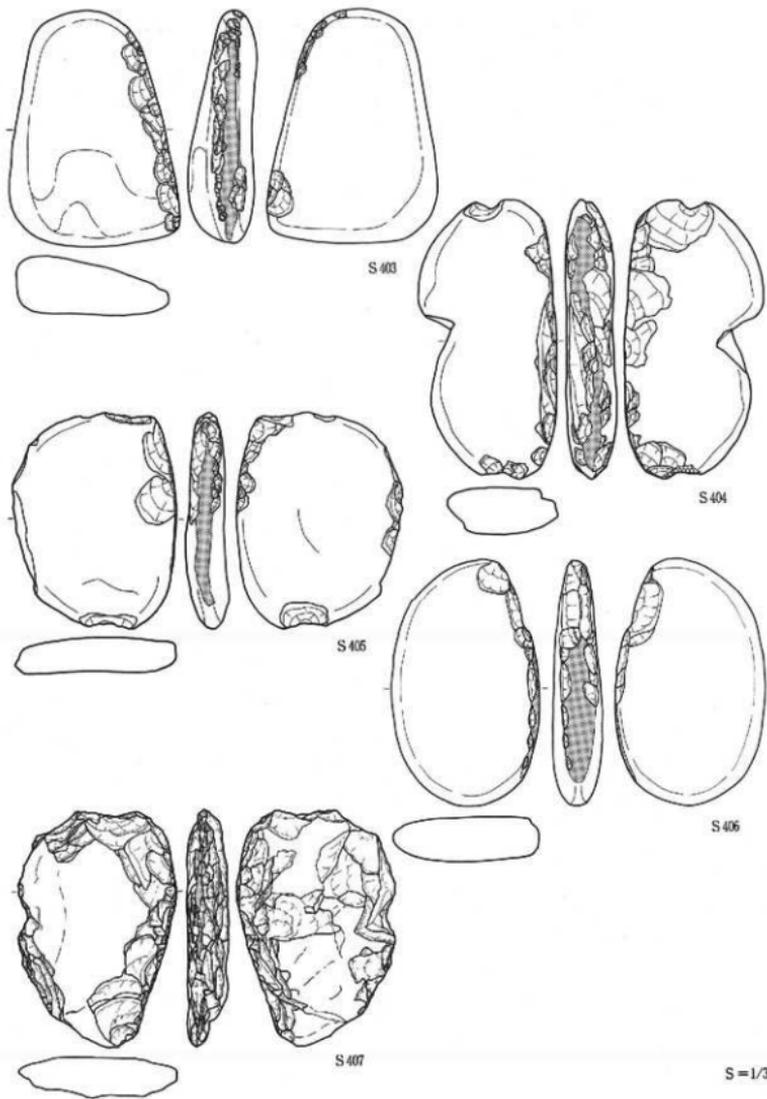
S401



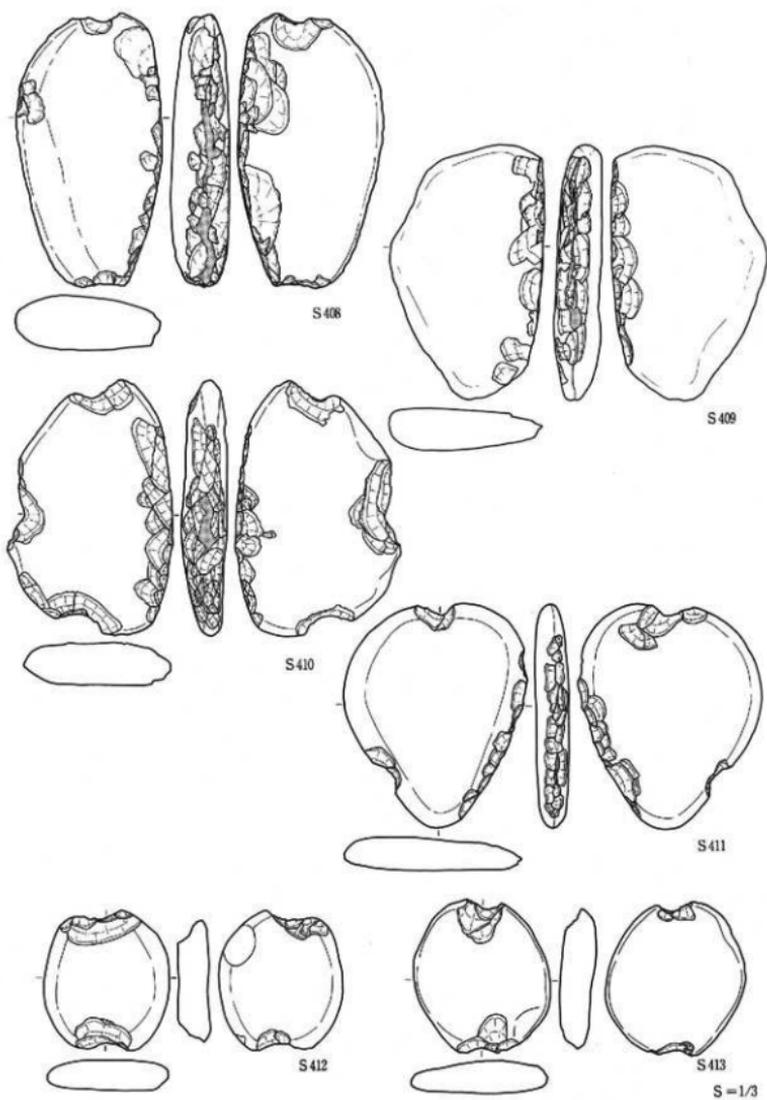
S402

S=1/3

第112図 遺構外出土遺物 石器 (23)

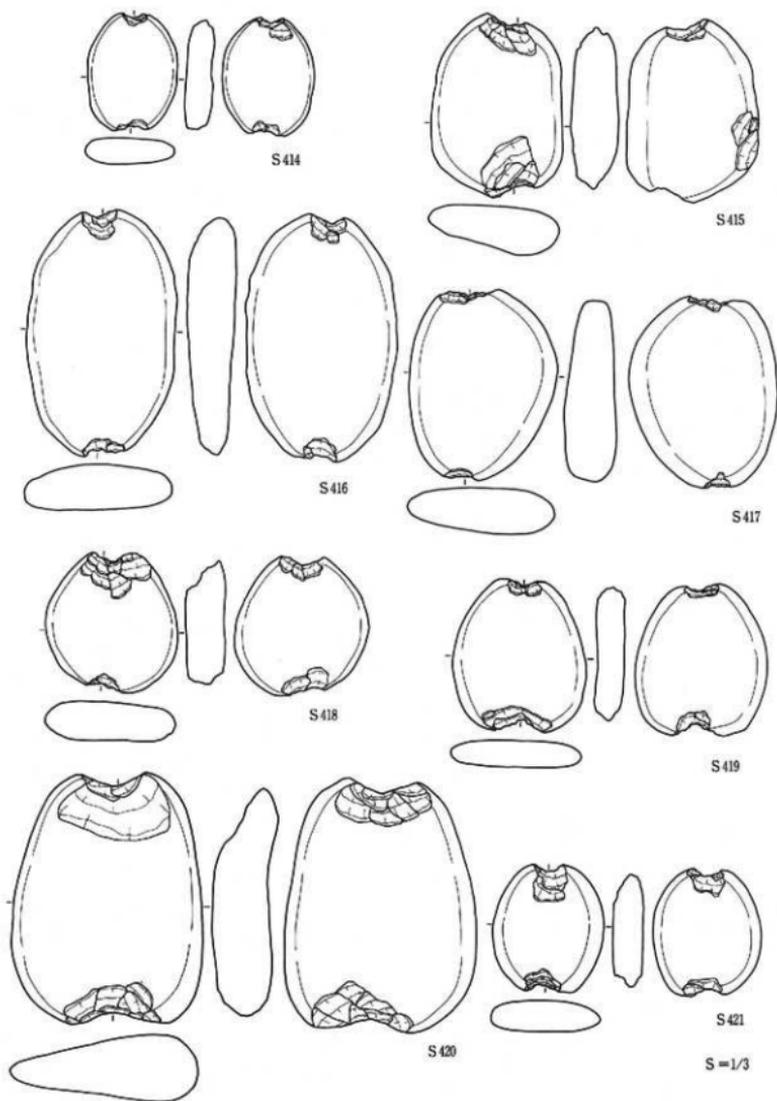


第113圖 遺構外出土遺物 石器 (24)

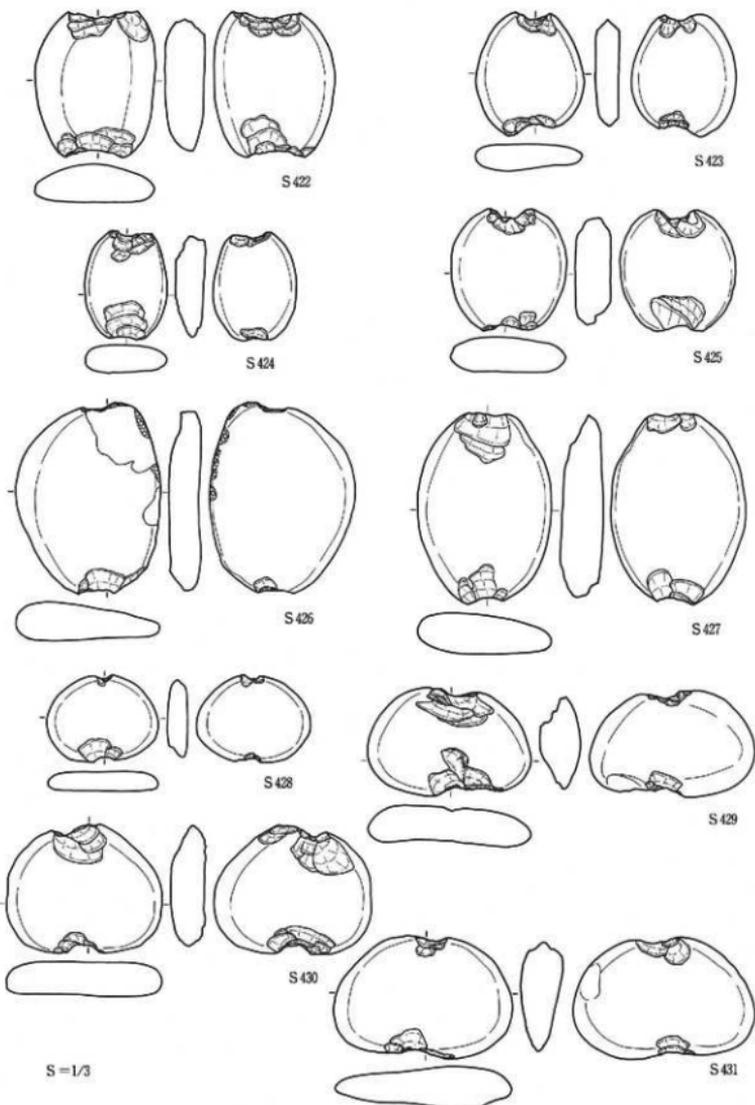


第114圖 遺構外出土遺物 石器 (25)

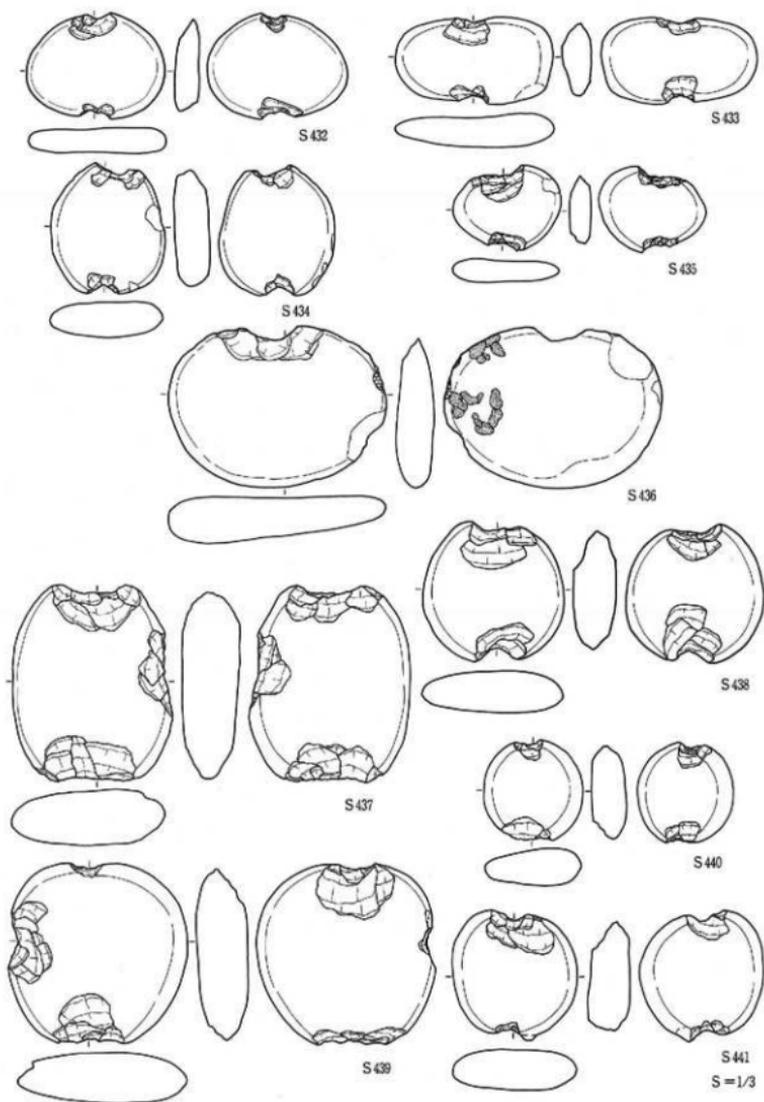
S=1/3



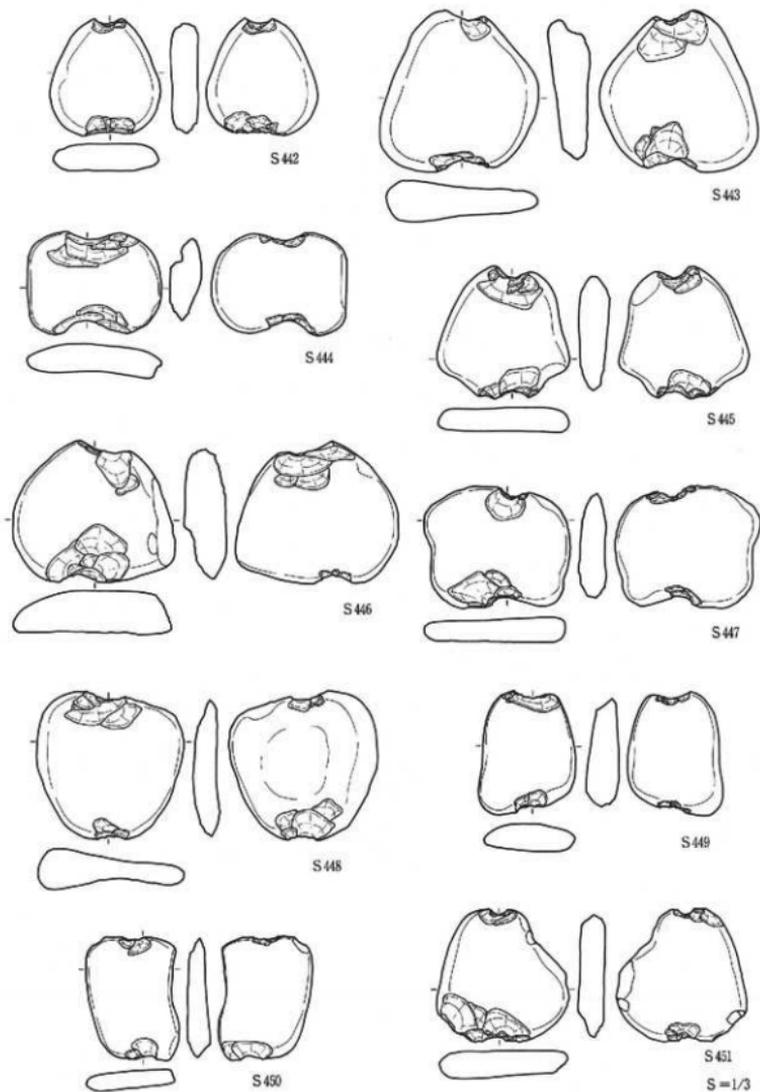
第115圖 遺構外出土遺物 石器 (26)



第116図 遺構外出土遺物 石器 (27)

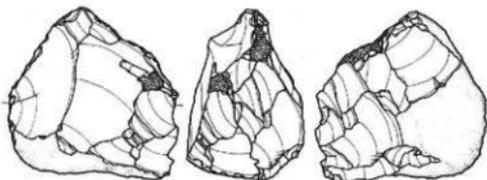


第117圖 遺構外出土遺物 石器 (28)

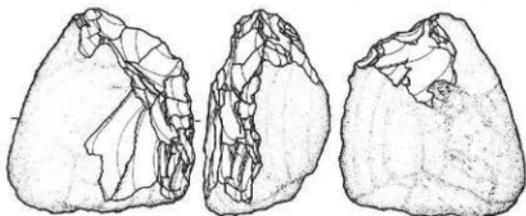
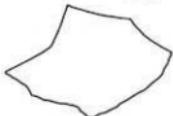


第118圖 遺構外出土遺物 石器 (29)

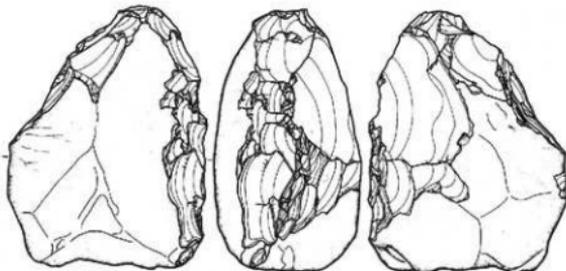
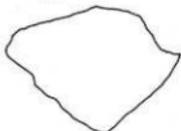
S-1/3



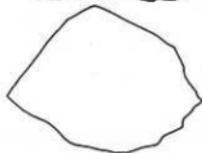
S 452



S 453

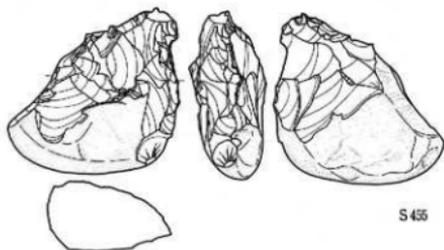


S 454

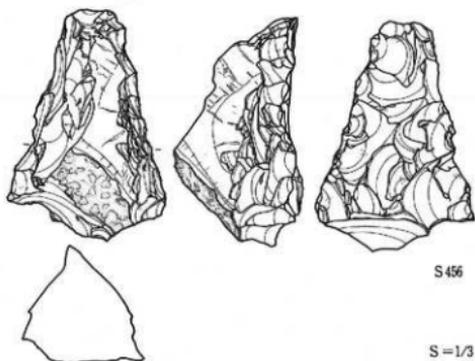


S = 1/3

第119図 遠構外出土遺物 石器 (30)



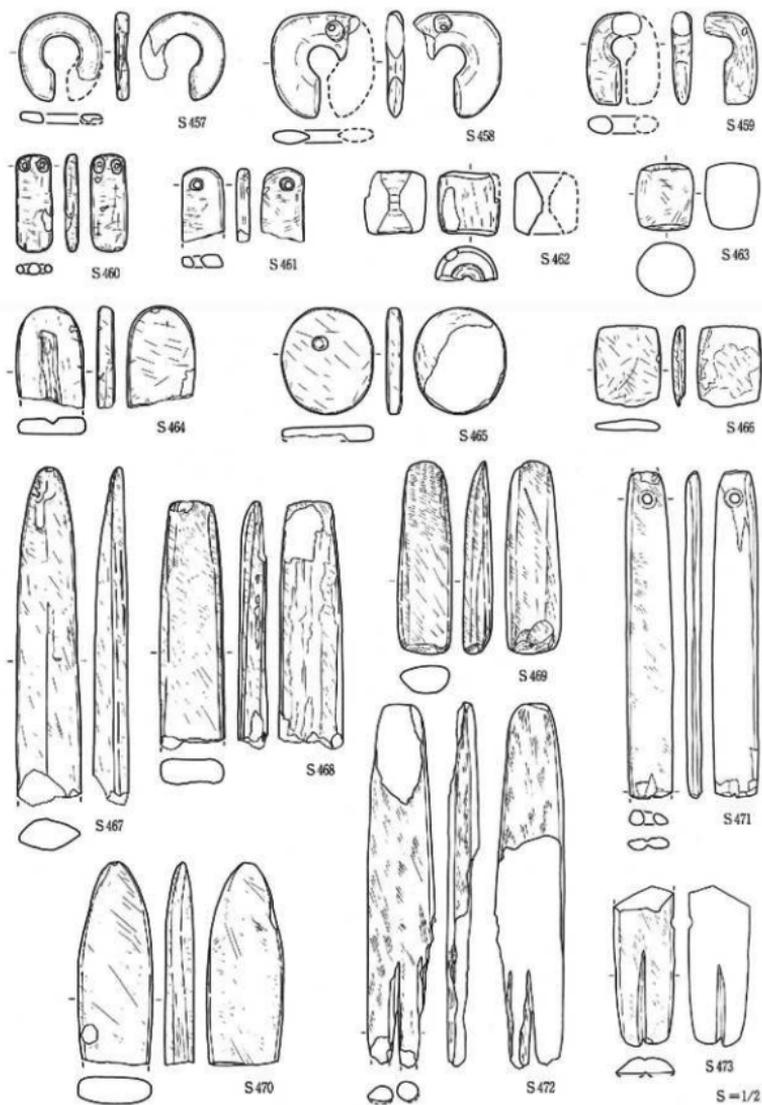
S 455



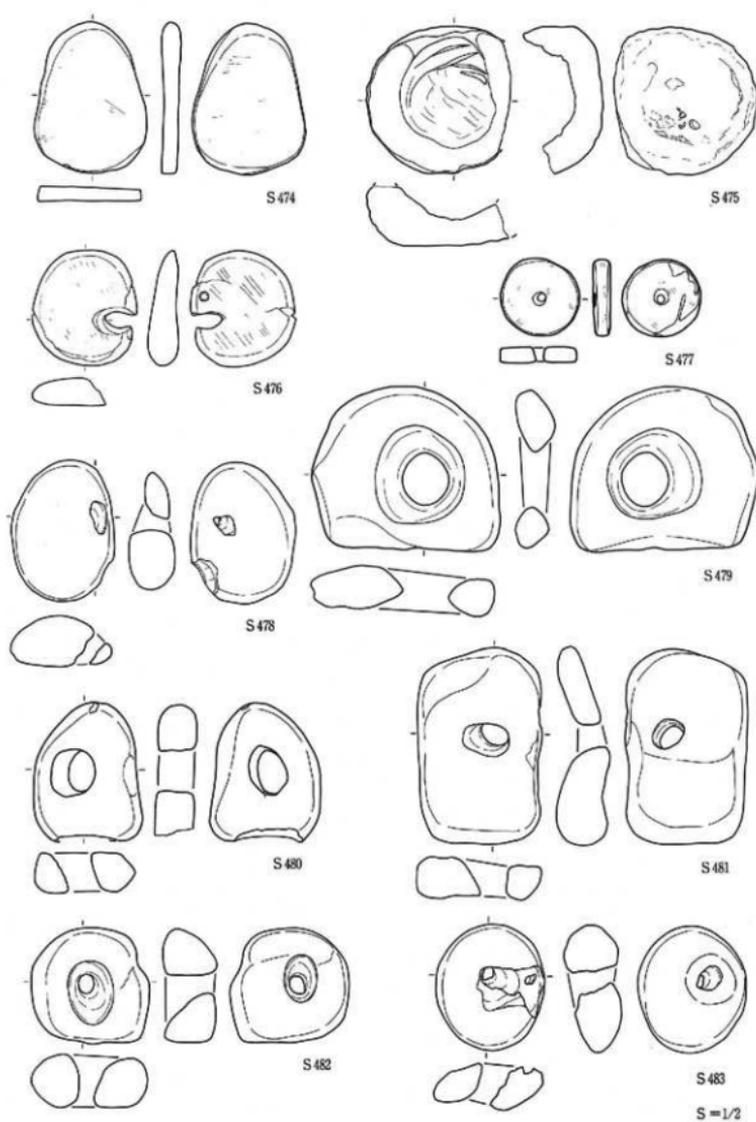
S 456

S = 1/3

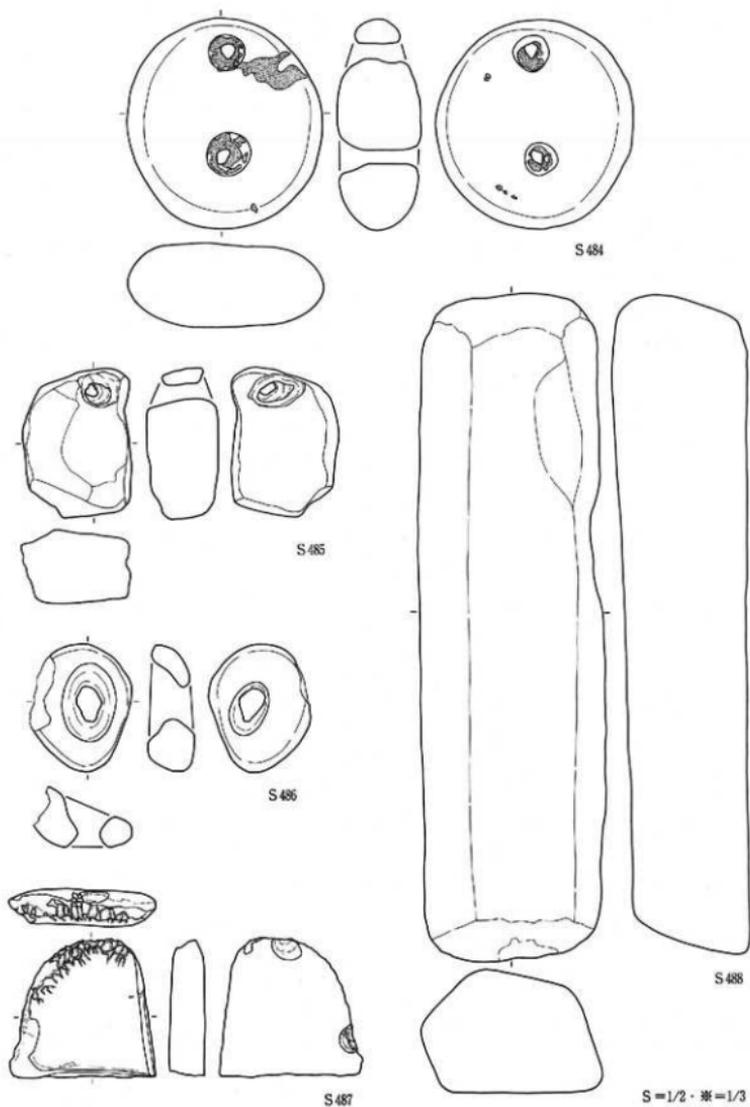
第120圖 遺構外出土遺物 石器 (31)



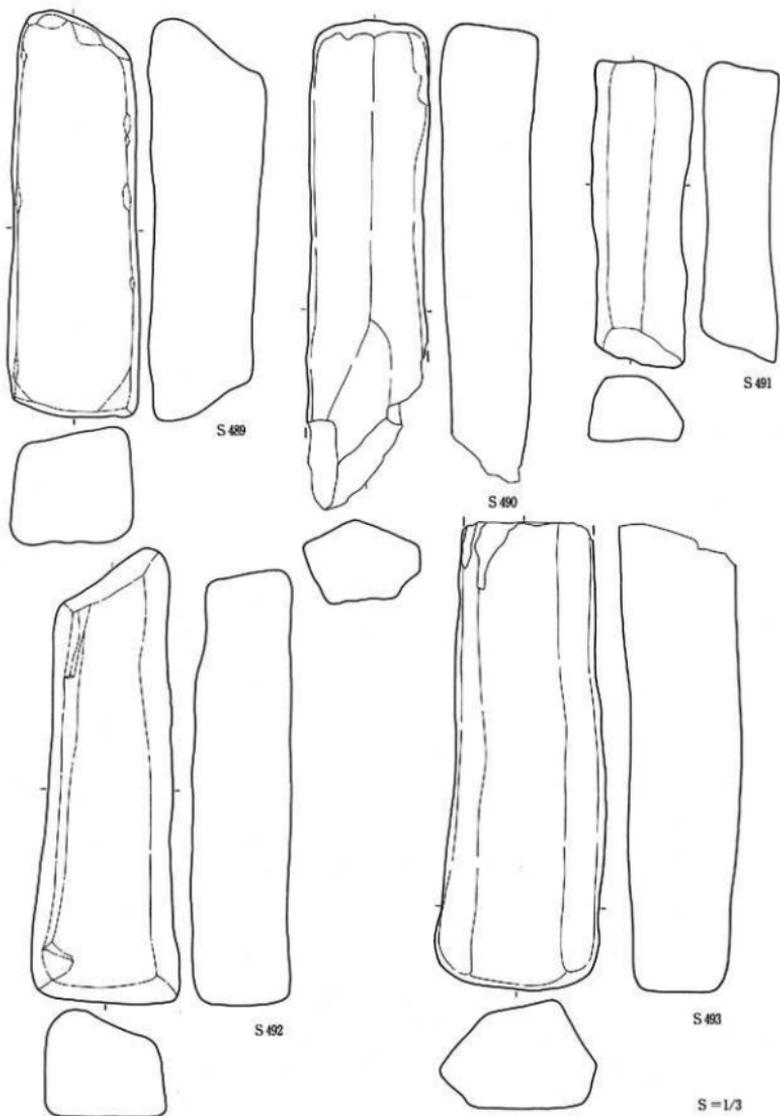
第121図 遺構外出土遺物 石製品(1)



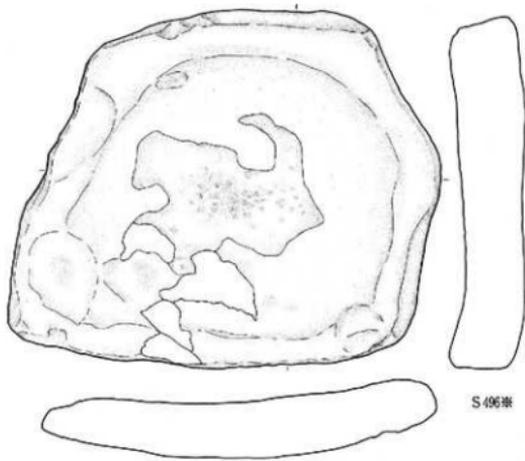
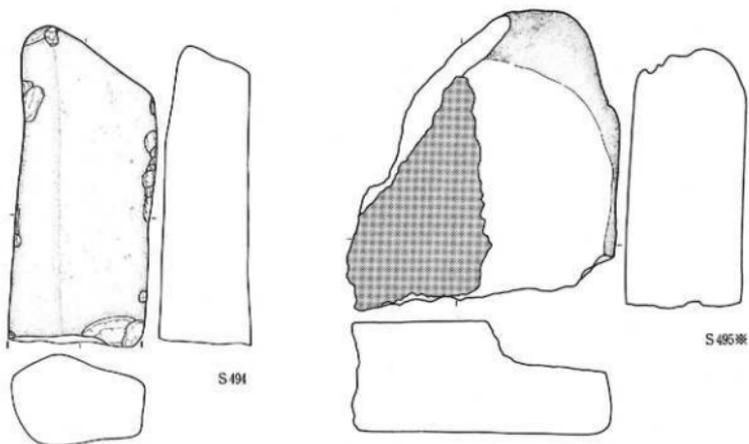
第122圖 遺構外出土遺物 石製品(2)



第123回 遺構外出土遺物 石製品 (3)



第124圖 遺構外出土遺物 石製品(4)



第125図 遺構外出土遺物 石製品(5)・古銭

V. 自然科学的分析

1. 黒曜石の産地同定

本節は、7a グリッドⅡ層から出土した黒曜石製石鏃1点(掲載番号S159)について、薬科哲男氏へ依頼した原産地分析の結果報告である。

清水ヶ野遺跡出土の黒曜石製石器・剥片の原材産地分析

薬科哲男(京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりササカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている^{1, 2, 3)}。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、岩石と露頭原石の組成が一致すれば、その露頭から流れた岩石であると言うことは、自然法則に従って流れたルートを証明できる。産地分析では石器とある産地の原石が一致したからと言って、その産地のものと言い切れないが、一致しなかった場合、その産地のものとは違うと言い切れるのが大原則である。人が移動させた石器の組成とA産地原石の組成が一致したからと言って、産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、移動ルートが自然の法則に従って証明できず、その石器がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証明できないために、A産地だと言い切れない。A産地と一致しなかったと言う結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはA産地と交流がなかったと言い切れる。考古学は、様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの素材があり、一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。地質など自然科学の場合は、自然科学的方法(物理・化学的方法)に従って、産地を特定するが、分析装置を使用すれば科学的分析と誤解している科学者がみられるが、装置は物差しにすぎず、得られた結果を自然の法則に従って処理し産地を特定しなければならない。考古学者は考古学を基準にして、例えば産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する。または原産地地方との交流が石器以外の他の遺物で証明されているなどの条件を考えて、石器の石質と一致する最も近い産地の原石を肉眼観察を基準にして推測する。この結果が信用される場合は、石質の一致よりも、産地との交流を推測しても考古学条件に無理がないためである。これは、遺跡から500km以上離れた産地の石材が石器と一致しても、遠距離の産地を言わず、近く的一致した産地しか言わないことから分かる。従って、実際に遠距離から伝播した原材でも、近くの産地のものとして処理している。日本中の産地の石材を観察すると、とても肉眼観察で産地を特定することはできないと思う。また地質学者に聞いても、とても肉眼観察で産地など特定できないと言う人が多い。石器原材の岩石名、産出産地を述べる場合客観的なデータに基づいて決定した結果を記さなければ、報告書全体が正確さを欠くように思われる。黒曜石、ササカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地特定する指標とした。分類の指

標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができ、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。今回分析を行なった試料は、湯田町に位置する清水ヶ野遺跡から出土した縄文時代前期～中期の集落から出土した1個の黒曜石製石鐮の産地分析についての結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、 Ca/K 、 Ti/K 、 Mn/Zr 、 Fe/Zr 、 Rb/Zr 、 Sr/Zr 、 Y/Zr 、 Nb/Zr の比量をそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し表1に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると170個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの梶加沢地点、また白土沢、八号沢などより転搬として黒曜石が採取できる。赤石山の大量の黒曜石は色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った（旧白滝第2群）、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転搬は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。梶加沢よりの転搬の中で70%は梶加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝二股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝二股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝二股産原石は十三ノ沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上1梶町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原産地が十勝一袋群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美豊台地から産出する黒曜石から2個の美豊原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布野水池から1名寄にかけて黒曜石の円礫が採取される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群それぞれ分類された。また、滝川市江別乙で採集される親指人の

黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとなり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開折された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。この原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえない原石で赤井川第一群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第二群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鯉ヶ沢地区に流入する中村川の支流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ板および西津軽郡森田村鶴ヶ板地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、成田群、浪岡町泉民の森地区より産出の大沢淵群（旧浪岡群）は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大沢淵産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石礫が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。男鹿群は秋田県男鹿市の男鹿半島の金ヶ崎温泉のあった海岸より採取された原石で作られ、男鹿半島の脇本地区で採取された原石の組成は男鹿群と相互に近似していることから、この両産地の原石の起源は同じと考えられる。岩手県の黒曜石原産地は北上川に沿った範囲に点々と見られ、雫石群は岩手郡雫石町の小赤沢地区の礫層から採取された原石で作られ、折戸群は水沢市真城の折戸地区の礫層より採取された円礫で作られ、花泉群は西磐井郡花泉町の弘田および金沢の向地区の礫層より採取された小円礫の原石で作られた原石群である。これら岩手県の原石群の組成は相互に似ていて、これら原産地を元素組成で明確に区別できなく、遺物を分析してたとえこれら岩手県下の原石群中の一地点に同定されても、この遺物の原石産地はこれら岩手県内の複数の原産地を考えなければならない。月山群は羽黒山から月山にかけての西麓付近に点々と分布する黒曜石産出地点より採取した原石で作った群である。最近、鈴木氏より提供された黒曜石原石は、寒河江市から転搬として産出した黒曜石原石で、西北九州の中町産地の原石と組成が似るが、一致せず全く新しい組成の黒曜石と判明し、寒河江群として原石群に加えた。湯倉群は宮城県加美郡宮崎町柳瀬の湯倉真珠岩層の露頭付近で採取された原石で作られた群である。新高島内の原産地では、佐渡島は大佐渡山地の南部に位置し、所在地は佐渡郡金井町望林、二ツ板地域から佐和田町の境にかかる地帯である。今回分析した黒曜石は林道工事のときに産出した円礫状の原石で、1cmから3cmの大きさのものが大部分で、大きな原石は長径が約10cmのものが確認できた。現在、林道での採取は困難で、僅かに同地域の沢で少量採取できるにすぎない。この沢で採取した最大の原石は長径が約5cmの円礫で、小型の石礫を作るには十分の大きさである。元素比の組成の似たもので群を作ると、佐渡第一群と佐渡第二群の二つの群にまとなる。これら佐渡第一、二群は佐渡固有の群で他の産地の原石群と区別することができる。新発田市の板山原石は牧場内に露頭があり、小粒の黒曜石は無数に採取され、牧場整備で土木工事で露出した露頭からは握り拳大の原石を採取することができた。板山原産

から北方約5kmに上石川黒曜石産地があり良質の黒曜石を産出している。また、新津市の秋葉山地区から小粒の黒曜石が産出することが知られていた。また、秋葉山南方約3kmの金津地区から新たに黒曜石が産出している地点が明らかになり金津産原石で金津群を作った。この他新潟県では入込瀬村の大白川地区から採取される黒曜石は大半が親指大で肉眼的には良質であるが石器原材として使用された例はない。中信高原地域の黒曜石産地の中で、霧ヶ峰群は、長野県下諏訪町金明水、早ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町観音沢の露頭の原石も、霧ヶ峰群に一致する元素組成を示した。和田峠地域産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田峠トンネルを中心にした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成で分類すると、和田峠第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かたれる。和田峠第一、第三群に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田峠第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田峠第四群は男女倉側の新トンネルの入り口、また、和田峠第五、第六群は男女倉側新トンネル入り口北側で、和田峠第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女倉産地の原石は男女倉群にまとも組成は和田峠第五群に似る。鷹山、星ヶ峰の黒曜石の中に和田峠第一群に属する物が多数みられる。支草峠群は大石川の支流および支草峠より採取された原石で作られた。これら中信高原の原産地は、元素組成で和田峠、霧ヶ峰、男女倉、支草峠の各地域に区別される。伊豆箱根地方の原産地は笛塚、畑宿、鍛冶屋、上多賀、柏峠西の各地域にあり、良質の石材は、畑宿、柏峠西で斑晶の多いやや石質の悪いものは鍛冶屋、上多賀の両原産地でみられる。笛塚産のものはピッチストーン様で、石器原材としては良くないであろう。伊豆諸島の神津島原産地は砂糠崎、長浜、沢尻湾、恩馳島の各地点から黒曜石が採取され、これら原石から神津島第一群および第二群の原石群にまともられる。浅間山の火砕岩の黒曜石は貝殻状剥離せず石器の原材料としては不適當ではあるが、考古学者の間ではしばしば話題に上るため大窪沢群として遺物と比較した。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水合層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かず産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値には、不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した清水ヶ野遺跡出土の黒曜石製遺物の分析結果を表2に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを見ると、表2の試料番号65420番の遺物ではRb/Zrの値は0.312で、霏石群の[平均値]±[標準偏差値]は、0.305±0.016である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から2.3 σ 離れている。ところで霏石群の原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から±2.3 σ のずれより大きいものが2個ある。すなわち、この遺物が、霏石群の原石から作られていたと仮定しても、2.3 σ 以上離れる確率は2%であると言える。だから、霏石群の平均値から2.3 σ しか離れていないときには、この遺物が霏石群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を寒河江群と比較すると、寒河江群の平均値からの隔たりは、約10 σ である。これを確率の言葉で表現すると、寒河江群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から10 σ 以上離れている確率は、百百分の一であると

える。このように、百億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、寒河江群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は隕石群に2%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから隕石産原石が使用されていると同定され、さらに寒河江群に1億万分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから寒河江産原石でないと同定される」。遺物が一つの産地（隕石産地）と一致したからと言って、例えば隕石群と寒河江群の原石は成分が異なっても、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（隕石産地）に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の170個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて隕石系（隕石、花泉、折居産地）の何れかの石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一の元素だけでなく、前述した8ヶの元素で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出すようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する¹⁾。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では170個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる、すなわち、隕石系産原石と判定された遺物について、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表3に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラッキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D²の値を記す。今回分析した石製の原石産地は隕石系の原石が使用されていると判定した。隕石系の原石とは北上川に沿った範囲に点々と見られ、隕石群は岩手郡隕石町の小沢沢地区の礫層から採取された原石で作られ、折居群は水沢市真城の折居地区の礫層より採取された円礫で作られ、花泉群は西磐井郡花泉町の払出および金沢の高地区の礫層より採取された小円礫の原石で作られた原石群である。これら岩手県産の原石群の組成は相互に似ていて、これら原産地を元素組成で明確に区別できなく、遺物を分析してたとえこれら岩手県下の原石群の中の一地点に同定されても、この遺物の原石産地はこれら岩手県内の複数の原産地を考えなければならない。現時点では、この3ヶ所であるが、北上川周辺地域を詳細に調査をすれば、新たに隕石系の組成の産地が発見される可能性があり、遺跡調査に平行して原石産地も古代人の活動した範囲として調査し、新たな産地が発見されなければ、分析した石製の原石産地は、隕石、花泉、折居産地の何れかと特定できる。

参考文献

- 1) 薬科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)。考古学と自然科学, 8 : 61-69
- 2) 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11 : :53-81 : 33-47
- 3) 薬科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16 : 59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9 : 77-90
- 5) 東村武信(1990), 考古学と物理化学。学生社

表 1-1 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	分群 群名	Cs/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
北海道	名寄第一	0.478±0.011	0.121±0.005	0.035±0.007	2.011±0.063	0.814±0.032	0.574±0.022	0.130±0.017	0.034±0.016	0.033±0.002	0.451±0.010
	名寄第二	0.309±0.015	0.103±0.005	0.021±0.006	1.774±0.065	0.866±0.044	0.586±0.011	0.301±0.022	0.028±0.020	0.028±0.007	0.394±0.010
	白根	0.173±0.014	0.061±0.003	0.079±0.013	2.714±0.112	1.340±0.059	0.283±0.019	0.475±0.030	0.073±0.026	0.028±0.002	0.374±0.012
	札幌	0.138±0.010	0.022±0.002	0.105±0.017	3.123±0.127	1.846±0.045	0.106±0.015	0.748±0.046	0.078±0.046	0.028±0.008	0.389±0.042
	区	0.139±0.009	0.023±0.001	0.099±0.015	2.976±0.102	1.784±0.077	0.104±0.010	0.470±0.037	0.103±0.027	0.028±0.002	0.369±0.007
青森県	近文台第一	0.819±0.013	0.165±0.006	0.081±0.010	3.286±0.117	0.604±0.031	0.941±0.030	0.039±0.020	0.039±0.016	0.027±0.005	0.365±0.011
	近文台第二	0.517±0.011	0.099±0.005	0.067±0.090	2.773±0.097	0.812±0.037	0.816±0.034	0.197±0.024	0.041±0.019	0.025±0.002	0.442±0.008
	第一	0.514±0.012	0.098±0.006	0.066±0.014	2.766±0.125	0.814±0.068	0.816±0.042	0.199±0.039	0.078±0.008	0.034±0.002	0.443±0.011
	第二	0.249±0.017	0.122±0.006	0.078±0.011	1.614±0.068	0.995±0.037	0.458±0.023	0.235±0.024	0.023±0.021	0.022±0.004	0.334±0.013
	第三	0.506±0.016	0.098±0.005	0.070±0.011	2.750±0.099	0.805±0.042	0.808±0.032	0.197±0.026	0.027±0.016	0.027±0.003	0.371±0.010
	第四	0.523±0.016	0.122±0.006	0.077±0.009	1.613±0.090	1.017±0.045	0.459±0.025	0.233±0.029	0.038±0.018	0.025±0.003	0.370±0.010
	第五	0.510±0.015	0.098±0.005	0.068±0.009	2.740±0.072	0.802±0.039	0.812±0.019	0.192±0.026	0.032±0.023	0.030±0.004	0.393±0.011
	第六	0.326±0.008	0.128±0.005	0.045±0.008	1.813±0.092	0.824±0.034	0.454±0.020	0.179±0.023	0.044±0.020	0.030±0.002	0.412±0.010
	第七	0.259±0.018	0.074±0.003	0.068±0.010	2.281±0.087	0.997±0.035	0.434±0.023	0.354±0.029	0.064±0.025	0.029±0.002	0.396±0.013
	第八	0.494±0.009	0.134±0.007	0.052±0.010	2.633±0.181	0.802±0.061	0.707±0.044	0.199±0.029	0.039±0.023	0.033±0.002	0.442±0.015
岩手県	第一	0.593±0.038	0.144±0.012	0.065±0.010	3.059±0.251	0.762±0.040	0.754±0.051	0.197±0.026	0.038±0.022	0.034±0.002	0.419±0.009
	第二	0.258±0.029	0.070±0.004	0.066±0.010	2.213±0.104	0.969±0.060	0.428±0.021	0.309±0.024	0.038±0.023	0.027±0.002	0.371±0.009
	第三	0.084±0.006	0.104±0.002	0.080±0.010	2.297±0.083	0.970±0.045	0.436±0.026	0.245±0.021	0.070±0.029	0.025±0.007	0.371±0.007
	第四	0.473±0.019	0.148±0.007	0.060±0.015	1.764±0.072	0.518±0.027	0.617±0.028	0.187±0.020	0.028±0.017	0.032±0.002	0.469±0.013
宮城県	第一	0.377±0.009	0.133±0.006	0.065±0.008	1.723±0.066	0.516±0.019	0.510±0.018	0.177±0.016	0.007±0.015	0.030±0.005	0.431±0.010
	第二	0.190±0.015	0.075±0.003	0.040±0.008	1.575±0.066	1.241±0.046	0.318±0.014	0.141±0.023	0.076±0.021	0.024±0.002	0.348±0.010
	第三	0.346±0.022	0.132±0.007	0.231±0.019	2.268±0.095	0.865±0.044	1.104±0.055	0.299±0.038	0.179±0.031	0.038±0.003	0.499±0.015
	第四	0.080±0.008	0.097±0.011	0.013±0.002	0.697±0.021	0.128±0.009	0.002±0.002	0.964±0.007	0.035±0.004	0.026±0.002	0.379±0.010
	第五	0.077±0.005	0.098±0.003	0.013±0.002	0.701±0.019	0.134±0.005	0.002±0.002	0.070±0.005	0.034±0.006	0.027±0.005	0.384±0.009
秋田県	第一	0.250±0.024	0.040±0.003	0.068±0.012	2.358±0.237	1.168±0.062	0.521±0.063	0.277±0.045	0.076±0.025	0.029±0.002	0.362±0.015
	第二	0.084±0.006	0.104±0.004	0.013±0.002	0.691±0.021	0.123±0.006	0.002±0.002	0.969±0.010	0.033±0.005	0.025±0.002	0.399±0.007
	第三	0.344±0.017	0.132±0.007	0.232±0.023	2.261±0.143	0.981±0.052	1.081±0.060	0.300±0.039	0.186±0.037	0.037±0.002	0.466±0.018
	第四	0.252±0.017	0.068±0.009	0.079±0.033	2.548±0.231	1.149±0.069	0.568±0.108	0.288±0.037	0.049±0.036	0.028±0.005	0.383±0.018
	第五	0.673±0.479	0.203±0.149	0.267±0.217	21.648±1.500	0.090±0.021	1.708±0.102	0.156±0.015	0.169±0.031	0.053±0.042	0.858±0.086
	第六	0.283±0.016	0.067±0.008	0.077±0.029	2.519±0.118	1.147±0.065	0.558±0.067	0.286±0.038	0.047±0.040	0.028±0.003	0.385±0.018
	第七	0.294±0.009	0.087±0.004	0.220±0.018	1.644±0.081	1.493±0.081	0.930±0.043	0.287±0.039	0.068±0.040	0.029±0.020	0.365±0.008
山形県	第一	0.295±0.006	0.087±0.004	0.219±0.017	1.671±0.077	1.503±0.072	0.939±0.054	0.286±0.045	0.108±0.034	0.028±0.006	0.367±0.009

表1-2 各黒曜石の産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

産地	原石群名	分析 順数	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
山形県	月山	44	0.385±0.021	0.123±0.017	0.182±0.016	1.905±0.096	0.940±0.069	1.022±0.071	0.278±0.036	0.119±0.033	0.033±0.002	0.443±0.014	
		45	0.385±0.026	0.116±0.005	0.049±0.017	1.806±0.034	0.890±0.025	0.441±0.023	0.212±0.020	0.056±0.015	0.033±0.003	0.460±0.010	
		25	0.616±0.033	0.187±0.012	0.062±0.007	1.784±0.011	0.303±0.016	0.303±0.016	0.431±0.021	0.209±0.016	0.045±0.014	0.041±0.005	0.591±0.014
		22	0.615±0.035	0.180±0.016	0.058±0.007	1.751±0.062	0.300±0.023	0.300±0.023	0.421±0.051	0.238±0.079	0.045±0.011	0.045±0.006	0.594±0.048
宮城県	花泉	30	0.690±0.048	0.147±0.018	0.056±0.008	1.742±0.072	0.314±0.019	0.409±0.025	0.239±0.016	0.044±0.013	0.041±0.003	0.890±0.030	
		31	1.174±0.068	0.349±0.017	0.057±0.005	2.544±0.149	0.116±0.009	0.658±0.024	0.138±0.015	0.020±0.013	0.073±0.003	0.956±0.040	
栃木県	成原山	37	0.629±0.395	1.639±0.104	0.178±0.017	11.362±1.150	0.168±0.018	1.298±0.063	0.158±0.016	0.037±0.018	0.077±0.002	0.720±0.032	
		40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.044±0.007	2.016±0.110	0.381±0.025	0.502±0.028	0.190±0.017	0.023±0.014	0.036±0.003	0.510±0.012	
東京都	神津島第一群	56	0.381±0.014	0.126±0.005	0.102±0.011	1.729±0.079	0.471±0.027	0.698±0.037	0.267±0.021	0.090±0.026	0.036±0.003	0.504±0.012	
		23	0.317±0.016	0.120±0.008	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.656±0.050	0.388±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.069	
神奈川県	磯原・四ノ宮	40	0.318±0.020	0.120±0.006	0.118±0.014	1.805±0.098	0.614±0.038	0.664±0.045	0.291±0.059	0.093±0.039	0.034±0.006	0.476±0.012	
		30	0.765±0.254	2.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.258±0.017	0.025±0.019	0.140±0.008	1.529±0.095	
静岡県	島津原	41	0.656±0.064	0.669±0.019	0.076±0.007	2.912±0.194	0.962±0.007	0.680±0.029	0.262±0.011	0.011±0.010	0.060±0.005	1.126±0.031	
		31	1.602±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.901±0.020	
静岡県	上多賀	31	1.320±0.078	0.294±0.018	0.641±0.006	1.697±0.065	0.687±0.009	0.851±0.023	0.138±0.011	0.010±0.009	0.059±0.004	0.856±0.038	
		35	1.215±0.164	0.314±0.028	0.631±0.004	1.699±0.167	0.110±0.007	0.891±0.022	0.143±0.007	0.009±0.009	0.047±0.004	0.663±0.020	
富山県	小豆峠	40	0.310±0.008	0.082±0.004	0.297±0.038	3.211±0.319	0.829±0.089	0.154±0.039	0.547±0.054	0.067±0.057	0.025±0.014	0.429±0.016	
		12	0.279±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.194±0.014	0.162±0.021	0.027±0.002	0.372±0.009	
長野県	一上山第一群	36	0.319±0.017	0.113±0.006	0.040±0.008	1.720±0.080	0.740±0.062	0.665±0.029	0.121±0.036	0.047±0.031	0.015±0.014	0.391±0.019	
		40	0.710±0.017	0.202±0.008	0.054±0.011	1.994±0.152	0.418±0.029	0.840±0.050	0.118±0.026	0.051±0.031	0.020±0.020	0.599±0.024	
長野県	和国神社第一群	45	0.441±0.022	0.108±0.014	0.079±0.021	2.251±0.138	0.704±0.156	1.222±0.088	0.127±0.041	0.067±0.053	0.018±0.014	0.412±0.055	
		171	0.138±0.009	0.066±0.003	0.104±0.011	1.339±0.057	1.078±0.047	0.360±0.023	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.015		
長野県	霧ヶ峰	143	0.167±0.028	0.049±0.008	0.117±0.011	1.346±0.089	1.483±0.068	0.409±0.048	0.139±0.059	0.025±0.002	0.335±0.016		
		17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.036±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007	
長野県	霧ヶ峰	62	0.248±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.104	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017	
		37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.306±0.030	0.283±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019	
長野県	霧ヶ峰	47	0.156±0.011	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.659±0.093	0.659±0.058	0.179±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.300±0.019	
		53	0.150±0.011	0.065±0.005	0.066±0.012	1.223±0.064	1.529±0.093	0.134±0.031	0.284±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012	
長野県	霧ヶ峰	54	0.132±0.004	0.012±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.645±0.010	0.442±0.022	0.026±0.002	0.360±0.015		
		119	0.228±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.061	0.701±0.109	0.469±0.052	0.128±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.068	
長野県	霧ヶ峰	68	0.250±0.020	0.138±0.011	0.049±0.009	1.403±0.069	0.530±0.042	0.764±0.031	0.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017	
		83	0.203±0.027	0.129±0.007	0.068±0.010	1.630±0.179	0.608±0.052	0.802±0.058	0.111±0.024	0.037±0.032	0.027±0.002	0.401±0.017	
長野県	霧ヶ峰	42	1.481±0.117	0.466±0.021	0.042±0.006	2.005±0.135	0.182±0.011	0.841±0.014	0.105±0.010	0.009±0.008	0.033±0.005	0.459±0.012	

表 1-3 各標石の原産地における原岩群の元素比の平均値と標準偏差

原産地 原岩群名	分析 個数	要 素 比									
		Cs/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Ai/K	Si/K
新潟県	佐渡第一 #第一	0.225±0.013	0.078±0.006	0.620±0.035	1.499±0.079	0.821±0.047	0.288±0.018	0.142±0.018	0.049±0.017	0.024±0.004	0.338±0.03
	上石川	0.263±0.032	0.097±0.018	0.620±0.036	1.501±0.083	0.717±0.106	0.326±0.029	0.085±0.023	0.068±0.015	0.029±0.002	0.359±0.069
	坂白石	0.321±0.007	0.070±0.003	0.669±0.011	2.061±0.070	0.981±0.042	0.773±0.024	0.182±0.023	0.036±0.027	0.008±0.007	0.359±0.069
	坂白石川	0.232±0.011	0.068±0.003	0.699±0.017	2.178±0.110	1.772±0.098	0.374±0.047	0.184±0.034	0.027±0.002	0.021±0.001	0.359±0.069
	坂白石川	0.569±0.012	0.149±0.007	0.633±0.015	1.698±0.049	0.261±0.012	0.332±0.011	0.160±0.015	0.023±0.011	0.008±0.003	0.359±0.069
新潟県	会津川	0.331±0.011	0.097±0.037	0.630±0.007	1.711±0.068	0.618±0.027	0.283±0.012	0.181±0.018	0.035±0.018	0.022±0.009	0.402±0.02
	津橋川	0.163±0.019	0.053±0.006	0.669±0.011	1.354±0.058	1.615±0.028	0.984±0.012	0.306±0.038	0.100±0.028	0.023±0.007	0.340±0.030
石川県	比呂	0.370±0.014	0.087±0.004	0.660±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.062±0.018	0.032±0.002	0.396±0.037
	安曇	0.407±0.007	0.123±0.005	0.638±0.006	1.639±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.119±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.460±0.030
高知県	三山	0.360±0.018	0.123±0.008	0.608±0.006	1.561±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.999±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.068
	加津	0.166±0.008	0.093±0.008	0.614±0.003	0.899±0.031	0.278±0.017	0.069±0.017	0.061±0.015	0.154±0.018	0.039±0.001	0.249±0.098
	津津	0.181±0.008	0.132±0.182	0.615±0.003	0.940±0.041	0.301±0.014	0.016±0.005	0.060±0.013	0.144±0.008	0.039±0.002	0.244±0.068
福岡県	久見	0.145±0.006	0.061±0.003	0.621±0.004	0.989±0.023	0.388±0.011	0.607±0.003	0.109±0.013	0.238±0.011	0.023±0.002	0.316±0.065
	八女昭和池	0.261±0.010	0.211±0.007	0.633±0.003	0.789±0.027	0.326±0.013	0.283±0.015	0.071±0.009	0.034±0.008	0.034±0.006	0.279±0.060
佐賀県	中野第一群 #第一	0.218±0.007	0.087±0.003	0.627±0.005	1.619±0.085	0.628±0.028	0.348±0.015	0.102±0.018	0.076±0.018	0.023±0.007	0.321±0.011
	野田	0.345±0.007	0.104±0.003	0.627±0.005	1.536±0.039	0.455±0.017	0.397±0.014	0.069±0.016	0.059±0.014	0.056±0.008	0.328±0.031
	梅原	0.657±0.014	0.202±0.006	0.671±0.013	4.239±0.205	1.048±0.065	1.269±0.058	0.104±0.022	0.380±0.047	0.029±0.005	0.345±0.069
	藤原	0.214±0.015	0.029±0.001	0.676±0.012	2.694±0.110	1.086±0.085	0.441±0.030	0.299±0.039	0.287±0.029	0.027±0.002	0.356±0.068
	柳井	0.414±0.009	0.071±0.003	0.101±0.017	2.947±0.142	1.253±0.081	2.015±0.099	0.147±0.038	0.255±0.040	0.009±0.007	0.398±0.069
佐賀県	柳井第一群 #第一	0.600±0.067	0.183±0.029	0.125±0.018	4.692±0.369	1.170±0.114	2.093±0.122	0.171±0.032	0.285±0.037	0.033±0.003	0.376±0.068
	柳井第二群 #第二	0.953±0.027	0.307±0.010	0.126±0.013	6.696±0.342	0.868±0.070	1.907±0.119	0.147±0.029	0.194±0.028	0.033±0.008	0.383±0.030
長崎県	久喜	0.172±0.009	0.066±0.002	0.630±0.005	1.176±0.043	0.358±0.012	0.011±0.004	0.132±0.018	0.354±0.014	0.029±0.002	0.276±0.047
	池野	0.174±0.007	0.065±0.002	0.633±0.005	1.174±0.035	0.389±0.012	0.013±0.006	0.129±0.014	0.356±0.012	0.029±0.003	0.275±0.068
	坂角	0.146±0.009	0.038±0.002	0.659±0.009	1.691±0.100	1.786±0.085	0.035±0.008	0.314±0.040	0.717±0.047	0.029±0.002	0.338±0.030
	島	0.125±0.010	0.037±0.002	0.686±0.009	1.748±0.073	1.834±0.064	0.022±0.013	0.334±0.046	0.714±0.040	0.021±0.009	0.339±0.035
	松浦	0.218±0.010	0.029±0.002	0.685±0.013	2.699±0.126	1.671±0.084	0.430±0.027	0.284±0.047	0.366±0.028	0.027±0.002	0.359±0.032
熊本県	第一群 #第一	0.176±0.016	0.030±0.004	0.662±0.022	2.364±0.389	1.407±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.361±0.030
	第二群 #第二	0.216±0.019	0.060±0.006	0.645±0.012	1.976±0.240	0.678±0.039	0.421±0.061	0.130±0.030	0.145±0.023	0.038±0.033	
	第三群 #第三	0.287±0.019	0.067±0.004	0.644±0.007	1.908±0.106	0.765±0.074	0.484±0.034	0.116±0.023	0.117±0.018	0.029±0.001	0.367±0.047
	第四群 #第四	0.334±0.014	0.080±0.004	0.644±0.009	1.744±0.060	0.539±0.030	0.485±0.039	0.094±0.023	0.119±0.017	0.027±0.002	0.503±0.030
	第五群 #第五	0.248±0.017	0.058±0.008	0.657±0.007	1.884±0.085	0.823±0.082	0.403±0.025	0.110±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.383±0.047
鹿児島県	第一群 #第一	0.327±0.030	0.080±0.017	0.645±0.007	1.832±0.074	0.653±0.088	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.358±0.042
	第二群 #第二	0.192±0.020	0.027±0.003	0.660±0.016	2.699±0.215	1.709±0.164	0.413±0.065	0.210±0.056	0.259±0.040	0.027±0.002	0.368±0.038
	第三群 #第三	0.414±0.012	0.078±0.006	0.692±0.018	2.898±0.304	1.221±0.074	0.951±0.154	0.133±0.047	0.281±0.034	0.031±0.002	0.358±0.030
	第四群 #第四	0.267±0.035	0.062±0.009	0.664±0.009	1.309±0.131	0.815±0.113	0.815±0.082	0.101±0.023	0.145±0.027	0.029±0.002	0.364±0.042
	第五群 #第五	0.341±0.009	0.054±0.006	0.640±0.008	1.626±0.114	0.835±0.068	0.281±0.028	0.190±0.032	0.124±0.039	0.039±0.011	0.311±0.047
大分県	0.161±0.011	0.061±0.002	0.637±0.006	1.718±0.056	0.946±0.030	0.179±0.018	0.019±0.020	0.137±0.019	0.039±0.002	0.340±0.068	

表 1-4 各産別石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	分析個数	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Sr/K	
大分県	第一群	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.829±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
	第二群	33	0.231±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.175	0.355±0.097	0.669±0.105	0.035±0.002	0.451±0.009
	第三群	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.599±0.322	6.114±0.077	3.169±0.189	0.444±0.031	0.240±0.041	0.040±0.004	0.471±0.017
	第四群	29	1.074±0.110	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	3.305±0.067	4.902±0.174	0.109±0.021	0.137±0.025	0.040±0.004	0.469±0.014
	第五群	10	0.974±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.469±0.301	2.268±0.048	4.010±0.197	0.101±0.022	0.133±0.028	0.040±0.004	0.469±0.014
	第六群	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	6.605±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.038±0.002	0.448±0.015
	第七群	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	6.600±0.051	6.684±0.082	0.175±0.018	0.105±0.020	0.038±0.002	0.371±0.009
	第八群	50	1.615±0.042	0.670±0.013	0.095±0.008	5.509±0.259	8.284±0.031	1.526±0.053	0.897±0.016	0.035±0.018	0.033±0.005	0.310±0.011
	第九群	64	0.462±0.036	0.286±0.015	0.081±0.006	1.361±0.060	3.303±0.019	7.112±0.043	0.269±0.018	0.058±0.021	0.012±0.010	0.288±0.016
	熊本県	第一群	30	0.317±0.023	0.137±0.005	0.063±0.007	1.441±0.070	6.611±0.032	7.028±0.044	0.175±0.023	0.097±0.017	0.025±0.002
第二群		44	0.281±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	3.226±0.012	2.276±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.006
第三群		44	0.298±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	3.329±0.017	2.778±0.019	0.068±0.011	0.031±0.009	0.020±0.003	0.243±0.006
第四群		21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.780±0.038	3.324±0.011	2.719±0.017	0.064±0.011	0.030±0.006	0.025±0.002	0.277±0.009
第五群		32	1.391±0.013	0.641±0.009	0.100±0.006	6.846±0.178	3.316±0.022	1.319±0.039	0.099±0.013	0.038±0.014	0.021±0.008	0.227±0.006
第六群		63	1.597±0.098	0.732±0.046	0.097±0.008	6.690±0.314	2.822±0.022	1.316±0.021	0.102±0.013	0.037±0.015	0.024±0.011	0.257±0.021
第七群		84	0.791±0.082	0.279±0.009	0.045±0.005	1.208±0.023	6.279±0.018	8.111±0.046	0.046±0.012	0.029±0.014	0.031±0.009	0.386±0.033
第八群		53	1.642±0.125	0.670±0.033	0.089±0.010	4.894±0.474	2.719±0.028	1.432±0.089	0.094±0.013	0.027±0.016	0.021±0.008	0.312±0.011
第九群		78	0.208±0.021	0.101±0.009	0.024±0.006	1.352±0.066	1.021±0.059	3.351±0.037	0.162±0.027	0.027±0.022	0.022±0.007	0.317±0.009
宮崎県		第一群	47	0.207±0.015	0.094±0.005	0.070±0.009	1.521±0.075	1.080±0.048	4.118±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.026±0.003
	第二群	33	0.291±0.015	0.094±0.006	0.065±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	7.752±0.039	0.205±0.029	0.047±0.026	0.022±0.002	0.323±0.009
	第三群	26	35.198±1.118	5.901±0.175	0.041±0.002	0.038±0.002	0.909±0.001	0.156±0.005	0.335±0.019	0.009±0.000	0.035±0.019	0.446±0.022
鹿児島県	第一群	45	0.186±0.010	0.083±0.005	0.047±0.008	1.611±0.079	9.948±0.055	3.140±0.032	0.291±0.031	0.041±0.032	0.022±0.008	0.358±0.014
	第二群	45	0.247±0.018	0.106±0.006	0.047±0.008	1.488±0.074	7.658±0.034	4.428±0.049	0.235±0.020	0.039±0.027	0.024±0.008	0.378±0.010
	第三群	42	0.594±0.012	0.176±0.005	0.037±0.007	1.484±0.097	4.749±0.031	6.676±0.049	0.143±0.023	0.038±0.022	0.023±0.014	0.390±0.010
	第四群	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.178±0.040	7.112±0.028	4.498±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	第五群	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.003	1.170±0.064	7.055±0.021	4.406±0.021	0.088±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
	第六群	41	1.629±0.068	0.801±0.037	0.053±0.006	3.245±0.215	1.185±0.013	1.106±0.056	0.897±0.009	0.022±0.009	0.036±0.002	0.391±0.011
	第七群	31	1.944±0.054	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	1.184±0.011	1.266±0.049	0.693±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010
	第八群	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.053±0.009	1.524±0.079	6.919±0.038	7.119±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
	第九群	47	0.552±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.812±0.062	6.644±0.029	6.583±0.028	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
	台湾	第一群	37	0.510±0.010	0.198±0.007	0.038±0.010	1.869±0.079	3.853±0.019	6.919±0.010	0.123±0.012	0.034±0.017	0.026±0.007
第二群		72	0.479±0.012	0.166±0.007	0.046±0.007	1.672±0.059	6.199±0.011	6.097±0.016	0.126±0.011	0.009±0.014	0.039±0.010	0.460±0.009

表1-5 各異種石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差

原産地	原石群名	分析個数	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Y/Zr	Ai/K	Si/K		
北海道	H S 1 産物群	67	0.211±0.021	0.107±0.005	0.018±0.006	1.296±0.077	0.030±0.016	0.183±0.009	0.140±0.015	0.068±0.013	0.018±0.012	0.325±0.042	
	H S 2 産物群	61	0.483±0.010	0.185±0.008	0.041±0.008	1.765±0.075	0.448±0.021	0.119±0.019	0.150±0.015	0.034±0.010	0.000±0.000	0.500±0.085	
	F R 1 産物群	51	0.613±0.012	0.126±0.002	0.052±0.002	2.547±0.143	0.650±0.032	0.659±0.032	0.156±0.023	0.004±0.004	0.029±0.011	0.407±0.047	
	F R 2 産物群	69	0.835±0.061	0.106±0.012	0.053±0.009	2.545±0.138	0.857±0.051	0.686±0.029	0.165±0.021	0.016±0.022	0.027±0.009	0.373±0.043	
	F R 3 産物群	37	0.390±0.037	0.084±0.007	0.052±0.009	2.548±0.145	0.650±0.056	0.681±0.033	0.164±0.021	0.017±0.023	0.023±0.006	0.292±0.047	
	F R 4 産物群	44	0.261±0.043	0.074±0.010	0.051±0.008	2.549±0.147	0.656±0.057	0.679±0.032	0.155±0.021	0.009±0.010	0.008±0.008	0.258±0.036	
	F H 1 産物群	32	0.898±0.032	0.221±0.007	0.054±0.006	2.549±0.147	0.656±0.057	0.679±0.032	0.155±0.021	0.009±0.010	0.008±0.008	0.258±0.036	
	K T 1 産物群	56	1.103±0.080	0.146±0.007	0.061±0.008	2.942±0.153	0.314±0.053	0.776±0.082	0.109±0.013	0.017±0.021	0.037±0.003	0.417±0.041	
	K T 2 産物群	38	0.959±0.027	0.154±0.005	0.085±0.010	2.882±0.092	0.342±0.028	1.111±0.040	0.107±0.015	0.012±0.016	0.045±0.008	0.516±0.035	
	K S 1 産物群	62	0.274±0.007	0.107±0.005	0.047±0.010	1.751±0.081	0.636±0.038	0.468±0.024	0.180±0.019	0.023±0.028	0.028±0.007	0.345±0.030	
秋田県	K S 2 産物群	65	0.244±0.011	0.070±0.004	0.056±0.013	1.749±0.168	1.080±0.108	0.424±0.036	0.327±0.042	0.037±0.031	0.029±0.011	0.379±0.041	
	N K 産物群	107	0.381±0.014	0.121±0.006	0.063±0.007	1.581±0.071	0.347±0.029	0.219±0.014	0.216±0.015	0.054±0.017	0.029±0.011	0.475±0.080	
岩手県	T B 産物群	60	0.282±0.014	0.119±0.007	0.124±0.015	1.805±0.088	0.875±0.056	0.660±0.038	0.272±0.029	0.083±0.037	0.029±0.008	0.378±0.041	
	A I 1 産物群	41	1.519±0.026	0.277±0.010	0.078±0.006	2.849±0.073	0.187±0.010	0.539±0.017	0.251±0.013	0.009±0.012	0.068±0.017	0.929±0.054	
	A I 2 産物群	61	3.141±0.074	0.552±0.021	0.080±0.008	2.752±0.062	0.094±0.009	0.716±0.019	0.242±0.011	0.008±0.014	0.063±0.029	1.353±0.069	
	A I 3 産物群	61	0.950±0.013	0.215±0.004	0.117±0.009	4.306±0.100	0.114±0.008	0.909±0.020	0.248±0.012	0.011±0.013	0.029±0.006	0.360±0.069	
	A I 4 産物群	122	1.550±0.059	0.474±0.025	0.067±0.007	2.658±0.077	0.083±0.006	0.531±0.030	0.177±0.010	0.011±0.013	0.064±0.025	1.081±0.165	
	A I 5 産物群	122	3.187±0.092	0.696±0.027	0.101±0.009	3.787±0.108	0.114±0.010	0.892±0.026	0.241±0.012	0.006±0.012	0.091±0.020	1.234±0.062	
	F S 産物群	45	2.727±0.090	0.997±0.029	0.053±0.007	1.791±0.083	0.217±0.019	0.458±0.024	0.207±0.018	0.029±0.027	0.017±0.011	0.339±0.041	
	S D 産物群	48	2.900±0.050	0.674±0.016	0.118±0.010	3.922±0.077	0.117±0.012	0.906±0.026	0.246±0.013	0.008±0.017	0.063±0.013	1.195±0.059	
	長野県	N K 産物群	57	0.566±0.019	0.163±0.007	0.086±0.011	1.823±0.064	0.467±0.031	1.691±0.064	0.102±0.021	0.041±0.028	0.038±0.003	0.500±0.034
		青森県											
青森県	H Y 産物群	31	0.238±0.011	0.131±0.006	0.048±0.008	1.636±0.066	0.418±0.028	1.441±0.015	0.482±0.024	0.029±0.028	0.020±0.015	0.481±0.068	
	S N 1 産物群	33	0.297±0.006	0.087±0.004	0.053±0.005	1.697±0.037	0.244±0.011	0.259±0.011	0.281±0.012	0.009±0.012	0.021±0.006	0.329±0.066	
長野県	S N 2 産物群	29	0.209±0.006	0.116±0.006	0.076±0.008	1.571±0.082	0.716±0.035	0.292±0.017	0.284±0.029	0.028±0.030	0.023±0.009	0.383±0.035	
	K 1 産物群	40	0.363±0.010	0.098±0.004	0.069±0.011	1.937±0.060	1.028±0.041	0.538±0.026	0.180±0.025	0.032±0.032	0.029±0.010	0.451±0.040	
長野県	U T 産物群	46	0.207±0.013	0.107±0.005	0.053±0.010	1.638±0.104	1.012±0.056	0.739±0.039	0.168±0.027	0.034±0.028	0.024±0.011	0.360±0.044	
	S G 産物群	48	1.668±0.034	0.778±0.038	0.082±0.010	4.106±0.223	0.202±0.014	0.699±0.025	0.133±0.013	0.015±0.019	0.037±0.010	0.553±0.053	
北朝鮮	O K 産物群	32	1.371±0.074	0.687±0.025	0.081±0.008	3.109±0.161	0.202±0.012	0.579±0.027	0.122±0.014	0.009±0.014	0.027±0.018	0.518±0.051	
	会寧城外環 新豊産物群	70	0.135±0.012	0.062±0.006	0.017±0.003	1.118±0.051	0.885±0.026	0.068±0.019	0.150±0.022	0.372±0.035	0.026±0.004	0.319±0.012	
ロシア	イリスタヤ 産物群	26	18.988±2.100	0.950±0.068	0.293±0.032	27.963±2.608	0.065±0.017	2.716±0.162	0.163±0.019	0.006±0.030	0.173±0.020	1.674±0.200	
	IG-1 ¹⁾	127	0.755±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.903±0.026	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.029±0.002	0.342±0.044	
平均値	王冠岩産物群												
	平均値												

a) Anko, A., Kurama, E., Ohmori, T., & Ishida, S. (1974) compilation of data on the QJS geochemical reference samples Jp-1 granulofelsite and Jp-1 lamella. Geochemical Journal Vol. 8, (17)-18.

表2 湯田町清水ヶ野遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
65420	0.662	0.192	0.043	1.679	0.312	0.428	0.201	0.035	0.034	0.571
JG-1	0.763	0.209	0.074	3.734	0.926	1.153	0.313	0.107	0.028	0.332

JG-1 : 標準試料 - Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192 (1974)

表3 湯田町清水ヶ野遺跡出土の黒曜石石器の原産地推定結果

分析番号	資料番号、種類、時期	原産地（確立）	判定	備考
65420	6、石鏃、縄文時代前期～中期	雫石 (81%)、花泉 (39%)、 折居 (35%)	雫石	

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法（土器様式の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。

2. 放射性炭素年代測定

本項は、2号住居跡および3号住居跡の覆土から出土した木炭片について、橿古環境研究所へ依頼した年代測定の結果報告である。なお分析した試料は次のとおりである。

試料No.6 (SMN99-No.1) 2号住居跡覆土下位より採取した木炭片。

試料No.7 (SMN99-No.2) 3号住居跡覆土下位より採取した木炭片。

岩手県清水ヶ野遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. 試料と方法

No.	試料	試料の種類	重量	前処理・調整	測定法
6	SMN99-No.1	炭化物	2.60 g	酸/アルカリ/酸洗浄 長時間測定 ベンゼン処理	β -線計数法 (液体シンチレーション法)
7	SMN99-No.1	炭化物	0.72 g	酸/アルカリ/酸洗浄 石墨調整	AMS法 (加速器質量分析法)

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代	暦年代	測定No. Beta-
No.6	4520 \pm 110	-25.4	4520 \pm 110	交点 BC 3335, BC 3205, BC 3195 2 σ BC 3615 to 3595, BC 3525 to 2900 1 σ BC 3370 to 3025	137665
No.7	4630 \pm 50	-23.5	4650 \pm 50	交点 BC 3490, BC 3465, BC 3375 2 σ BC 3620 to 3590, BC 3525 to 3345 1 σ BC 3510 to 3420, BC 3390 to 3360	137666

- ^{14}C 年代測定値
試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。
- $\delta^{13}\text{C}$ 測定値
試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は、標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(0/100)で表す。
- 補正 ^{14}C 年代値
 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。
- 暦年代
過去の宇宙線強度の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代(西暦)を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定、サンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver M. et al., 1998, Radiocarbon 40(3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。
暦年代との交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)・2 σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。
- 測定No
測定は、Beta Analytic Inc. (Florida, U.S.A.)において行われた。Beta-は同社の測定Noを意味する。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.4; lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-137665

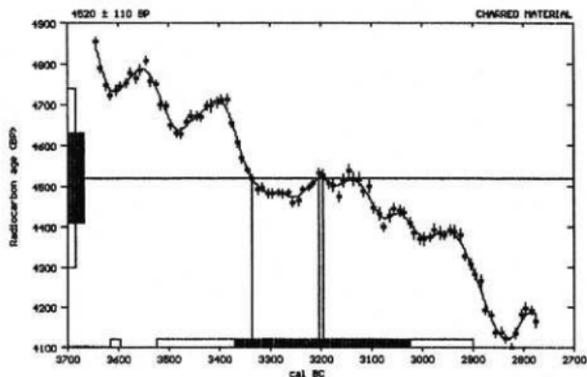
Conventional radiocarbon age: 4520 ± 110 BP

Calibrated results: cal BC 3615 to 3595 (Cal BP 5565 to 5545) and
(2 sigma, 95% probability) cal BC 3525 to 2900 (Cal BP 5475 to 4850)

Intercept data:

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: cal BC 3335 (Cal BP 5285) and
cal BC 3205 (Cal BP 5155) and
cal BC 3195 (Cal BP 5145)

1 sigma calibrated results: cal BC 3370 to 3025 (Cal BP 5320 to 4975)
(68% probability)



References:

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p11-211

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talbot, A. S., Vogel, J. C., 1993, *Radiocarbon* 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

図1 試料№ 6 測定結果

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-23.5; lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-137666

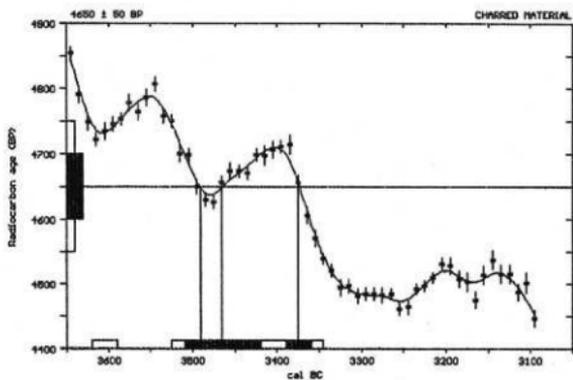
Conventional radiocarbon age: 4650 ± 50 BP

Calibrated results: cal BC 3620 to 3590 (Cal BP 5570 to 5540) and
(2 sigma, 95% probability) cal BC 3525 to 3345 (Cal BP 5475 to 5295)

Intercept data:

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: cal BC 3490 (Cal BP 5440) and
cal BC 3465 (Cal BP 5415) and
cal BC 3375 (Cal BP 5325)

1 sigma calibrated results: cal BC 3510 to 3420 (Cal BP 5460 to 5370) and
(68% probability) cal BC 3390 to 3360 (Cal BP 5340 to 5310)



References:

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plinck, H., 1998, Radiocarbon 40(3), p411-411

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talbot, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com

図2 試料No. 7 測定結果

3. 赤色顔料の蛍光X線分析

本項は、3号住居跡の覆土から出土した石匙（掲載番号 S41）に付着した赤色顔料について、咲山まどか氏へ依頼した蛍光X線分析の結果報告である。

清水ヶ野遺跡出土顔料の自然科学的調査結果

咲山まどか、赤沼英男（岩手県立博物館）

清水ヶ野遺跡から出土した顔料についてその分析を行った。以下にその結果を報告する。

1 分析資料

分析した資料は、縄文時代前期末の壑穴住居跡から出土した石匙に付着する顔料1点である。遺跡内からは同様の石器が出土しているが、顔料の付着が確認されたのは今回分析を行った資料1点のみである¹⁾。

2 分析方法

分析は蛍光X線分析法および粉末X線回折分析による。蛍光X線分析法は試料にX線を照射し、含有される元素が発する二次的なX線（特有X線）を測定するものである。特徴は、非破壊で元素の定性が可能なところであり、試料採取が困難な文化財の分析に適している。粉末X線回折分析法は試料にX線を照射し、試料より回折されるX線を測定するものである。試料の結晶格子間隔の違いにより化合物を同定することができる。

まずはじめに資料に付着している顔料量が少ないことから、大型資料専用蛍光X線分析装置を使用して、顔料が付着している領域と付着が見られない領域それぞれの領域の分析を行い、両者の結果を比較し顔料に含まれる元素を推定した。次に極微量の資料を抽出し、メノウ乳鉢で粉末にした後、粉末X線回折分析装置用ガラス試料板に充填し分析に供した。なお、回折図形の標準としてはJCPDSカードのデータを使用した。

3 分析結果

資料の顔料が付着している面の蛍光X線分析結果を図1 a に、顔料が付着していない面の分析結果を図1 b に示す。蛍光X線分析法により分光結晶 LiF を用い重元素を、分光結晶 Ge・TAP を用いて軽元素 [イオウ (S)、マグネシウム (Mg)] を測定した結果である。図1 a からは鉄 (Fe) の K α 線 ($2\theta = 57.50^\circ$)、K β 線 ($2\theta = 51.71^\circ$) が5000cps以上、チタン (Ti) の K α 線 ($2\theta = 86.11^\circ$)、ストロンチウム (Sr) の K α 線 ($2\theta = 25.10^\circ$)、バリウム (Ba) の L α 線 ($2\theta = 87.20^\circ$)、銅 (Cu) の K α 線 ($2\theta = 45.00^\circ$)、亜鉛 (Zn) の K α 線 ($2\theta = 41.81^\circ$)、マグネシウム (Mg) の K α 線 ($2\theta = 45.21^\circ$)、イオウ (S) の K α 線 ($2\theta = 110.73^\circ$) が100~1000cpsの強度で検出された。これに対し、図1 b の顔料が付着していない石質面ではFeが3500~4000cpsの強度で低レベルに、他の元素は図1 a 同様の強度で分析された。図1 a (顔料付着面のスペクトル) と図1 b を比べると、前者ではFeが約1.5倍の強度であるのに対し、他の元素はほぼ同レベルにある。また、この定性スペクトルからは水銀 (Hg) のピーク L α 線 ($2\theta = 35.89^\circ$)、L β 線 ($2\theta = 30.18^\circ$)、L γ 線 ($2\theta = 25.71^\circ$) は認められなかった。上記の結果に基づけば、石匙付着顔料の発色剤は鉄に起因していることは確実である。

図2のX線回折スペクトルによれば、回折角度 $2\theta = 20.72^\circ$ 、 $2\theta = 26.56^\circ$ 、 $2\theta = 33.08^\circ$ 、 $2\theta =$

35.56°、 $2\theta = 59.81^\circ$ に強いピークが確認され、JCPDSカードと対比すると石英 (Quartz: SiO_2)、ベンガラ (Hematite: FeO_3) の回折パターンとはほぼ一致することがわかった。また、 $2\theta = 41.68^\circ$ に見られる強いピークの同定はできなかった。

上記の結果を総合すると、石英は顔料の付着していた石匙の成分であり、顔料の発色剤はベンガラと判定される。考古学の研究成果によると、石匙は顔料を掻きとる用途に使用されたという見解が提示されている¹⁾。この研究結果および、遺跡内から石皿・磨石などの顔料製造用具や、顔料容器、赤彩土器などが出土していないことをふまえると、他の場所から運ばれてきたものの可能性もある。今後他の分析結果も加味しながら明確にする必要があろう。

注)

- 1) 調査担当者による。
- 2) 領塚正浩 (1998)「考古学ジャーナル438」市川市立市川考古博物館

表1 蛍光X線分析ならびに粉末X線回折分析の測定条件

蛍光X線分析		粉末X線回折分析	
対陰極	Cr	対陰極	Cu
印加電圧・電流	50KV-50Ma	管電圧	40KV
分光結晶	LiF・Ge・TAP	管電流	40mA

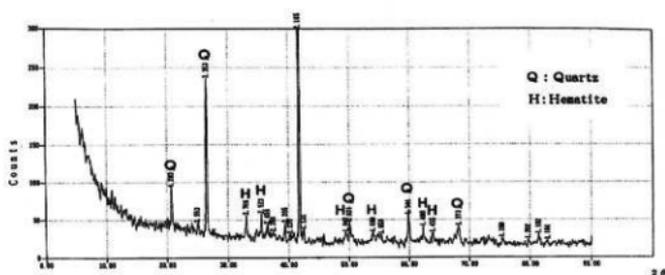


図2 X線回折スペクトル

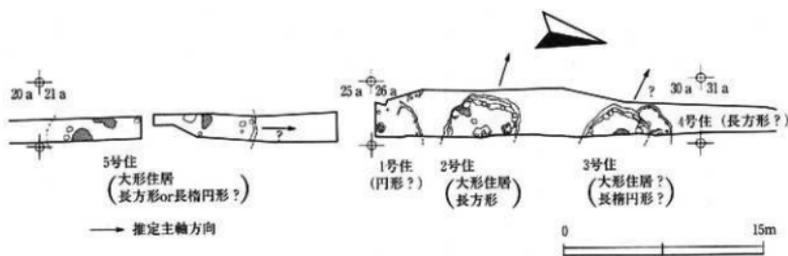
VI. まとめと考察

1. 遺構

(1) 竪穴住居跡

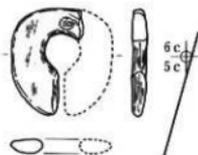
今回の調査区からは5棟検出された。いずれも縄文時代前期末葉に属するものと推定される。うち、2・3・5号住居跡の3棟については、大形住居跡である可能性が高いと思われる。調査区内で検出したのは一部分にすぎないため詳細を検討できないが、推定できる範囲で述べる。

住居跡が検出されたのは調査区北半部の21a～30aグリッドの範囲内であり、南半部では検出されていない。検出された住居跡の配置状況を第126図に示した。2・3号住居跡については、ほぼ東西方向を長軸とし、2棟の長軸線はほぼ平行するものと推測される。一方、5号住居跡は床面範囲の在り方や炉と思われる焼土の配置から考えて、2・3号住居跡と軸線を異にするものであろう。長軸方向の具体は不明であるが、概ね南北方向を長軸としていると思われる。この軸線の違いは、時期的な差異であるか、地形的な要因に負うものであるか、明確には把握できていない。少なくとも、軸線を同じくする2・3号住居跡は、出土した土器の年代観に照らしても、大木6式期に存在していた可能性が高いことが指摘できよう。但し、3棟が全くの同時期に併存していたかどうかは不明である。また、4号住居跡は3号住居跡に載られており、より古期の住居跡である。同住居跡はやや方形のプランを呈し、炉をもたず、床面中央(?)付近に主柱穴、壁際に小径の柱穴状ピットが通るものであり、縄文前期前葉期の「小形」の住居跡に類似している。しかしながら、出土した土器は大木6式の範疇に収まるものであり、3号住居跡と然程の時間差が無いことが示唆される。一方、1号住居跡については、プランを明瞭に把握できず、詳細が不明である。ただ、同住居跡は炉の形態が他の住居跡とは異質である点が特筆される。炉が検出された2・3・5号住居跡はいずれも石組を欠く地床炉であるのに対し、1号住居跡の炉は比較的堅半多角形気味の石組みを伴う石囲炉である。通常、石囲炉は中期以降に一般化するものであり、前期には稀な形態であると解される。同住居跡に伴う土器は寡少であり時期判断の材料を欠くが、炉の形態のみから考えると、同住居跡は中期以降に属する可能性が高い

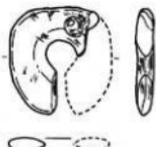


第126図 竪穴住居跡の配置・形状

S138 7号土坑覆土下位
4.4×(4.1)×0.6cm



S458 5a グリッドⅢ層下位
4.4×(4.1)×0.7cm



6b | 6a
5b | 5a

7号坑

5c | 5b
4c | 4b

5a | 4a

2号坑

4c | 4b
3c | 3b

4b | 4a
3b | 3a

S457 3c グリッドⅣ層
3.5×(3.4)×0.5cm



S459 4b グリッドⅢ層 3.8×(2.2)×0.5cm



※出土地点の詳細不明

第127図 A区土坑群と袂状耳飾出土地点

大木6式期以外の土坑
(時期特定できないもの)

▲ 袂状耳飾出土地点

0 1 2m

ように思われる。以上から、今回検出された5棟中、1号住居跡を除く4棟が縄文時代前期末葉期（大木6式期）に属し、短いスパンで並存ないしは交替したものである可能性が考えられる。

なお、2・3号住居跡の覆土から出土した炭化物の分析鑑定では、BP4520±110、BP4650±50という年代が算出された。鑑定結果の「約4,500～4,750年前」という数値は、一般的な年代観よりも新しく、隔たりがある。これは採取試料の汚染の可能性があるが、該期の年代が従来の年代観よりも若干新しくなる可能性もあると思われる。

(2) 土 坑

調査区南部（A区）20基、中央部（B区）10基、北部（C区）3基、合わせて33基が検出された。平面形は円形・楕円形・隅丸方形・不整形00基、断面形はピーカー形・フラスコ形・浅鉢形があり、平面形・規模に斉一性はない。時期については、2・4・7～10・12・14～16・21・22・31号土坑の13基は出土遺物から、12・32号土坑は他遺構との載り合い関係から、それぞれ判断して縄文時代に属すると推測される。とりわけ、遺物の出土した13基については、縄文時代前期末葉およびそれ以前に属するものと推定されよう。また、5・6・13・20号土坑は出土遺物を欠くが、断面形がフラスコ形を呈する所謂「フラスコピット」状であり、類例から判断するとこれら4基もまた縄文時代の遺構である可能性が高い。なお、断面形がフラスコ形を呈する5・6・13・15・20号土坑の5基については、類例から判断して貯蔵穴としての機能を有したものと推測されるが、堅果類等は検出されておらず、確証を欠く。なお13号土坑では、覆土上位に焼土層が形成されている。貯蔵穴としての機能を失って埋没する過程で、異地性の焼土が投げ込まれたものと解釈される。

土坑の配置は、A区4～6グリッド付近で密な傾向が認められる（1～20号土坑）。これらは、いずれもIV層下位～Ⅷ層上位面で検出されているが、本来の構築面は不明である。これらの土坑のうち縄文時代前期末葉およびそれ以前に属するものは、11基である（第127図）。そのうち、比較的人形の7号土坑については、覆土中～下位では人為的な堆積様相と解され、覆土下位からは块状耳飾1点が出土していることから、土坑（土坑墓）であった可能性がある。また、2・4号土坑は平面形が隅丸長方形ないしは楕円形を基調とすること、16号土坑は底面付近で敷き詰められたように多量の土器片が出土していることから、これらについても土坑（土坑墓）であった可能性（消極的ではあるが）考えられる⁽¹⁾。土坑群の分布範囲内から遺構に伴わないながらも3点の块状耳飾が出土したこと（前述の1点と合わせて都合4点出土）を考え合わせると、根拠としては弱いものの、これらの土坑群のうち7号土坑を含めた数基が集落の墓域を構成していた可能性を指摘できよう。

(3) 集落の占地

今回の調査では、縄文時代前期の集落を構成していた住居跡・土坑・土器埋設遺構（=墓？）・焼土遺構が検出された。調査範囲の制約から、縄文前期集落に長さ160mの細長いトレンチを入れた格好であり、集落の全体像は把握できていないが、可能な範囲内で検出遺構の配置について若干の検討を加える。

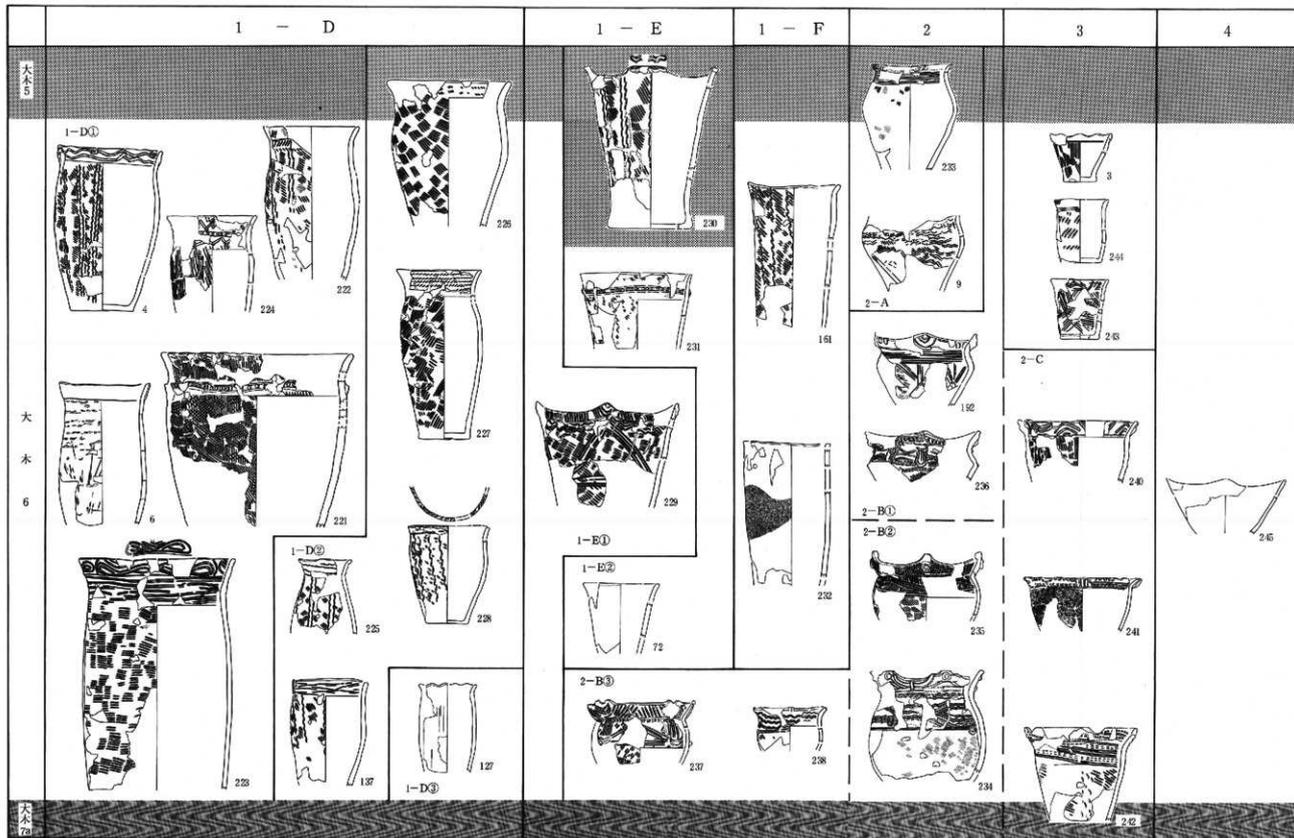
検出遺構の配置は概ね20mグリッド付近を境界として、様相を異にしている。すなわち、北部に竪穴住居跡、南部には土坑が占地している。これを意図的な「場の使い分け」として見ることが可能であろうか。本遺跡と時期的に近い遺跡では、湯田町峠山牧場I B、胆沢町大清水・大清水上、秋田県協和町上の山II等で、長軸線が放射状になるように環状ないしは弧状に配置される大形住居群が確認され、集落における「場の使い分け」（遺構配置の規則性）が示唆された。狭い調査範囲では住居配置の全体を図りかねるが、本遺跡の場合は、地形的な制約から集落が環状構造をとる可能性は低いものと考えられるものの、少なくとも住居と土坑とは「場」を使い分けているものと推測される。

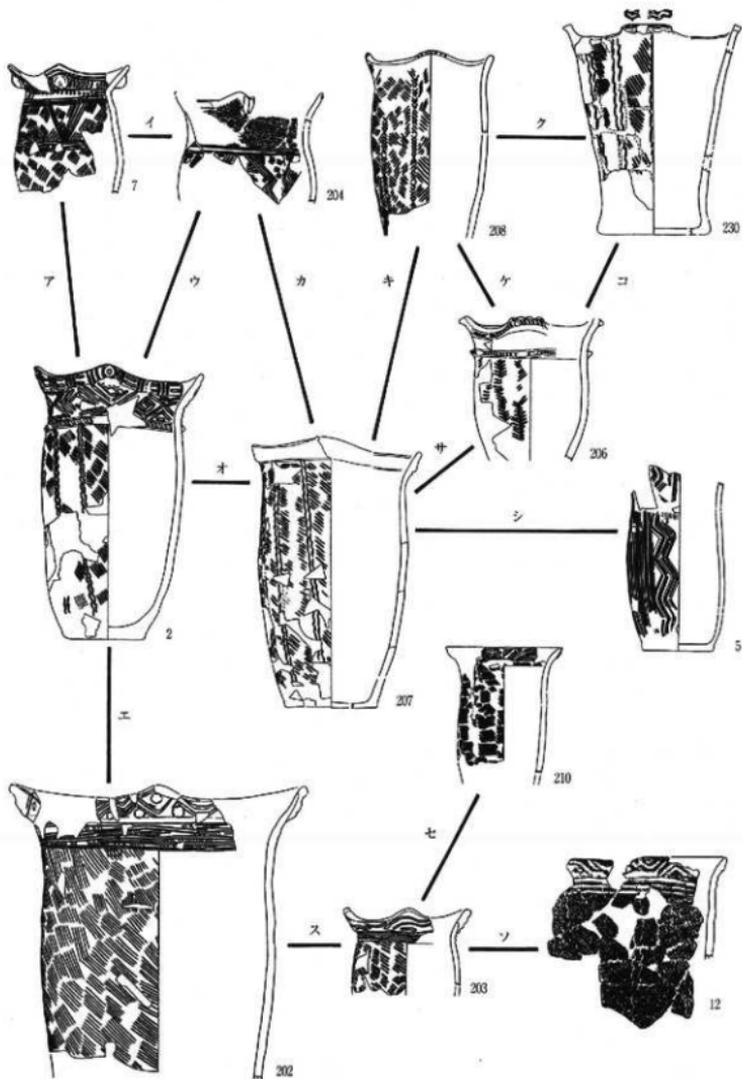


(註) 同分類の土器の上下関係が、直ちに新旧を示すものではない。

第126図 出土土器集成図(1)

縮尺 約1/8





第130図 深鉢1類の系統想定図

2. 遺物

(1) 土器

〈細分類・類と時期の比定〉 第四章において出土資料を器形・文様に基づいて分類しているが、本項では前述の分類群と土器型式とを照応させる。

第I群：大木2a式

口縁部に不整然糸文が重層的に施文される様相から判断して、大木2a式に比定される。

第II群：大木5・6・7a式

本群は複数の土器形式を一括している。細分した各群を、同時期の他遺跡の分類を参照して土器型式に照応する。参照したのは、興野(1969・1970)、丹羽(1989・1996)、白鳥(1989)、および本遺跡に比較的近い該期遺跡群出土資料—北上市の滝ノ沢(北上市教委1983)、鳩岡崎上の台⁽¹⁾(岩手県教委1982・岩手埋文1995c)、企ヶ崎町の和光6区(岩手埋文1987)—である。

大木5式類似資料：1-E②類の一部(230)。230は上面に山形沈線を施した台状突起を貼付したバケツ形深鉢であり、滝ノ沢・深鉢A₁I群1類、鳩岡崎上の台・第II群1類aにやや類似性を見出せる。また、破片資料では5-A①d類(379~384)がある。漸移的な資料としては1-A①c類(208)、2-A類(9・233)が上げられる。206・208の口縁部形態は、大木5式の台状突起の退化した形態ではないかと思われる。球胴鉢である9・233は胴部がやや延びて屈曲が緩く、滝ノ沢・深鉢B3類、和光6区・深鉢C1類に類似し、大木5~6式の範疇で捉えられている。本項では、大木6式の典型的な球胴鉢の祖形と解し、大木5式新相に位置づけた。

大木6式類似資料：1-A①a・b・d類、1-A②類、1-C類、1-D類、1-F類、2-B①~③類、3類である。他遺跡の類似資料。1-A類土器は、鳩岡崎上の台・3群2類、1-C類は鳩岡崎上の台・第3群4類、1-D類は鳩岡崎上の台・第3群3類。また、1-A・C・D類は、滝ノ沢・深鉢A₁8~12類、和光6区・深鉢A5~6類および深鉢B2~4類に対比できる。一方、2-B類は鳩岡崎上の台・第3群1類、に対比可能である。以上より、これらの資料は概ね大木6式に比定されよう。ただ、本遺跡出土資料の場合、文様帯が口縁部に収斂・圧縮される傾向にあり、文様が胴部上半にまで展開する資料は少ない。白鳥(1989)、丹羽(1981・1996)の見解に拠れば、この様相は「大木6式新相」にあたるのではないかと思われる。よって、ここに上げた本遺跡の出土資料の多くは大木6式後半期に属するものと推測される。

大木7a式類似資料：破片資料ではあるが、5-A①aキ類(328・329)、b類(326・327?)、e類の一部(386)。326~329は、いずれも口縁部に縦位隆帯が貼付されて文様帯を分割(4区画?)し、横方向に展開する沈線が充填される様相を示している。一方、386は、口縁部に横S字状の太い貼付隆帯をもち、隆帯上に地文を施している。中期初頭に位置付けられるものと考えたが、小破片であり具体の文様が不明であり不確かである。漸移的な資料は、球胴鉢の2-C類(240~242)で、胴部の屈曲が弱くなり外傾して口縁部では開くもので、滝ノ沢・深鉢B2類および同4類に類似している。滝ノ沢においては、大木6式および同6~7a式として捉えられている。本項では、大木7a式に伴う球胴鉢への遷移する過程の資料、大木6~7a式の移行期に属するものと位置付けた。但し、242については不確実(球胴鉢ではない可能性がある)。

型式特定不能の資料：大木5~6式と思われるが、特定根拠を欠くもの。1-B類、1-F類、4類、5類の大部分。1-F類は他の出土資料とは著しく異なる器形であり、秋田県域からの円筒土器文化の影

響を想起させる。

その他の資料：325・387は、本遺跡の第Ⅱ群資料においては、やや異質な資料である。387は、滝ノ沢・深鉢A、5類に類似資料があるが、器形が不明であり同一様相とは断定できない。

第Ⅲ群：加曾利B式？

壺形の器形、磨り消し縄文を多用した文様の様相から、後期中～後葉と思われるが、口縁～頸部までしかないため、型式特定は不能である。

〈出土資料の特徴〉 出土資料について特徴となる点を列記する。焼成・胎土・色調：全体として焼成は不良であり、胎土に粗砂が多量に含まれているものが大半である。なお、必ずしも時期の相違を示すものではないと思われるが、土器の色調に若干の相違が見られた。山土土器の色調は概ね、浅黄褐色、鈍い褐色、褐灰色といった暗色系が多かったが、一部、灰白色や赤褐色といった明色系のものが散見される⁽¹⁾。施文工具：沈線施文に用いられたものは、竹管（半截・輪切り）、櫛歯状工具、棒状工具（太・細）、篋状工具、等である。最も多用されているのは半截竹管〔あるいはそれに類する工具〕であり、背面を用いた凹線、腹面を用いた平行沈線や押し引き沈線、先端部を用いた三日月状刺突、といったバリエーションが認められる。土器製作者にとっては、使い良い施文具であったのだろう。一つの土器の文様内で、凹線と平行沈線を使い分け、意図的に左右非対称の文様構成としている例もある。地文：斜縄文（複節・単節・無節）、摺糸文（単軸・網目状・木目状・多軸）、羽状縄文（結束、非結束）、綾織文、擬縄文（オオバコ）等がある。全体として摺糸文の多用が目立っている。単軸絡条体の中には、撚り方向の異なる2条を絡めているものもある。木目状摺糸文は若干数あるがいずれも「崩れた」木目状であり、円筒土器文化の影響下に模倣を試みたものではないかと思われる。円筒土器の当該文様に比較して雑推ではあるが、その影響を示唆する資料である。また、今回出土した資料では縦走する綾織文の出現頻度が高い。



第131図 岩手県内出土 オオバコ回転文土器

〈出土資料の系統性〉 前述のとおり、第Ⅱ群資料は時間幅をもった連続性のあるものと解されるが、資料相互の遠因・系統性については十分な検討が適わなかった。そこで試みに、第Ⅱ群深鉢Ⅰ類における系統性をもつと思われる資料の一部を第130図に例示した。個々の類似性は次のようになる。ア・ウ・エ：器形、文様構成モチーフの一致。イ：文様帯の在り方（胴上半部への展開）の類似。オ：器形の相似。カ：器形の類似、「縦位に展開する意匠」。キ・サ：器形の類似、波頂部の刻み、台状突起縁の意匠。ク・コ：口縁部形状の類似（台状突起およびそれを意識した意匠）。ケ：器形の類似。シ：「縦位に展開する意匠」。ス：器形、文様帯の在り方の類似。セ・ソ：口縁部の曲線のモチーフの類似。このうち「縦位に展開する意匠」としたものは、平行沈線による縦位山形文と、原体結節による縦走する綾線文である。この二つは全く異なる手法で施されたものではあるが、ともに「縦に流れるギザギザの（沈）線」であり、同様の意匠を反映したものと筆者には思われるのである⁽¹⁾。ここでは、当該意匠を、大木4・5式からの小波状文・鋸歯状文の系統を引くもの（文様のボジ表現の更なる転化？）として捉えた。

〈「オオバコ回転文」土器〉 今回の調査では、「オオバコ回転文」と称される擬網文の土器が出土している。「オオバコ回転文」は、オオバコの花茎部分を押し・回転させたものである。オオバコ（大葉子）は現在では日本全土の道端や荒地で見られる一般的な草花で、薬草として用いられることがある。縄文時代にも身近な草（雑草？）であったのだろう。葉は根生の広く大きなもので、高さ10～20cmの花茎を数本伸ばし、秋には円錐状の尖った小さな果実が花茎部分に穂状につけられる。この花茎部を縄文原体の代わりに押し・回転することで、果実の円錐状の先端部分を器面に突き刺して文様を表現する。

若手県内では盛岡市上八木田Ⅰ、北上市鳩岡崎上の台・横町⁽²⁾、湯田町峠山牧場ⅠB⁽³⁾において縄文時代前期後葉～末葉の土器（大木5～6式）と共に伴って出土している⁽⁷⁾。本遺跡出土の資料も、他遺跡の資料と時期・施文手法に大きな差異はない。第131図に当該文様をもつ県内出土資料を示した。これらの資料から判断できる点は、次のとおりである。①口縁部に最大径をもつ深鉢形土器で、底部から緩やかに立ち上がり、口縁部で緩く外傾・外反する器形である。②口縁部・胴部ともに、他の文様をもたない。

この「オオバコ回転文」は、大沼忠春氏の発見・提唱以後、認知されたものであるが、未だ類例が少なく、初現時期は不明である。北海道では、木古内町新道4遺跡（北海道埋文1986b）・登別市川上B遺跡（北海道埋文1983, 1986a）・泊村茶津貝塚（北海道文化財研究所1990）・苫小牧市美沢1遺跡等で「オオバコ回転文」の土器片が出土しており、縄文時代中期末葉から後期初頭に属するものとされている。また、福島県のいわき市大畑Ⅱ遺跡では、弥生時代中期の「オオバコ回転文」の甕形土器片が出土している（佐藤2000）。一方、本県の資料は前述のとおり、盛岡市の北上山麓で1例、北上市～湯田町の北上川・和賀川流域で3例である。現時点では、かろうじて北上市周辺での分布のまとまりを指摘できるが散発的であり、かつ時期は共伴遺物から縄文時代前期後葉～末葉と推定される。

若手県内出土例と他地域との間でも、施文手法自体には大きな較差は見出し得ない。また、本県南部と北海道・東北南部との当該文様の関連性については、明らかではない。仮に、前期大木文化圏で発生した文様が、後期の北海道や弥生中期の福島で継承されたとすれば、時間的・地域的な伝わりが認められて良いはずである。しかし、本県北部および福島県以外の他の東北諸県においては、管見に触れるところでは当該文様が確認されていない⁽⁸⁾。時間・地域を異にして散発的に発生したもののようである。

「オオバコ回転文」をもつ土器は個体数が少ないため類例は少なく、詳細については断言できない部分が多い。無論、上に述べた器形・文様の特徴も現在検出されているものに限られており、一般化できないものではある。今後、類例の増加を待ちたい。現時点では、本県南部（盛岡市以南）における当該文様の

出現が、北海道・東北南部に比して早い時期—大木5～6式期—to認められることは確実である。

(2) 上製品

焼成粘土塊、土製円盤等、4点が出土しているが、点数は僅少である。いずれも遺構外出土で、出土土器と同時期の縄文時代前期後葉～中期初頭に属するものと思われる。

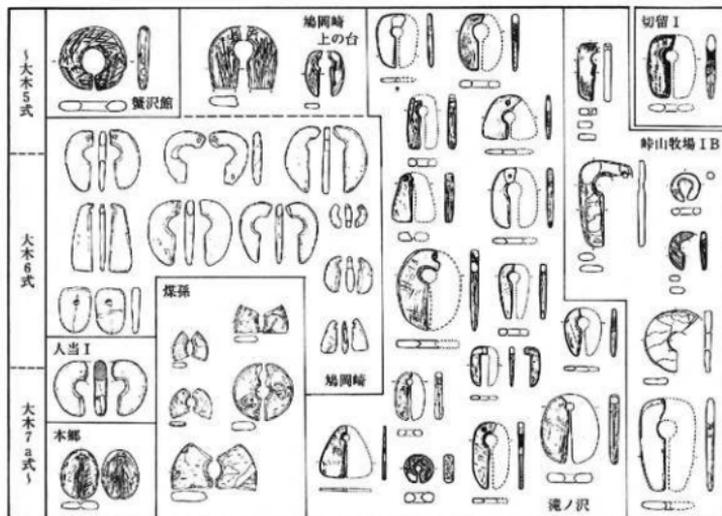
(3) 石器

今回の調査では、石器・剥片・砕片・石核がコンテナ00箱分出土した。調査区の全域から満遍なく出土しており、特定グリッド・地点での集中傾向は認められなかった。

ここで本遺跡の石器出土の様相を、他の遺跡例と比較・検証する。比較対象としたのは、縄文時代前期後葉～中期初頭の大木文化圏（大木5～7a式期）の遺跡群である。比較対象について注意点を述べる。表および図に示した点数は報告書に記載された総点数である。報告書に総量（不掲載分を含めた）の記載がないものもあるが、その場合は単純に掲載点数のみを集計している。また、報告書で著しく異なる器種区分を行っている場合は、筆者が分類し直しており、報告書記載とは異なる場合がある。各遺跡について、鳩岡峠上の台については、岩手県教委調査分と岩手県文調査分とを合算したが、岩手県教委報告においては本報告書でいうところの石器と不定形石器が一括されている。時間的な制約もあり、鳩岡峠上の台については石器と不定形を合算した点数を示した。横町遺跡については、北上市教委調査分の本報告が未刊であるため、岩手県文調査分のみを集計した。

遺跡別の石器出土点数を表および第134～138図に示した。これらの遺跡はそれぞれ調査面積が異なっており、単純に数量のみでは比較できない。そこでまず、単純に遺跡別の出土総量を示し、併せて1㎡あたりの出土総量を示した。なお、各遺跡ともその範囲内に遺物分布の濃淡があり、示した点数が必ずしも遺跡全体の傾向を示すものではないが、ある程度の石器組成の傾向は捉えられるものと思われる。本遺跡と他の遺跡群とを比較すると、以下の点が指摘できる。①出土総点数でみれば、本遺跡の出土点数（2,346点）は滝ノ沢・煤孫・峠山牧場1B・上八木田1に次いでいる。一方、1㎡あたりの出土点数で見れば、本遺跡（195.50個/100㎡）と滝ノ沢および塩ヶ森が突出した状況である。以上より、本遺跡は他遺跡に比して石器出土量が著しく多く、一般的な遺跡の様相とは異なっていることが読み取れる。②本遺跡においては礫石類の出土点数が多く（338点）、本遺跡の石器組成中では14.41%を占める。この傾向は滝ノ沢・煤孫・上八木田1・峠山牧場1Bと共通している。縄文時代前期後葉～末葉において石器組成に礫石類の占める割合が大きくなることは、先学の指摘にあるところである。上八木田1は、前期初頭～中期に互る遺跡であり、該期の石器のみを分離できないが、他の3遺跡では、石器組成における割合がそれぞれ滝ノ沢45.41%、煤孫49.67%、峠山牧場1B15.06%となっており、傾向に合致している。ただし、上記の遺跡群と同時期と思われる和光6区・田高Ⅱでは礫石類はごく僅かである。礫石類は、一般に漁網や糸を紡ぐ際の重りとして使用されたと考えられており、生業の相違が想起される。③本遺跡の石器組成では、食糧を「磨り潰す」ための敲磨器類・石皿が比較的少量である。④本遺跡の石器組成では不定形石器の比率が高く、かつ他遺跡に比しても出土点数が多い。ただし、この傾向は本遺跡において搥削器およびRフレイクを「不定形」として一括したことが大きく影響したものと思われる。⑤本遺跡の石器組成は、最も近くに位置する峠山牧場1Bの傾向に類似するものである。

今回は剥片・石核（残核）の比較は行わなかったが、石器成品に限定した以上の点からも本遺跡が石器の非常に多い遺跡であることが指摘できる。かかる様相は、本遺跡が石器製作過程に何らかの関連性をもつ可能性を示唆するものである。



第132図 和賀川流域の玦状耳飾り

(5) 石製品

玦状耳飾、燕尾形石製品、垂飾品、砥石?、石棒・石柱、石皿、有孔石等、合計46点出土した。本項では、玦状耳飾と燕尾形石製品についての言及し、その他については割愛する。

〈玦状耳飾〉 遺構内1点、遺構外3点が出土した。遺構内外を問わず、出土地点はA区南半部に集中している。遺構内出土したのはS138のみで、7号土坑の覆土中位から出土している。同上坑の覆土に含まれた土器は大木6式類似の資料であり、共存する玦状耳飾も該期に属するものである可能性が高い。遺構外出土した他の3点については、確実な共存資料が乏しいが、いずれもIV層からの出土である。同層に含まれている土器は概ね大木6式に比定されるものであることから、かかる3点も該期に属するものと思われる。堀江武史氏は切れ目長・全長・厚さの比率を数値化し、それらの相関関係から玦状耳飾を5つに分類している(堀江1992)。堀江氏の分類基準に則れば、なお、本遺跡出土の玦状耳飾は2種に分類可能であり、S138・457・458はB類、S459のみC類となる。

本遺跡とはほぼ同時期の遺跡の玦状耳飾出土例との比較を試みた。但し、時間的な制約により、全体的な資料の収集は果たせなかったため、和賀川流域、具体には、湯田町および北上市に限定して見ることとする。今回、筆者が見出した事例を第132図に示した。紙幅の都合により縮尺1/4で参照しづらく、かつ全点は掲載していないので、詳細については原典に当たっていただきたい。図の表現について。図では一応、各遺跡の主体時期に対応させる形で線引きをしているが、上下関係がそのまま新旧関係(古一新)を示すものではない。玦状耳飾の出土例は、以下の遺跡である。①和賀町(現北上市)蟹沢館……大木2・3・

5式期の遺跡で、大形住居で構成される集落跡である。ただし本報告未刊であり、詳細は不明。大木5式期の住居跡(大形住居)の覆土から1点出土している。平面形は円形で、中央に比較的大径の孔があり、全面に撞痕が見られる。②江釣子村(現北上市)鳩岡崎上の台……大木5~7式期の遺跡で、大形住居が複数検出された大規模集落跡である。遺構内外から合計14点出土している。平面形が、やや縦長の長方形、三角形、楕円形のものが見られる。孔部は、中央~やや上に位置している。③北上市滝ノ沢……大木5~7式土器を多量に出土した遺跡である。遺構外で合計00点が出土している。鳩岡崎遺跡同様、長楕円形、長方形などの縦長のものが多く見られ、円形のものも少量混じる。④湯田町峠山牧場1B……大木5~7式期。遺構覆土および遺構外から合計19点出土している。平面形態は、縦長の長方形・楕円形のもの、円形のものなど多種に互る。⑤和賀町(現北上市)煤孫……大木5~7式期の集落跡。遺構外で5点出土しているが、孔部の破片が多く全体の形状がわかるのは1点のみで、中央に孔を有する円形を呈するものと思われる。⑥和賀町(現北上市)人当I……大木6式期か。遺構外で1点出土。平面形は円形基調と思われる。⑦和賀町(現北上市)本郷……大木7a~8a式期の遺跡。木成品1点が遺構外出土している。縦長の長楕円形の素材に、長軸方向に表裏両面から切れ目を入れるが、貫通していない。⑧和賀町(現北上市)切留I……表採の欠損品1点。縦長長方形で孔が上に位置するタイプである。

今回は、土器型式に対応する形で缺状耳飾を分離することはできず、時期による形状の相違については解明できなかったが、以上の出土例から大木5~7式期の缺状耳飾の平面形は、概ね、円形、縦長の長楕円・長方形・三角形に分類される。本遺跡の缺状耳飾も類別に合ったものであることを指摘できよう。
 <黒胎形石製品> 遺構外で3点出土した。いずれも欠損品であり、全体の形状がわかるものは1点のみである。秋田県協和町上ノ山II遺跡(大木4~5式期)では58点と大量に出土し、和賀川中~下流域では北上市(旧和賀町)蟹沢館遺跡(大木2~5式期)で1点、湯田町峠山牧場I遺跡(大木5~7式)で2点が出土している。現在のところ類別が乏しく詳細を論じられないところではあるが、秋田県教委(1988)では「秋田県内の前期大木式文化圏に伴う特殊な石製品」である可能性が指摘されており、秋田県域との連関が想定される。

3. 遺 跡

(1) 周辺地域の該期集落について

岩手県南部において大木5~7a式土器が一定量出土した遺跡(調査実施遺跡に限定)は、盛岡市の大館町(大木6~7)・七木田I(大木5~7a)、雫石町の塩ヶ森I(大木6~7)・小山谷地Ib(大木6~7)、花巻市の久田野II(大木7a)・山の神(大木6~7)、湯田町の峠山牧場1B(大木5~7a)・白木野I(大木6)、北上市の蟹沢館(大木2・4~5)・新平(大木6)・鳩岡崎上の台(大木5~7)・煤孫(大木6~7a)・滝ノ沢(大木5~7b)・鹿島館(大木6)・高畑(大木6)・横町(大木6)・禅山(大木6~7)、金ヶ崎町和光6区(大木5~7a)、水沢市中島(大木6)、胆沢町の浅野(大木6)・大清水上(胆沢町教委1900:大木5)⁽⁹⁾、前沢町田高II(大木5~7a)、一関市庄司合(大木5~6式期)、千厩町清田台(大木6~10)⁽¹⁰⁾である(第133図)。また、隣接する秋田県山内村の小田V(秋田県教委1996b)で大木4~5式期の竪穴住居跡が検出されている。秋田県では他に大木5式期の協和町上ノ山IIが知られるが、大木5~7式期の遺跡は少ない⁽¹⁰⁾。遺跡の分布は、和賀川中~下流域(湯田町・北上市)にある程度のみとまりが認められる。

(2) 「石器製作跡」について

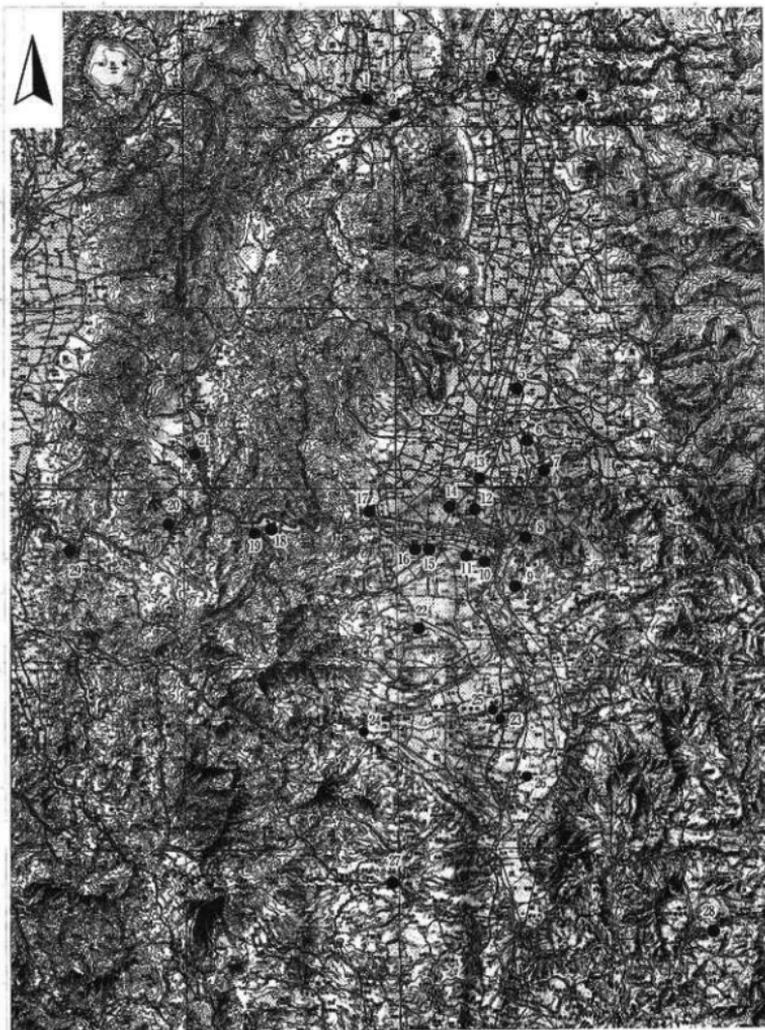
前節では、本遺跡が石器製作に関連する可能性が示唆された。しかしながら、今回の調査においては、「石器製作跡」を遺構としては捉えられなかった。そこで本節では、本地域の周辺に所在する縄文時代（とりわけ前期）の石器製作跡関連遺跡を取り上げて、本遺跡の様相との比較・検討を通じて、本遺跡の性格の一端を解明する糸口としたい。

本遺跡の立地する和賀川流域における当該遺構の検出事例は、北上市鳩岡崎上の台のみである。検出された「石器製造跡」は幅0.5～0.6m、長さ4mの帯状の範囲で、石器・剥片・砕片・石核等338点が出土したものである。うち剥片が151点と半数を占めている。しかし砕片は25点と少量であることから、「石器製造を裏付けるものではないが、石器素材（213点）の占める割合から「何らかの形で石器製造跡に関連するもの」であり、「破壊された石器製造跡」または「二次堆積地域」と報告されている。なお、柱穴14個を伴った小規模な溝2条が検出されているが、報告では直接付随する施設ではないと判断されている。

一方、湯田町と境を接する秋田県平鹿郡山内村では、平成2～5年にかけて、東北横断自動車道秋田線路線内の遺跡群が調査されており、縄文時代草創期～前期の石器製作跡が検出されている。小田V（秋田県教委1994b）では、石器製作を明瞭に跡付ける遺構は確認されていないが、土器に比べて石器の出土量が卓越している（土器23箱、石器・剥片類37箱）ことから、「石器製作が行われていた時期があったもの」と推測されている。小田Vでは前期後葉の石器集中部6箇所が検出された。検出された石器集中部は、石器製作時の剥片・砕片が径1.1～2.0mの不整な円形乃至は楕円形の範囲内に集中して検出されたものである。いずれも付随施設（掘り込みや溝等）は検出されておらず、剥片・砕片が「自然の窪地などに一括廃棄されたもの」と報告されている。上谷地（秋田県教委1994a）では、前期初頭の石器製作跡1箇所および石器集中部1箇所が検出され、石器製作跡に関わる遺跡であると報告されている。検出された石器製作跡は、長軸26m×短軸10m程の長楕円形状の範囲内に、定形石器・石器未製品・剥片・砕片の集中ブロックが点在するものである。石器集中部は0.35m×0.3mの狭い範囲内で、無調整の剥片49点が集中して検出された剥片貯蔵遺構（デポ？）的なものと推測されている。両遺構ともに付随施設は検出されていない。岩瀬（秋田県教委1996c）では、草創期～前期の石器石材集積遺構4箇所（草創期3・前期1）および石器集中部48箇所（草創期16・早期21・前期8）が検出されており、草創期～前期にかけての石器製作跡が確認された。石器集中部は、径1～8m程の円形乃至は楕円形状の範囲内に石器・石核・剥片・砕片が集中したもので、付随施設は検出されていない。石器製作時の一時的廃棄によるか、その後の二次的廃棄によるものかの厳密な区分はできないが、「各時代毎に石器製作を行っていたことは十分に認めることができ」と報告されている。また、石器石材集積遺構は、0.4～0.5m程の狭い範囲内で両面調整素材・両面調整石器・二次調整剥片等が集中して検出されたもので、やはり付随施設は検出されていない。また、茂竹沢（秋田県教委1993）では、縄文時代（具体の時期不明）の剥片集中出土地点1箇所（SX27）が検出され、「調査区全体の遺物散布状況に照らし、遺物の集中が著しいことから遺構と判断」された。出土した剥片・石核では、接合資料が23点あると報告されている。

以上の検出事例に鑑みると、いわゆる「石器製作跡」として報告されている「遺構」は特別の付随施設をもたず、石器素材や剥片・砕片・石核の局所的な集中として「確認」されており、その遺構認定は多分に状況証拠に頼らざるを得ないものといえる。

本遺跡においては件の「局所的な集中」＝「石器製作跡」は確認されず、少なくとも今回の調査区内での石器製作の痕跡を跡付けることはできなかった。また、出土した石器類に敲石・台石が少ないことから考えて



- | | | | | | |
|------------|--------------------|-------------|-------------|----------|-----------|
| 1 小日谷池 I B | 7 高畑 | 13 磨戸崎 | 19 耳取 I | 25 浅野 | 28 清田台 |
| 2 塚ヶ森 I | 8 横町 | 14 新平 | 20 白木野 | 26 田高 II | 29 小田 V |
| 3 大館町 | 9 樺山 | 15 榎ノ木 | 21 清水ヶ野…本遺跡 | 27 庄司合 | 30 上ノ山 II |
| 4 上八木田 I | 10 滝ノ沢 | 16 笹孫 | 22 和光 6 区 | | |
| 5 山の神 | 11 鹿島館 | 17 蟹沢館 | 23 中島 | | |
| 6 久田野 II | 12 鳩岡崎
(鳩岡崎上の台) | 18 峠山牧場 I B | 24 大清水・大清水上 | | |

第133図 大木 5～7 a 式土器出土遺跡の分布

も、調査区内に直接の石器製作工房が存在した可能性は低いと思われる。しかしながら、石核・剥片・砕片は石器製作にともなって生じる残滓（廃棄物）であり、遺跡外の遠隔地で行われた石器製作の残滓が本遺跡に運ばれ廃棄されたとは考えにくく、今回の調査区から出土した石核・剥片・砕片は（本調査区外の）遺跡内で行われた石器製作行為の残滓が二次的に廃棄されたものと解するのが妥当ではないか。出土した剥片石器の多くは、本調査区周辺の和賀川縁で容易に獲得できる頁岩を母岩とするものであり、石器製作には適した環境であったと推測されることに鑑みても、本調査区隣接地に石器製作の場があった可能性があると思われる。

この「捨て場」の形成時期については、共存する土器の型式からは概ね大木5～6式期と推測される。しかし、A・B区の上坑、C区の罅穴住居跡から大木6式土器が出土しており、占地を同じくする集落と「捨て場」が同時期に并存したこととなり、相矛盾している。大木6式期の単時期に、集落成立→集落廃絶→「捨て場」という場の使い方の変化が生じたとは考えにくいからである。すなわち、本遺跡の「捨て場」は（中期以降の）二次堆積により形成されたものであり、本来の形成位置から動いたもの、原位置を保っていないものと考えられる。二次堆積の成因については、地形的要因（崩落、地滑り？）、人為的要因（人間による地形改変、「造成工事」）が考えられるが、確証はない。

以上の議論から、本遺跡が石器製作に関連する場であった可能性が高いことが示唆される。すなわち、本調査区が石器製作を行った直接の場ではなく、石器製作に伴って生じた残滓（欠損品・未製品・剥片・砕片・残核等）を包含する土層が二次堆積した場であった可能性が指摘できよう。

(3) まとめ

清水ヶ野遺跡の今回の調査では、罅穴住居跡5棟、土坑34基、土器埋設遺構3基、焼土遺構6基、獨立柱建物跡1棟が検出されている。うち、罅穴住居跡、土坑（一部）、土器埋設遺構、焼土遺構は縄文時代前期末葉期に属している。また、土器コンテナ約50箱分、土製品4点、石器2,300点、石製品30点、剥片・砕片00箱分が出土した。川上した土器は、縄文時代前期前葉、前期後葉、前期末葉、中期初頭、後期に属するものである。うち、量的に主体を占めるのは縄文時代前期末葉（大木6式）に比定される土器群である。以上より、本遺跡が縄文時代前期末葉を主体とする集落跡であることが確認された。また、川上遺物中、石器類の出土頻度が他の該期遺跡に比して卓越しており、さらに石器成品のみならず多量の石核・剥片・砕片が出土していることから、本遺跡が石器製作に関連する場であることが示唆される。

以上、調査の結果を踏まえて、できるだけ資料を提示したが、遺跡の *raison d'être* を十分に理解し、それを提示し得たか疑問が残るところである。不備や事実認識があれば、偏に筆者の浅学・力不足によるものである。末事になるが、本報告書を纏めるにあたって、指導・助言・協力をいただいた方々に厚く感謝申し上げるものである。

表4 遺跡別石器出土量

(1) 出土総量

遺跡名	清水ヶ野	大淵水上	山高日	山の神	新平	白木野 I	上八木出 I	大淵町	埴上の崎台	和光6区	滝ノ沢	磯原	磯原町	峠山宮崎 I b	小日野野 I b	塩ヶ森 I	本郷
調査面積㎡	大木5~7a 1,300	大木5 7,600	大木5~7a 4,500	大木6~7b 2,000	大木4~6 1,572	大木6 3,000	大木2~8b 22,400	大木6~8a 783	大木5~7b 3,969	大木5~7a 1,500	大木5~7b 2,934	大木5~7a 15,360	大木5~7a 1,960	大木5~7a 6,120	大木6~7b 570	大木5~7a 3,350	大木7a~8b 15,490
石 鍬 類	350	7	110	71	9	7	330	97	235	81	583	323	42	628	57	427	33
石 錐	25	1	9	0	0	0	32	4	18	12	49	33	5	43	5	64	11
石 匙	191	8	81	34	5	1	228	34	219	60	301	191	18	275	27	474	26
石 鏝	55	13	31	20	1	6	24	35	1,026	45	153	160	8	237	25	1,049	87
不定形	1,060	6	91	29	16	12	913	28	247	505	640	37	1,020	96	1,537	112	
石 斧	31	3	49	7	1	2	54	12	63	26	87	40	2	34	7	101	57
敲磨器類	241	12	200	7	3	3	655	63	838	126	1,173	670	1	785	126	1,909	301
石 皿	2	2	15	0	2	0	119	2	105	27	36	20	7	19	7	45	8
石 鏟	338	3	0	1	7	0	353	2	478	0	2,599	2,393	0	566	35	177	21
石製品	44	4	25	8	3	0	56	14	123	36	143	147	4	113	6	92	11
その他	9	1	73	3	4	0	51	5	57	37	94	201	3	38	2	81	69
計	2,316	60	684	180	51	31	2,815	296	2,136	697	5,722	4,818	127	3,758	293	5,956	736

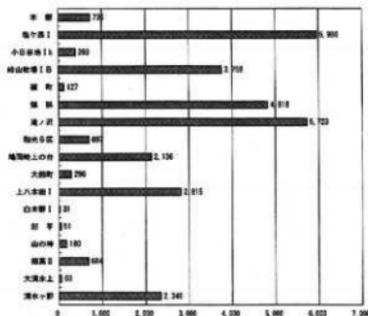
(2) 100㎡あたりの出土量

遺跡名	清水ヶ野	大淵水上	山高日	山の神	新平	白木野 I	上八木出 I	大淵町	埴上の崎台	和光6区	滝ノ沢	磯原	磯原町	峠山宮崎 I b	小日野野 I b	塩ヶ森 I	本郷
石 鍬 類	29.17	0.09	2.44	3.55	0.57	0.23	1.47	12.39	5.92	5.40	19.87	2.06	2.12	10.26	10.00	12.75	0.21
石 錐	2.08	0.01	0.20	0.00	0.00	0.00	0.14	0.51	0.45	0.80	1.67	0.21	0.25	0.70	0.88	1.91	0.07
石 匙	15.92	0.11	1.80	1.70	0.32	0.03	1.02	4.34	5.52	4.00	10.26	1.23	0.91	4.49	4.74	14.15	0.17
石 鏝	4.58	0.17	0.69	1.00	0.06	0.20	0.11	4.47	25.85	3.00	5.21	1.03	0.40	3.87	4.39	31.31	0.56
不定形	88.33	0.08	2.02	1.45	1.02	0.40	4.08	3.58	16.47	17.21	4.11	1.87	16.67	16.84	45.88	0.72	
石 斧	2.58	0.04	1.09	0.35	0.06	0.07	0.24	1.53	1.59	1.73	2.97	0.26	0.10	0.56	1.23	3.01	0.37
敲磨器類	20.08	0.16	4.44	0.35	0.19	0.10	2.92	8.05	21.11	8.40	39.98	4.31	0.05	12.83	22.11	56.99	1.94
石 皿	0.17	0.03	0.33	0.00	0.13	0.00	0.53	0.26	2.65	1.80	1.23	0.13	0.35	0.31	1.23	1.34	0.05
石 鏟	28.17	0.04	0.00	0.05	0.45	0.00	1.38	0.26	12.04	0.00	88.58	15.38	0.00	9.25	6.14	5.28	0.14
石製品	3.67	0.05	0.56	0.40	0.19	0.00	0.25	1.79	3.10	2.40	4.87	0.94	0.20	1.85	1.05	2.75	0.07
その他	0.75	0.01	1.62	0.15	0.25	0.00	0.23	0.64	1.44	2.47	3.20	1.29	0.15	0.62	0.35	2.42	0.45
計	195.50	0.79	15.20	9.00	3.24	1.03	12.57	37.80	79.67	46.47	195.06	30.96	6.41	61.41	68.95	177.79	4.75

註 数値は、各遺跡の報告書の記載によるが、石器分類基準が著しく異なる場合には改めてカウントし直している。

石器・石製品合計

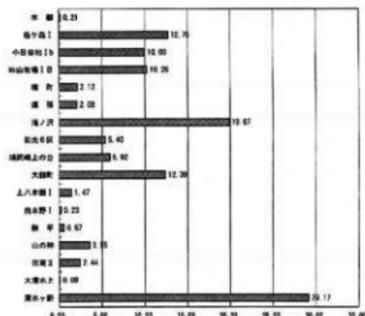
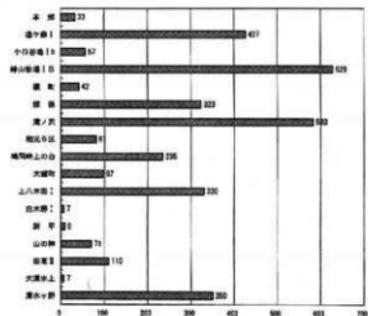
総 点 数



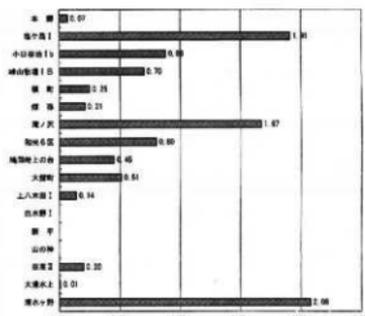
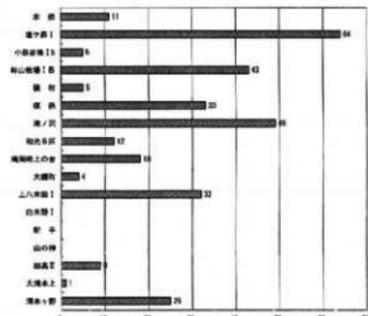
100㎡あたりの出土点数



石 鉄 類



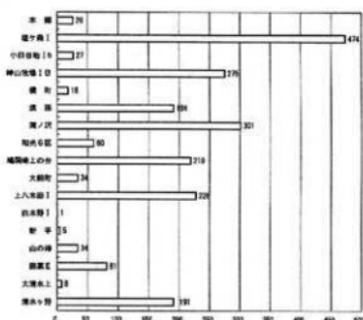
石 鏢



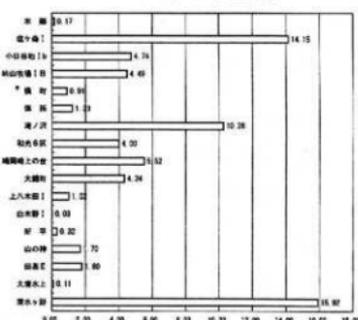
第134図 遺跡別石器出土量(1)

石 匙

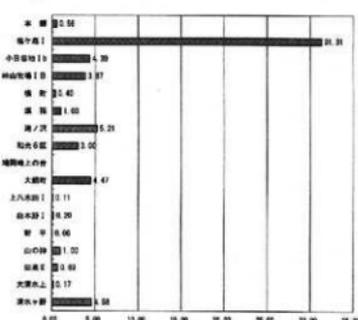
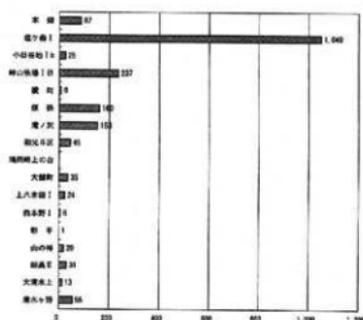
総点数



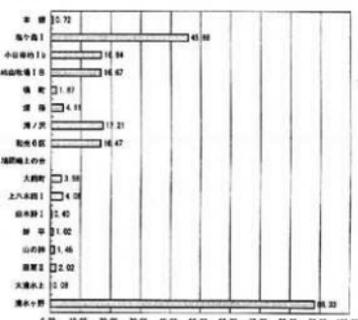
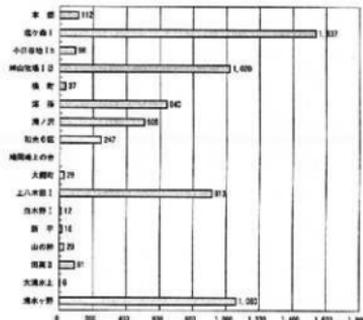
100㎡あたりの出土点数



石 鏡



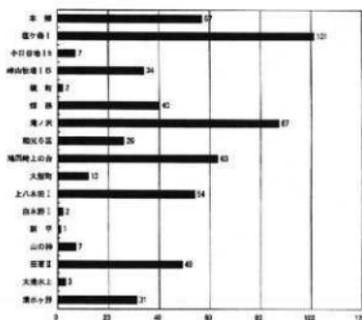
不定形石器



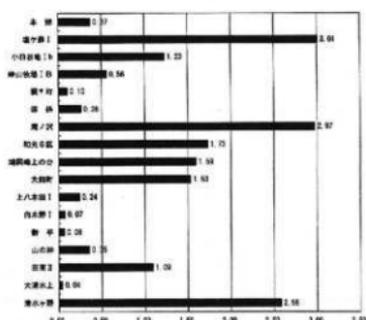
第135図 遺跡別石器出土量(2)

石 斧

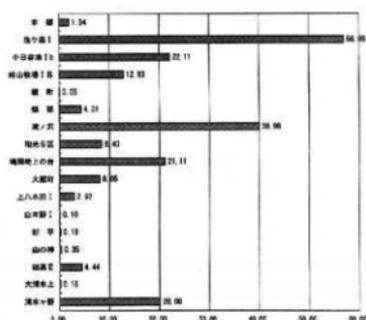
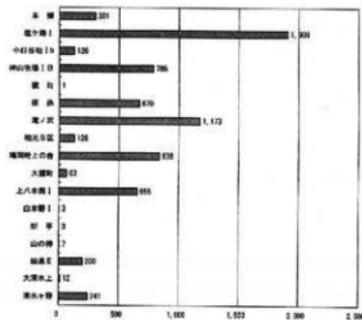
総点数



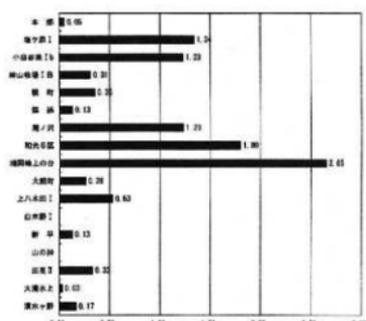
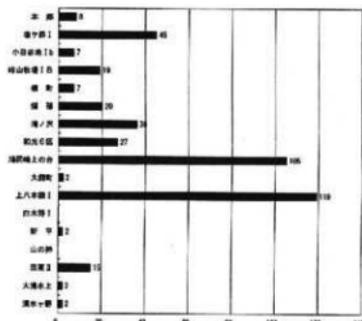
100mあたりの出土点数



散射器類



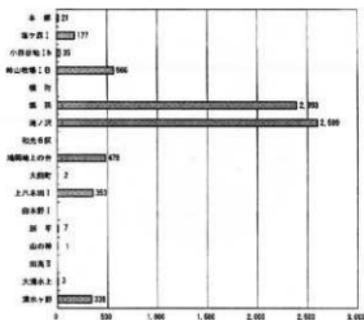
石 皿



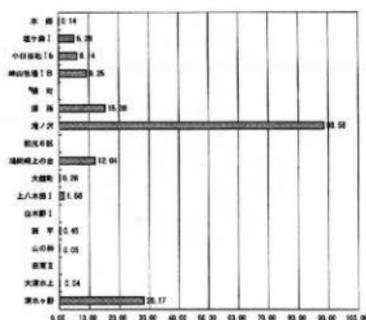
第136図 遺跡別石器出土量(3)

確石鑑

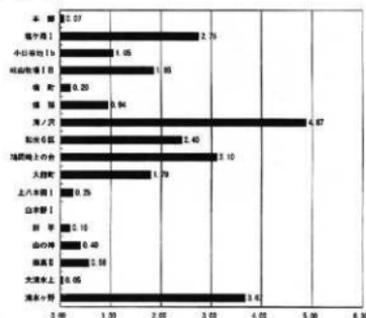
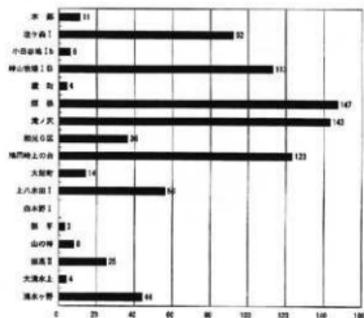
総点数



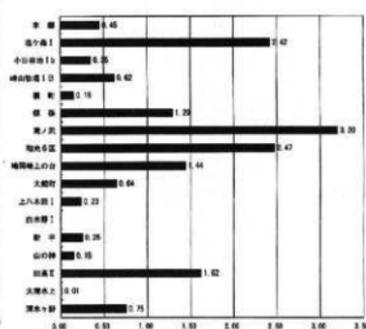
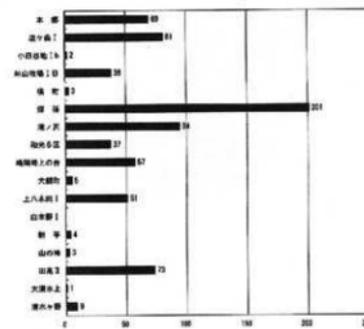
100mあたりの出土点数



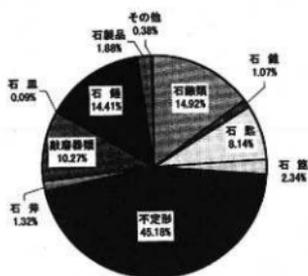
石製品



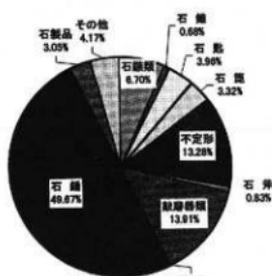
その他



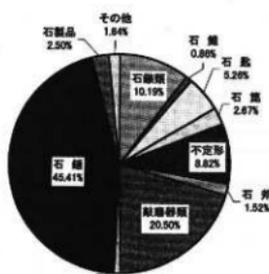
第137図 遺跡別石器出土量(4)



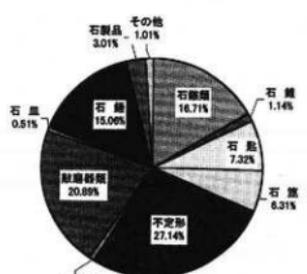
清水ヶ野



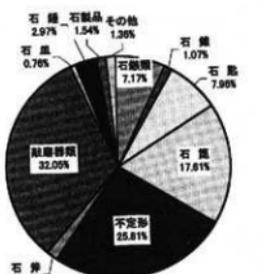
煤孫



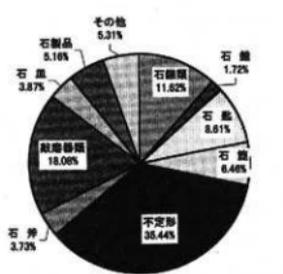
浅ノ沢



神山牧場I区



塚ヶ森I



和光6区

第138図 遺跡別石器組成の比較

<註>

- (1) 中村 大氏は、土墳(十坑墓)の認定基準を提唱している(中村2000)。すなわち、①人骨の検出②赤色顔料の撒布③土坑上面の配石・集石・立石④底面の周溝や底面・壁の礎設置⑤装身具・「第一の道具」の出土、以上の特徴に該当する土坑を土墳としての「確実な認定基準」としている。本遺跡では、7号土坑が⑤に該当している。また、①～④に該当しない土坑でも、土器の出土パターンを検討することで「土壇」と認定できることを指摘しており、本遺跡の16号土坑(覆上下位～底面にかけて多量の土器片が出土)は中村氏の「パターンB」(土器片被覆葬)に該当するのではないかとと思われる。
- (2) 岩手県教委が昭和48～50年に調査した「鳩岡崎遺跡」は、その後、小字名を付して「鳩岡崎上の台遺跡」と呼称されており、両者は同一遺跡である。本書では、便宜上、岩手県教委調査分を含めて「鳩岡崎上の台遺跡」と呼称する。
- (3) 稲野裕介氏のご教示によると、北上市横町遺跡出土資料では、時期差を反映した色調の相違が認められるという。すなわち、大木6式資料に比して、大木5式資料では赤みを帯びた色調のものが多くなる。横町遺跡の出土品は現在整理中で、未報告資料である。
- (4) 村上 拓氏は陸前高田市牧田貝塚の調査報告において、同一文様に「隆帯で表現されるものと沈線で表現されるものの両方が存在」し、「その視覚的イメージは互いに酷似」していることから「文様のネガ・ポジ」転換の現象を指摘している(岩手埋文1996c)。ここでいう「縦位に展開する意匠」は、村上氏の指摘する「文様のネガ・ポジ」の関係にはあたらないが、両意匠で「視覚的イメージ」の類似性が保持されている点は指摘できよう。
- (5) 稲野裕介氏のご教示による。
- (6) 峠山牧場1遺跡は、本遺跡同様に和賀川流域の段丘(峠山高位面)に載り、本遺跡の南東約10kmに位置している。平成8年に実施された同遺跡B地区の調査では、縄文時代前期末の大形壺穴住居跡12棟が検出されている。地理的に近い環境にあることから、本遺跡との関連性が窺われる。なお、「オオバコ回転文」土器については、整理担当者である阿部勝則氏のご教示に多くを拠っている。
- (7) なお未報告資料ではあるが、当センターで平成12年度に調査を行った大清水上遺跡でも、「オオバコ回転文」を施した小形の深鉢が出土している。
- (8) 青森県内では、現時点まで「オオバコ回転文」は確認されていないようである(福田友之氏のご教示による)。
- (9) いずれも未報告資料である。内容については、それぞれ整理担当者の佐藤淳一氏・小原真一氏・木戸川俊子氏よりご教示を受けた。
- (10) 小笠原好彦氏は、前期末葉期における円筒土器文化圏の南限が、太平洋側では盛岡市付近(岩手県北部)であるのに対して、日本海側では吹浦遺跡付近(山形県北部)まで最南下することを指摘している(小笠原1974)。和賀川中・下流域の湯田町～北上市周辺の遺跡においては、日本海側からの文化流入の様相が窺われる。本遺跡においても、木目状燃糸文を模倣したと思われる資料が一定量存在し、いわゆる「半円状扁平打製石器」や黒彫形石製品が一定量出土している点で、脊梁山脈を越えて伝播したであろう円筒土器文化圏の影響が見られる。なお、大木6式資料は安比川水系の浄法寺町飛鳥台地1遺跡(岩手埋文1988)において少量出土しており、同遺跡付近が分布の北限と思われる。

引用・参考文献

※ 以下の表では、次のとおり省略して記す（巻次については省略していない）。

◎ 岩手県埋蔵文化財センター、◎ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター → 岩手埋文
埋蔵文化財センター、埋蔵文化財調査センター → 埋文 教育委員会 → 教委 市立博物館 → 市博

<発掘調査報告書>

岩手埋文発行分

- (1978)『花巻市山の神遺跡』岩手埋文センター文化財調査報告書第3集
(1980)『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅰ)』岩手埋文センター文化財調査報告書第12集
(1981)『松尾村長者屋敷遺跡(Ⅱ)』岩手埋文センター文化財調査報告書第20集
(1982)『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』(桜松遺跡)、岩手埋文センター文化財調査報告書第29集
(1982)『平石町塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文センター文化財調査報告書第31集
(1983)『上里遺跡発掘調査報告書』岩手埋文センター文化財調査報告書第55集
(1985)『新平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第91集、岩手埋文
(1987)『和光6区遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第114集
(1988)『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第120集
(1992)『本郷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集
(1993)『塚野Ⅰ・塚野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第199集
(1994 a)『煤孫遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第196集
(1994 b)『白木野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集
(1994 c)『越中畑Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第201集
(1994 d)『耳取Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第232集
(1995 a)『大渡Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第215集、岩手埋文
(1995 b)『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集
(1995 c)『鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第240集
(1996 a)『峠山牧場Ⅰ遺跡B地区範囲確認調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第233集
(1996 b)『横町遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第236集
(1996 c)『牧田貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集
(1998 a)『唐戸崎・唐戸崎Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第000集
(1998 b)『本内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第271集
(1999 a)『峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第291集
(1999 b)『耳取Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第292集
(2000 a)『沢田Ⅰ遺跡(第1～4次)発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第300集
(2000 b)『峠山牧場Ⅰ遺跡B地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第320集

その他の諸機関発行分（五十音順）

- 秋田県教委（1981）『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第83集
- 秋田県教委（1988）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ（上ノ山Ⅱ遺跡 他）』秋田県文化財調査報告書第166集
- 秋田県教委（1989）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ（上ノ山Ⅱ遺跡・補遺）』秋田県文化財調査報告書第186集
- 秋田県教委（1993 a）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ（茂竹沢遺跡）』秋田県文化財調査報告書第233集
- 秋田県教委（1993 b）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ（越上遺跡）』秋田県文化財調査報告書第235集
- 秋田県教委（1994 a）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ（上谷地遺跡）』秋田県文化財調査報告書第241集
- 秋田県教委（1994 b）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ（小田Ⅳ遺跡）』秋田県文化財調査報告書第243集
- 秋田県教委（1996 a）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ（蟹ノ沢遺跡）』秋田県文化財調査報告書第261集
- 秋田県教委（1996 b）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ（小田Ⅴ遺跡）』秋田県文化財調査報告書第262集
- 秋田県教委（1996 c）『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ（岩瀬遺跡）』秋田県文化財調査報告書第263集
- 胆沢町教委（1985）『大清水上遺跡調査報告書』胆沢町埋蔵文化財報告書第15集（岩手）
- 胆沢町教委（1988）『浅野遺跡 一調査報告書―』胆沢町埋蔵文化財調査報告書第17集（岩手）
- 一関市教委（1977）『庄司合遺跡発掘調査概要（第二次調査）』一関市文化財調査報告書第10集（岩手）
- 岩手県教委（1981）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ（梅ノ木遺跡）』岩手県文化財調査報告書第58集
- 岩手県教委（1983）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅹ-1・2（鳩岡崎遺跡）』岩手県文化財調査報告書第70集
- 岩手県教委（1999）『Ⅱ 試掘調査』（清水ヶ野遺跡）『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成10年度）』岩手県文化財調査報告書第105集
- 大船渡市教委・岩手県文化財愛護協会（1976）『大船渡市清水日塚発掘調査概要』（岩手）
- 北上市教委（1975）『鹿島館遺跡調査報告書Ⅰ』文化財調査報告書第14集（岩手）
- 北上市教委（1983）『滝ノ沢遺跡（1977～82年度調査）』北上市文化財調査報告書第33集（岩手）
- 北上市教委（1990 a）『樺山遺跡（1989年度）』北上市文化財調査報告書第59集（岩手）
- 北上市教委（1990 b）『滝ノ沢遺跡Ⅱ（1989年度）』北上市文化財調査報告書第60集（岩手）
- 北上市教委（1993）『蟹沢館遺跡発掘調査概報』北上市文化財調査報告書第14集（岩手）
- 北上市教委（1995）『横町遺跡発掘調査概報』北上市埋蔵文化財調査報告書第21集（岩手）
- 北上市教委（1996）『樺山遺跡（1992・93年度）』北上市埋蔵文化財調査報告書第25集（岩手）
- 沢内村教委（1998）『沢内村内の遺跡 詳細分布調査報告書Ⅰ』（岩手）

- 沢内村教委 (1999) 『沢内村内の遺跡 詳細分布調査報告書Ⅱ』(岩手)
- 沢内村教委 (2000) 『沢内村内の遺跡 詳細分布調査報告書Ⅲ (最終)』(岩手)
- 雫石町教委 (2000) 『小口谷地ⅠB遺跡発掘調査報告書』雫石町埋蔵文化財調査報告書第2集(岩手)
- 仙台市教委 (1982) 『北前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第36集(宮城)
- 北海道文化財研究所 (1990) 『茶津貝塚』北海道文化財研究所調査報告書第5集
- 北海道埋文 (1983) 『川上B遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告13
- 北海道埋文 (1986a) 『登別市 川上B遺跡・C地区』北海道埋蔵文化財センター調査報告27
- 北海道埋文 (1986b) 『木古内町 建川1・新道4遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告33
- 前沢町教委 (1997) 『田高Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県前沢町文化財調査報告書第4集(岩手)
- 宮城県教委 (1900) 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報—長根貝塚—』宮城県文化財調査報告書第19集
- 宮城県教委 (1988) 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書付編』宮城県文化財調査報告書第126集
- 盛岡市教委 (1978) 『岩手県盛岡市大館町遺跡—昭和51年度発掘調査概報—』盛岡市文化財調査報告書第20集(岩手)
- 山形県教委 (1984) 『吹浦遺跡第1次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 山形県教委 (1985) 『吹浦遺跡第2次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第93集
- 山形県教委 (1988) 『吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集
- 湯田町教委 (1983) 『大台野遺跡発掘調査報告書』(岩手)
- 陸前高田市教委 (1971) 『岩手県陸前高田市牧田貝塚発掘調査概要』(岩手)
- 陸前高田市教委 (1979) 『太陽台貝塚』(岩手)

<論 文>

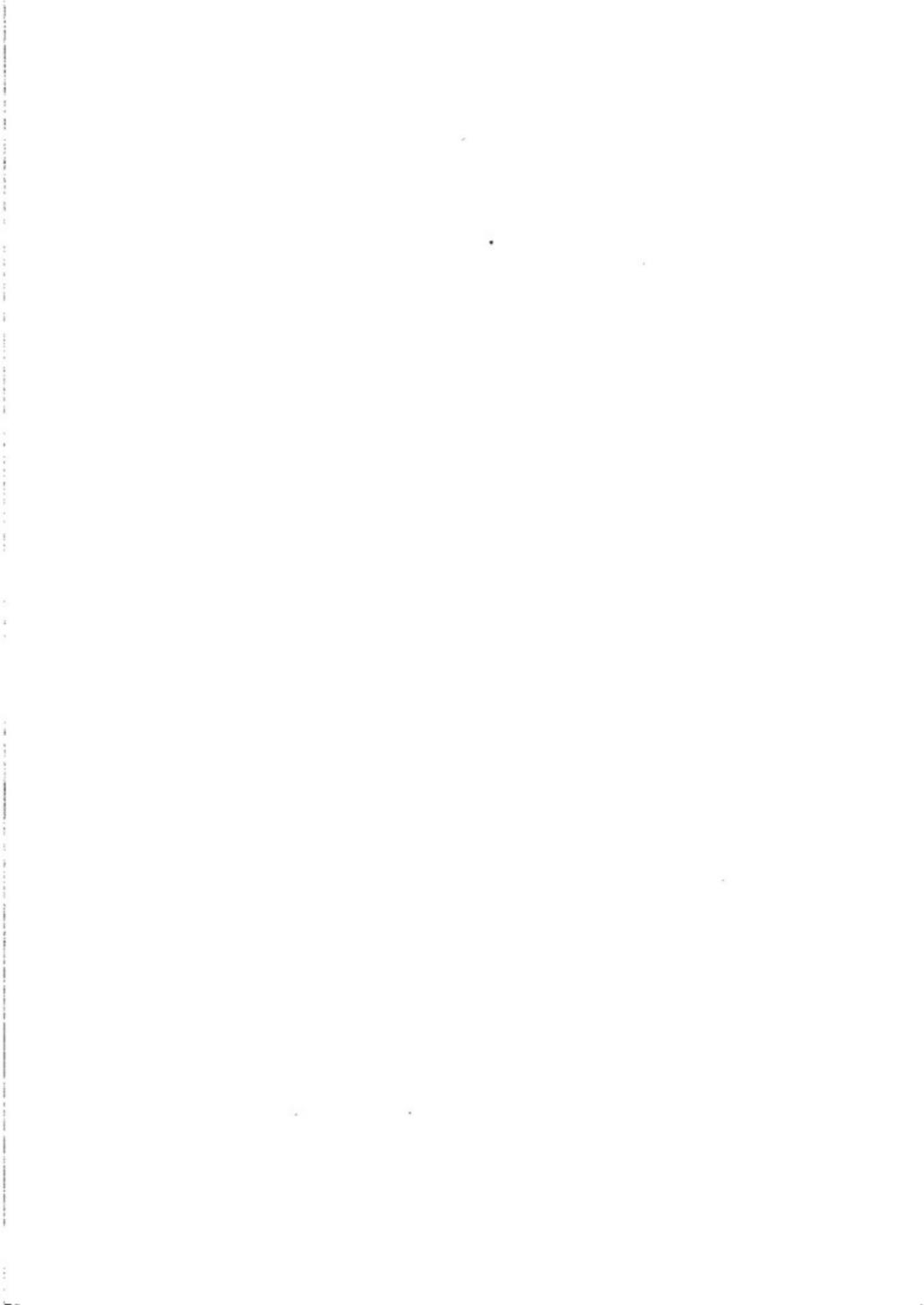
- 稲野 彰子 (1991) 「大木式土器にみられる球胴形深鉢について」北上市立博物館研究報告第8号、北上市博(岩手)
- 今村 啓爾 (1985) 「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号、東京大学文学部(東京)
- 海老原郁雄 (1982) 『北関東の大木式土器』『縄文文化の研究』雄山閣出版
- 大沢 穰・舟山裕士・北村 信 (1971) 『川尻地域の地質』地域地質研究報告、工業技術院地質調査所
- 小笠原好彦 (1968) 「東北地方南部における前期木から中期初頭の縄文式土器」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城県の地理と歴史第3集、宮城教育大学歴史研究会
- 小笠原好彦 (1974) 『円筒式文化の崩壊とその意義』『東北の考古—歴史論集』平重道先生還暦記念会
- 小原 眞一 (1980) 「沢内盆地の地形発達」岩手大学教育学部卒業論文
- 川崎 保 (2000) 「石製装身具に見える外来要素」考古学ジャーナル454号、ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 (1969) 「大木式土器理解のために (V)」考古学ジャーナル32号、ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 (1970) 「大木式土器理解のために (VI)」考古学ジャーナル48号、ニュー・サイエンス社
- 興野 義一 (1970) 「大木5b式土器の提唱」『古代文化』第141号、縄古代学協会
- 興野 義一 (1984) 「大木式土器について」『宮城県の研究 第1巻 考古学篇』
- 草間 俊一 (1965) 「中島遺跡」『水沢市の原始・古代遺跡』水沢市教委(岩手)
- 草間 俊一 (1971) 「新平遺跡」『日本考古学年報』第19号、日本考古学会

- 佐藤 典邦 (2000) 「弥生時代中期の擬縄文」『民俗と考古の世界』和田文夫先生頌壽記念献呈論文集
- 白鳥 良一 (1989) 「前期大木式土器様式」『縄文土器大観』小学館
- 高倉 淳 (1968) 「宮城県気仙沼市大島磯草貝塚出土の土器について」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城県の地理と歴史第3集、宮城教育大学歴史研究会編
- Toyoshima, M (1984) The Sequence of River Terrace Development in the last 20,000 Years in the Ou Backbone range, Northeastern Japan, The Science Reports of Tohoku University, 7th series, vol.34, NO.2*
- 豊島 正幸 (1993) 「和賀川流域の地形編年と遺跡の立地」『岩手県北上市和賀町愛宕山遺跡発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第9冊、岩手県立博物館
- 奈良 修介・豊島 昂 (1967) 『秋田県の考古学』
- 中川久夫・石田琢二・大池昭二・小野寺信吾・七崎修・松山力 (1971) 「北上線沿線の段丘群」東北大学地質学古生物学教室研究邦文報告71巻(宮城)
- 中村 大 (2000) 「土器の出土状況からみた土壌墓の認定について—縄文時代の北日本を中心として—」『關學院大學考古学資料館紀要第16輯(東京)』
- 西口 陽一 (1983) 「耳飾から見た性別」『季刊考古学』第5号
- 丹羽 茂 (1981) 「大木式土器」『縄文文化の研究』雄山閣出版
- 丹羽 茂 (1989) 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観』小学館
- 丹羽 茂 (1996) 「大木式土器」『日本土器事典』雄山閣出版
- 芳賀 英一 (1985) 「大木式土器と東部関東との関係」『古代』第80号、早稲田大学考古学会(東京)
- 林 謙作 (1965) 「東北地方」『日本の考古学 II』(東京)
- 福田 友之 (1999) 「本州北端の玦状耳飾り」『研究紀要』第4号、青森県埋文
- 藤田富士夫 (1983) 「縄文～古墳時代の玉製装身具—生産と流通—」『季刊考古学』第5号、雄山閣出版
- 藤田富士夫 (1989) 『玉』考古学ライブラリー52、ニュー・サイエンス社
- 堀江 武史 (1992) 「玦状耳飾の分類と製作工具に関して」『關學院大學考古学資料館紀要第8輯(東京)』
- <事典・図録・資料集・市町村史ほか>
- 岩手県博 (1982) 『岩手の土器—県内出土資料の集或—』
- 岩手埋文 (1985) 『岩手の遺跡』
- 岩手日報社 (1999) 『岩手年鑑 2000年版』
- 大川 清・鈴木公雄・工業善通編 (1997) 『日本土器事典』雄山閣出版
- 北上市立博物館・北上史談会 (1974) 『北上市の原始・古代の遺跡』(岩手)
- 旧石器文化談話会 (2000) 『旧石器考古学辞典』
- 沢内村史編纂委員会 (1991) 『沢内村史』沢内村教委 (岩手)
- 北海道埋文 (1994) 『遺跡が語る北海道の歴史 (15周年記念誌)』
- 南北北海道考古学情報交換会 (1996) 『円筒土器下層式図録集 遺構編』
- 南北北海道考古学情報交換会 (1999) 『北日本における縄文時代の墓制資料集 (20周年記念シンポジウム資料)』
- 湯田町史編纂委員会 (1979) 『湯田町史』湯田町教委 (岩手)

第 0 表 石材・石製品品目表 (8)

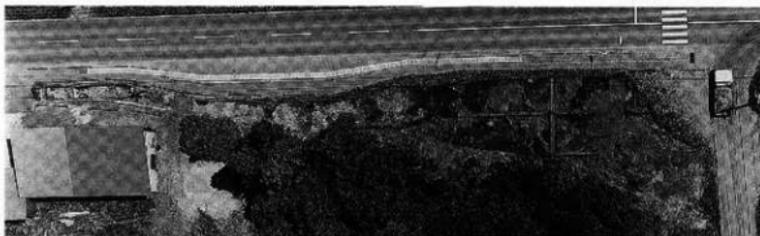
品名	数量	単位	出仕形式	部位	仕様	分級	取巻量 (mm)	重量	仕様・分類・備考	石材	規格
青斑石 S 392	311	53	2970 51a	N-V-V	粗面浮石	1-a	8.3	6.7	615.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 393	311	53	2970 51b	N-V-V	粗面浮石	1-b	8.3	6.7	615.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 394	311	53	2970 41a	N-V-V	粗面浮石	1-a	10.2	8.3	828.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 394	311	53	2970 41b	N-V-V	粗面浮石	1-b	10.2	8.3	828.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 395	311	53	2970 51a	N-V-V	粗面浮石	1-a	10.1	8.3	820.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 395	311	53	2970 51b	N-V-V	粗面浮石	1-b	10.1	8.3	820.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 397	12	83	2660 9a	N-V-V	粗面浮石	1-a	12.7	4.4	358.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 397	12	83	2660 9b	N-V-V	粗面浮石	1-b	12.7	4.4	358.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 398	112	83	3000 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	11.8	5.7	338.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 398	112	83	3000 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	11.8	5.7	338.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 400	112	83	3000 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	14.8	7.3	388.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 400	112	83	3000 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	14.8	7.3	388.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 401	112	83	3000 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	15.1	7.3	401.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 401	112	83	3000 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	15.1	7.3	401.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 402	112	83	3000 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	9.3	5.2	47.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 402	112	83	3000 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	9.3	5.2	47.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 403	112	83	3000 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	15.3	15.3	622.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 403	112	83	3000 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	15.3	15.3	622.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 404	112	83	3000 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	13.7	10.2	577.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 404	112	83	3000 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	13.7	10.2	577.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 405	112	83	3000 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	15.1	8.3	542.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 405	112	83	3000 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	15.1	8.3	542.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 406	112	83	3000 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	15.8	8.3	578.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 406	112	83	3000 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	15.8	8.3	578.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 411	14	84	2440 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	13.3	11.2	481.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 411	14	84	2440 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	13.3	11.2	481.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 413	114	84	2710 A/C/T-2	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.2	5.7	104.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 413	114	84	2710 B/C/T-2	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.2	5.7	104.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 414	114	84	2710 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.5	6.2	116.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 414	114	84	2710 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.5	6.2	116.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 415	115	84	2720 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.5	6.9	113.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 415	115	84	2720 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.5	6.9	113.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 416	115	83	2720 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	9.7	5.2	210.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 416	115	83	2720 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	9.7	5.2	210.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 417	115	83	2760 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.7	10.1	105.4	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 417	115	83	2760 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.7	10.1	105.4	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 418	115	83	2760 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	11.4	8.3	242.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 418	115	83	2760 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	11.4	8.3	242.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 419	115	83	2760 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	13.7	10.2	577.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 419	115	83	2760 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	13.7	10.2	577.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 421	115	83	2770 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	8.4	9.4	229.4	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 421	115	83	2770 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	8.4	9.4	229.4	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 422	114	83	2780 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	15.3	8.3	567.8	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 422	114	83	2780 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	15.3	8.3	567.8	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 423	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.3	6.3	117.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 423	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.3	6.3	117.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 424	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	11.9	8.1	497.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 424	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	11.9	8.1	497.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 425	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.7	6.1	244.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 425	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.7	6.1	244.9	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 426	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	10.9	8.3	311.6	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 426	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	10.9	8.3	311.6	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 427	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	15.5	11.7	619.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 427	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	15.5	11.7	619.1	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 428	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	11.9	213.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 428	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	11.9	213.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 429	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	12.1	11.9	474.6	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 429	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	12.1	11.9	474.6	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 430	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	8.3	10.9	279.4	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 430	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	8.3	10.9	279.4	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 431	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.9	6.7	148.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 431	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.9	6.7	148.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 432	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.7	6.8	141.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 432	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.7	6.8	141.3	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 433	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	9.1	7.3	208.8	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 433	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	9.1	7.3	208.8	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 434	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	8.1	7.8	214.6	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 434	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	8.1	7.8	214.6	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 435	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.7	6.8	172.2	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 435	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.7	6.8	172.2	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 436	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	6.7	6.8	172.2	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 436	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	6.7	6.8	172.2	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 437	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.1	5.8	144.8	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 437	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.1	5.8	144.8	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 438	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	5.8	4.6	117.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 438	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	5.8	4.6	117.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 439	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.7	6.4	186.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 439	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.7	6.4	186.7	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 440	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.1	5.8	166.2	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 440	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.1	5.8	166.2	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 441	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 441	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 442	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 442	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 443	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 443	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 444	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 444	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 445	114	83	2840 1a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 445	114	83	2840 1b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 446	114	83	2840 2a	N-V-V	粗面浮石	1-a	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石
青斑石 S 446	114	83	2840 2b	N-V-V	粗面浮石	1-b	7.4	8.3	217.5	粗面浮石	青斑石

写 真 图 版

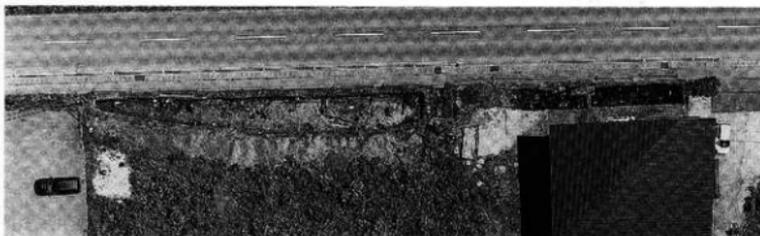




調査区全景 (北東→)



調査区南半部 (左が北)



調査区北半部 (左が北)

写真図版1 空中写真



調査区遠景 (東→)



調査区近景 (南東→)



調査前風景 (1) A区



調査前風景 (2) B区



調査前風景 (3) C区

写真図版2 調査区現況



精査状況 (1) A区



精査状況 (2) A区



精査状況 (3) A区



精査状況 (4) B区



精査状況 (4) C区



重機による盛土除去・B区



現地説明会 (1)



現地説明会 (2)

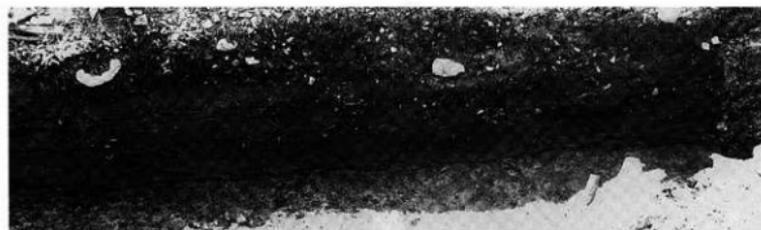
写真図版 3 作業風景・現地説明会



土層断面 (1) A区南端部 (北～南)



土層断面 (2) C区2b aグリッド (東～西)



土層断面 (3) C区31a～32aグリッド (南～北)

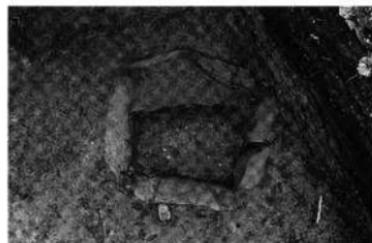
写真図版4 基本層序



1号住居跡



1号住居跡断面

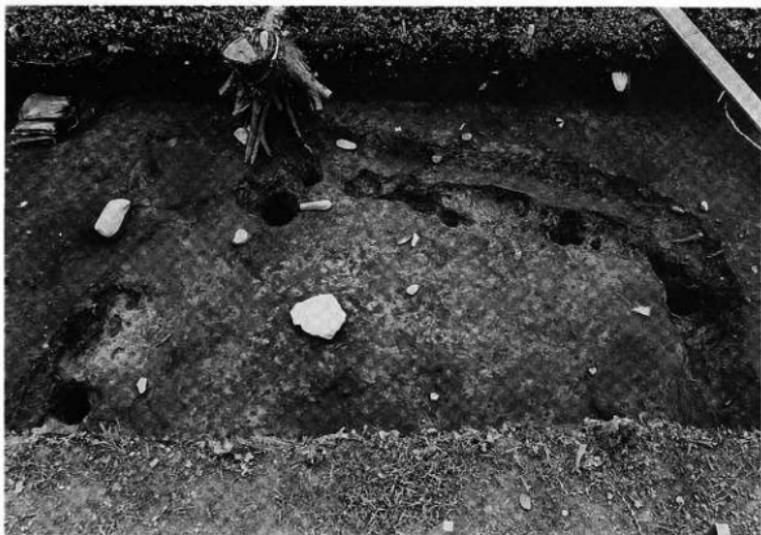


炉平面

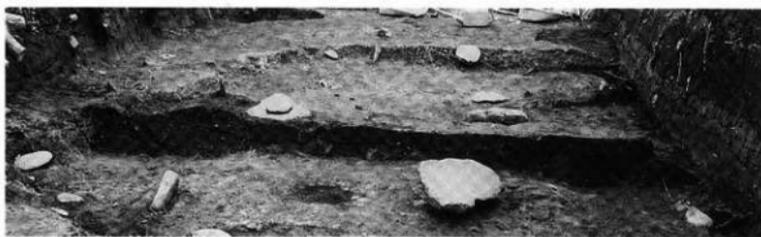


炉断面

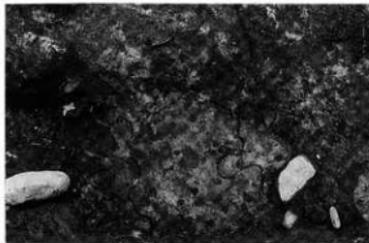
写真図版5 1号住居跡



2号住居跡



2号住居跡断面



炉平面

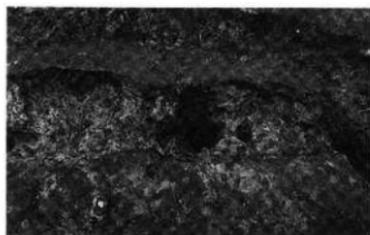


炉断面

写真図版6 2号住居跡(1)



2号住居跡遺物出土状況



壁溝平面



壁溝断面



柱穴 (P6) 平面

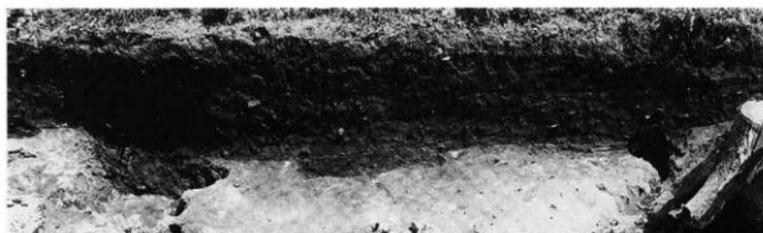


土器 (2) 出土状況

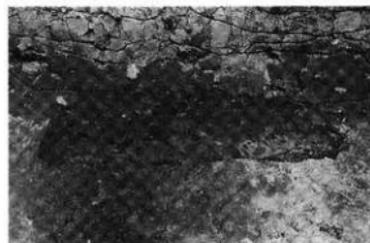
写真図版7 2号住居跡 (2)



3号住居跡



3号住居跡断面



炉断面



土器出土状況

写真図版8 3号住居跡(1)



3号住居跡柱穴 (P 2・3)



3号住居跡遺物出土状況 (S 41)



4号住居跡

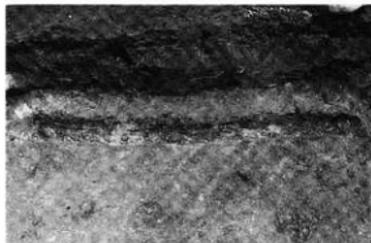


4号住居跡断面

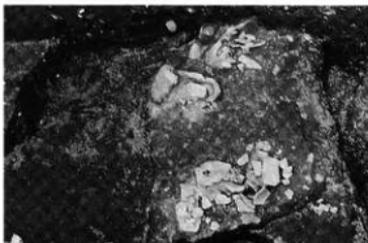
写真図版 9 3号住居跡 (2)・4号住居跡



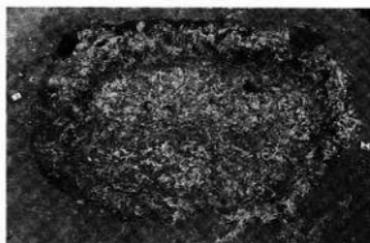
5号住居跡



炉断面



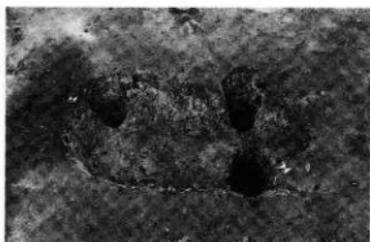
遺物出土状況



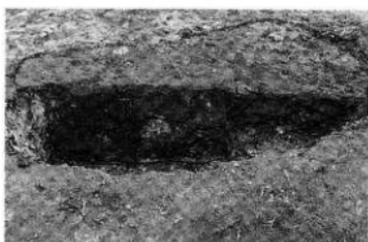
1号土坑



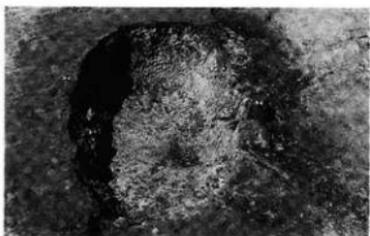
1号土坑断面



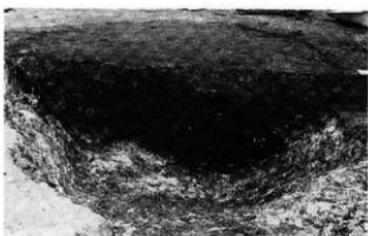
2号土坑



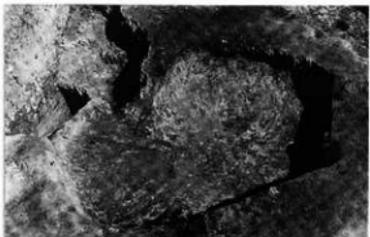
2号土坑断面



3号土坑



3号土坑断面



4号土坑

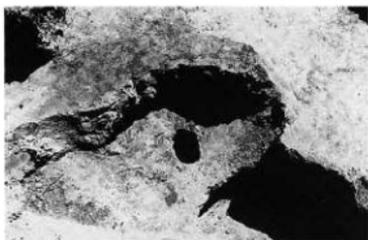


4号土坑断面

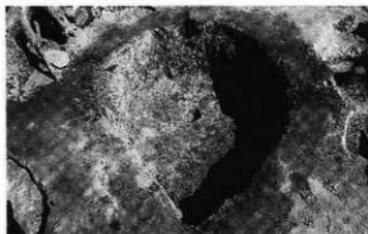
写真图版11 土坑(1)



5号土坑



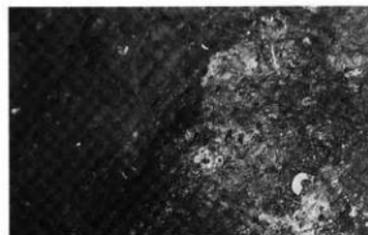
6号土坑平面



7号土坑



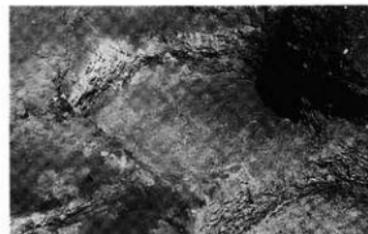
7号土坑断面



7号土坑 缺状耳钵 (S138) 出土状况



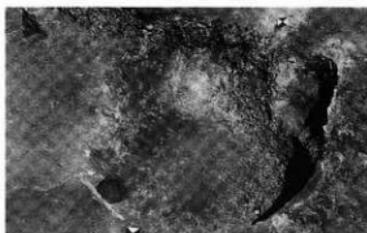
8号土坑平面



9号土坑



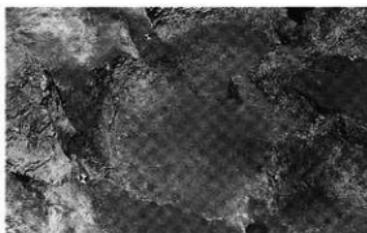
作業風景



10号土坑



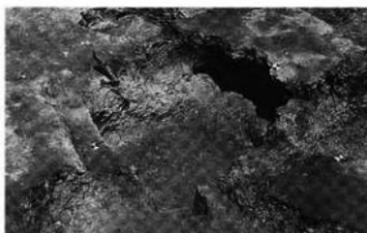
10号土坑断面



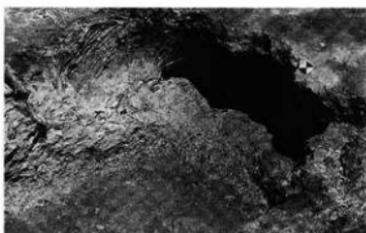
16号土坑



16号土坑土器出土状况



12号土坑

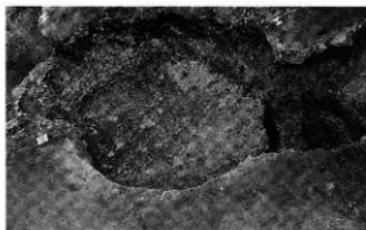


13号土坑



12号土坑・13号土坑断面

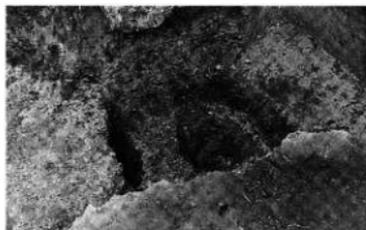
写真图版13 土坑(3)



14号土坑



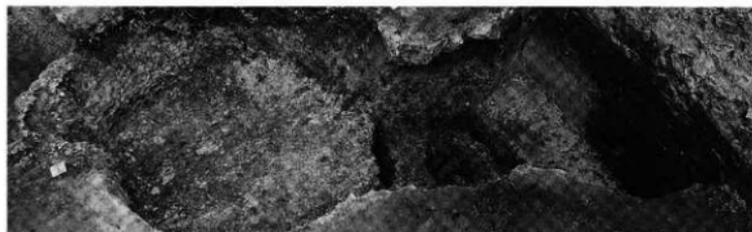
14号土坑断面



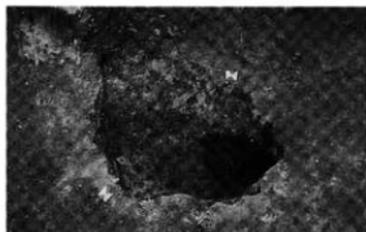
15号土坑



11号土坑



14·15·11号土坑

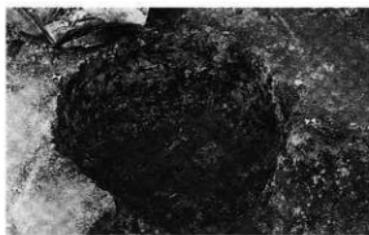


17号土坑



17号土坑断面

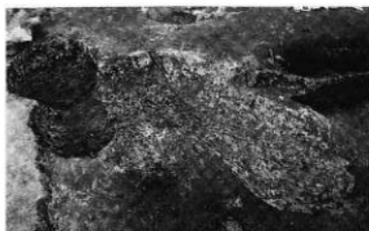
写真图版14 土坑(4)



18号土坑



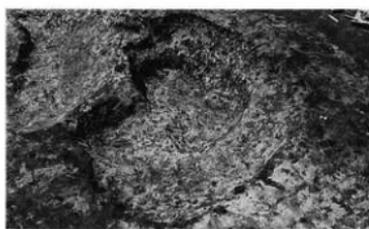
遺物出土狀況



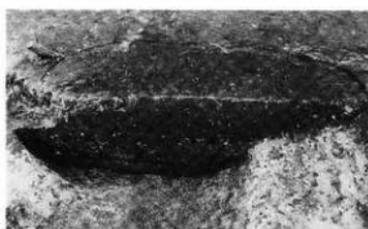
19号土坑



19号土坑断面



20号土坑



20号土坑断面



21号土坑

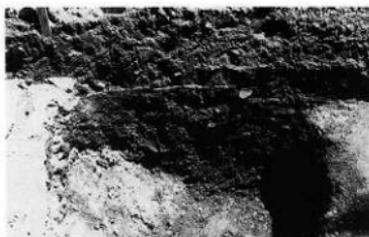


21号土坑断面

写真図版15 土坑(5)



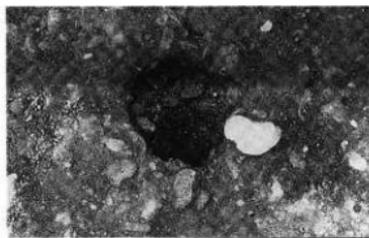
22号土坑



22号土坑断面



23号土坑



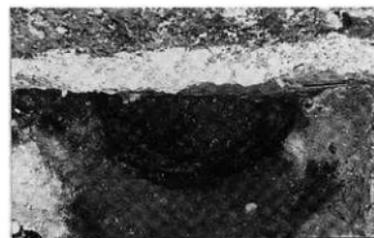
24号土坑



25号土坑



26号土坑



24号土坑



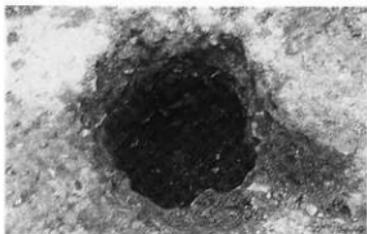
27号土坑断面



28号土坑



28号土坑断面



29号土坑



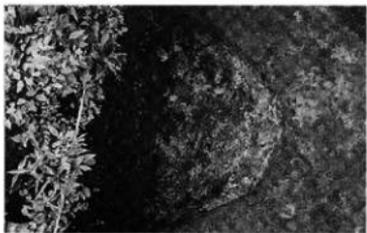
29号土坑断面



30号土坑



作業風景



31号土坑



31号土坑断面

写真図版17 土坑(7)



32号土坑



32号土坑断面



33号土坑



33号土坑断面



A区土坑分布状况 (北→)

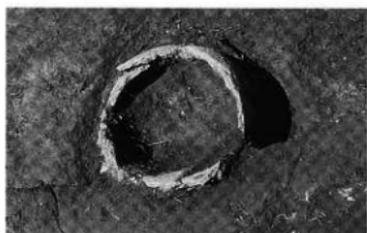
写真图版18 土坑(8)



1号埋設土器



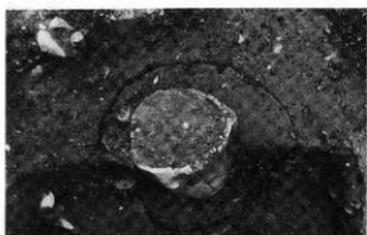
1号埋設土器断面



2号埋設土器



2号埋設土器断面



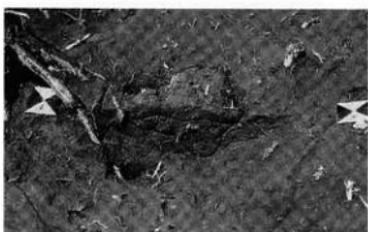
3号埋設土器



3号埋設土器断面

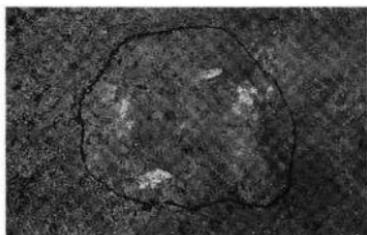


1号烧土



1号烧土断面

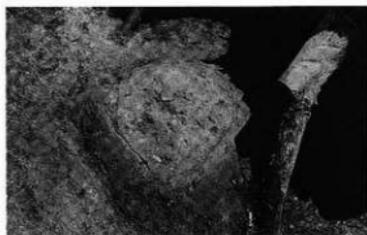
写真図版19 土器埋設遺構、烧土遺構(1)



2号烧土



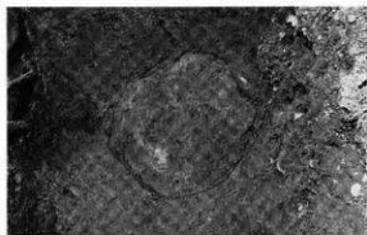
2号烧土断面



3号烧土



3号烧土断面



4号烧土



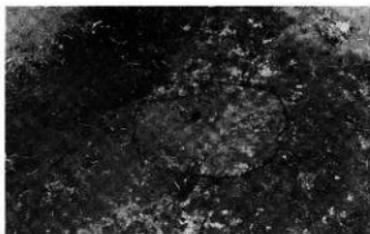
4号烧土断面



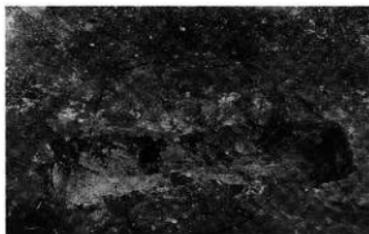
5号烧土



5号烧土断面



6号烧土



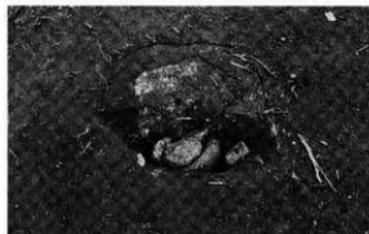
6号烧土断面



掘立柱建物跡



柱穴平面 (P2)



柱穴断面 (P2)

写真図版21 烧土遺構 (3)・掘立柱建物跡



A区遺物出土状況



A区遺物出土状況



A区遺物出土状況



A区遺物出土状況



C区遺物出土状況



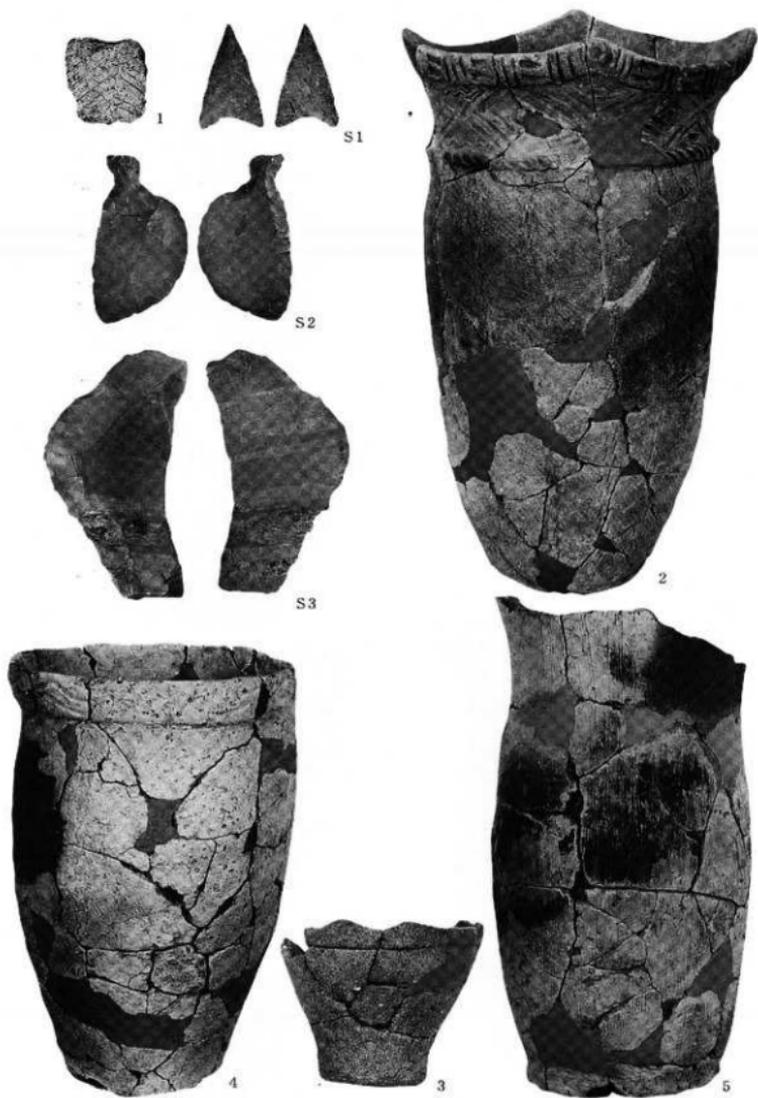
C区遺物出土状況



缺状耳飾 (S457) 出土状況



缺状耳飾 (S458) 出土状況



写真図版23 遺構内出土遺跡 (1)



6



7



9



8

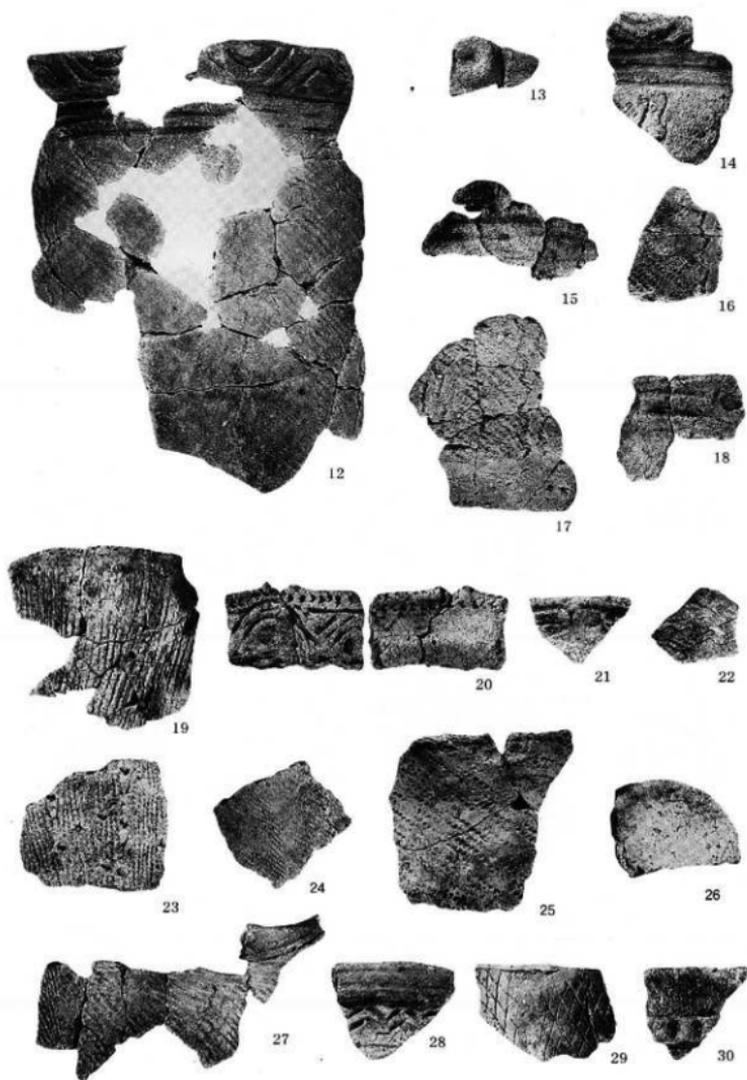


10



11

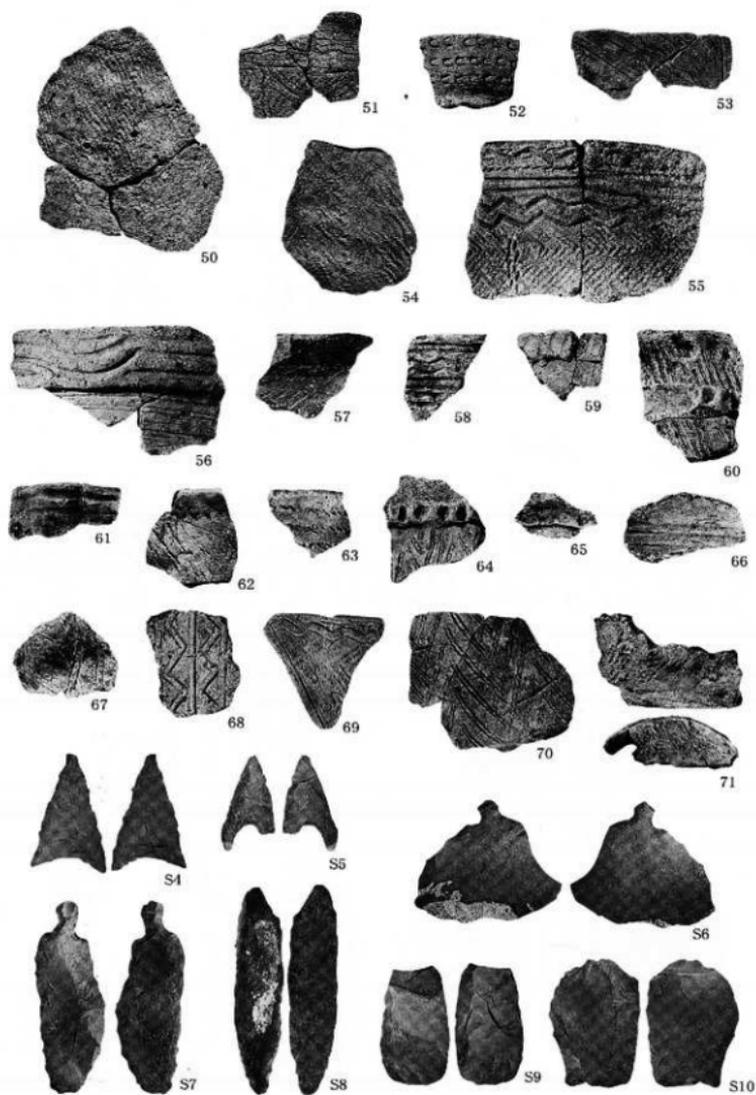
写真図版24 遺構内出土遺物(2)



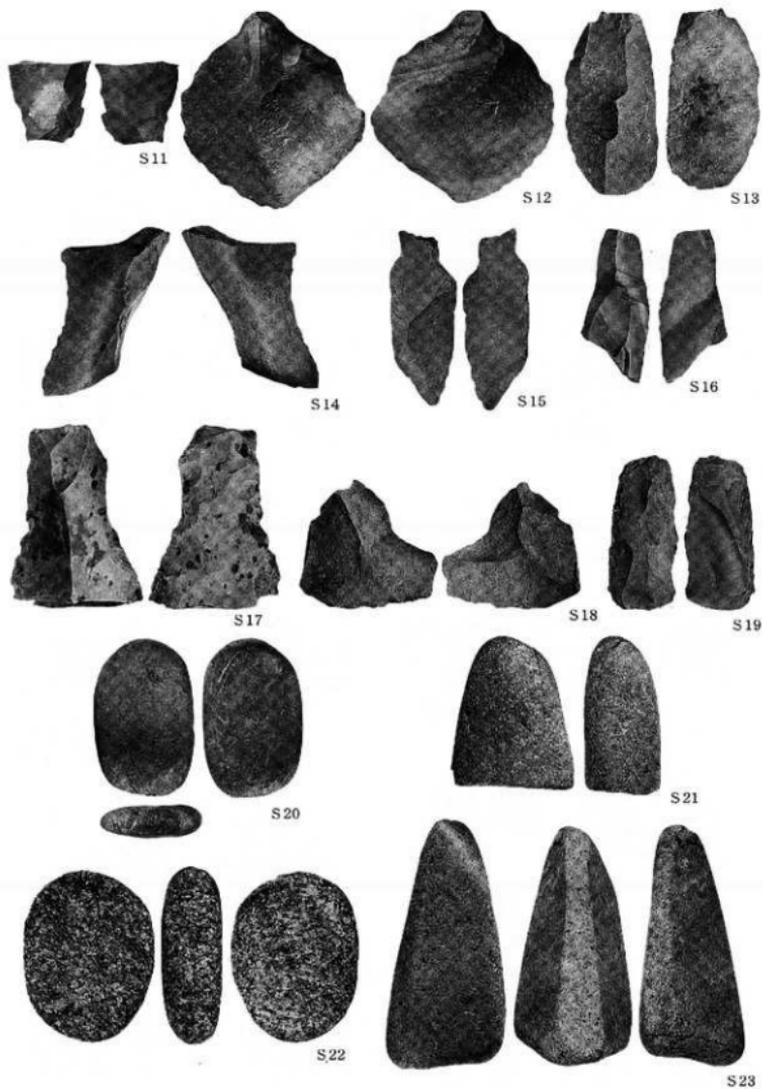
写真図版25 遺構内出土遺物(3)



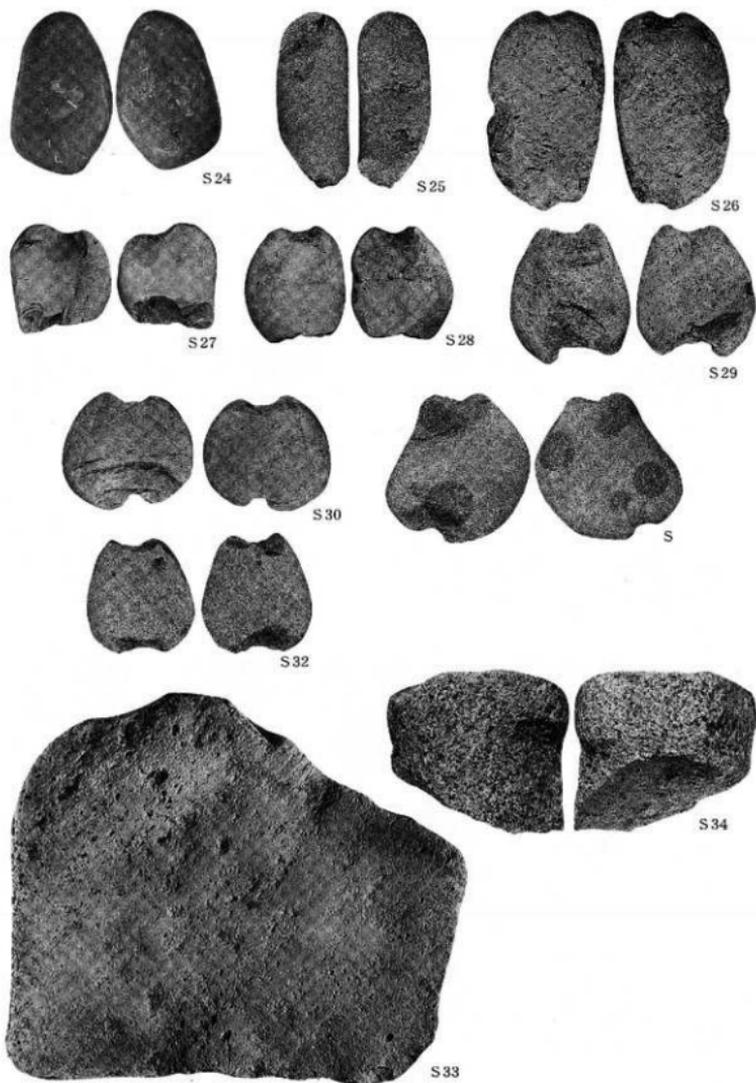
写真図版26 遺構内出土遺物(4)



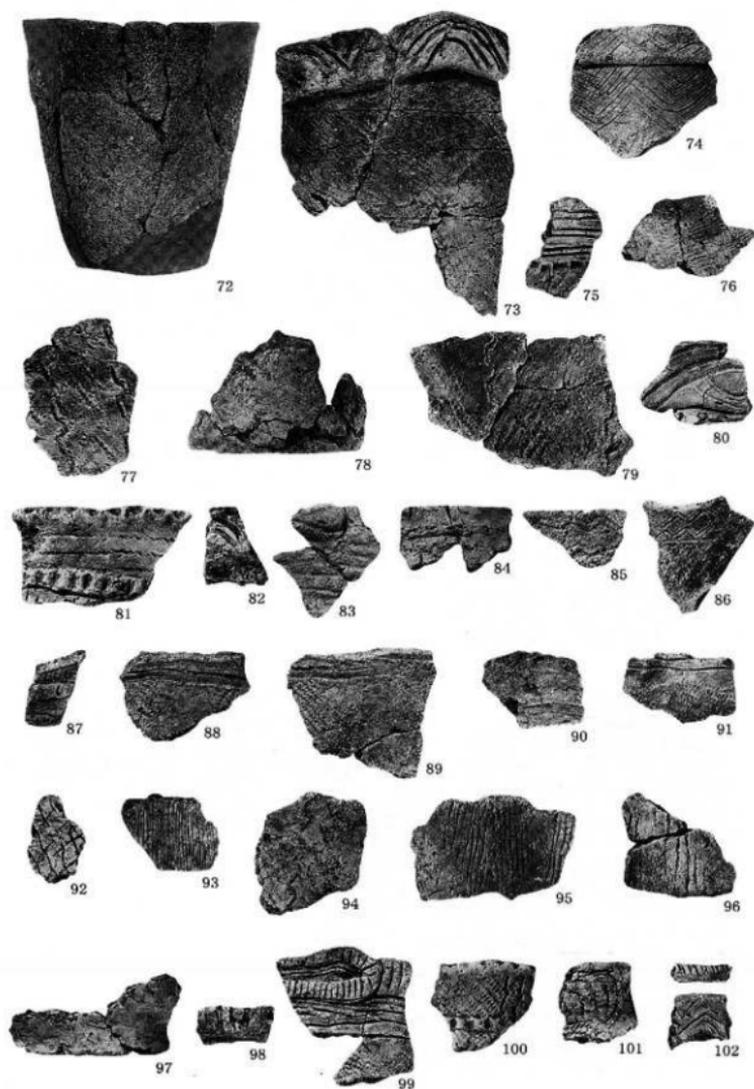
写真図版27 遺構内出土遺物 (5)



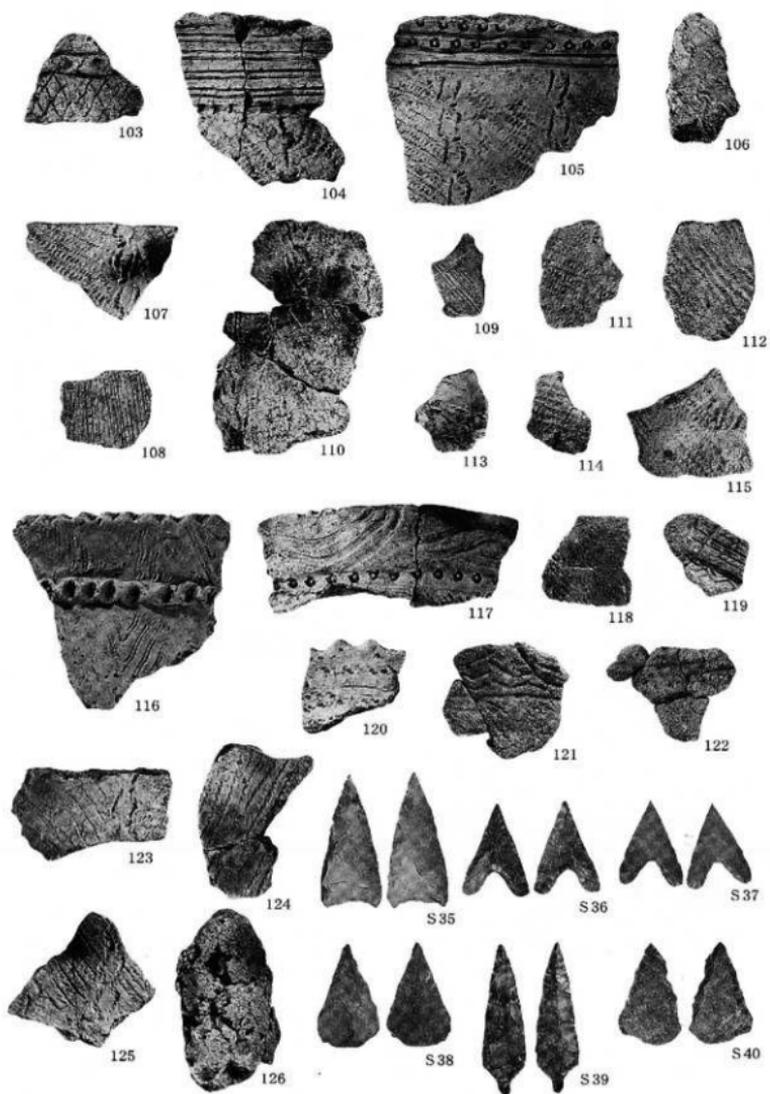
写真図版28 遺構内出土遺物(6)



写真図版29 遺構内出土遺物(7)



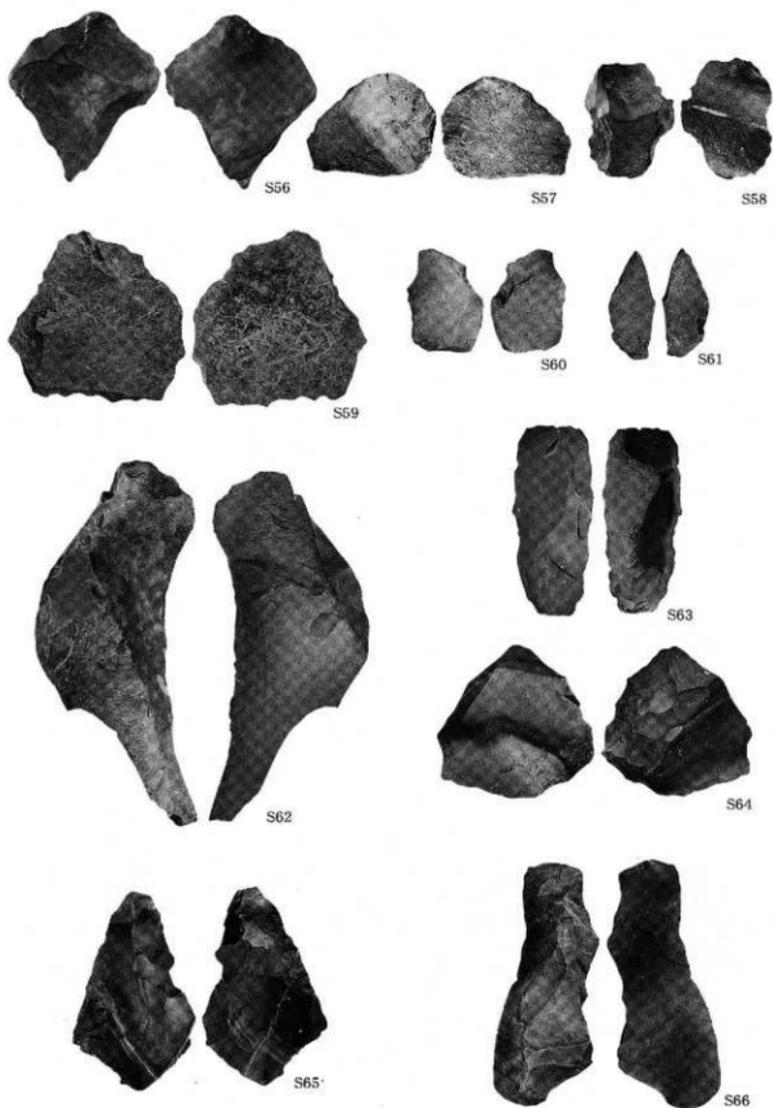
写真図版30 遺構内出土遺物(8)



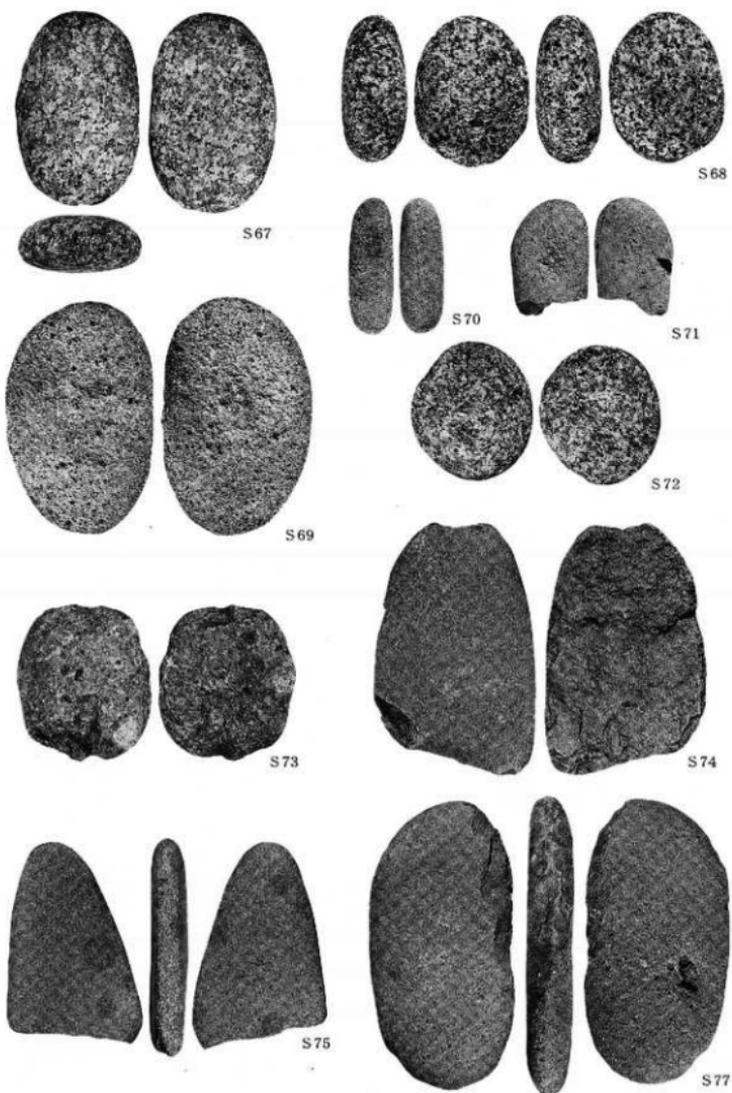
写真図版31 遺構内出土遺物(9)



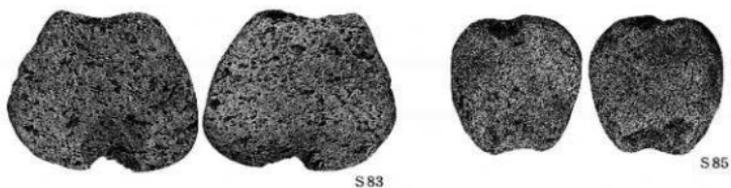
写真図版32 遺構内出土遺物 (10)



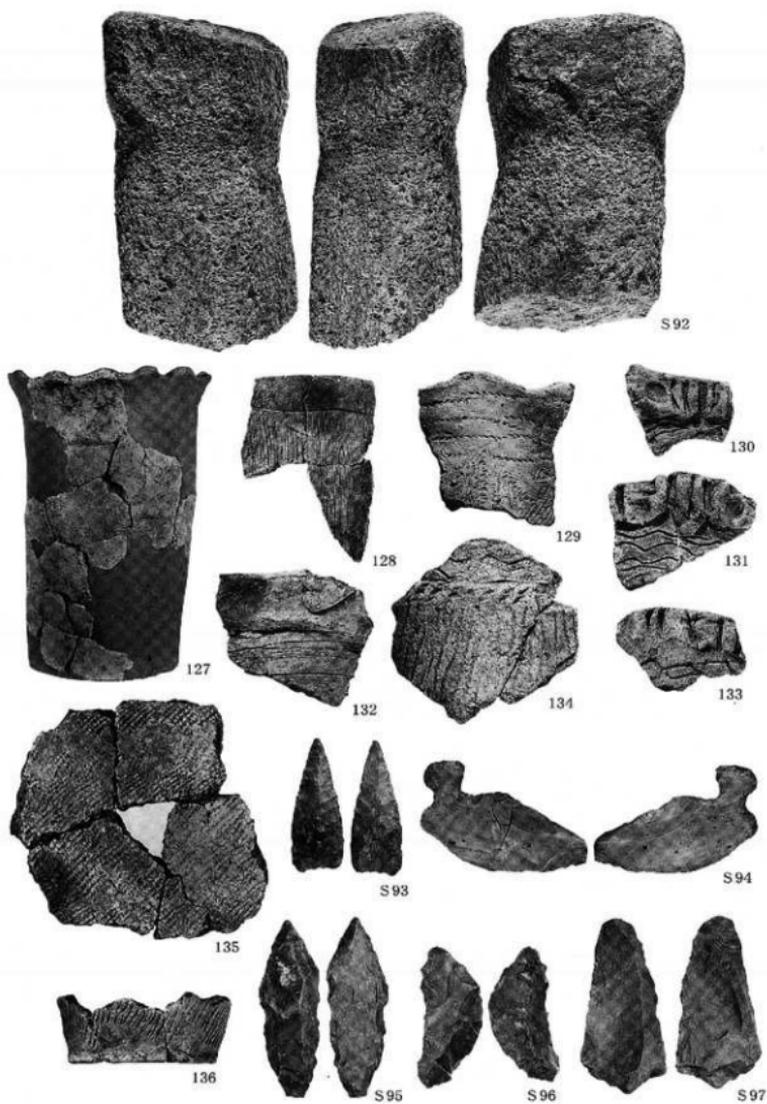
写真图版33 (11)



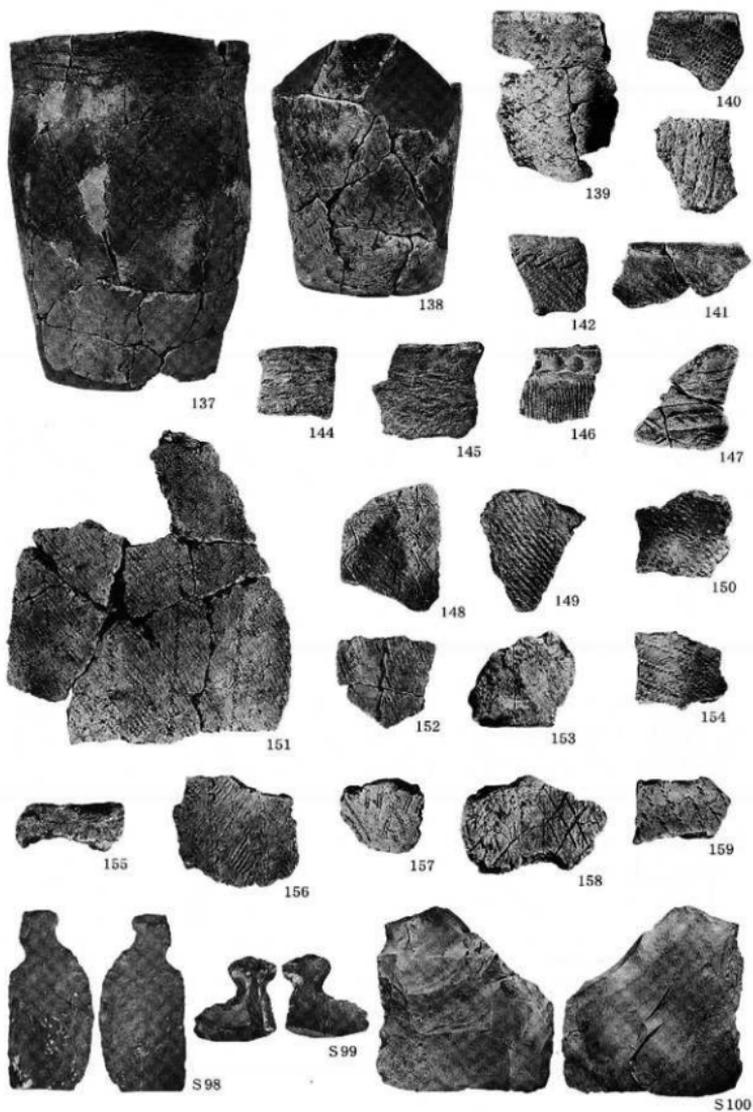
写真図版34 遠構内出土物 (12)



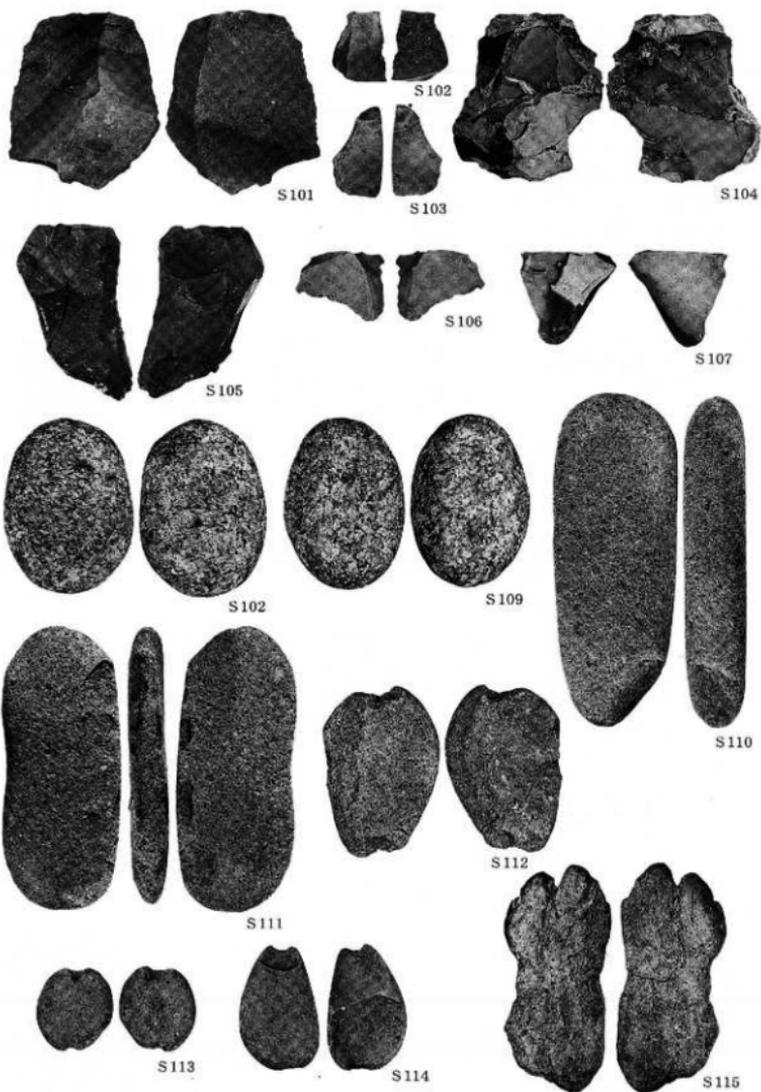
写真図版35 遺構内出土遺物 (13)



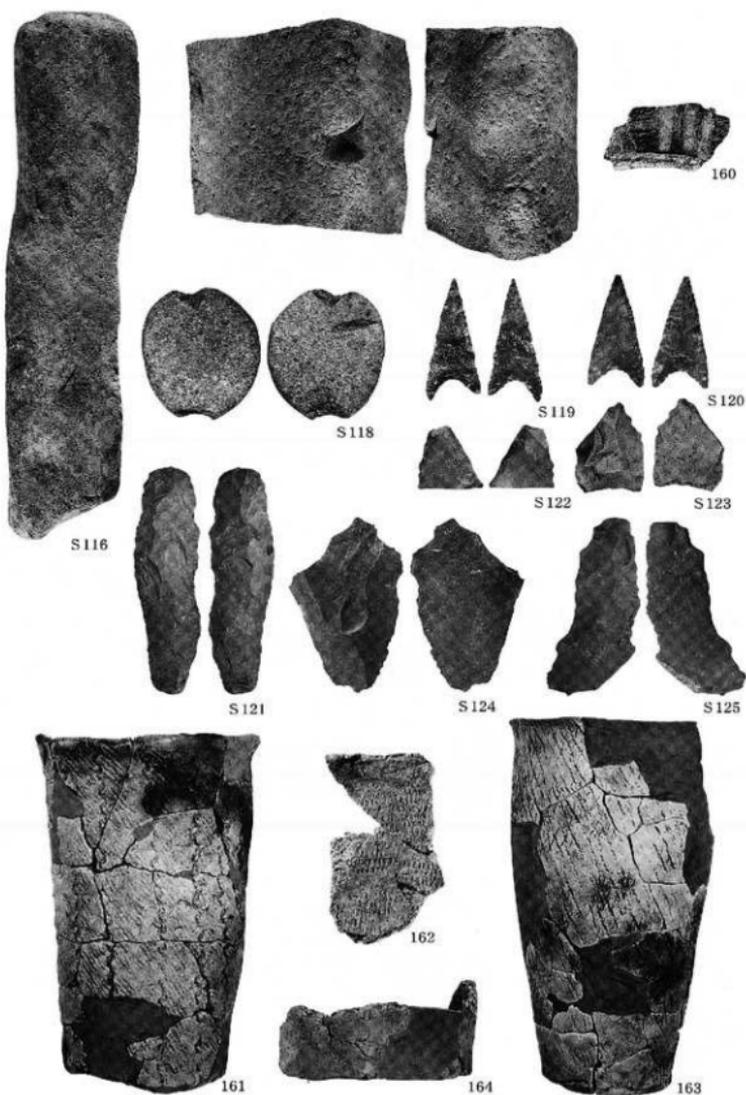
写真図版36 遺構内出土遺物 (14)



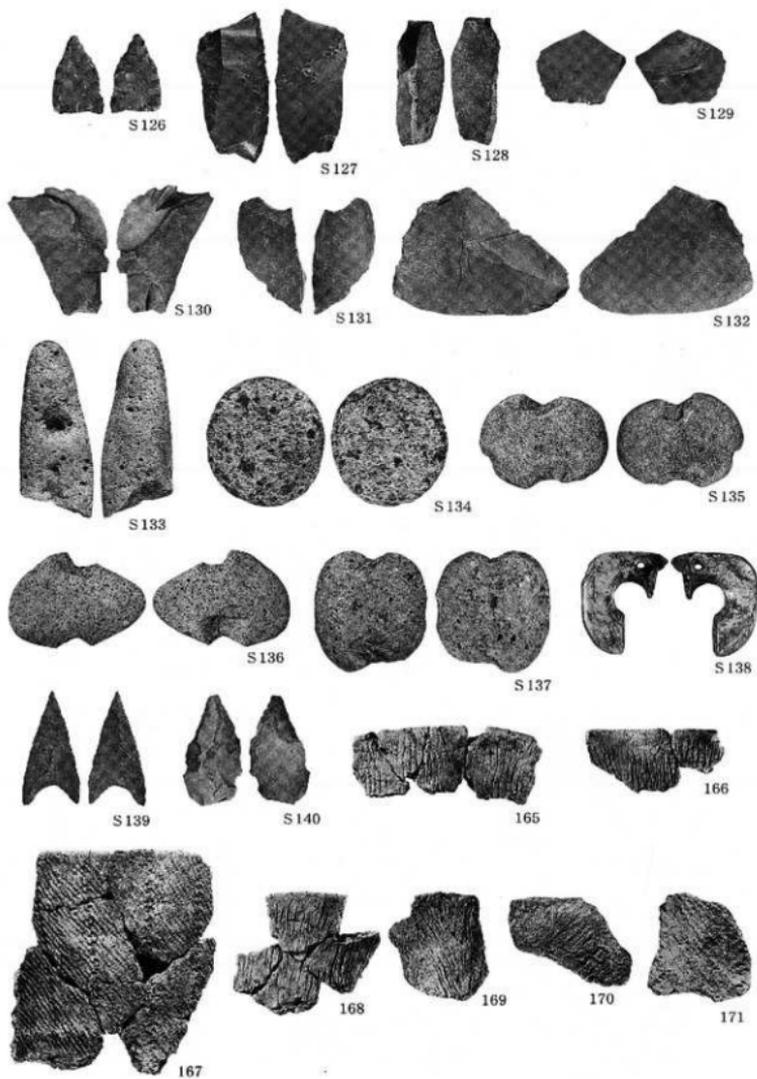
写真図版37 遺構内出土遺物 (15)



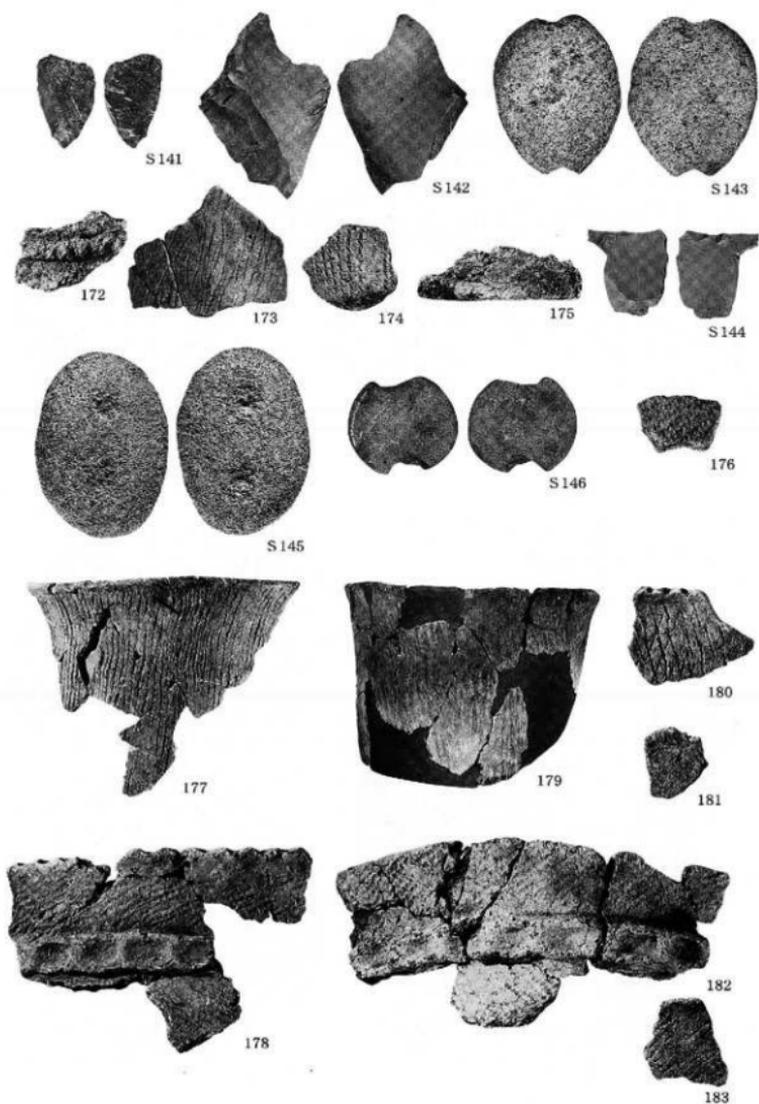
写真図版38 遺構内出土遺物 (16)



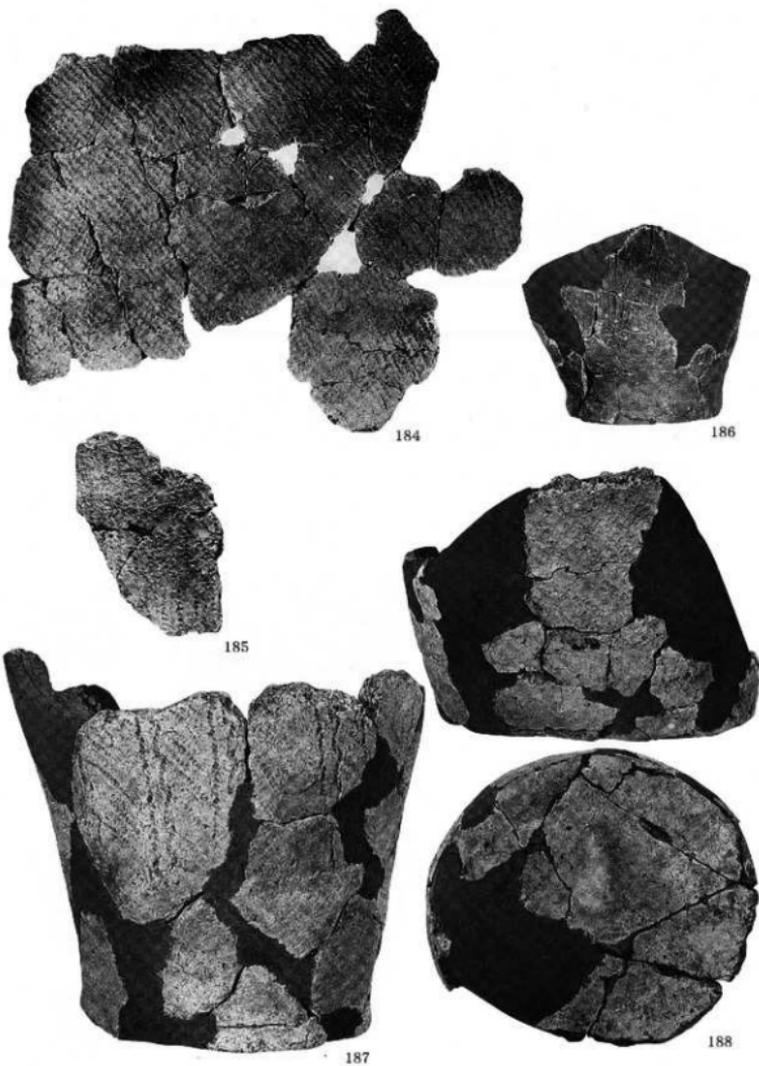
写真図版39 遺構内出土遺物 (17)



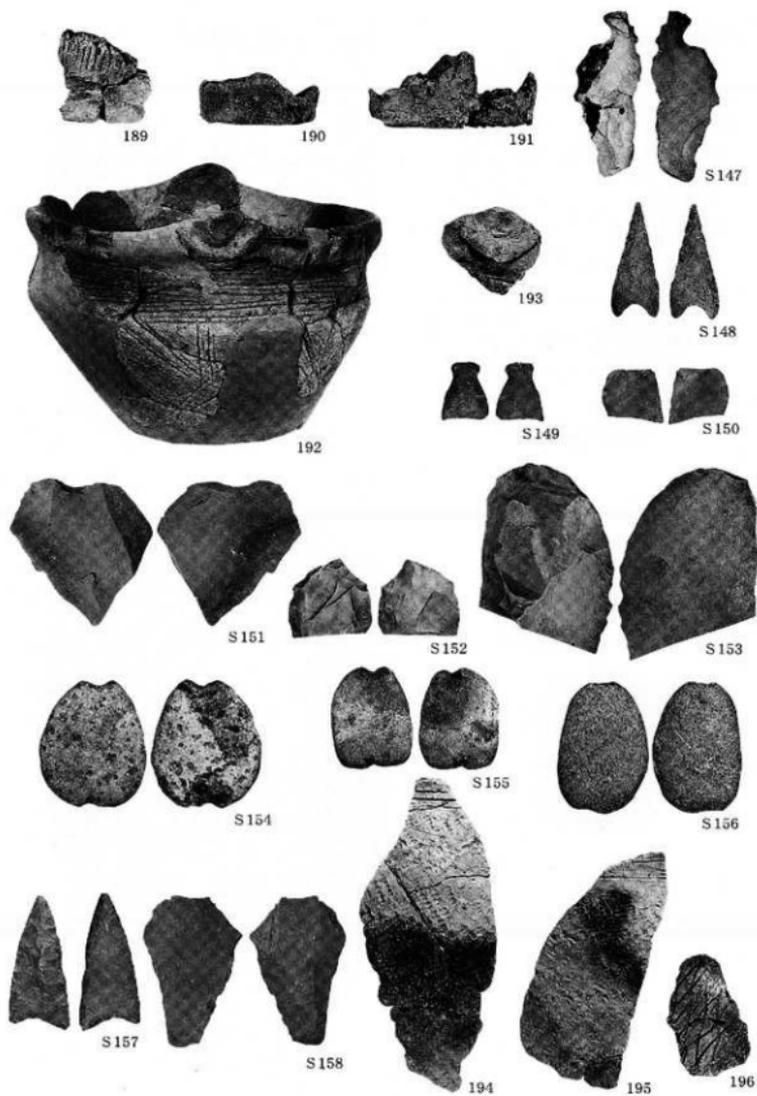
写真図版40 遺構内出土遺物 (18)



写真図版41 透櫛内出土遺物 (19)



写真図版42 遺構内出土遺物 (20)



写真図版43 遺構内出土遺物 (21)



197



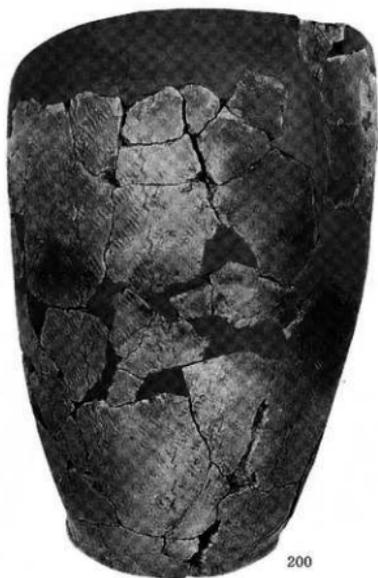
198



199



201



200

写真図版44 遺構内出土遺物 (22)



202



203



205 a



204



205 b

写真図版45 遺構外出土遺物(1)



206



208



207



210

写真図版46 遺構外出土遺物(2)



211



209



212

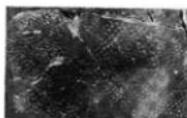


213



214

写真図版47 遺構外出土遺物(3)



217部分拡大図



写真図版48 遺構外出土遺物(4)



219



220



221

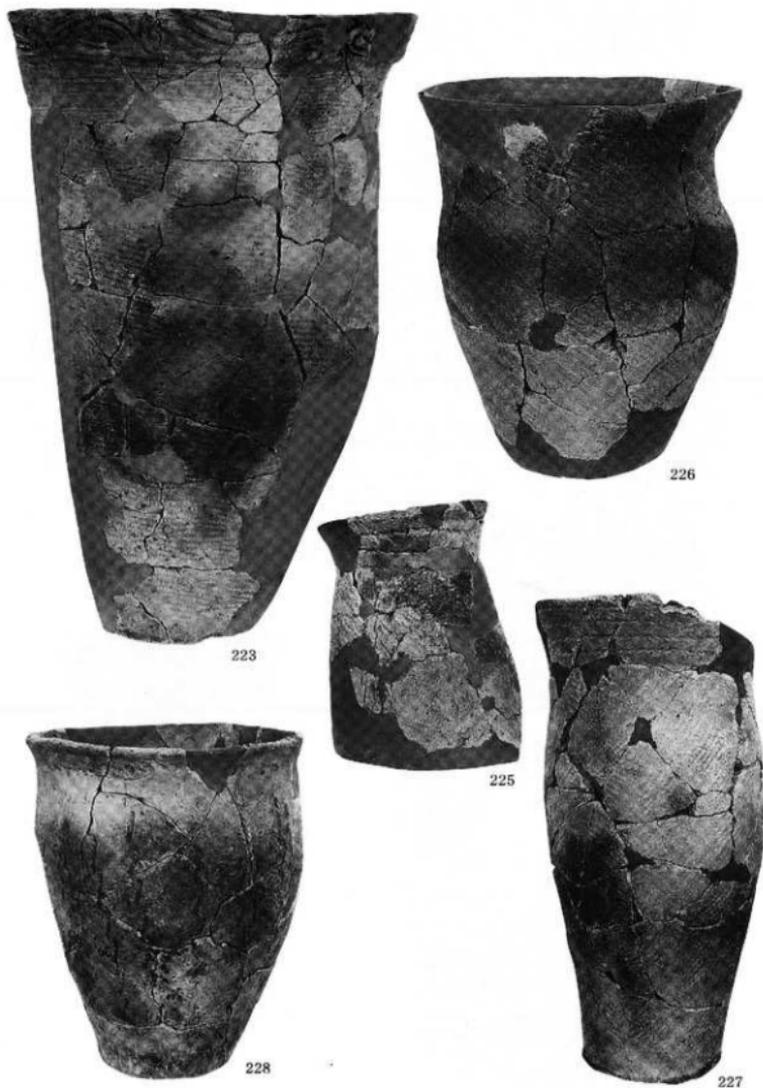


222



224

写真図版49 遼構外出土遺物(5)



写真図版50 遺構外出土遺物(6)



229



230



231



232

写真図版51 遺構外出土遺物(7)



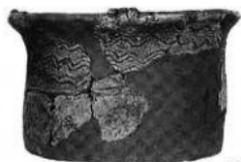
233



234



235



238



236



239

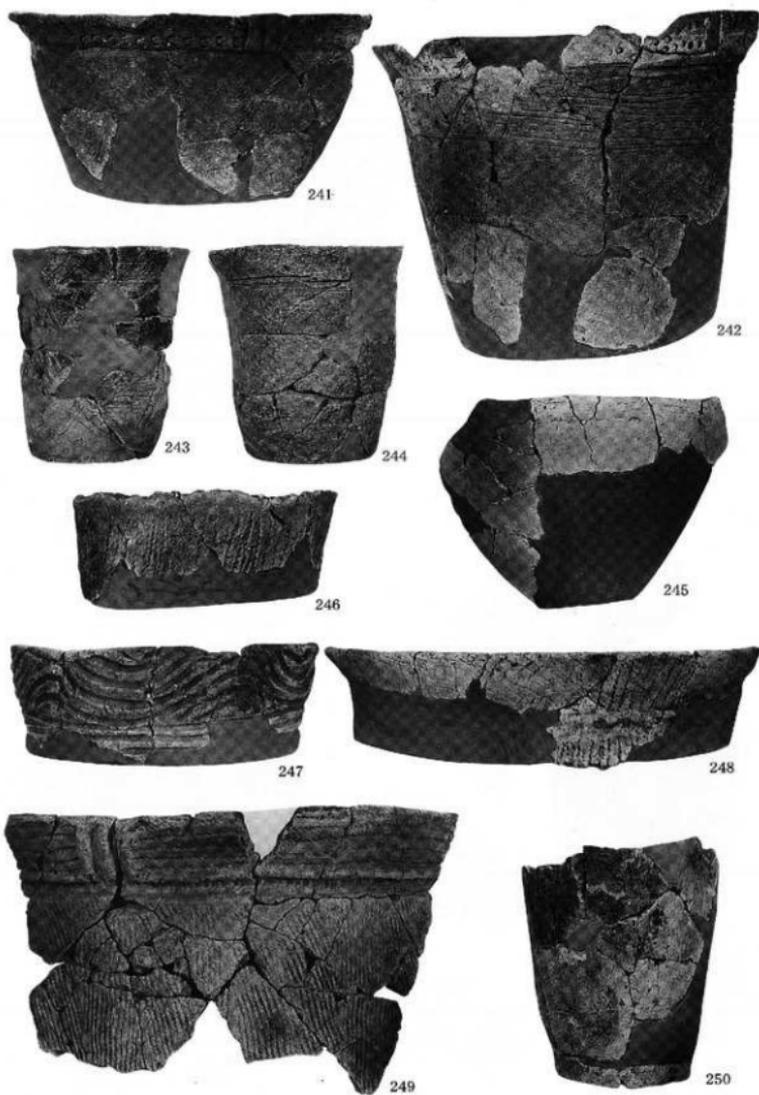


237

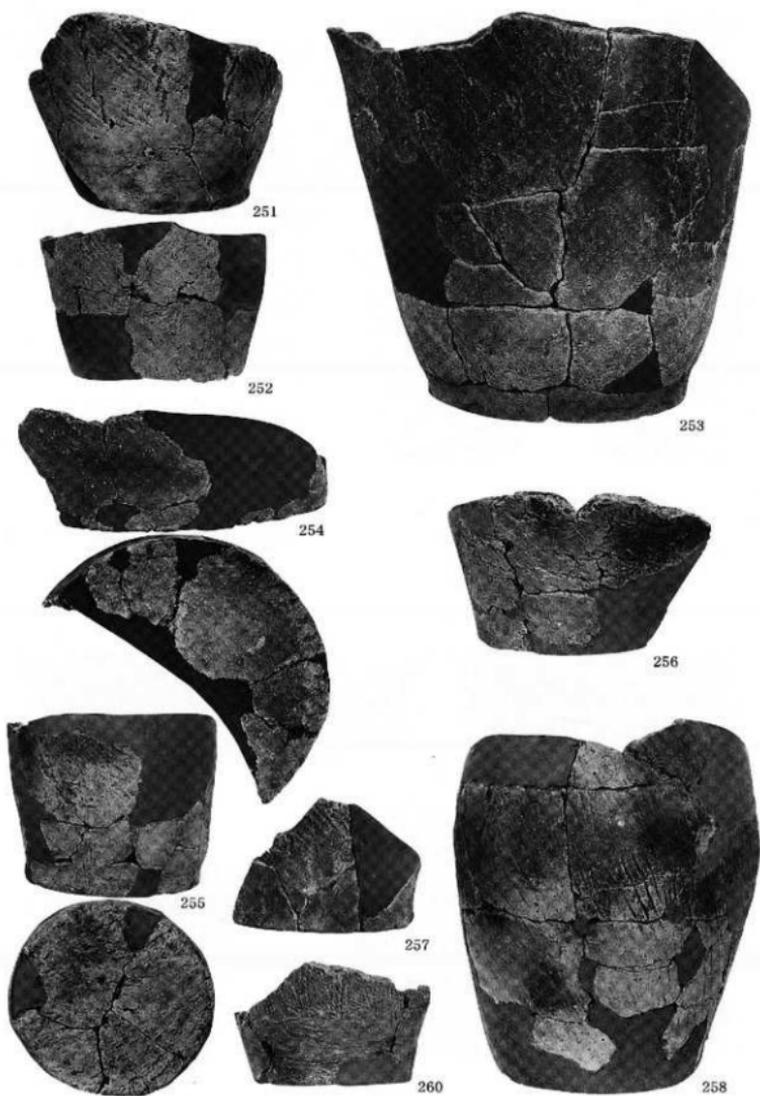


240

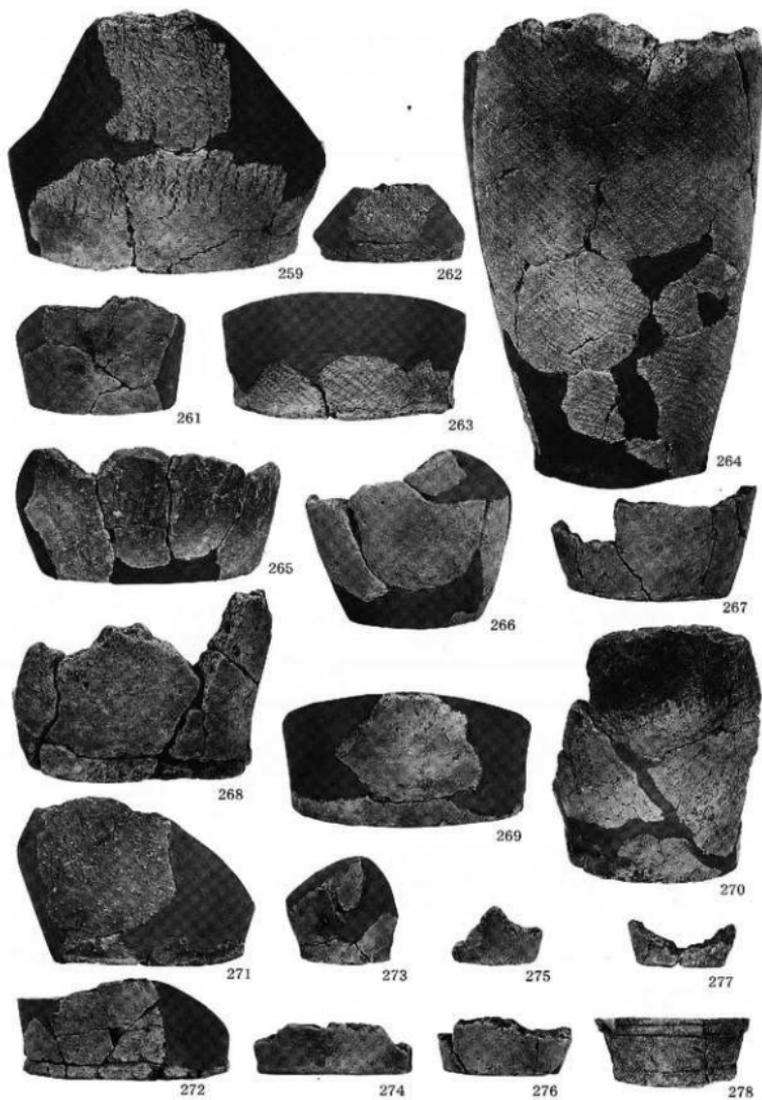
写真図版52 遺構外出土遺物(8)



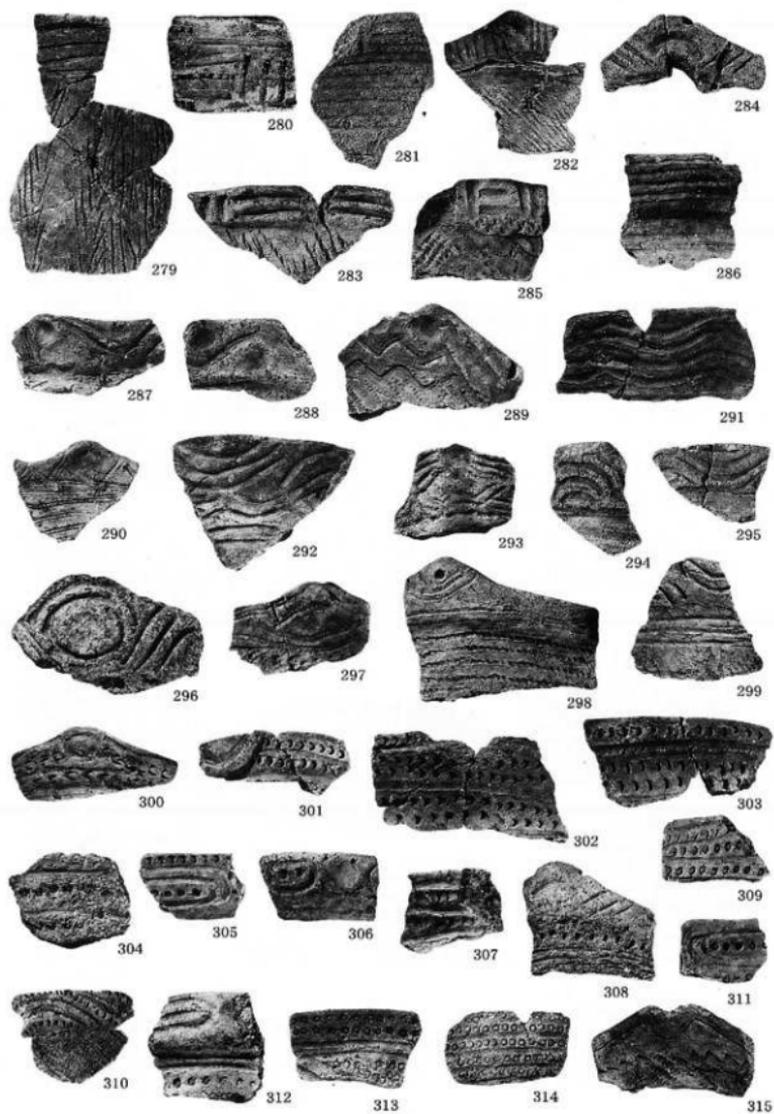
写真図版53 遺構外出土遺物(9)



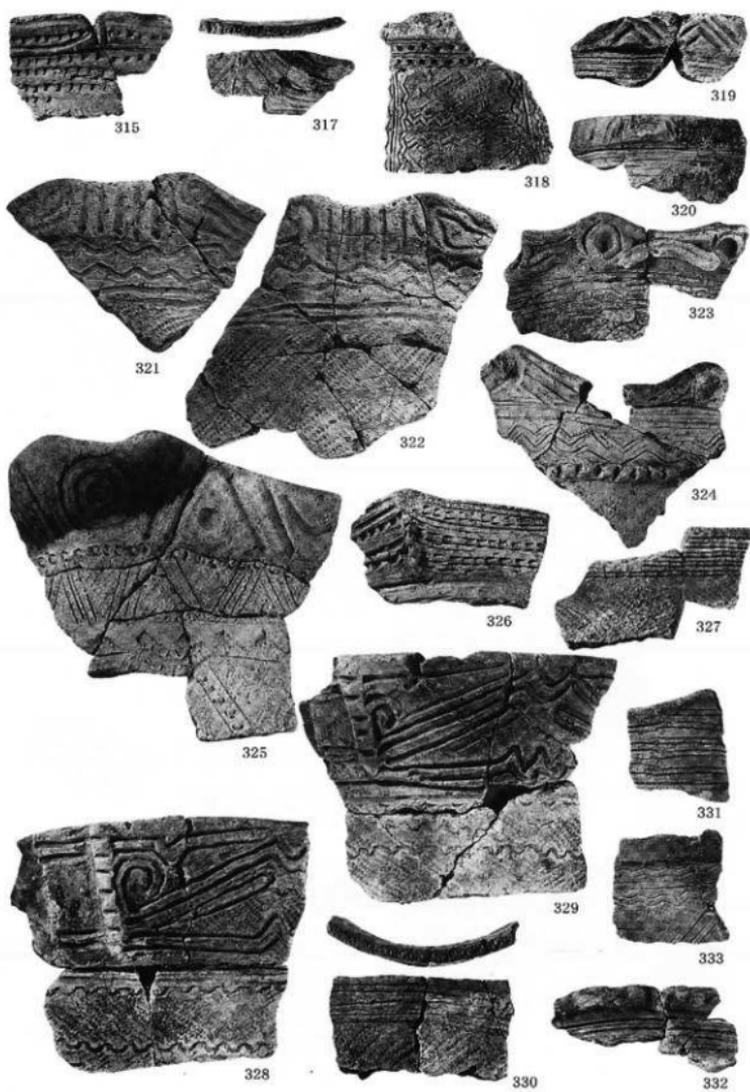
写真図版54 遺構外出土遺物 (10)



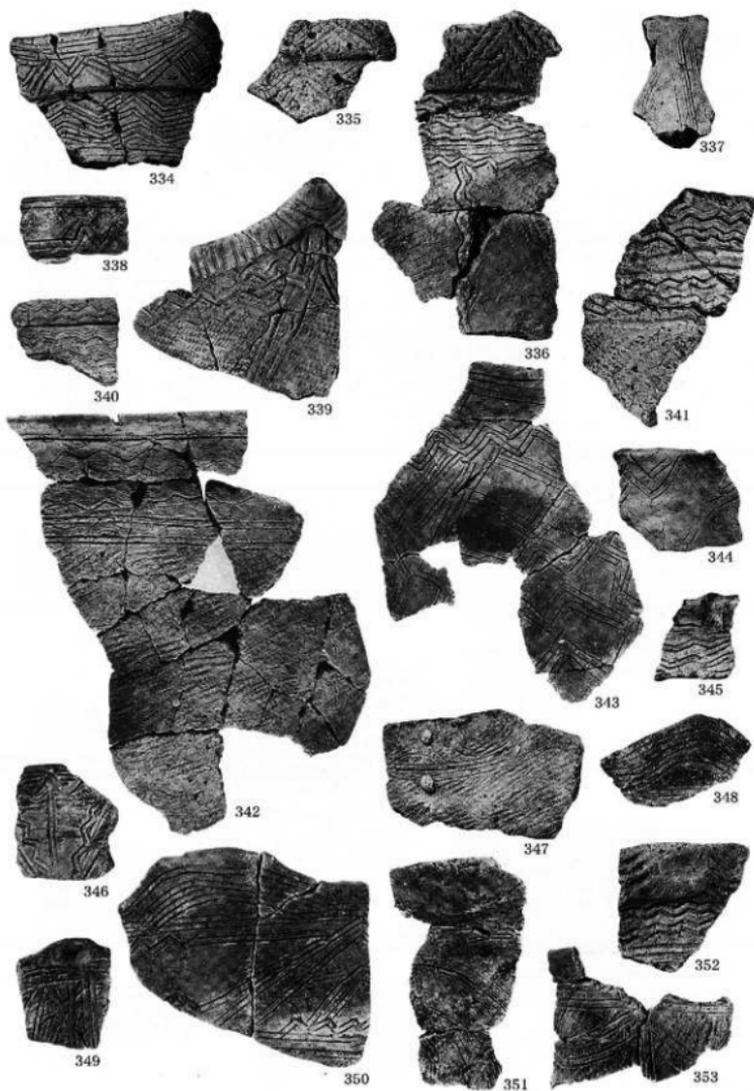
写真図版55 遺構外出土遺物 (11)



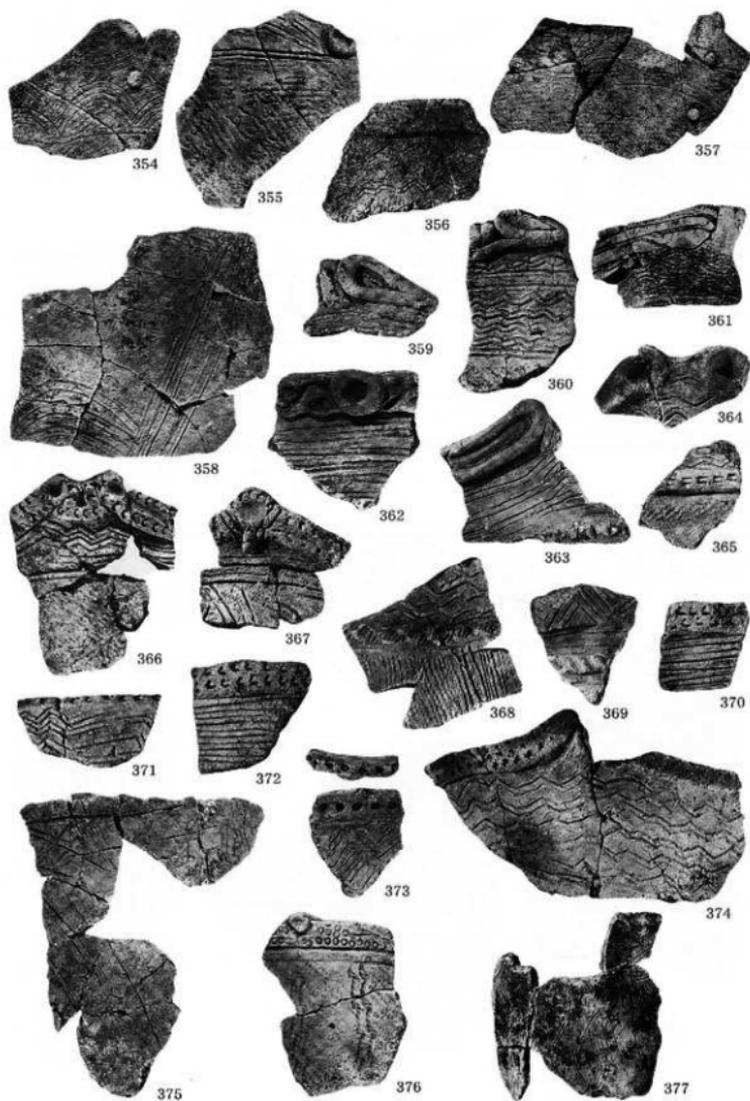
写真図版56 遺構外出土遺物 (12)



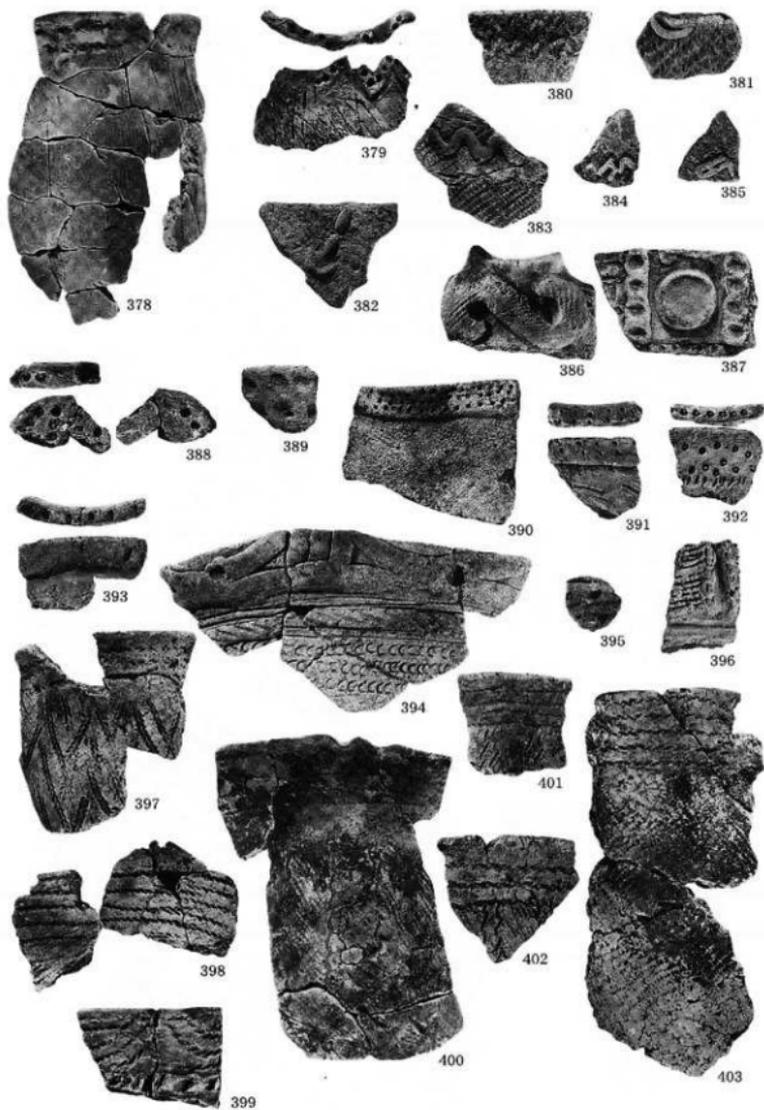
写真図版57 遺構外出土遺物 (13)



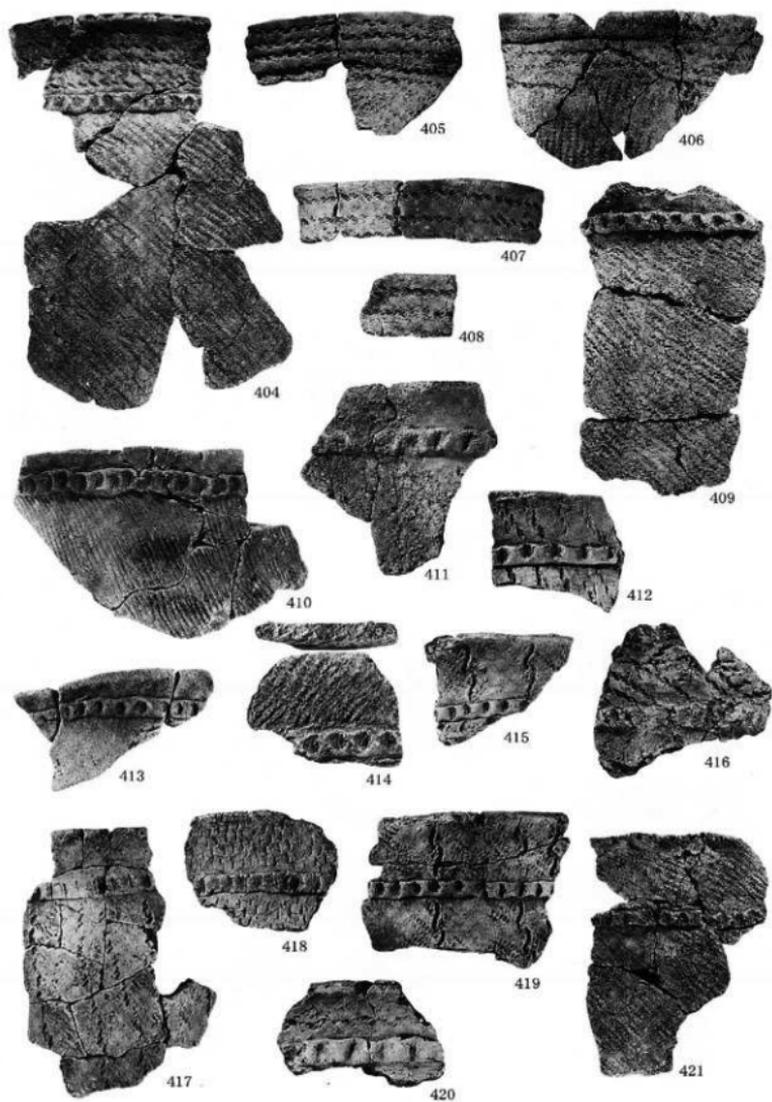
写真図版58 遺構外出土遺物 (14)



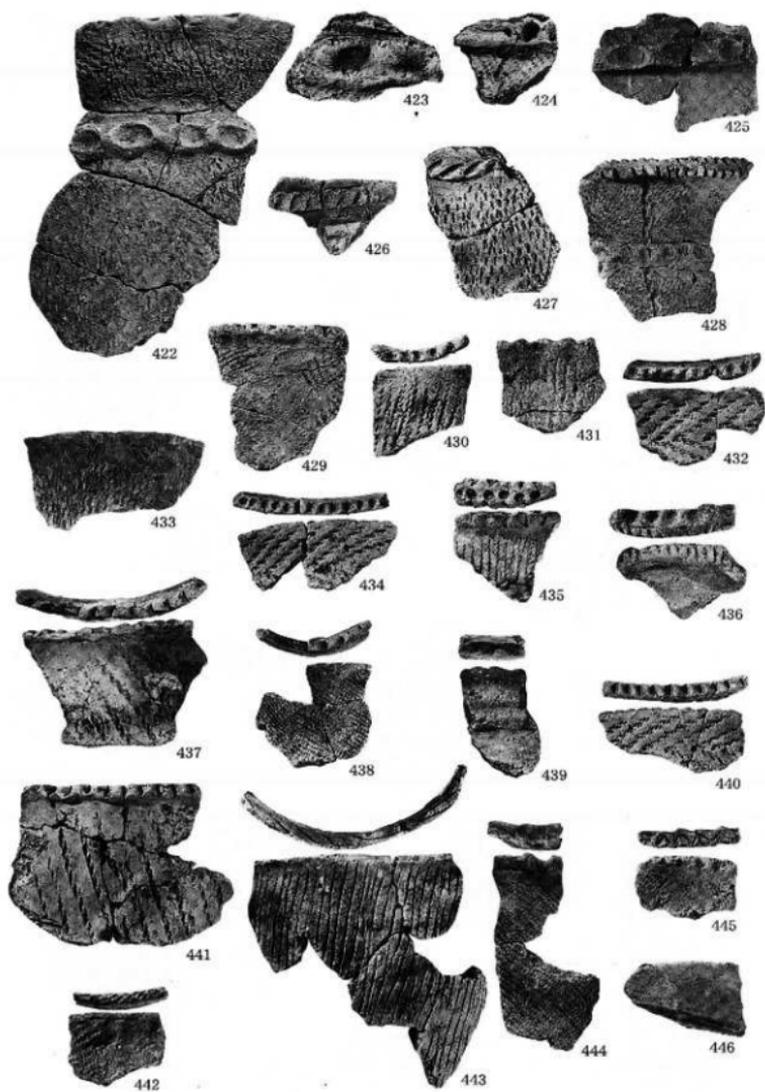
写真図版59 遺構外出土遺物 (15)



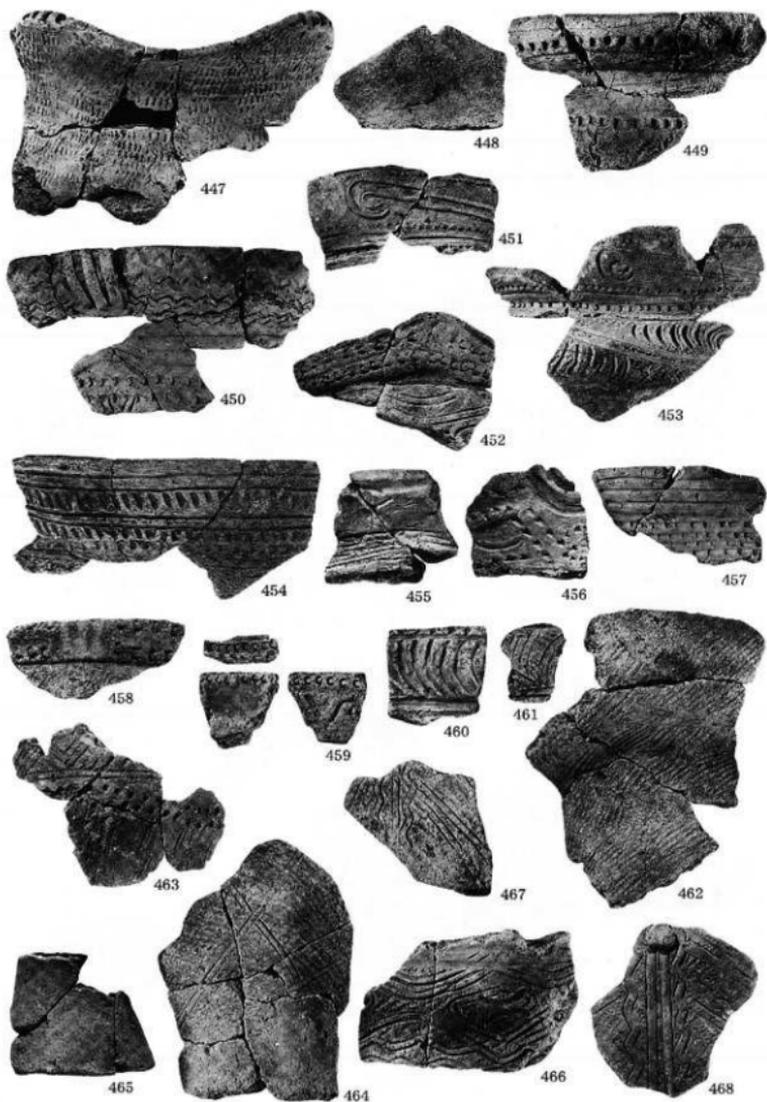
写真図版60 遺構外出土遺物 (16)



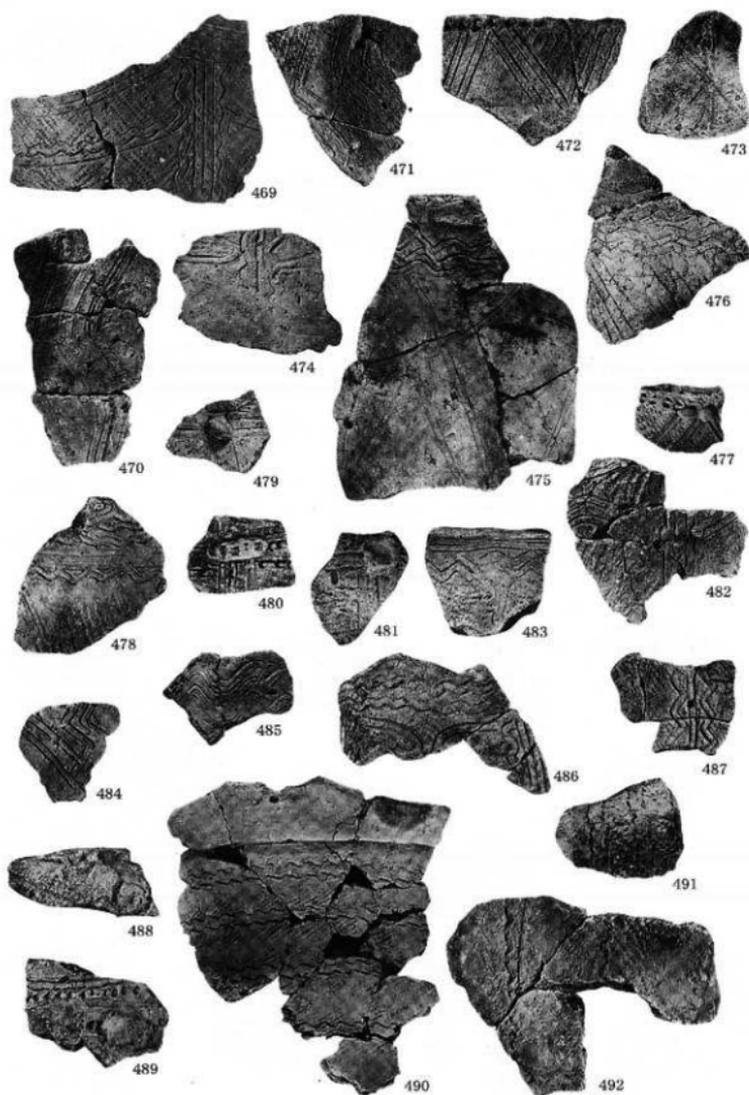
写真図版61 遺構外出土遺物 (17)



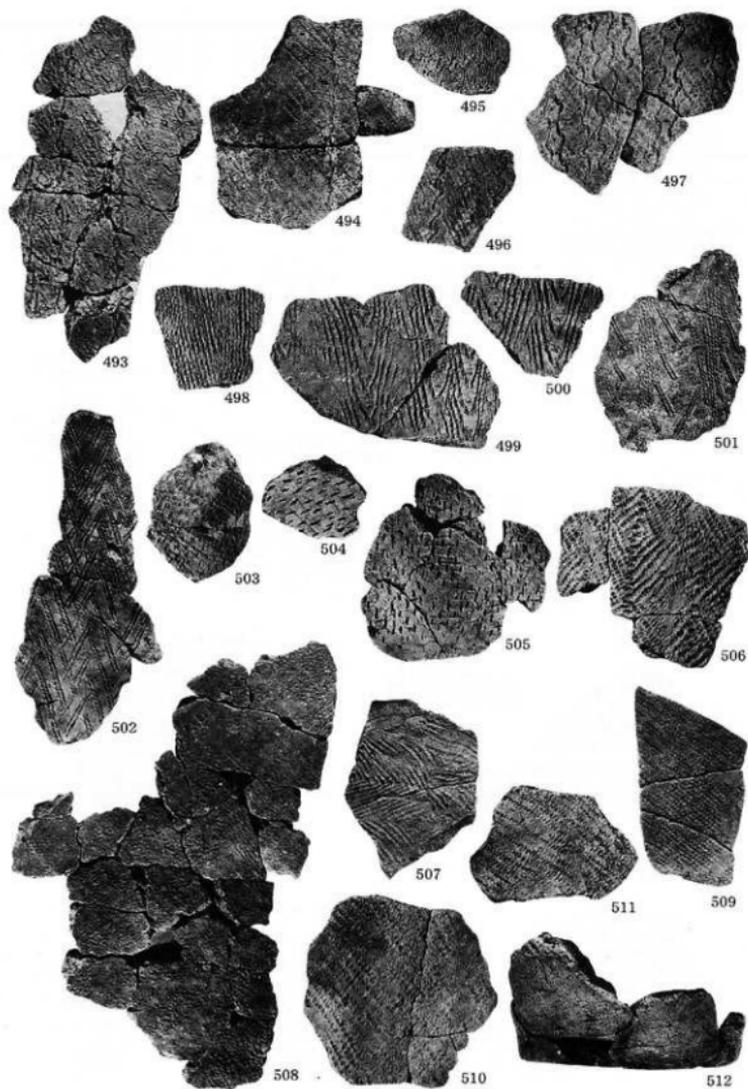
写真図版62 透構外出土遺物 (18)



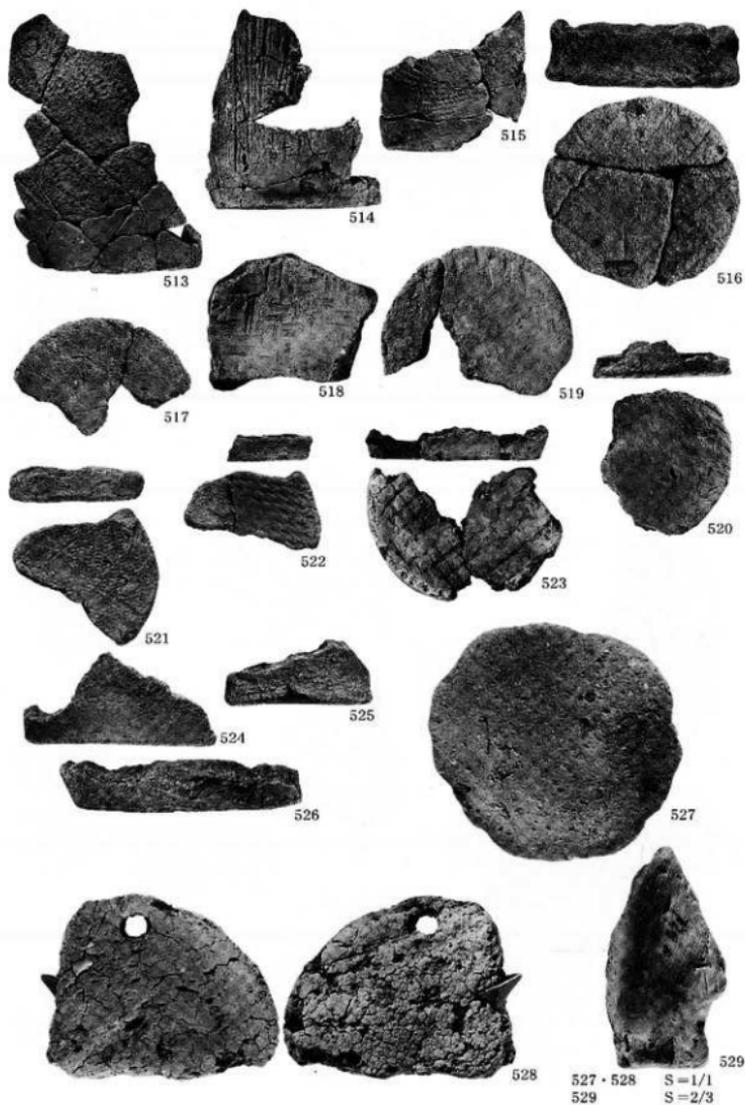
写真図版63 遺構外出土遺物 (19)



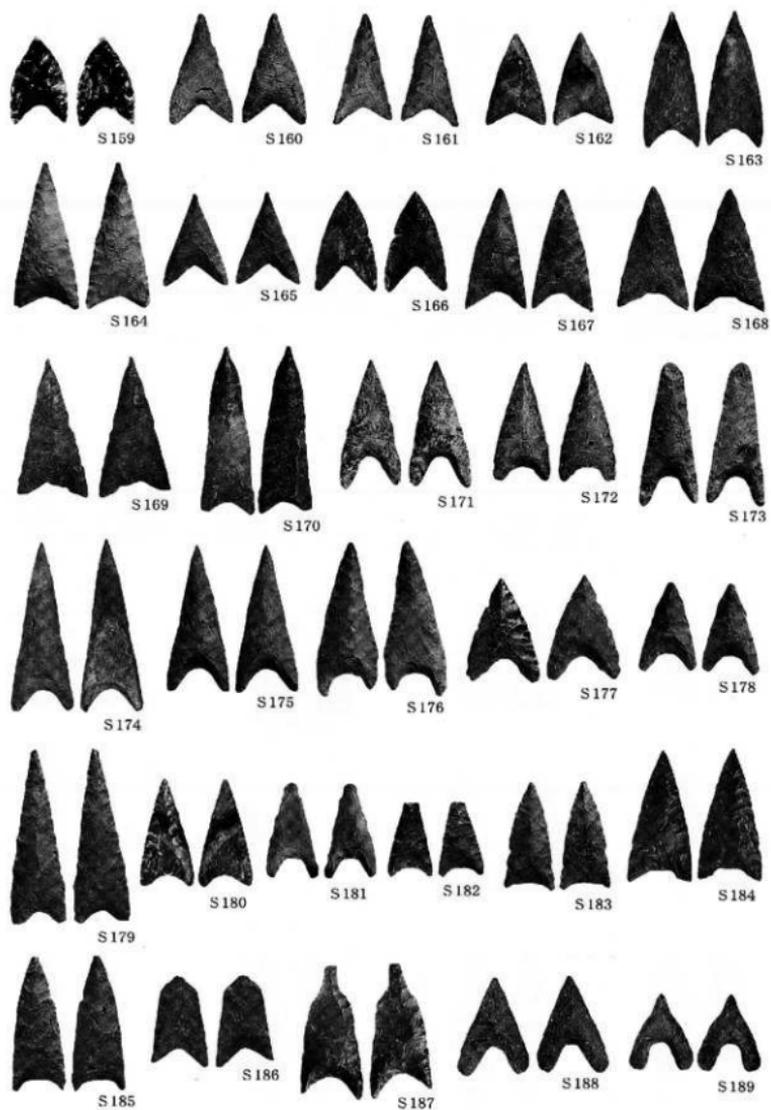
写真図版64 遺構外出土遺物 (20)



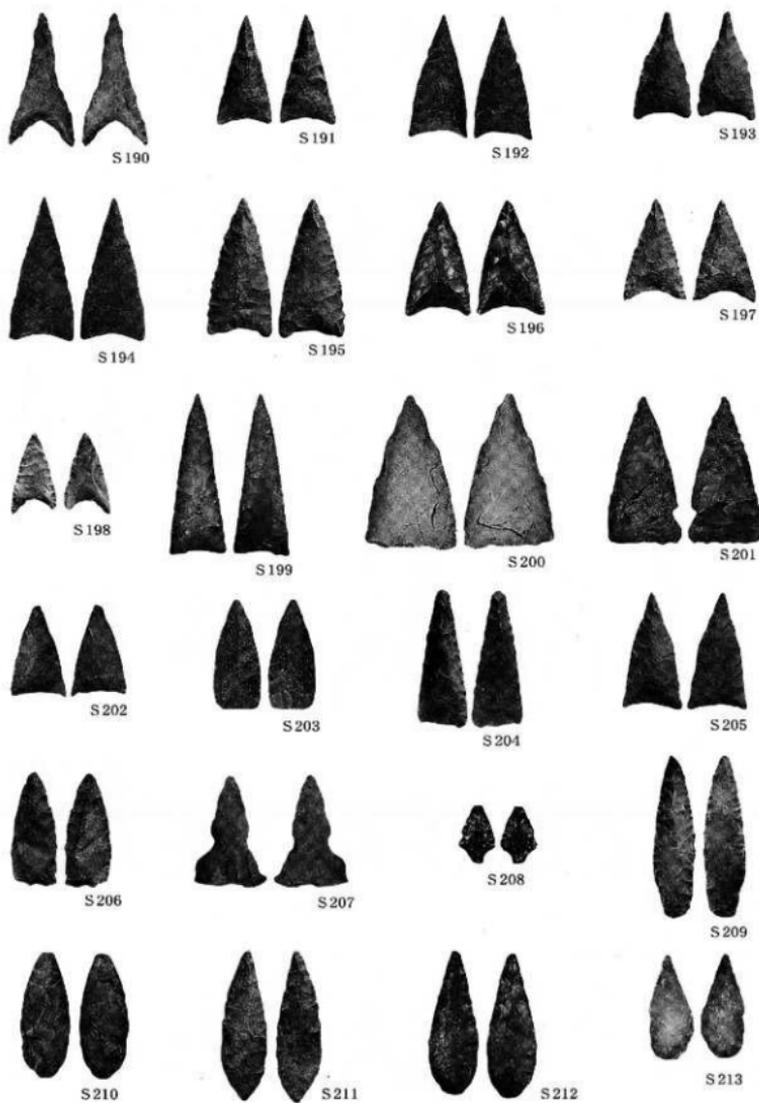
写真図版65 遠構外出土遺物 (21)



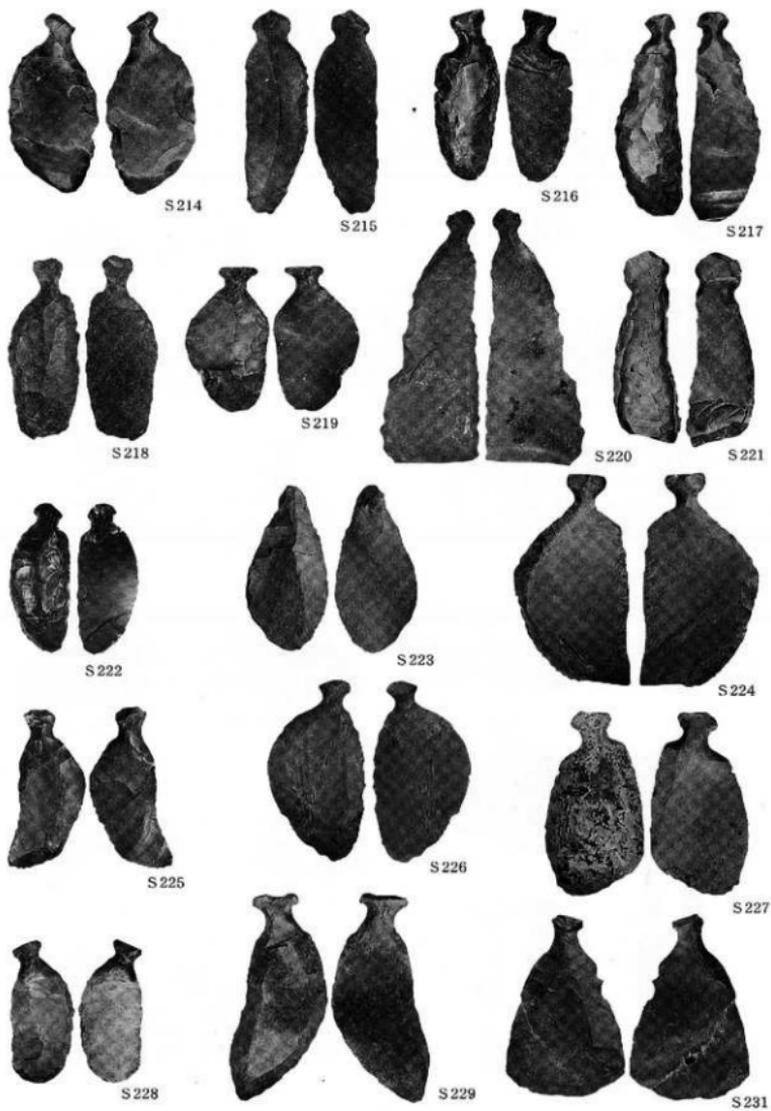
写真図版66 遺構外出土遺物 (22)



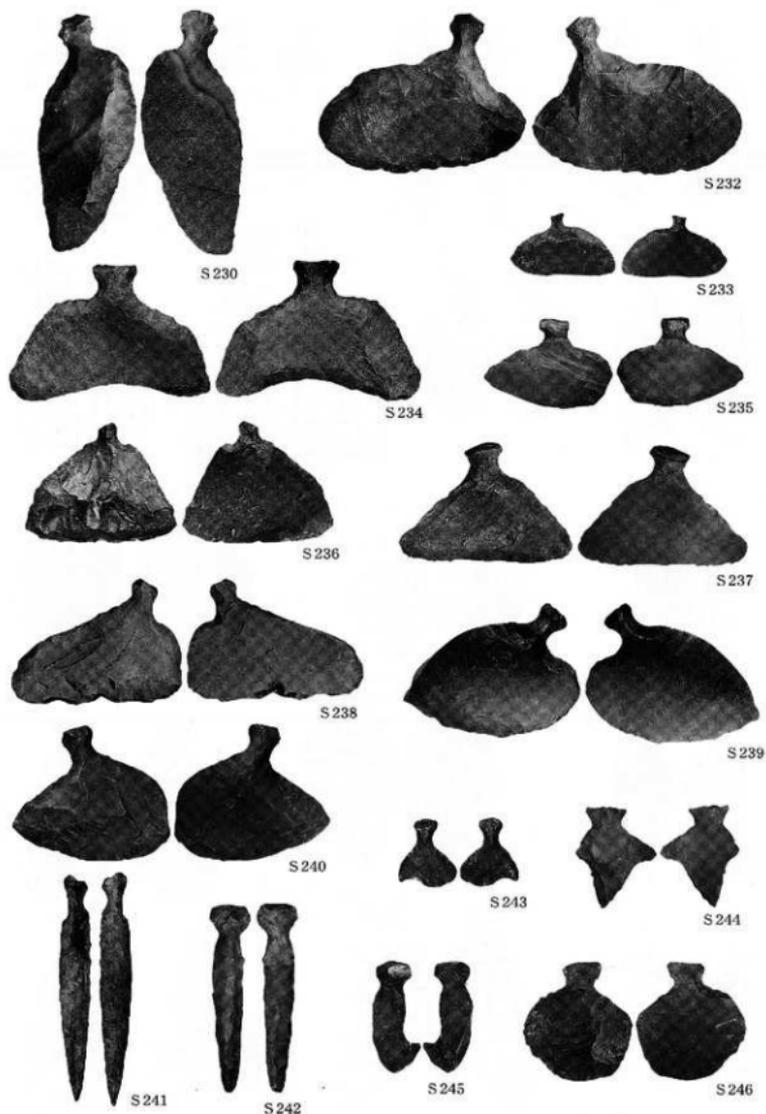
写真図版67 遺構外出土遺物 (23)



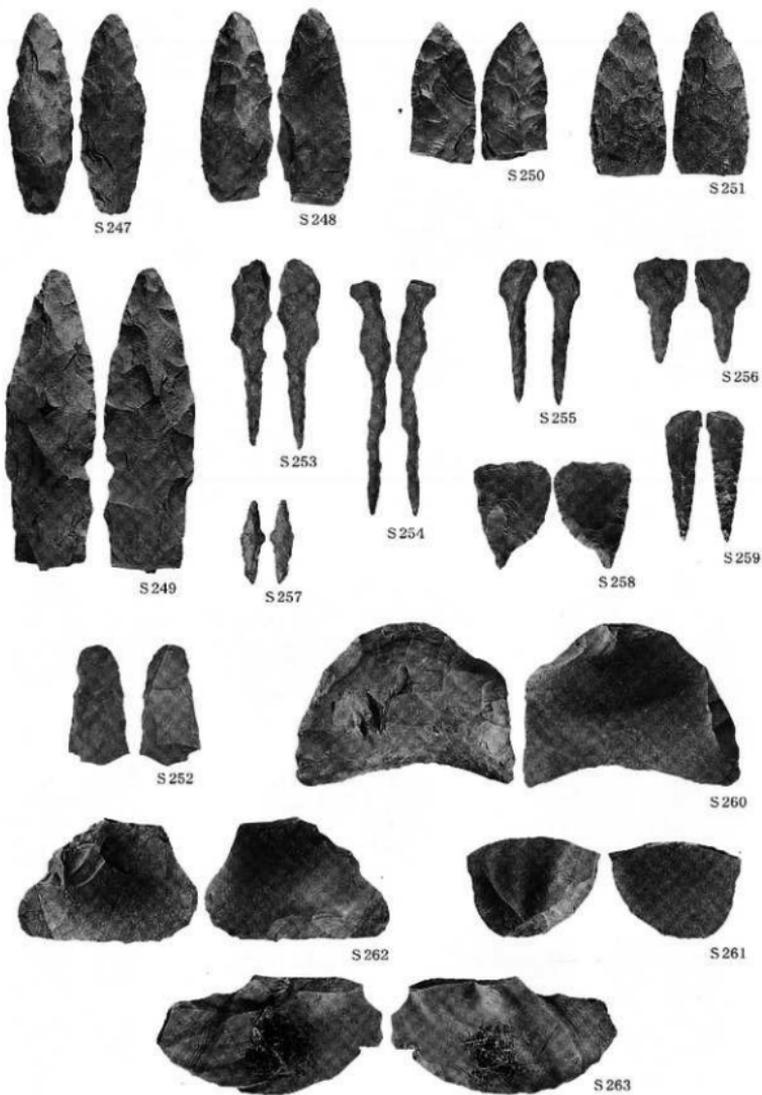
写真図版68 遺構外出土遺物 (24)



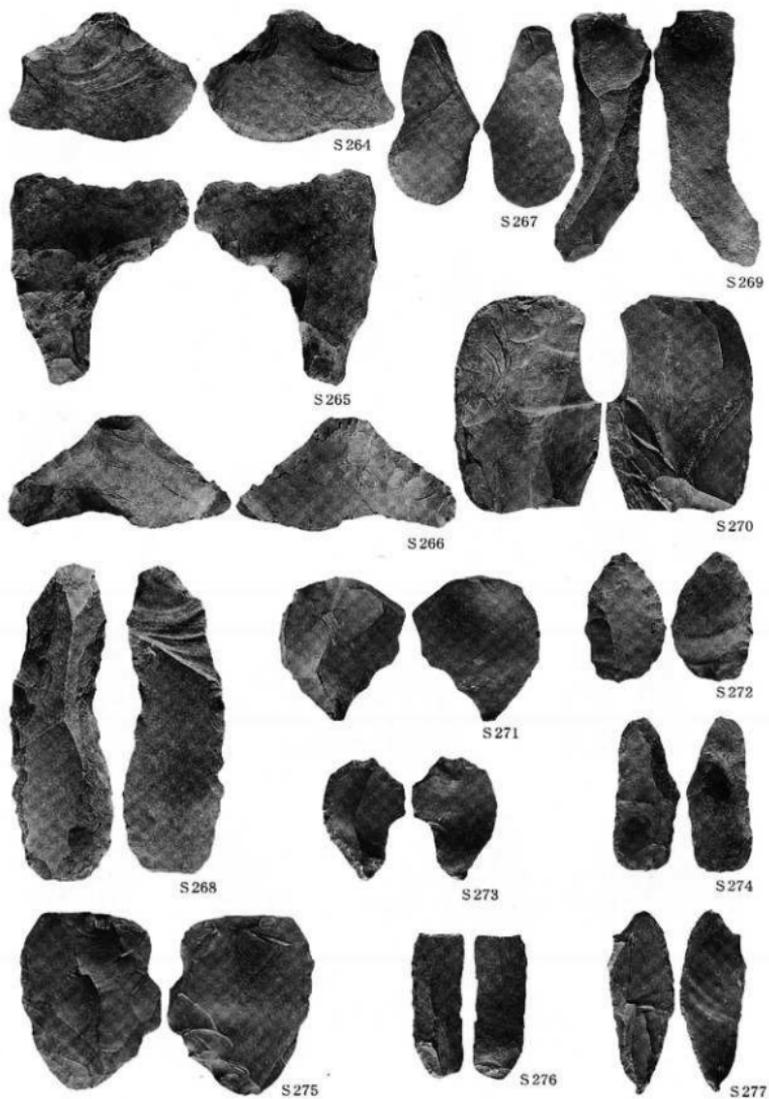
写真図版69 遠構外出土遺物 (25)



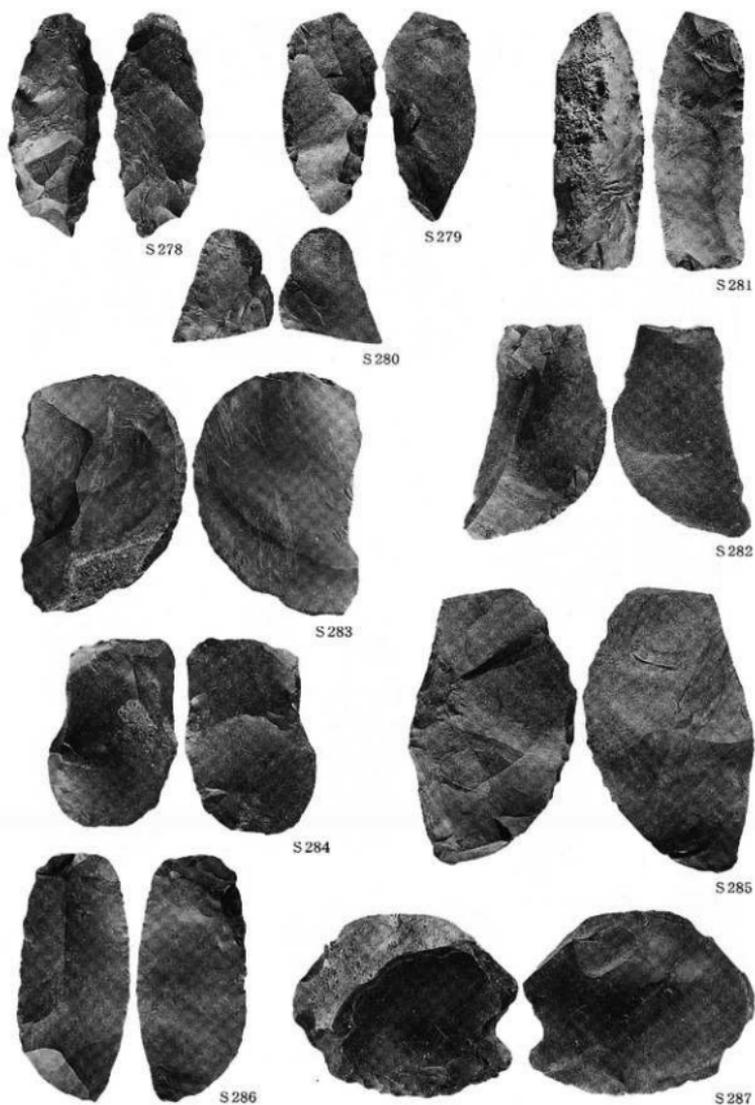
写真図版70 遺構外出土遺物 (26)



写真図版71 遺構外出土遺物 (27)



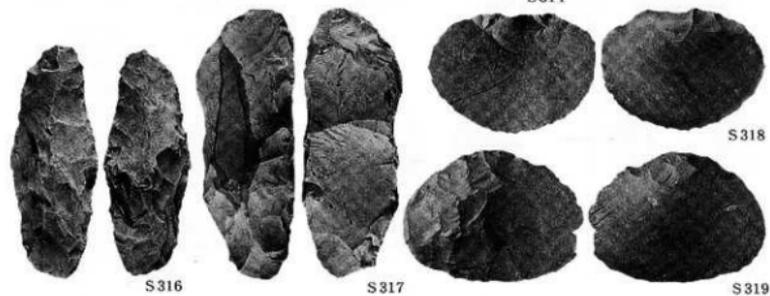
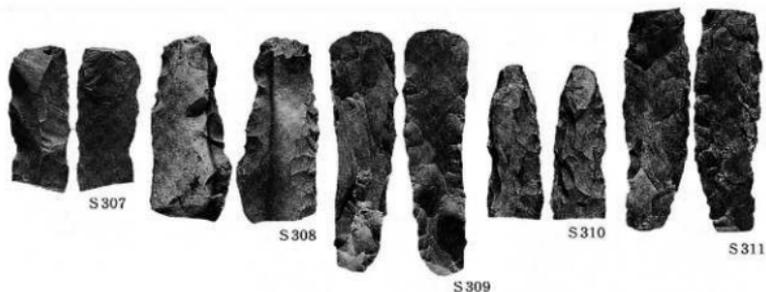
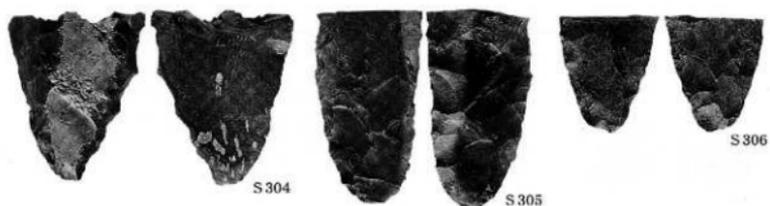
写真図版72 遠構外出土遺物 (28)



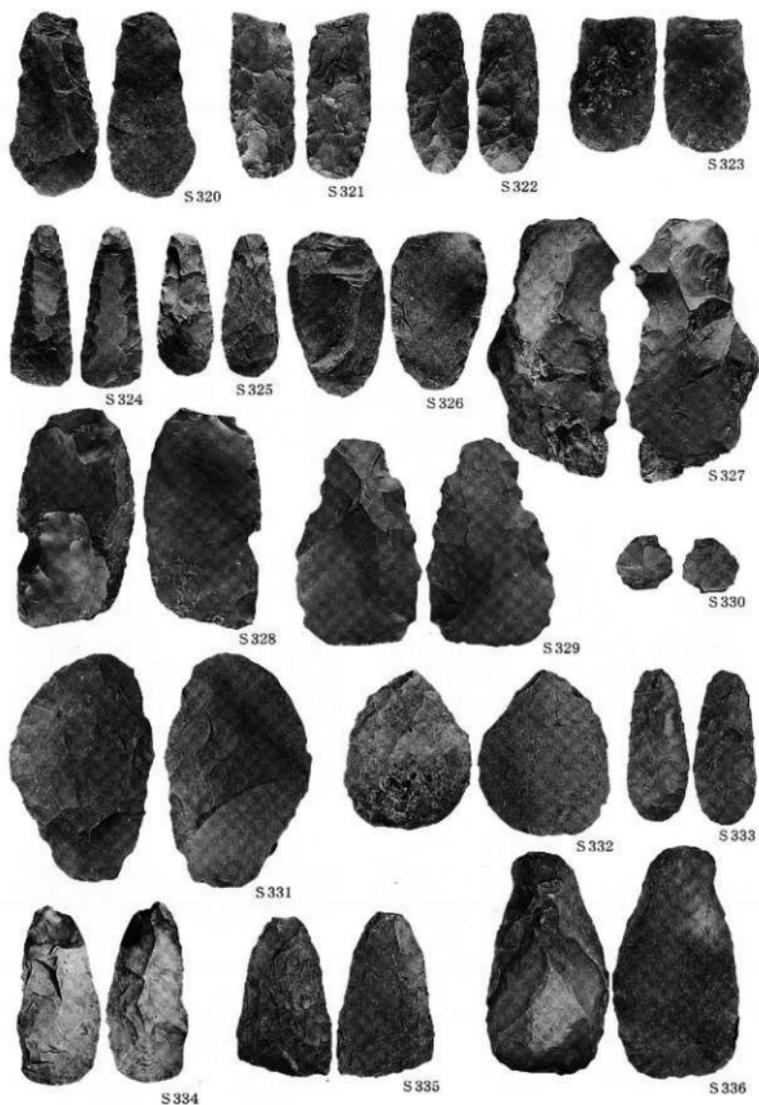
写真図版73 遠構外出土遺物 (29)



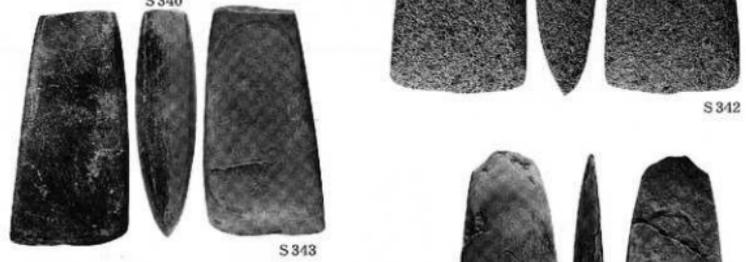
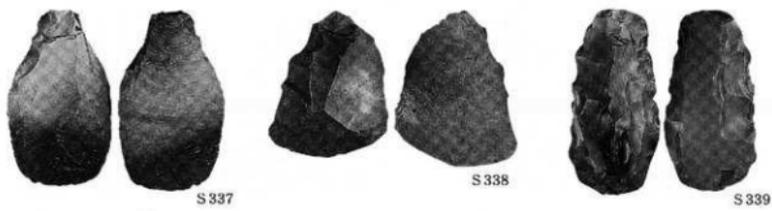
写真図版74 遺構外出土遺物 (30)



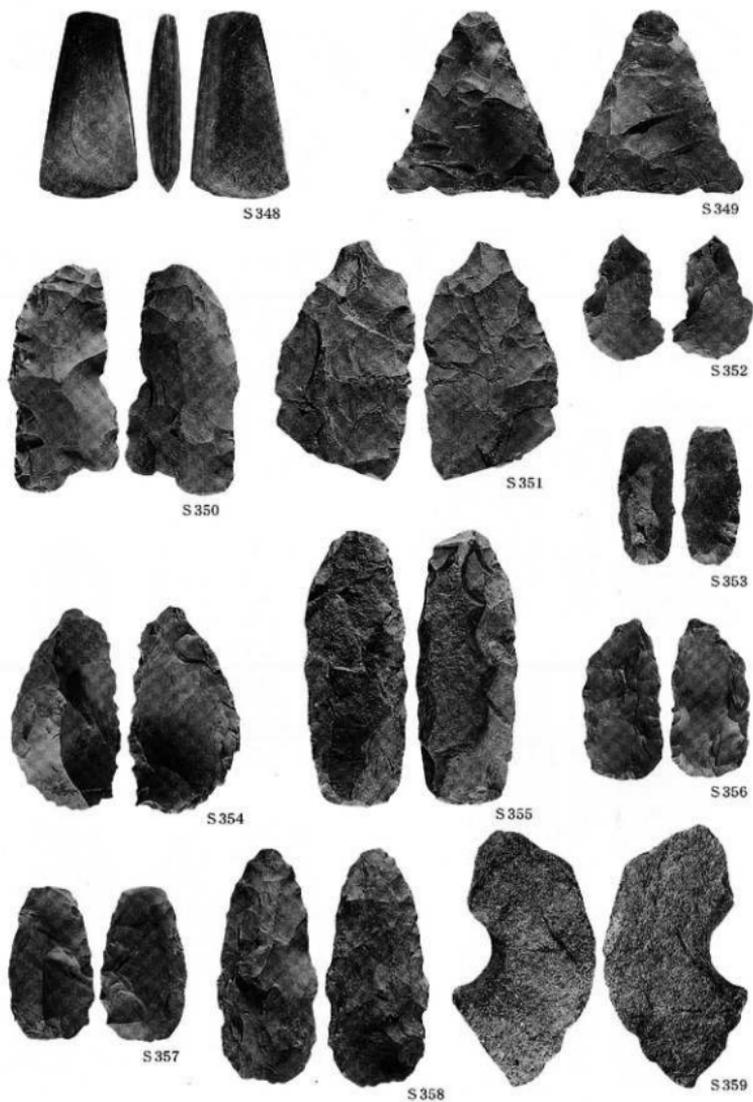
写真図版75 遠構外出土遺物 (31)



写真図版76 遺構外出土遺物 (32)



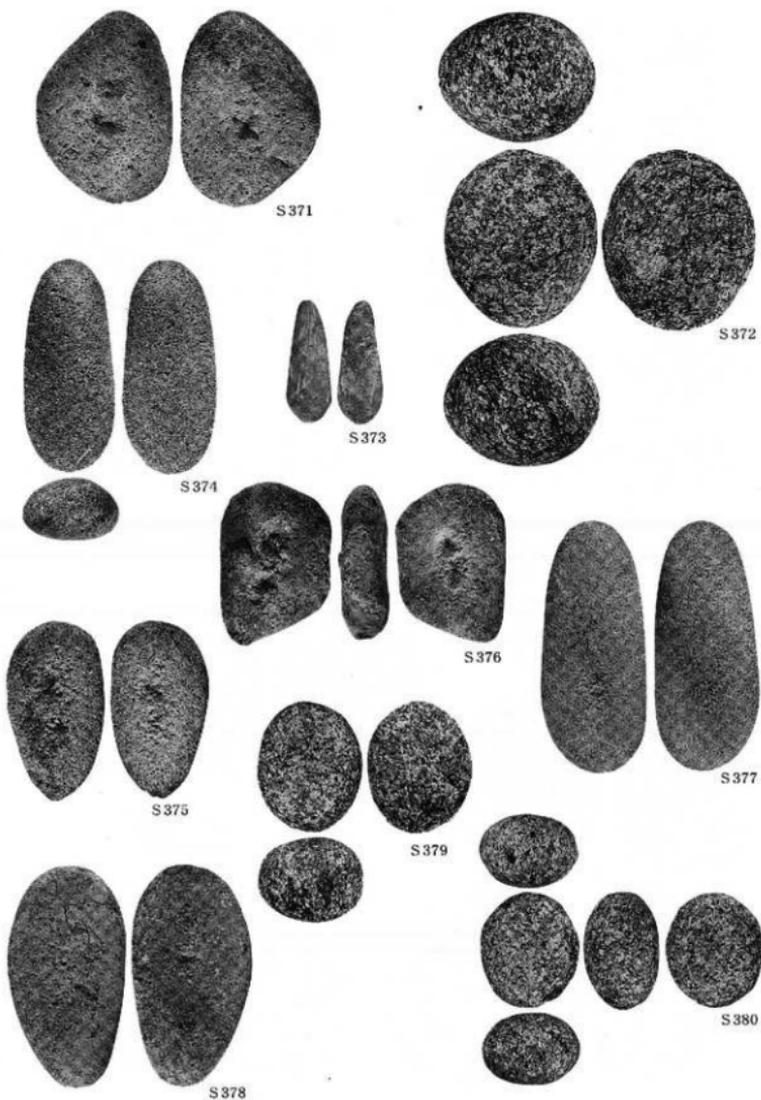
写真図版77 遺構外出土遺物 (33)



写真図版78 遺構外出土遺物 (34)



写真図版79 遠構外出土遺物 (35)



写真図版80 遺構外出土遺物 (36)



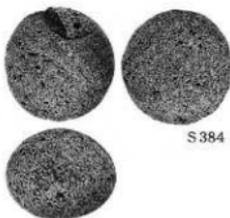
S 381



S 382



S 383



S 384



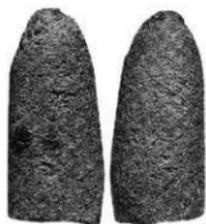
S 385



S 387



S 386

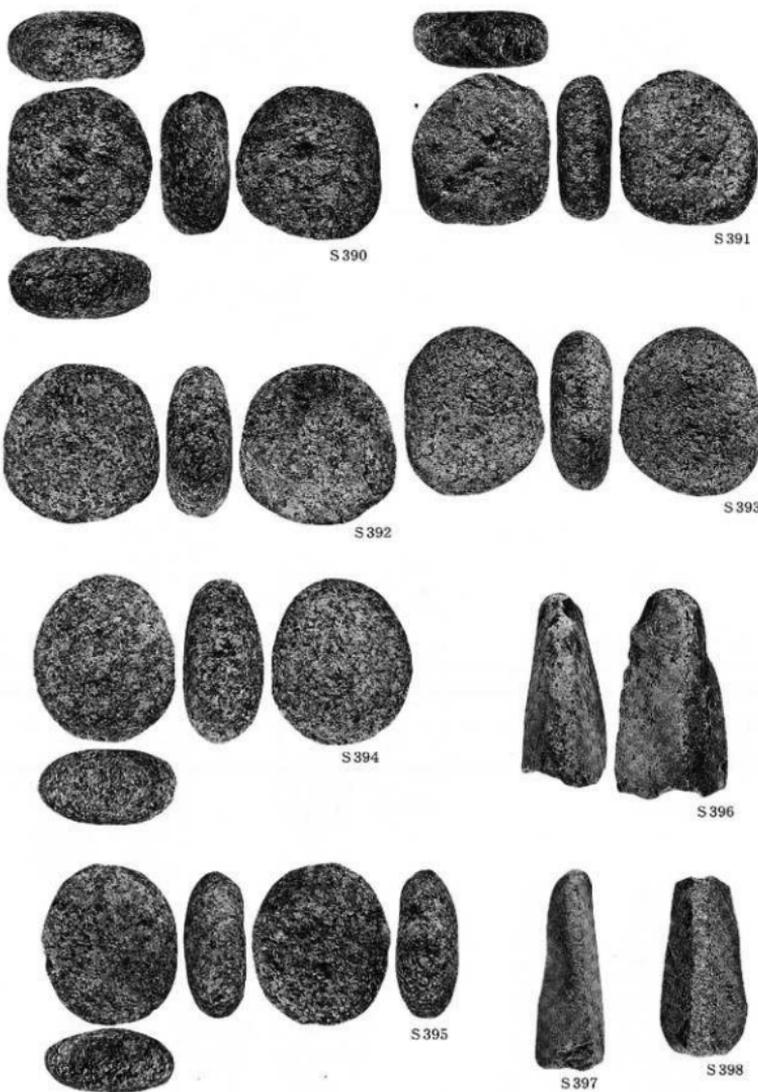


S 388

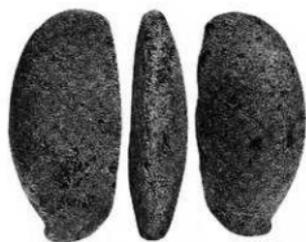


S 389

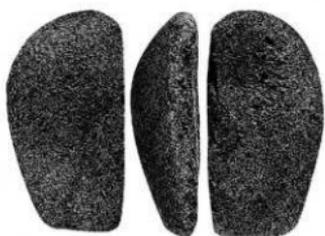
写真図版81 遠構外出土遺物 (37)



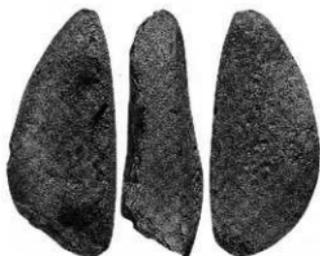
写真図版82 遠構外出土遺物 (38)



S 399



S 400



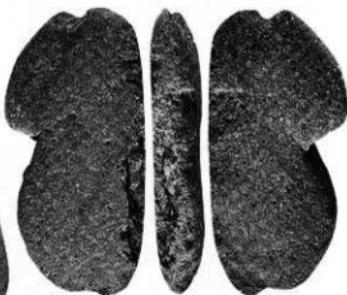
S 401



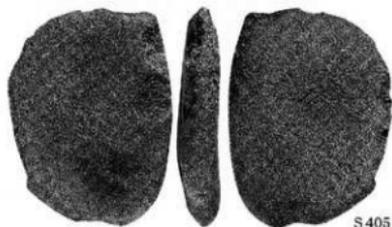
S 402



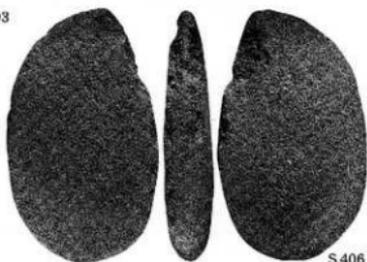
S 403



S 404

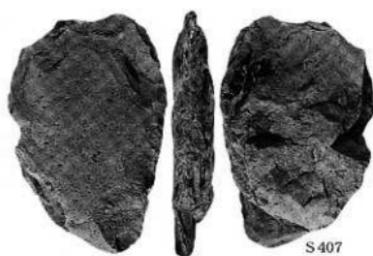


S 405

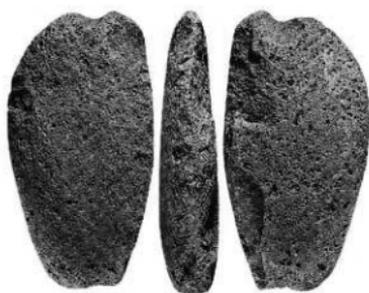


S 406

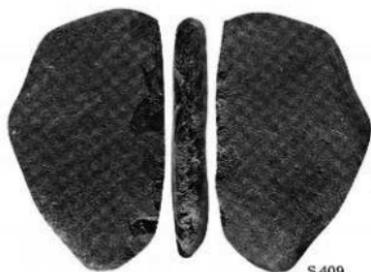
写真図版83 遺構外出土遺物 (39)



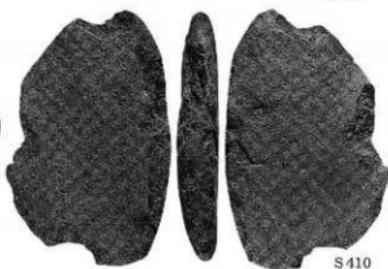
S407



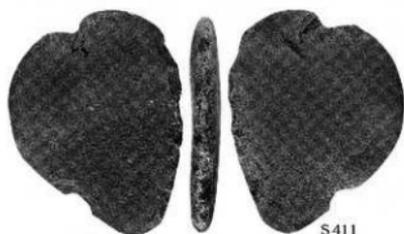
S408



S409



S410



S411



S412



S413

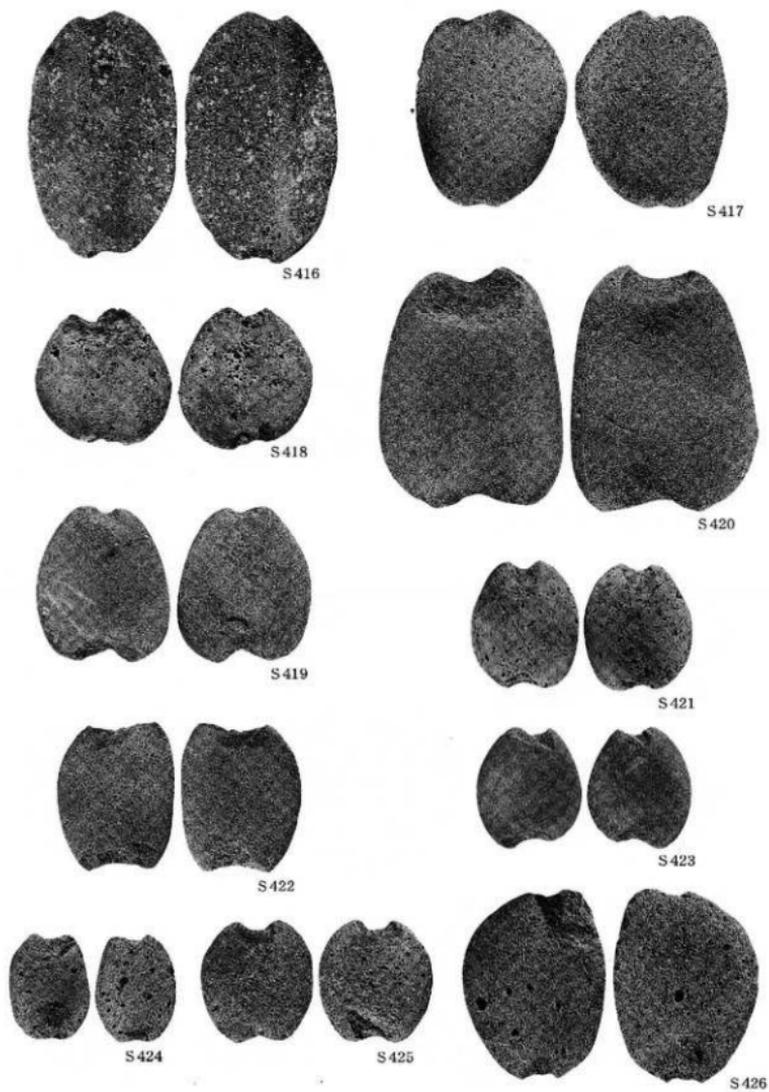


S415

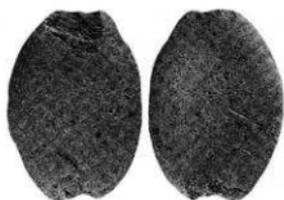


S414

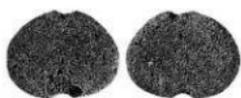
写真図版84 遺構外出土遺物 (40)



写真図版85 遺構外出土遺物 (41)



S 427



S 428



S 430



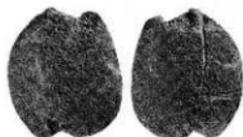
S 429



S 432



S 431



S 434



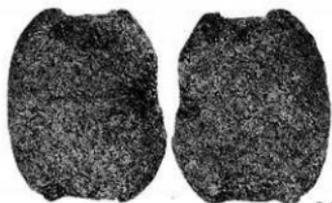
S 433



S 435



S 436

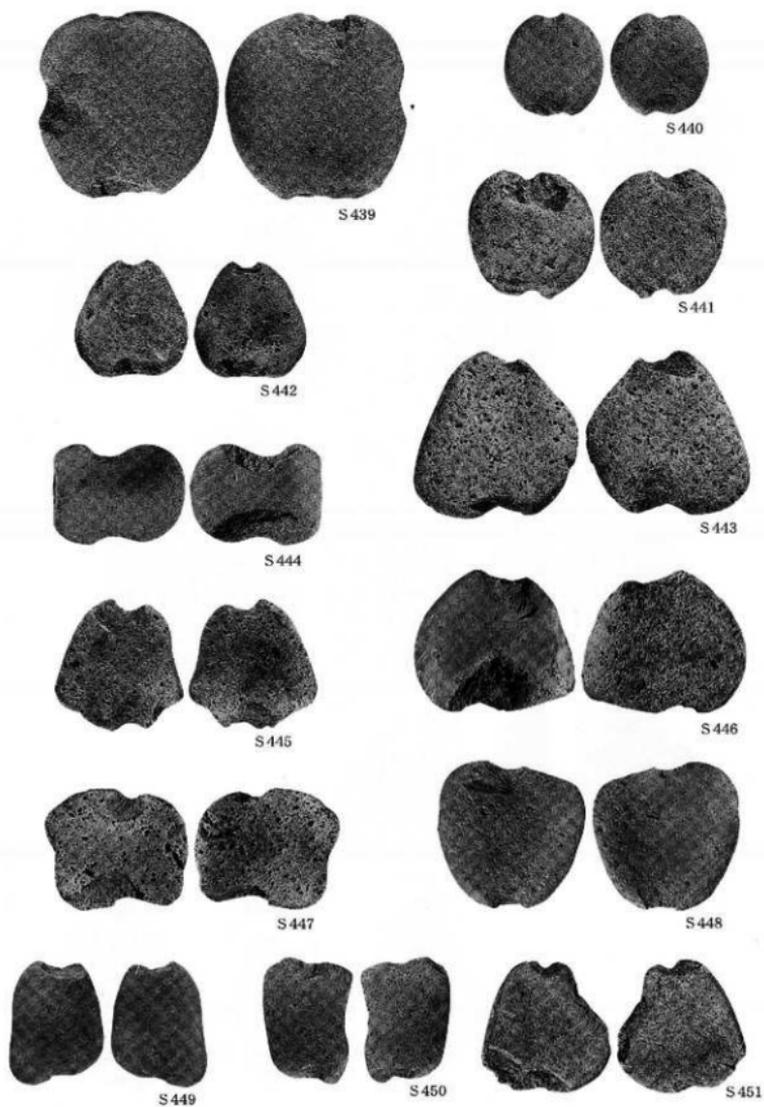


S 437

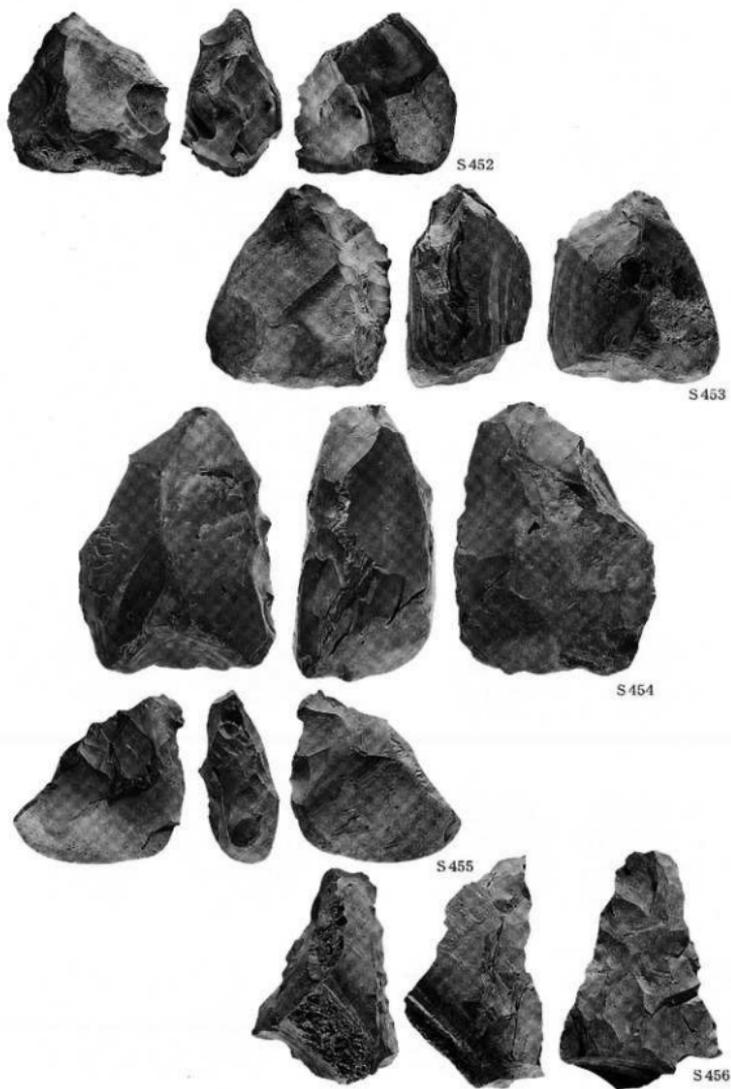


S 438

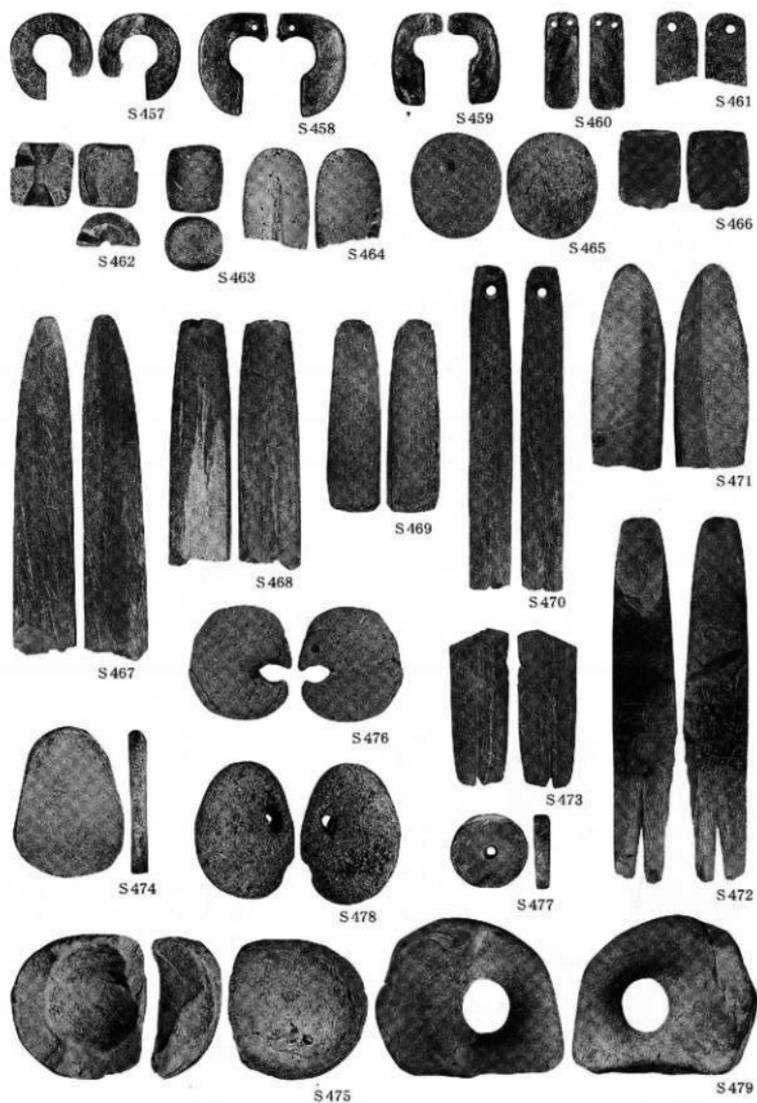
写真図版86 遺構外出土遺物 (42)



写真図版87 遺構外出土遺物 (43)



写真図版88 遺構外出土遺物 (44)



写真図版89 遺構外出土遺物 (45)



写真図版90 遺構外出土遺物 (46)



S494



S495



S496



M1



M2



M3

報告書抄録

ふりがな	しみずがのいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	清水ヶ野遺跡発掘調査報告書							
副書名	地域振興支援道路整備事業主要地方道盛岡横手線関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第351集							
編著者名	千葉正彦							
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 Ⅷ 019-638-9001・9002							
発行年月日	平成13年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	通称番号	°' "	°' "			
しみずがのいせきはくつちょうさほうこくしょ 清水ヶ野遺跡	いわてけんわがやまけん 岩手県和賀郡 湯田町湯田 18-122-5	03363	MD 38-2212	39° 21' 30"	140° 45' 40"	19990413 ~19990817	1,200㎡	主要地方道 盛岡横手線 改修工事に 伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
清水ヶ野遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	5棟	縄文時代前期後葉~中期初頭の上器(主体は前期末葉の大木6式の土器群)		住居跡と土坑群からなる、大木6式期の集落跡。 石器の出土が量・割合ともに高いことから、石器製作関連遺跡の可能性がある。	
			土坑	15基	土製品			
			土器埋設遺構	3基	石器類			
			焼土遺構	6基	石製品			
	散布地	近世 ~近代			寛永通寶・鉄製品			
		時期不明	掘立柱建物跡	1棟				
			土坑	18基				

平成12年度 助 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職 員】

所 長	伊 藤 民 也	副 所 長	櫻 田 次 男
〔管 理 課〕			
管 理 課 長	川 浪 清 徳	嘱 託	千 葉 芳 夫
管 理 課 長 補 佐	山 崎 善 光	”	藤 島 恵 子
主 査	立 花 多加志	”	新 田 ト ヨ
主 事	口 影 睦 夫	”	佐々木 光 重
〔調査第一課〕		〔調査第二課〕	
調 査 第 一 課 長	佐々木 勝	調 査 第 二 課 長	高 橋 與右衛門
調 査 第 一 課 長 補 佐	佐々木 清 文	調 査 第 二 課 長 補 佐	中 川 重 紀
主任文化財専門調査員	小山内 透	主任文化財専門調査員	高 橋 義 介
文化財専門調査員	赤 石 登	”	金 子 佐知子
”	吉 田 充	文化財専門調査員	中 子 田 池
”	小 原 眞 一	”	工 藤 道 孝
”	小笠原 健一郎	”	占 館 眞 身
”	金 野 進	”	阿 部 眞 澄
”	鳥 居 達 人	”	松 尾 芳 幸
”	金 子 昭 彦	”	工 藤 藤 微
”	東海林 洋 美	”	前 田 稔 計
”	阿 部 勝 則 人	”	岩 渕 計 悟
”	羽 柴 直 之	”	早 坂 田 宏
”	小野寺 正 男	”	濱 田 由 紀
”	菅 原 靖 克 稔	”	安 藤 木 晃
”	長 村 浩 二 郎	”	高 木 正 彦
”	瀧 池 貴 広	”	千 佐 藤 淳 一
”	村 上 拓	”	半 澤 武 彦
”	本 多 準 一 郎	”	杉 沢 昭 太 郎
”	北 村 忠 昭	”	中 村 直 美
”	丸 山 浩 治	”	中 村 雅
”	村 木 敬	”	”
期 限 付 専 門 職 員	小 林 弘 卓	期 限 付 専 門 職 員	鈴 木 聡 (12月退職)
”	江 藤 敦	”	古 川 徹
”	藤 原 賢 徳 (6月退職)	”	北 田 敷
”	菊 池 賢	”	吉 田 里 和
”	井 上 信 介	”	原 美 津 子
”	川 又 晋	”	齋 藤 麻 紀 子
”	吉 田 真 由 美	”	島 原 弘 征
”	北 田 博 義 (11月退職)	”	”

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第351集

清水ヶ野遺跡発掘調査報告書

地域活性化支援道路整備事業主要地方道盛岡横手線関連遺跡発掘調査

印刷 平成13年3月22日

発行 平成13年3月27日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001・9002

FAX (019) 638-8563

印刷 河北印刷株式会社

〒020-0015 盛岡市本町通2丁目8-7

TEL (019) 623-4256

FAX (019) 623-0976

